令和 3 年度

東京藝術大学大学院音楽研究科

博士学位論文

第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽曲創作の実態

中嶋 達郎

平成 31 年度入学

学籍番号　2319901

目次

凡例 **3**

序章 **5**

第 1 章　第二次世界大戦以前に創作された吹奏楽曲リスト **10**

第 1 節　リストの概要と調査手順 10

第 2 節　リストの分類 15

第 2 章　編成の考察 **26**

第 1 節　「ブラスバンド」編成 26

第 2 節　その他の編成 40

第 3 章　第二次世界大戦以前における吹奏楽曲の創作 **47**

第 1 節　黎明期（明治～大正時代）の吹奏楽曲 47

第 2 節　昭和期（戦前）の吹奏楽曲 54

第 3 節　戦中期の吹奏楽曲 74

第 4 節　吹奏楽作品創作に関する議論 99

第 4 章　吹奏楽曲の作曲手法 **106**

第 1 節　行進曲の楽曲傾向 108

第 2 節　その他の様式 117

第 3 節　喇叭鼓隊編成の楽曲 135

第 4 節　多様化する編成 140

第 5 章　戦後への影響 **143**

第 1 節　大戦末期と終戦直後のレパートリー 143

第 2 節　1950 年代以降の吹奏楽曲の処遇 157

結章 **165**

謝辞 **172**

参考文献 **173**

別冊付録

1. 第二次世界大戦以前の日本人作曲家による吹奏楽曲一覧

2. 大沼哲作曲《奉祝前奏曲》譜例

3. 吹奏楽曲の編成例

凡例

1. 各種記号は以下の意味で用いる。

《 》　作品名

「 」　引用文、強調、単語の括り

『 』　書籍名、「」内での引用文

［ ］　筆者による補足・修正

2. 旧字体、旧仮名遣いは原則として新字体、新仮名遣いを用いる。

3. 文字の解読ができないものについては□で表す。

4. 本文中の年代については西暦を用い、（ ）内に元号を併記する。

例）1900（明治 33）年

5. 日本人作曲家名の横には、生没年（元号と西暦）を付記し、日本人以外の作曲家名には、原綴と西暦を付記する。

例）瀬戸口藤吉（1868（慶応 4）年～1941（昭和 16）年）

フランツ・エッケルト（Franz Eckert、1852 年～1916 年）

6. 音名は原則として英語音名で表記し、臨時記号は♯（シャープ）、♭（フラット）、♮（ナチュラル）で表す。尚、引用文等では必要に応じて他言語表記も使用する。

例）ＣＤＥＦＧＡＢ　E♭　D#　C♮

7. 調は日本語で表記する。尚、引用文等では必要に応じて他言語表記も使用する。

例）ハ長調、変ロ長調、嬰ヘ短調

上記の他は、東京芸術大学音楽学部『論文作成の手引き（2019 年改定）』に従う。

序章

第 1 節　本研究の目的とその背景

本研究は、明治期～第二次世界大戦以前（1945（昭和 20）年以前）までに日本人によって作曲された吹奏楽曲の実態を明らかにすることを目的とする。

日本における「吹奏楽」の定義は、今日では専ら木管楽器、金管楽器、打楽器およびコントラバスより成り立つ合奏を指すが、第二次世界大戦期以前においては、今日の吹奏楽編成（当時の呼称はブラスバンド編成）に喇叭隊、喇叭鼓隊、旋律喇叭隊、鼓笛隊（後述）などの編成を含めた、管楽器と打楽器による合奏が総括的なジャンルとして「吹奏楽」と捉えられていた。

現代の日本の音楽業界において、一つの大きなジャンルとなっている「吹奏楽」は、現在では毎年多くの楽曲が日本人によって発表されている。約 150 年に渡る日本の吹奏楽の歴史の中では、日本人の手によって吹奏楽のための楽曲が数多く創作され、世界各国で演奏されるに至っている。

しかしながら、現在演奏会等で取り上げられる楽曲の多くが専ら第二次世界大戦以後に作曲されたものであり、それ以前に創作され演奏されていた吹奏楽曲に関しては、どのような楽曲が存在していたのか断片的な情報しか伝わっておらず、研究も限られているため、個々の詳細が明らかになっていない状況である。

そもそも戦前の吹奏楽曲は、吹奏楽が日本の帝国主義形成の上で果たした社会的な機能面のみを強調され論じられることが中心で、個々の楽曲を取り上げて、音楽上の成果を具体的に論じているものは未だ少ない。しかしながら、残された演奏会の記録等の断片的な情報からは、戦前の日本において既に多数の吹奏楽曲の作曲者が現れ、多くの邦人作品が生み出されていた様子を推測することができる。

本研究では、当時の雑誌や放送記録から楽曲をリストアップし、実際の楽譜資料の分析もおこなうことで、戦前の吹奏楽曲のレパートリーの特徴と、特に純器楽曲としての吹奏楽曲の創作がどのようになされていたのか、そしてそれらが戦後にどのような立場におかれ今日まで至るのかを検証し、第二次世界大戦以前の日本における吹奏楽曲創作の実態を明らかにしていきたい。

尚、本論文は戦争を賛美するものでも、戦前の作曲家の行動を批判するものでもない。本研究は、日本の吹奏楽曲に関して、埋もれつつある歴史的な事実を明らかにし、作曲を専門とする立場から客観的な考察を行うことを目指したものであり、音楽分野に限らず今後の様々な研究の一助となれば幸いである。

第 2 節　先行研究の検討

吹奏楽作品は、後述のような楽曲の性質上、作曲家の作品リストにも加えられていない場合が多々あり、個々の楽曲の調査は困難を極めた。

1956（昭和 31）年に出版された、富樫康の『日本の作曲家』[1]は、同時代の情報として、現在では記録が失われているような楽曲も掲載されており、そこには吹奏楽曲も含まれている。

1962（昭和 37）年の『バンドジャーナル』第 4 巻 10 号では、日本の吹奏楽曲の特集が組まれ、秋山紀夫によって第二次世界大戦以前に作曲された吹奏楽曲が一部紹介されている[2]。

1980 年代以降は、第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽文化の研究が増加し、楽曲への注目も集まってきた。戦前の吹奏楽曲のレパートリーに関して言及しているものとしては、塚原康子[3]、塩津洋子[4]、丹下聡子[5]、細川周平[6]らの研究がある。また宮内孝子による大沼哲の

---

[1] 富樫康『日本の作曲家』、東京：音楽之友社、1956 年。

[2] 秋山紀夫「日本人の作品について」、『バンドジャーナル』4 巻 10 号、1962 年、13〜14 頁。

[3] 塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」（『ブラスバンドの社会史：軍楽隊から歌伴へ』、東京：青弓社、2001 年、83〜124 頁）など

[4] 塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊所蔵楽譜目録 総譜篇」（『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』15 巻、1999 年、5〜76 頁）、塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」（『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 14 巻、1998 年、43〜80 頁）など

[5] 丹下聡子「陸軍第三師団軍楽隊による鶴舞公園での音楽会」、『愛知県立芸術大学紀要』48 巻、2018 年、169〜181 頁。

[6] 細川周平『近代日本の音楽百年：黒船から終戦まで』（全 4 巻）（東京：岩波書店、2020 年）など

研究[7]や、片山杜秀らによる第二次世界大戦以前の日本人作曲家の活動の研究[8]などを通して、吹奏楽に関わる日本人作曲家のうち何人かに目が向けられ始めている。中でも谷村政次郎は、1905（明治 38）年 8 月 1 日から 1943（昭和 18）年 9 月 11 日まで東京・日比谷公園の野外音楽堂で開催された陸・海軍軍楽隊の公園奏楽での演奏曲について、当時の演奏会記録を丹念に調査しその細部まで明らかとしている[9]。この他に、作曲家の中橋愛生は「概論 吹奏楽曲創作の歴史」[10]の中で、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲の戦後の受容について言及している。中橋は、「現在、明治期から終戦までに作られた楽曲が演奏されることはほとんどない」[11]ことの理由として、陸軍式、海軍式に端を発する編成的な問題と、「当時の作品のほとんどが時局と密接に結び付」[12]いているからだと論じている。

戦前の楽曲は、1950 年代後半より旧軍楽隊出身者によって度々録音や演奏が行われてきたが、近年では、各自衛隊の音楽隊[13]、警視庁音楽隊[14]などによる録音や、リベラ・ウィンド・シンフォニー（指揮：福田滋）による「奏楽堂の響き」シリーズ[15]を始めとした演奏会などの企画により、耳にする機会が増加してきている。

---

[7] 宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』（東京：音楽之友社、1993 年）など

[8] 片山杜秀の吹奏楽に関連する研究として、「架空音楽日誌『山本元帥戦死の頃』」（『別冊レコード芸術 Summer 1999』、東京：音楽之友社、1999 年、104～116 頁）や、「戦前・戦中・戦後――その連続と不連続 1945-1951」（佐野光司編『日本戦後音楽史・上 戦後から前衛の時代へ』、東京：平凡社、2007 年、42～151 頁）のほか、吹奏楽曲の作曲家も取り上げられている作曲家人名事典、片山杜秀・細川周平共同監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』（東京：日外アソシエーツ、2008 年）などがある。

[9] 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、東京：つくばね舎、2010 年。

[10] 中橋愛生「概論 吹奏楽曲創作の歴史」、戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史 1869-2000』、青弓社、2013 年、169～182 頁。

[11] 同前、171 頁。

[12] 同上。

[13] CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽』シリーズ（東京：日本クラウン、1995 年） など

[14] CD『警視庁音楽隊創設 50 周年 ＝The 50th anniversary』、東京：AMD、1999 年。

[15] CD『奏楽堂の響き Vol.2』（東京：スリーシェルズ、2009 年）、『奏楽堂の響き Vol.3』（東京：スリーシェルズ、2010 年） など

このように特定の作曲家や、特定の楽曲については、明らかになってきているものもあるが、研究が軍楽隊関連に偏っていること、楽譜資料の多くが入手困難であることから、楽曲全体としては未だまとまった研究がなされていない現状である。

第 3 節　本研究の方法

個々の楽曲の調査に先立ち、まずは第二次世界大戦以前に作曲された楽曲を収集し、リストの作成を行った。リストの作成にあたっては、谷村政次郎氏（元・海上自衛隊東京音楽隊隊長）よりご提供いただいた未公開の楽曲リストを基礎として、後述の楽譜そのもののほか、雑誌・書籍の記録、NHK 放送博物館所蔵の放送記録、国立国会図書館におけるレコード発売記録などの筆者による調査結果を加えた。尚、楽曲リストに関する事項は、第 1 章で詳述する。楽譜資料は、個人的に入手したものや日本近代音楽館、国立国会図書館所蔵資料に加えて、海上自衛隊東京音楽隊、警視庁音楽隊のご協力の下、非公開の旧軍楽隊関係の所蔵資料の調査を行なったほか、宮内孝子氏（大沼哲ご息女）からは大沼哲氏関係の楽譜資料をご提供いただいた。この資料の概要は、第 4 章で詳述する。

個々の楽曲の調査では、楽曲分析を通して、楽曲リストや雑誌記事の調査より得られた吹奏楽曲創作の実態の裏付けを行なった。

第 4 節　本研究の構成

第 1 章では、作成した楽曲リストの概要と、楽曲リストから明らかとなった第二次世界大戦以前の吹奏楽曲全体としての傾向、特徴を分析し、全体像を把握する。楽曲リストは、当時の資料を中心に、第二次世界大戦以前に作曲された楽曲をデータベース化したものである。

第 2 章では、当時の楽器編成について、当時の雑誌の論説や楽器法関連書籍を用いて、整理・検証を行う。

第 3 章では、楽曲リストをもとに、明治期から第二世界大戦以前までの吹奏楽曲を個別に取り上げ、吹奏楽曲創作の実態を明らかにするとともに、雑誌記事に見られる吹奏楽曲創作に関する論説を取り上げ、吹奏楽曲創作の場がいかに形成されていったのかを考察する。

第 4 章では、実際の楽譜を用いて編成や作曲様式の調査、分析を行う。

第 5 章では、第二次世界大戦直後の放送・演奏記録や、レコードの発売状況に着目し、戦前に創作された吹奏楽曲が戦後どのように扱われるに至ったかを検証する。

第 1 章　第二次世界大戦以前に創作された吹奏楽曲リスト

第 1 節　リストの概要と調査手順

前述の通り、第二次世界大戦以前に創作された吹奏楽曲は、一部のみ現在に伝わっているだけで、これまでその全貌は明らかではなかった。1962（昭和 37）年の『バンドジャーナル』掲載の秋山紀夫「日本人の作品について」[1]は、第二次世界大戦以前の主要な吹奏楽曲（182 曲所収）が一覧として掲載されている数少ない例であるが、秋山自身が指摘している通り限定的な情報であった[2]。本論文の付録の楽曲リストは、この第二次世界大戦以前の吹奏楽曲の調査のため、筆者が各種資料から各楽曲を収集し、楽曲一覧を作成したものである。本章では、この楽曲リストの概要を示した後に情報を数値化し、データの分析を行なっていく。

楽曲リストでは、1945（昭和 20）年 8 月 15 日までに日本人によって純器楽作品として作曲された以下のような楽曲を、主な掲載の対象とした。

・吹奏楽のために作曲された楽曲。
・吹奏楽版以外（管弦楽版など）も存在する楽曲のうち、編曲が作曲者本人によるもの（作曲者が吹奏楽編成を想定して編曲を行なったもの)。

また、以下のものは今回除外した。

・吹奏楽伴奏による歌唱曲（行進曲のトリオに歌唱が加えられている楽曲を除く)。
・民謡、俗謡、歌謡、軍歌などをそのまま編曲した楽曲およびメドレー。

---

[1] 秋山紀夫「日本人の作品について」、『バンドジャーナル』4 巻 10 号、1962 年、13〜14 頁。

[2] 秋山自身も次のように記載している。「邦人による吹奏楽作品は何と云っても戦前又は戦時中のものが多く、そのほとんどは現在演奏されることはごく少い。その頃作られた多くの作品を整理し、作曲やそのいきさつを明かにしておくことは大切なことであるが調査に十分な時間をえられなかったため、ただ手許にある資料を並べただけに終わってしまい申訳ないが、これは近い将来に先輩のご協力をえて完全なものにしたいと考えている。」（同書、13 頁。）

「行進曲」については、国民歌謡の一ジャンルとしても多くの楽曲が作られたが、本リストで扱うのは器楽曲としての「行進曲」である。

「編曲」については、例えば後述のように軍歌をトリオに使用した行進曲のような楽曲も「編曲」として発表される場合がある[3]が、このような場合はリストに掲載した。

情報源は、当時の演奏・放送記録が判明する資料や当時の楽譜などを「基礎資料」と位置づけて主に使用し、必要に応じて「補足資料」を参照した。基礎資料の収集にあたっては、谷村政次郎氏[4]が作成していた未公開の楽曲リストを活用した。またこの未公開リストには谷村氏による作曲者への直接の聞き取り調査の結果等、貴重な情報も掲載されており、楽曲リスト作成にあたっては随時参照した。

①基礎資料

・日比谷公園音楽堂演奏記録
・放送記録（洋楽放送記録および番組確定表）
・レコード
・雑誌、書籍等刊行物
・出版楽譜及び手稿譜

②補足資料

・戦後の録音（レコード、CD）
・戦後の雑誌
・書籍
・インタビュー資料

など

---

[3] 第 4 章で詳述。

[4] 谷村政次郎は、海上自衛隊東京音楽隊隊長時代には戦前の吹奏楽曲を発掘し、CD 収録するなど精力的な活動を行ったほか、『行進曲「軍艦」百年の航跡――日本吹奏楽史に輝く「軍艦マーチ」の真実を求めて』（東京：大村書店、2000 年）、『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』（東京：つくばね舎、2010 年）、『海の軍歌と禮式曲――帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』（東京：出版共同社、2015 年）などの著書や解説等を多数執筆し、軍楽隊に関する研究の第一人者として知られている。

リストには楽曲名と作曲者名のほか、曲種、作曲者の出身（所属）、作曲年、出版社、演奏記録、収録レコードの情報を掲載した。尚、軍楽隊名義で発表され、作曲者名が不明であった楽曲[5]について、筆者による調査で明らかとなった楽曲や、谷村政次郎氏の聞き取り調査によって判明した楽曲[6]は、本名を掲載している。

楽曲の編成については、第 2 章で詳述する[7]。

演奏記録は、リスト作成にあたって確認した記録であり、必ずしも初演の記録ではない。作曲年は、レコードの発売年や曲中に使用している軍歌等の発表年が分かるものは、それからおおよその時期を推測し記載している。作曲者の出身（および関係）については、陸軍、海軍、民間、その他（団体等）、不明の項目を設定し、軍楽隊退役後民間で作曲活動を行なった人物に関しては、所属元の軍隊に続き（民間）と付記した。

演奏会記録の調査には、谷村政次郎著『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽氏に輝く軍楽隊の記録』を中心に、必要に応じて吹奏楽年鑑や各雑誌の記事を参照した。

放送記録は、NHK 放送博物館所蔵の『洋楽放送記録』より吹奏楽の放送記録を抽出し、必要に応じて『番組確定表』も参照した。『洋楽放送記録』は、当時の番組担当の職員によって、日時、出演者、演奏曲名等のほか変更事項も記載されており、情報が変更されていない可能性のある『番組確定表』よりも確実な情報源となっている。尚、本調査では東京中央放送局（JOAK）の記録を中心とし、必要に応じて地方放送局の記録を参照した。レコードの調査は、現物に加えて、国立国会図書館所蔵資料（国会図書館歴史的音源「れきおん」）を参照した。

---

[5] 「軍楽隊員が作曲した曲は個人名を出さず軍楽隊作曲として発表することが昭和 7 年頃から始まり、終戦まで続いたことによる。陸軍軍楽隊から始まったようで、海軍軍楽隊もそれに倣ったと思われる。」（谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲』、27 頁。）

[6] 谷村政次郎氏による作曲家名の調査について、既に各作曲家作品集の CD や書籍で公となっているものに関しては、それを参考資料として記載した。また、今回谷村氏からの資料で新たに明らかとなった楽曲については、その旨を記載した。尚谷村氏は、陸軍の楽曲は須摩洋朔、海軍の楽曲は斉藤丑松、片山正見に聞き取り調査を行っている。

[7] 喇叭譜は本リストでは省略した。

当時の楽譜資料の収集にあたっては、出版譜や雑誌等の付録に加えて、警視庁音楽隊[8]、海上自衛隊東京音楽隊のご協力のもと旧陸海軍軍楽隊資料の調査をおこなった。また谷村政次郎氏、宮内孝子氏にも情報・楽譜資料をご提供いただいた。楽曲リスト作成にあたって、使用した資料名は次の通りである。尚、基礎資料名の左の数字、および補足資料の左のアルファベットは、楽曲リストの典拠部分に対応している。

基礎資料

1. 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、東京：つくばね舎、2010 年。
2. 『洋楽放送記録』および『番組確定表』
3. 当時のレコード
4. 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、東京：管楽研究会、1941 年。
5. 雑誌（特記のないものは楽譜広告）

   『ブラスバンド』東京：管楽研究会

   『ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』東京：管楽研究会

   『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』東京：管楽研究会

   『吹奏楽月報』東京：管楽研究会

   『吹奏楽』東京：吹奏楽発行所

   『バンドの友』東京：バンドの友社

   『音楽之友』東京：音楽之友社
6. 日本音楽文化協会編『音楽文化新聞』（東京：音楽之友社、1941～1943 年）および日本音楽文化協会編『音楽文化協会会報』（東京：日本音楽文化協会、1944～1945 年）[9]
7. 門馬直衛『日比谷公園音楽堂演奏曲目解説集 第一輯』、東京：岡田日栄堂、1926 年。
8. 海上自衛隊所蔵楽譜
9. 警視庁音楽隊所蔵楽譜

---

[8] 警視庁音楽隊のライブラリーには、旧陸軍軍楽隊長で初代警視庁音楽隊隊長の山口常光氏が所有していた旧陸軍軍楽隊備品の楽譜が所蔵されているが、外部への公開は行なっていない。尚、警視庁音楽隊所蔵の資料のうち明治～大正期の一部の楽譜は、日本近代音楽館にマイクロフィルムが所蔵されている。

[9] 戸ノ下達也編『音楽文化新聞 ： 戦時期文化史資料』（金沢：金沢文圃閣、2011 年）の復刻版を使用。

10. 日本近代音楽館所蔵楽譜
11. 大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、東京：共益商社、1941 年。
12. 『日刊ラヂオ新聞』東京：日刊ラヂオ編集社。

補足資料

a. 第二次世界大戦以後の音源資料（レコード、CD）および付録解説
b. 谷村政次郎氏個人資料
c. 全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』東京：全日本吹奏楽連盟、2019 年。
d. 秋山紀夫「日本人の作品について」、『バンドジャーナル』第 4 巻 10 号、1962 年、13～14 頁。
e. 塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊所蔵楽譜目録 総譜篇」、『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 15 巻、1999 年、5～76 頁。
f. 福田滋『日本の作曲家と吹奏楽の世界』、東京：ヤマハミュージックメディア、2012 年。
g. 塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊 ： 海軍軍楽長・吉本光蔵の明治 37・38 年日記から」、『東京芸術大学音楽学部紀要』第 40 巻、2014 年、71～89 頁。
h. 宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』、東京：音楽之友社、1993 年。
i. 富樫康『日本の作曲家』、東京：音楽之友社、1956 年。
j. 谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲――帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、東京：出版共同社、2015 年。
k. 山口常光編『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、東京：三青社、1973 年。
l. 田辺祥隆編『田辺隆太郎遺稿集』、東京：田辺球瓊子、1977 年。
m. 大沼哲ホームページ[10]
n. 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』（音楽篇）、東京：音楽之友社、1987～2003 年。

[10] http://satoruonuma.web.fc2.com、2021 年 4 月 10 日閲覧。

第 2 節　リストの分類

本リストに掲載の楽曲データ（全 806 曲）の分類結果は次の通りである。

(1)曲種

表 1.1

曲種	曲種別集計
行進曲	522
舞曲	74
意想曲	48
序曲・前奏曲	43
組曲	23
その他	47
不明	49

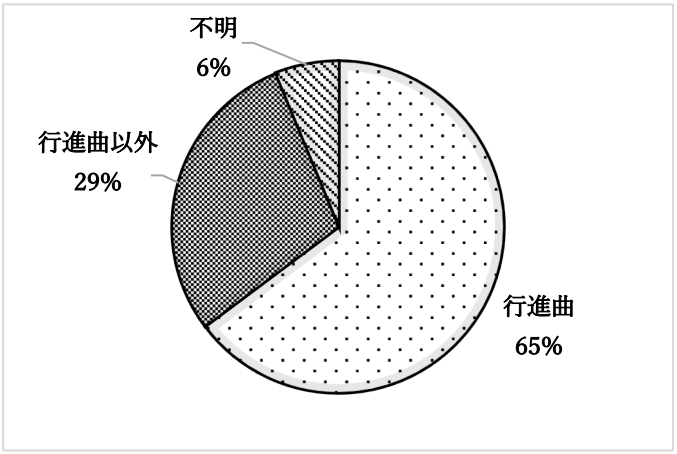


図 1.1 行進曲とそれ以外の楽曲の割合

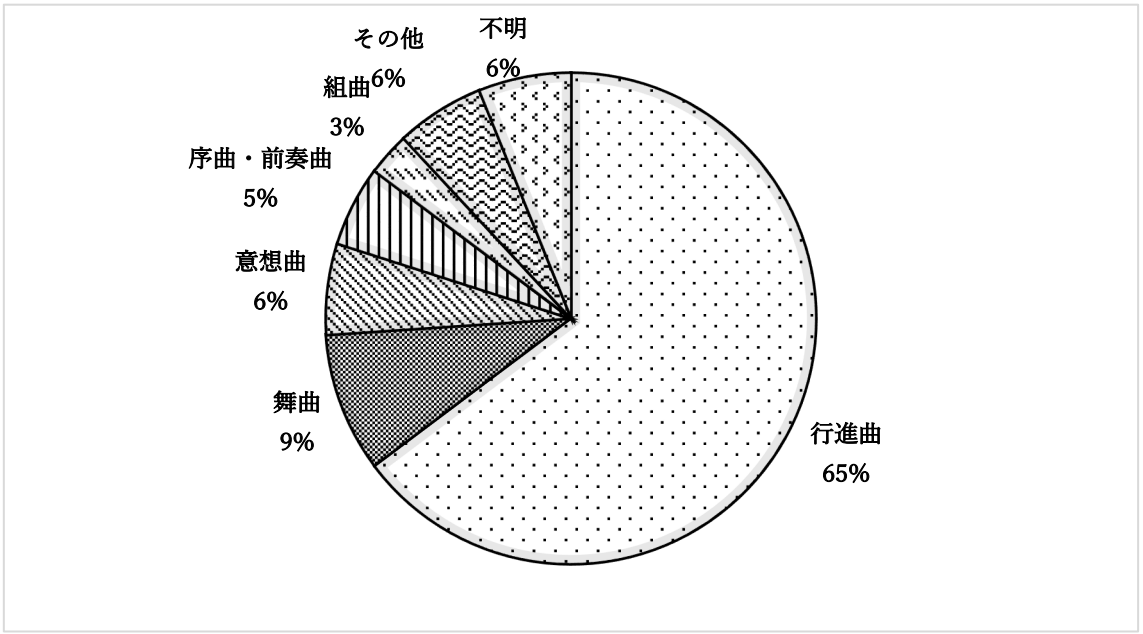


図 1.2 曲種の詳しい内訳

表 1.1 と図 1.1、図 1.2 を見ると、「行進曲」が他のジャンルと比べて圧倒的多数であったことが明らかである（「行進曲」の様式については、第 4 章で詳述する）一方、それ以外も 4 割程を占めている。「行進曲」以外では、「円舞曲」を中心とした「舞曲」が目立っている。この「舞曲」の形式は、西洋・東洋様々な様式のものが見られる。「意想曲」は、情景描写的要素のある標題音楽の一種で、「描写曲」と表記されることもある[11]。その他には「幻想曲」、「変奏曲」といった様式でも作品が創作されていた。

(2)作曲家の所属別の楽曲数

表 1.2

出身	出身別集計
陸軍（全合計）	307
海軍（全合計）	213
民間	226
その他	5
不明	55

表 1.3

作曲者が軍楽隊名義で明らかでないもの	作曲者別集計
陸軍軍楽隊名義	91
海軍軍楽隊名義	70

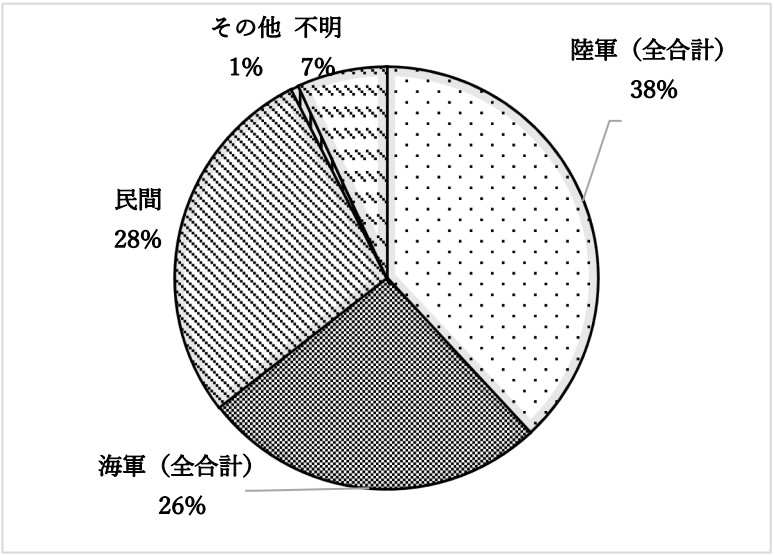


図 1.3　作曲家の所属（出身）別の割合

表 1.2 と図 1.3 は、楽曲を作曲者の所属（出身）ごとに分類した数である。このデータの分類は、海軍出身者（退役後の作品も含む、また軍楽隊員ではないが、海軍関係者である朝永研一郎も含む）、陸軍出身者（退役後の作品も含む）、民間出身者（軍楽隊関係者以外）、その他（民間団体名義）、所属不明、となっている。この表からは、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲は、軍楽隊出身者による楽曲が半数を占める一方で、民間出身者からも多数の楽曲が生み出されていることがわかる。

また、作曲者が軍楽隊名義となっている楽曲の中で、明らかとなっていないものは表 1.3 の通りであり、軍楽隊員による楽曲の三分の一ほどが作曲者不明となっている。

---

[11] 例えば、テオドーレ・ミヒャエリス作曲《森の鍛冶屋》には、「意想曲」（ミカエリス作曲、管楽研究会編『意想曲「森の鍛冶屋」』総譜、シンフォニー楽譜出版社、1939 年）、「描写曲」（門馬直衛『日比谷公園音楽堂演奏曲目解説集 第一輯』、東京：岡田日栄堂、1926 年、193 頁）の表記がある。

(3)作曲家のデータ一覧

表 1.4 は、楽曲リスト掲載の楽曲の作曲家一覧である。作曲家の情報の参照元は次の通りである。

1. 東京藝術大学音楽学部楽理科／大学院音楽文化学専攻音楽学分野海軍・陸軍軍楽隊データベース、東京音楽学校在籍者データベース
2. 大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、東京：共益商社、1941 年。
3. 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、東京：管楽研究会、1941 年。
4. 富樫康『日本の作曲家』、東京：音楽之友社、1956 年。
5. 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、東京：日外アソシエーツ、2008 年。
6. 『洋楽放送記録』記載事項。
7. 日外アソシエーツ編集部編『新撰 芸能人物事典――明治～平成』、東京：日外アソシエーツ、2010 年。
8. 岡部伸平資料：早稲田大学紳士録刊行会編『早稲田大学紳士録 昭和 15 年度版』、東京：早稲田大学紳士録刊行会、1939 年。
9. 田辺隆太郎資料：田辺祥隆編『田辺隆太郎遺稿集』、東京：田辺球瓊子、1977 年。
10. CD『日本の吹奏楽の変遷』（東京：国立音楽大学、2003 年）ブックレット。
11. 朝永研一郎資料：日本著作権協会『文化人名録 昭和 32 年度版』（東京：日本著作権協議会、1957 年）、佐佐木信綱「朝永研一郎君を悼みて」（竹柏会編『心の花』58 巻 4 号、1954 年、36～37 頁。）

表 1.4 掲載作曲家一覧

名前	主な別名・別表記	生没年	所属	典拠
赤崎 彦二			海軍	1
足羽 章		1912～1999	民間	1
油谷 三美			陸軍（民間）	1、3
安部 幸明		1911～2006	民間	2、4
安倍 盛		1905～1955	民間	3、2、5
飯田 信夫		1903～1991	民間	2、4
石井 五郎		1905～1978	民間	2、4、5
石井 留之助		？～1948	海軍	1
石田 一郎		1909～1990	民間	2、3、4
石田 久麿			不明	
市川 都志春		1912～1998	民間	2
伊藤 宣二		1907～？	民間	2
伊藤 昇		1903～1993	海軍（民間）	2、4、5
伊藤 隆一			陸軍（民間）	1、2、3
井上 繁隆		？～1987	陸軍	1
伊福部 昭		1914～2006	民間	2
岩井 貞麿		1883～1944	民間	2、10
岩国 茂太郎		1901～？	民間	2
上羽 仙松			陸軍（民間）	1、2、3
内田 元		1903～1947	民間	2、5
江木 理一		1890～1970	陸軍（民間）	1、2、3
江口 源吾	江口 夜詩	1903～1978	海軍（民間）	1、2、3、4
遠藤 定夫		？～1944	陸軍	1
大木 正夫		1901～1971	民間	2、5、4
太田 忠		1901～？	民間	5、4
大塚 淳		1885～1945	民間	3、2
大沼 哲		1889～1944	陸軍	1、2、3、4

大場 八百蔵			海軍（民間）	1
岡部 伸平	柚原 時雄	1896～？	民間	2、6、8
荻野 理喜治			陸軍	1
奥山 貞吉		1887～1956	民間	2
小倉 朗		1916～1990	民間	2、4
小原 政治		？～2002	海軍	1、3
小山 徳彦		1903～1957	民間	2
柿本 七郎		1909～？	民間	1、2、4
片山 正見		1914～2009	海軍	1
勝部 藤五郎		1889～？	陸軍（民間）	1
川上 昇			不明	
河南 史郎			不明	
清瀬 保二		1900～1981	民間	2、4
弘田 龍太郎		1892～1952	民間	1、2、4
草川 信		1893～1948	民間	2、4
久保田 憲吉			陸軍（民間）	1、3
河野 佐七			陸軍	1
古関 裕而		1909～1989	民間	2、4
小森 宗太郎		1900～1975	陸軍（民間）	1、2、3
斉藤 丑松	鹿倉 丑松	1912～1994	海軍	1
斉藤 定人		1901～1996	海軍	1
佐藤 長助		1906～1985	陸軍（民間）	1、2、3
佐野 鋤		1908～1996	民間	5
澤田 礎敬			不明	
澤田 幸宏			民間	3
清水 脩		1911～1986	民間	1、2
下総 皖一		1898～1962	民間	1、2
白磯 巌		1908～？	海軍（民間）	1、2、3
須賀田 礒太郎		1907～1952	民間	2、4
菅原 明朗		1897～1988	民間	3、2、4

杉山 長谷夫	杉山 長谷雄	1889～1952	民間	1、2
鈴木 総			不明	
鈴木 哲夫		1903～1977	民間	3、4
須摩 洋朔	明石 丈夫	1907～2000	陸軍	1、5
諏訪本 正富			陸軍	1
瀬戸口 藤吉	大山 藤吉	1868～1941	海軍（民間）	1、2、3、4
高津 敏		1886～？	陸軍（民間）	1、2、3
高嶺 宕			不明	
竹井 徳良			民間	6、3
竹内 龍夫		？～1944	陸軍	1
田代 晴郎		？～1992	海軍	1
田中 準			不明	
田中 豊明		1880～1934	海軍（民間）	1、2
田中 豊三	田中 豊藏		海軍	1
田中 穂積		1855～1904	海軍（民間）	1
田辺 隆太郎		1893～1953	陸軍（民間）	1、2、3、9
田村 孝史			不明	
田村 明一			陸軍	1、2、3
辻 順治		1882～1945	陸軍	1、3
辻井 市太郎		1910～1986	民間	7
辻井 玉之助			不明	
筒井 快哉			陸軍	1
椿原 良作		1904～1947	海軍	1
陶野 重雄		1908～1985	民間	2、4
徳田 三郎			海軍	1
朝永 研一郎	朝永 造機	1892～1954	海軍[12]	11

[12] 以下の資料によると、朝永は海軍造機少将で軍楽隊員ではないが、作曲活動を行っていた人物である。日本著作権協会『文化人名録 昭和32年度版』（東京：日本著作権協議会、1957年）、佐佐木信綱「朝永研一郎君を悼みて」（竹柏会編『心の花』58巻4号、1954年、36～37頁。）

戸山 英将			不明	
外山 国彦		1885～1960	民間	2
永井 建子		1865～1940	陸軍	1、4
永井 巴		1892～？	陸軍（民間）	1、2、3
長津 義司		1904～1986	民間	2、5
仁木 他喜雄		1901～1958	民間	2、4
野坂 栄太郎			海軍	1
萩原 英一		1887～1954	民間	1、2、3
橋本 国彦		1904～1949	民間	1、2、3
服部 逸郎	レイモンド服部	1907～1973	民間	2、4、5
服部 正		1908～2008	民間	2
早川 弥左衞門		1886～1949	海軍	1、2、3
林 亘		1870～1950	陸軍（民間）	1、2、3
坂西 久治	坂西 輝信	？～1985	海軍（民間）	1
平尾 貴四男		1907～1953	民間	2、4
平川 英夫		1906～1995	民間	5
広岡 九一		1898～1988	民間	1、2、3
広山 勝留			不明	
深井 史郎		1907～1959	民間	2、4
深海 善次		1904～1997	海軍（民間）	1、4、5
福喜多 鎮雄		？～1972	海軍	1、3
藤井 弘也		？～1966	陸軍（民間）	1、5
藤咲 源司		？～1945	海軍	1、3
古矢 弘政		1854～1923	陸軍	1
堀内 敬三		1897～1983	民間	3、2、4
松倉 五郎			陸軍	1
松平 頼則		1907～2001	民間	2、4
松本 岩井	永井 岩井		陸軍	1
水島 数雄		1902～1972	陸軍	1、3
三田 正美			海軍（民間）	1

箕作 秋吉		1895～1971	民間	2、4
三戸 知章	頼 雅章	1900～1987	民間	3
美春 錠二			不明	
宮下 紫水			民間	2
宮田 清蔵		1898～？	民間	2
宮田 東峰		1898～1986	民間	2
森 義八郎		1900～1965	民間	2、5、4
森 光栄			不明	
森屋 五郎			陸軍	1、2、3
八木 伝		1908[13]～1984	陸軍（民間）	1、2、4
山口 常光		1894～1977	陸軍	1、2、3
山下 孝			民間	6
山田 耕筰	山田 耕作	1886～1965	民間	1、2、4
山本 銃三郎			陸軍	1
山本 力		1913～？	民間	1、3
山本 直忠		1904～1965	民間	2、4
吉田 盈照			陸軍（民間）	1
吉本 光蔵		1863～1907	海軍	1、4
吉原 規		1897～1978	民間	1、2
若松 喜八			海軍	1
和田 小太郎		1887～1974	陸軍（民間）	1、2、3
渡辺 浦人		1909～1994	民間	1、2、4
渡辺 永吉			陸軍	1

[13] 生年に複数記述あり。1907年（大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』）、1908年（富樫康『日本の作曲家』）など。

この表に掲載されている作曲家を、出身（所属）別に集計すると、軍楽隊員と民間出身者の割合がほぼ均等となった。前項の「作曲家の所属別の楽曲数」と照らし合わせると、軍楽隊員は作曲者が不明であることを考慮したとしても、多くの軍楽隊関係以外の作曲家が吹奏楽曲の創作を行なっていた様子が明らかとなった。

表 1.5

出身（所属）別作曲家数	
海軍	27
陸軍	36
民間	60
不明	13
合計	136

また、表 1.6 は、掲載作曲家一覧に名前のある陸海軍楽隊員の人数を、入隊年[14]ごとに表したグラフであるが、1900 年代後半以降、昭和期にかけて吹奏楽曲の作曲を行う隊員が増加していった様子から、吹奏楽曲創作の活動期の推移を見ることができる。

[14] 個々の作曲家の生没年が不明であることが多いため、入隊年を対象とした。入隊年の調査には、「東京藝術大学音楽学部楽理科／大学院音楽文化学専攻音楽学分野 海軍・陸軍軍楽隊データベース」（http://musicology.geidai.ac.jp/wp/research/militarybanddb/、2021 年 4 月 10 日参照）を使用した。

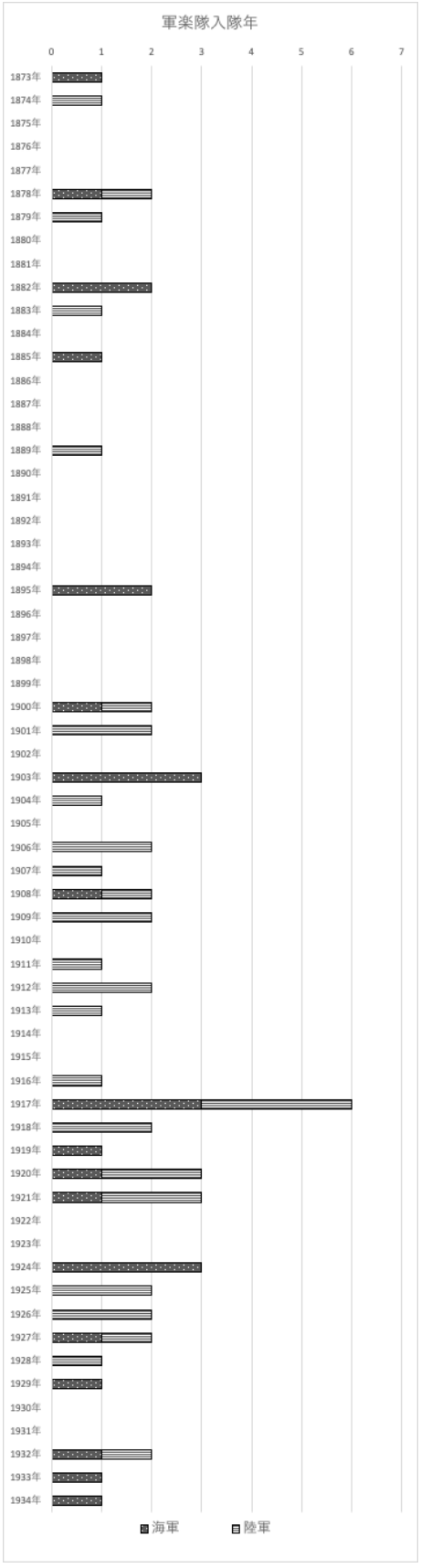
表 1.6 軍楽隊員の入隊年と、年ごとの人数の比較

海軍軍楽隊

名前	軍楽隊への入隊年
田中 穂積	1873年
吉本 光蔵	1878年
赤崎 彦二	1882年
瀬戸口 藤吉	1882年
野坂 栄太郎	1885年
田中 豊明	1895年
三田 正美	1895年
若松 喜八	1900年
藤咲 源司	1903年
早川 弥左衛門	1903年
福喜多 鎮雄	1903年
坂西 久治	1908年
斉藤 定人	1917年
田中 豊三	1917年
大場 八百蔵	1917年
江口 源吾	1919年
伊藤 昇	1920年
椿原 良作	1921年
田代 晴郎	1924年
深海 善次	1924年
白磯 巌	1924年
小原 政治	1927年
斉藤 丑松	1929年
片山 正見	1932年
石井 留之助	1933年
徳田 三郎	1934年

陸軍軍楽隊

名前	軍楽隊への入隊年
松本 岩井	1874年
永井 建子	1878年
荻野 理喜治	1879年
山本 銃三郎	1883年
古矢 弘政	1889年
林 亘	1900年
辻 順治	1901年
伊藤 隆一	1901年
高津 敏	1904年
勝部 藤五郎	1906年
和田 小太郎	1906年
大沼 哲	1907年
藤井 弘也	1908年
江木 理一	1909年
永井 巴	1909年
久保田 憲吉	1911年
山口 常光	1912年
河野 佐七	1912年
田辺 隆太郎	1913年
田村 明一	1916年
森屋 五郎	1917年
油谷 三美	1917年
小森 宗太郎	1917年
井上 繁隆	1918年
上羽 仙松	1918年
渡辺 永吉	1920年
諏訪本 正富	1920年
遠藤 定夫	1921年
水島 数雄	1921年
須摩 洋朔	1925年
松倉 五郎	1925年
佐藤 長助	1926年
八木 伝	1926年
筒井 快哉	1927年
吉田 盈照	1928年
竹内 龍夫	1932年



ここまでの楽曲の調査から、第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽創作の全体像について、次のようにまとめることができる。第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽曲は、「行進曲」を主要なジャンルとして創作が展開された一方、「行進曲」以外の曲種も多数創作されていた。この吹奏楽曲は軍楽隊出身者の手によるものが多数を占める一方、軍楽隊関係者以外でも多数の作曲家が、吹奏楽曲を手がけていた様子も明らかとなった。尚、吹奏楽曲創作の変遷については、第 3 章で詳しく取り扱う。

第 2 章　編成の考察

第 1 節　「ブラスバンド」編成

戦前の「吹奏楽」は、各雑誌や演奏記録に見られるように、現在の吹奏楽の編成に加えて喇叭隊、喇叭鼓隊、旋律喇叭隊、鼓笛隊（後述）なども含めて、管楽器と打楽器による合奏が総括的なジャンルとして捉えられていた。現代で吹奏楽とされる、木管楽器、金管楽器、打楽器を中心とした編成に関しては、「ブラスバンド」[1]として、雑誌や書籍等で扱われている。以後、「第二次世界大戦以前の吹奏楽編成」は、このブラスバンド編成に、喇叭隊、喇叭鼓隊、旋律喇叭隊、鼓笛隊等を含めた広義の編成を示すこととする。最初に、このブラスバンド編成を取り上げる。

まずは比較の対象として、第二次世界大戦以後の日本の標準編成の例をいくつか示す。一点目は 1979（昭和 54）年に、日本吹奏楽指導者協会（JBA）より発表された標準編成案である。二点目は、全日本吹奏楽コンクール課題曲公募のための作曲公募、「朝日作曲賞」および「全日本吹奏楽連盟作曲コンクール」応募要項に記載の編成表である。全日本吹奏楽コンクールにおいては、課題曲の編成を原則遵守しなければならない。指定の楽器がない場合には一部楽器の代用が認められているが、その場合は課題曲・自由曲を通しての使用となり、途中での持ち替えは認められない。このことから、コンクール出場団体は課題曲の編成を基準に編成を行うこととなり、実質的に標準編成として固定されていると言える。

---

[1] 吹奏楽・ブラスバンドの呼称の変遷について、詳しくは谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム ── 日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、18〜19 頁、塩津洋子「『吹奏楽』の概念の変遷」、『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 10 巻、1992 年、29〜41 頁などを参照のこと。

表 2.1　日本吹奏楽指導者協会の標準編成表[2]

	日本吹奏楽指導者協会標準編成表（1979年）					
編成人数	66名		76名		86名	
Piccolo	7	1	7	1	9	1
Flute		6		6		8
Oboe	2	2	2	2	3	2
English horn						1
Bassoon	2		2		2	
E♭ Clarinet	17	1	22	2	24	2
B♭ Clarinet		16		20		22
Alto Clarinet	5	2	6	2	6	2
Bass Clarinet		2		2		2
Contra-Alto Clarinet		1		1		1
Contra-Bass Clarinet				1		1
Soprano-Saxophone	6	1	6	1	6(1)	1
Alto-Saxophone		2		2		2
Tenor-Saxophone		2		2		2
Baritone-Saxophone		1		1		1
Bass-Saxophone						(1)
Cornet	6		7		8	
Trumpet						
Flügel-horn						
Horn	4		6		6	
Alto-horn						
Trombone	4		4		6	
Bass-Trombone						
Bariton	2		2		3	
Euphonium						
E♭ Bass	4		4		5	
B♭ Bass						
String-Bass	2		2		2	
Timpani	5		6		6	
Percussion						

表 2.2　全日本吹奏楽コンクール課題曲公募の編成表[3]

	第31回朝日作曲賞（全日本吹奏楽コンクール課題曲募集要項、2020年）		第13回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール（2020年）	
	A編成	B編成		
Piccolo	○	○	○（Fluteとの持ち替え可）	
Flute	I,II	I,II	I,II	
Oboe	○	Opt.	I,II	
Bassoon	○	Opt.	I,II	
E♭ Clarinet	○	Opt.	○	
B♭ Clarinet	I,II,III	I,II,III	I,II,III	
E♭ Alto Clarinet	○	Opt.	○	
B♭ Bass Clarinet	○	○	○	
E♭ Alto Saxophone	I,II	I,II	I,II	
B♭ Tenor Saxophone	○	○	○	
E♭ Baritone Saxophone	○	○	○	
B♭ Trumpet	I,II,III	I,II,III	I,II,III	
F Horn	I,II,III,IV	I,II,III	I,II,III,IV	
Trombone	I,II,III	I,II,III	I,II,III	
Euphonium	○	○	○	
Tuba	○	○	○	
String Bass	○	Opt.	Opt.	
Percussion	5名以内	5名以内	Timpani	○
			Percussions	5名以内
	ローマ数字はパートを表す。人数の指定は無し。Opt.はオプション指定			
	全日本吹奏楽コンクールの人数規定　中学校の部・・・50名以内、高等学校の部・・・55名以内 大学の部・・・・・55名以内、職場・一般の部・・65名以内			

[2] 出典： 音楽之友社編『吹奏楽の編成と歴史』、音楽之友社、1983 年（吹奏楽講座）212 頁。

[3] 出典：『第 31 回朝日作曲賞 全日本吹奏楽コンクール課題曲募集要項』、全日本吹奏楽連盟、2020 年。

『第 13 回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール募集要項』、全日本吹奏楽連盟、2020 年。

（1） 軍楽隊の編成

日本の軍楽隊は、1869（明治 2）年に薩摩藩士が軍楽伝習生として、イギリス人のジョン・ウィリアム・フェントン（John William Fenton、1831 年〜1890 年）の指導を受けたことから始まる[4]。この薩摩藩の軍楽隊が母体となり、後の陸海軍楽隊が発展していくこととなった。明治期には他に、宮内省式部職楽部で吹奏楽演奏が行われ、民間では市中音楽隊のような商業的な目的の吹奏楽団も活動を始めるが、軍楽隊はプロフェッショナルな吹奏楽団体の代表として、第二次世界大戦終結まで活動を行なっていた。この他の吹奏楽の専門団体としては、1923（大正 12）年に陸軍第四師団軍楽隊をルーツとして結成された大阪市音楽隊のほか、昭和期には退役軍楽隊員を中心に星桜吹奏楽団、大東京吹奏楽団、海洋吹奏楽団、外地では新京吹奏楽団などが組織された。

陸軍軍楽隊は、東京の陸軍戸山学校で教育が行われ、ここに存在した「陸軍戸山学校軍楽隊[5]」が陸軍軍楽隊の中心組織として機能した。大正期には、東京の戸山学校と近衛師団に加え、第三師団（名古屋）、第四師団（大阪）、朝鮮、旅順の全 6 隊を有したが、軍備縮小によって戸山学校のみの存続となった[6]。そのため戸山学校では定員を増加した上で、臨時編成として中央より各地に派遣する形態を取ることとなった。また、当初は管弦楽編成も設置され、東京音楽学校より派遣された教官によって教育が行われていたが、太平洋戦争期に廃止されている。一方、海軍軍楽隊は、横須賀海兵団での教育の後、各鎮守府、各艦隊に隊員を派遣する形態を取った。この横須賀海兵団には東京分遣隊があり、公園奏楽やラジオ放送での活動のほか、技能優秀な隊員が東京音楽学校に特修生として派遣され高度な教育を受けた。また陸軍同様、管弦楽編成も組織された[7]。横須賀海兵団と東京派遣所の二隊が、海軍軍楽隊の中枢組織として機能した[8]。

---

[4] 塚原康子「日本におけるエッケルトの足跡――明治期の外国人軍楽教師との比較から――」、ゴチェフスキ・ヘルマン他『近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究 : お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に』、平成 26〜30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、2019 年、98 頁。

[5] 名称はいくつか変遷の後、1937（昭和 17）年 12 月 15 日に「陸軍軍楽隊」となり終戦に至っている。（山口常光編『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、三青社、1973 年、520 頁。）

[6]「軍備縮小の嵐」、山口常光編『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、167〜175 頁。）

[7] 塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」、『ブラスバンドの社会史 : 軍楽隊から歌伴へ』、105〜106 頁。

[8]「昭和前期の東京派遣所と上野音楽学校」、楽水会編『海軍軍楽隊―日本洋楽史の原典』、東京：国書刊行会、1984 年、120〜123 頁。

次に、記録に残っている昭和期の陸海軍の編成表を示す。

表 2.3　海軍軍楽隊の編成表[9]

	海軍軍楽隊（吹奏楽隊に対する軍楽器並に人員配置表、1927年～終戦時まで）		
	甲種人員（44人）	乙種人員（32人）	丙種人員（18人）
Dフラットフリュート 及び Dフラットピッコロ	3	2	1
オーボー	2	1	1
Eフラット クラリネット	2	1	
Bフラット クラリネット	9	6	4
バスーン	2	1	1
アルトサクサホン	1	1	
テノールサクサホン	2	1	
Bフラット　オルトホン	2	2	
Bフラット(A) コルネット	6	4	3
Eフラット ホルン	4	3	2
テノールトロンボン 及び テノールスライドトロンボン	3	2	1
G ベストロンボン	1	1	1
ユーフォニオン	2	2	1
Eフラット ベス	2	2	1
Bフラット ベス	1	1	
大太鼓	1	1	1
機鼓及び小太鼓	1	1	1
特殊楽器			

表 2.4　陸軍軍楽隊の編成表[10]

	陸軍戸山学校軍楽隊（終戦時の人員配置）
フリュート	6
オーボア	4
バッソン	2
プチットクラリネット	4
クラリネット	13
サキソホーンアルト	5
サキソフォーンテノール	2
サキソフォーンバリトン	2
コルネ・ア・ピストン	8
トロンペット	5
コール・ア・ピストン	3
アルト	4
トロンボーン	11
バリトン	4
プチットバース	6
コントルバースmi♭	2
コントルバースsi♭	2
（コントルバース）*注	1
プチットケース	5
グロスケース	1
合計	90
少尉以下兵長までの階級で、楽器名の記載のある隊員のみ集計（死亡者も含む） *注　コントルバースの移調管が不明の隊員	

[9] 出典：「日中戦争時の海軍軍楽隊」、楽水会編『海軍軍楽隊―日本洋楽史の原典』、124 頁。

[10] 出典：山口常光『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、496～498 頁。

陸軍軍楽隊は、創設期にギュスターヴ・シャルル・ダグロン（Gustave Charles Dagron、1845年〜1898年）[11]、シャルル・ルルー（Charles Leroux、1851年〜1926年）[12]らフランス人教師に指導を受けて以来、フランス式の軍楽が定着した。一方、海軍軍楽隊は、イギリス人のジョン・ウィリアム・フェントンの後にドイツ人のフランツ・エッケルト（Franz Eckert、1852年〜1916年）[13]が指導に当たったことで、イギリス式からドイツ式の軍楽へと転換した影響もあり、結果としてイギリス、ドイツ、そしてアメリカの折衷型となった[14]。このことから、陸海軍はそれぞれ異なる楽器編成を取ることとなり、上記の表では、陸軍の楽器名の呼称はフランス語、海軍は英語を中心に言語が混在している。

海軍では人数に基づき 3 つの編成スタイルがあり、小編成時には楽器の兼任があることを示している。トロンボーンの表記が分けられているのは、当時はスライド式と共にバルブ式が使用されていたため、あえて表記しているものと推測できる。陸軍の表は全人員配置による人数であり、実際の活動における編成人数ではない。

陸海軍編成ともに、サクソルン属が多く使用されており、金管楽器の種類は、現在の編成よりも豊富である。特に陸軍では、「アルト」、「バリトン」、「プチットバース」、「コントルバース mi♭」と「コントルバース si♭」と楽器の種類が充実している。サクソフォーンも同様に、陸軍の方がより多く含まれている。海軍の「オルトホーン」はドイツ語由来であり、アメリカのテノール・ホーン、フランスのサクソルン・バリトン（バリトン）を示す。

海軍の打楽器に関して、「シンバルがないが、これは大太鼓に取り付けて演奏されたので省略されたのである。久しく海軍では行進演奏以外はつねにシンバルは大太鼓に取り付けて演奏した[15]」との記述がある。

---

[11] 塚原康子「日本におけるエッケルトの足跡――明治期の外国人軍楽教師との比較から――」、110 頁。

[12] 同上。

[13] 同前、103 頁。

[14] 山口常光は 1938（昭和 13）年に、「現在我国に於ても、陸軍々楽隊では仏式を採って居り、海軍々楽隊では英米独式を採用している。」と説明している。（山口常光『ブラスバンド教本』、管楽研究会、1938年、41 頁。）

[15] 中村政雄「海軍軍楽隊」、『吹奏楽の編成と歴史』1983 年、音楽之友社、127 頁。（新版 吹奏楽講座 7）

（2） アマチュア団体の編成

学校や職場に代表される、いわゆるアマチュアの吹奏楽活動が活発化したのは、明治時代後期頃からである。学校バンドは、「日清戦争前後に各地に結成されて戦勝祝賀会や恤兵音楽会（兵士のための慰問演奏会）などを盛んに行なっていた少年音楽隊に触発されるような形で、各地の学校に音楽隊が誕生した」[16]ことに始まり、全国へと広がっていった。

職場の活動としては、大正期に労働者の厚生活動の一環として吹奏楽が広く導入されることとなった。このアマチュアの活動は、昭和初期には全国へと広がり、各種吹奏楽雑誌の発行や、演奏会の開催、吹奏楽連盟の設立と全国各地での大会の開始へと繋がっていく。

次に、昭和初期の各雑誌や書籍に掲載されていた、アマチュア団体向けの編成表を示す。

アマチュア団体向け楽器編成表

表 2.5[17]

	プラスバンドの編成法　《プラスバンド第1巻1号（管楽研究会、1933年）》									
	5名		7名		10名		15名		20名	
ピッコロ							1		1	
フルート									(1)	
オーボー									1	
クラリネット	1		1		2		3		4	
コルネット	1		2		2		2		3	
トロンペット							1		1	
アルト					1		1		2	
トロンボーン					1		2		2	
バリトン	1		1		1		1		1	
小バース			1		1		1		2	
コントラバス							1		1	
	大太鼓	1	大太鼓	1	大太鼓	1	大太鼓	1	大太鼓	1
	小太鼓	1	小太鼓	1	小太鼓	1	小太鼓	1	小太鼓	1
	シンバル		シンバル		シンバル		シンバル		シンバル	

表 2.6[18]

	プラスバンド編成法《バンドの友広告（田邊吹奏楽器株式会社、1940年頃）》					
	7名		10名		15名	
Dbピッコロ					1	
Ebクラリネット					1	
Bbクラリネット	1		2		2	
Bbコルネット	1		2		2	
Bbトラムベット	1		1		1	
Ebアルト					1	
Bbトロンボーン	バルブ	1	バルブ	1	スライド	1
Bbバリトン	1		1		1	
Bb小バース			1		1	
Ebバース					1	
	大太鼓2尺	1	大太鼓2尺2寸	1	大太鼓26吋	1
	小太鼓1尺2寸	1	小太鼓14吋	1	小太鼓15吋	1
	シンバル8寸		シンバル9寸		シンバル1尺	

表 2.7[19]

	吹奏楽の編成《紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑（管楽研究会、1941年）》		
	第一案（15名）	第二案（18名）	第三案（22名）
ピッコロ	1	1	1
Ebクラリネット			1
Bbクラリネット	3	4	4
コルネット	2	3	4
トロムベット	1	1	1
アルト	2	2	2
トロンボーン	2	2	2
バリトン	1	1	2
小バス	1	1	2
Ebコントラバス		1	1
太鼓（大小）	2	2	2

16 都賀城太郎「スクールバンドと吹奏楽の普及」、『日本の吹奏楽史』、62～63 頁。

17 参照：「ブラスバンドの編成法」、『ブラスバンド』1 巻 1 号、管楽研究会、1933 年、12～13 頁。

18 参照：「ブラスバンド編成法」、『バンドの友』4 巻 10 号、バンドの友社、1939 年、付録。

19 参照：「吹奏楽の編成」、『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、管楽研究会、1941 年、341 頁。

表 2.8[20]

	吹奏楽の編成《紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑（管楽研究会、1941年）》「楽器会社が掲げている編成表」				
	15人編成	20人編成	25人編成	35人編成	50人編成
ピッコロ C	1	1	1	1	1
フリュート C		1	1	1	2
オーボー C				1	2
バズーン C					1
クラリネット E♭		1	1	1	2
クラリネット B♭	3	4	4	7	12
サクソフォンアルト E♭			1	1	1
サクソフォンテナー B♭			1	1	1
サクソフォンバリトン E♭				1	1
コルネット B♭	2	3	4	4	4
トランペット B♭	1	1	1	2	4
アルト E♭	1	2	2	4	4
スライドトロンボン B♭	2	2	2	3	4
バリトン B♭	1	1	1	1	2
小バス B♭	1	2	2	3	5
コントラバス E♭	1		1	1	1
コントラバス B♭		1	1	1	1
	大太鼓 1	大太鼓 1	大太鼓 1	大太鼓 1	大太鼓 1
	小太鼓 1	小太鼓 1	小太鼓 1	小太鼓 1	小太鼓 1
	シンバル	シンバル	シンバル	シンバル	シンバル

表 2.9[21]

	編成表《瀬戸口藤吉『ブラスバンドの編成と合奏法』アルス音楽大講座 第7巻（アルス、1936年）》													
	小編成					中編成					大編成			
	12人	15人	18人	20人	23人	25人	28人	30人	33人	35人	40人	45人	47人	50人
D♭ フリュート I-II	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	3
オーボエ			1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2
E♭クラリネット	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2
第1B♭クラリネット	1	1	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	4	4
第2B♭クラリネット	1	1	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	4	4
第3B♭クラリネット		1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3
バス・クラリネット												1	1	1
バズーン I-II					1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
サキソフォーン									1	1	1	2	2	2
第1B♭コルネット	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3
第2B♭コルネット	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2
B[♭]ビュゲル・ホルン I-II									2	2	2	2	2	2
E♭トラムペット I-II										1	2	2	2	2
第1E♭ホルン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第2E♭ホルン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第3E♭ホルン						1	1	1	1	1	1	1	1	1
第4E♭ホルン												1	1	1
B♭テナー・ホルン I-II					1	1	1	2	2	2	2	2	2	2
トロンボーン I-II		1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3
バス・トロンボーン		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
ユーフォニオン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2
バス	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3
打楽器	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

図 2.5、図 2.6 は、各楽器会社がアマチュア向けに作成し、配布していた編成案である（1933 年、1944 年頃）。図 2.7、図 2.8 は吹奏楽年鑑に記載のもの（1941 年）、図 2.9 は、元海軍軍楽隊楽長の瀬戸口藤吉による編成表（1936 年）である。

[20] 参照：同前、341～342 頁。

[21] 参照：瀬戸口藤吉「ブラスバンドの編成と合奏法」、北原鉄雄編『管楽器・打楽器の実技』、アルス、1936 年、第 7 巻、322 頁。（アルス音楽大講座 7）

これらの編成表からは、特に小編成時の楽器の編成状況から、当時のブラスバンド編成においてどの楽器を優先的に使用させることを想定していたかがわかる。軍楽隊の編成と比較すると、サクソフォーン[22]の使用は控えめか皆無であり、他方フレンチ・ホルンの代用の「アルト」を初め、「バリトン」、「小バス」（ユーフォニオン）、「大バス」（コントラバス）などのサクソルン属の楽器が、小編成時から組み込まれている。オーボエ、バスーンは瀬戸口の編成表では比較的小編成から使用されているが、その他の編成表ではそもそも楽器名が記載されていない場合もある。同属の楽器では、フルートよりもピッコロ[23]、トランペットよりもコルネットの使用が優先されている点も現在と異なる。田邊楽器の編成表（表 2.6）では、バルブ・トロンボーンが記載されていることと、打楽器の大きさを編成の規模に応じて変化させている特徴がある。

山口常光著『ブラスバンド教本』[24]では、ニッカン[25]考案の編成表（ブラスバンド第 1 巻 1 号記載のものと同一）の各編成の意図が考察されている。

> 日管案五人編成は大小太鼓のリズムの上にコルネットのメロディを奏させ、其オクターブ上をクラリネットで重ね、オクターブ下をバリトンが重ねて美しい斉奏をする。又時にはバリトンがバスらしい動きをなして、ソプラノとバスの二重奏をなす。
>
> 七人編成ではコルネットと小バスが増えている。此場合コルネットはやはりメロディを吹かするがよい。小バスはバスとして働かせる。其他は五人編成と同様である。
>
> ……（以下略）

---

[22] 瀬戸口藤吉の編成表のサキソフォーンは、他の部分の記述から「サキソフォン（アルト）E♭」、「サキソフォン（テナー）B♭」を想定していると考えられる。

[23] しかしこの楽器編成表はあくまで各楽器会社が意図したものであり、例えばピッコロは実際の吹奏楽編成ではあまり使用されていないとする次のような記述もある。「しかるに吹奏楽団の編成を見ると、小編成の場合に於てはもとより、相当の大編成の場合に於ても、木管楽器中、すこぶる有用なるピッコロを欠く場合が多いのである。」（花田寧「吹奏楽に於けるピッコロの重要性」、『バンドの友』6 巻 2 号、バンドの友社、1941 年、58 頁。）

[24] 山口常光『ブラスバンド教本』、管楽研究会、1938 年。尚、同書は戦後 1955（昭和 30）年に音楽之友社より『吹奏楽教本』として改訂版が出版されているが、ここでは戦前版によった。

[25] 日本管楽器株式会社の略称。

十人編成に於ては…（中略）…アマチュアバンドとしては一つのコルネットと二つのクラリネット及バリトンにメロディを吹かせ、一つのコルネットとアルト及トロンボーヌに三和音を吹かせ小バスにバスパートを吹かせ大小太鼓にリヅムを打たせれば美しく響くであろう。

十五人編成は…（中略）…アマチュアバンドでは 3 クラリネット 2 コルネット及バリトンにメロディを吹かせる。出来得れば 1 クラリネットは小クラリネットとしオクターブ上でメロディを重ねる。ピッコロは其オクターブを重ねることになる。そしてピッコロと小クラリネットは時にはメロディのヴァリアションらしいことを奏する。2 トロンボーヌと 1 アルト及 1 トロンペットが和音を奏し、小バスとコントラバスがバスパートを奏するのが良い。

二十人編成は…（中略）…1 クラリネットは出来得れば小クラリネットにする。そしてピッコロと共に十五人編成の時と同様に働かせる。アマチュアバンドに於ては 2 クラリネット 2 コルネット及バリトンにメロディを吹かせ、オーボァには独奏をさせ或はメロディを吹かせる。

1 クラリネット、1 コルネット及 1 トロンペットには時にメロディを吹かせ、時にはメロディの三度或いは六度を吹かせる。2 トロンボーヌ 2 アルトに和音を吹かせる。トロンボーヌとバリトンは時にはコントルシァン（裏歌）を吹かせることも出来る。2 小バスと 1 コントラバスはバスパートを奏する。そして大小太鼓がリヅムを強調する時、それこそ立派なブラスバンドである。[26]

これらの記述からは、バリトンが、小編成時には旋律及び低声部の役割を掛け持ちし、中編成においては主旋律を担い、編成が大きくなるとさらに別の声部を受け持たせるなど、幅広い役割が与えられることで、ブラスバンド編成において重要な役割を果たしていることが窺える。またコルネットとトランペットの関係においては、コルネットが旋律楽器として使用されるのに対し、トランペットは和音を構成する声部を担当し、役割が分けられている。

このようにブラスバンド編成は多様な形態を持っていたのだが、山口は『ブラスバンド教本』の中で編成表を提示する前に、そのあり方について次のように述べている。

---

[26] 同前、67 頁。

ブラスバンドの編成は既に述べた如く、音楽的重要性の問題、外見上の問題、経済上の問題及演奏技術者の問題等によって其団体毎に色々な都合があるから、決して断定的に論ずることは出来ない。

要するに其団体毎に定むべきであって、楽長の随意であ[る]。故に楽長はブラスバンド編成編曲に精通して、責任を以て其バンドの演奏効果を上げ得るようにせねばならない。

以上の如き理由によって編成表を示しても其通りに実施できるものではないが、只其基準を示す意味に於て次に若干の編成案を示して置く。楽長はよろしく前述の四重奏編成法と此のブラスバンド編成案とを参考にして自隊の編成編曲を整うべきである。[27]

加えて、瀬戸口藤吉も同様の内容を述べている。

ブラス・バンドの編成は、その奏楽すべき目的と場所により、先づ何人位のバンドのものを必要とすべきかを考えるのが先決問題である。

…（中略）…

ここに最も注意すべきことは、普通楽曲は大抵 25、6 人隊以上をもって演奏するを目標として作られているものであるから、これをそのまま小編成の楽器で演奏することの不可なるはいうまでもないことである。20 人隊以下の小編成で演奏する場合は、全曲の編成を調査玩味し、常に改作編曲するの労を惜しんではならない。[28]

以上のことが示すように、当時のブラスバンド編成は、標準化が試みられていた一方、厳密な標準編成で運営されることは少なく、各団体独自の編成とそれに合わせた編曲を行うことが前提であったことがわかる。後述するが、この状況は当時から度々問題に上がっていたことも、雑誌記事から明らかとなっている。

---

[27] 同前、66 頁。

[28] 瀬戸口藤吉「ブラスバンドの編成と合奏法」、『管楽器・打楽器の実技』、321～323 頁。

（3） 使用楽器

ここで、当時の楽器の用法について、各種書籍や吹奏楽年鑑から、現在の感覚とは異なる特徴的な記述を引用する。

作曲家の菅原明朗は、当時の雑誌記事で、ブラスバンド編成の木管楽器と金管楽器のバランスについて次のような見解を述べている。

> クラリネットは一見吹奏楽の花形の様であります、が、此れは音楽の感情のシテをつとめるものが旋律だからであって、曲の構成上より見れば頑として其の花形は金管なのであります。したがって小編成の合奏では木管よりもまづ金管の編成を完備させるのが第一であります。
> …（中略）…
> と云って吹奏楽はファンファールとは別個のものであります。其れは力と輝を持って居ると同時に軟らかな情緒の深い響きをもとめなければなりません。この要求を満たせてくれるものはサクソフォーンとビューグルとであります。我国のアマチュア吹奏楽にサクソフォーンを持って居る隊の少いのは実に残念な事でありますが、此れは此の楽器の値の高いことに原因して居るかも知れませんが、単にそれだけの罪ではないと思います。十人以上の編成の楽隊にはぜひサクソフォーンが必要であります。[29]

菅原は上記のように金管楽器を重視しながらも、吹奏楽を金管合奏と差別化するものとしてサクソフォーンとビューグルを活用することを提案し、それらの楽器の有用性を説いている。またこの記述からは、サクソフォーンの使用は当時のアマチュア団体では未だ一般的でないことが分かる。

また、金管楽器には、前述の通り現在よりもサクソルン属の楽器が多数含まれており、金管楽器のサウンドの基盤となっていたことが窺える。

E♭アルト（アルト・ホルン）の使用は、当時の吹奏楽編成では一般的で、理由として『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』では、「フレンチホルンの演奏が困難」[30]であること、「行進演奏の際にアルトの方が効果的」[31]であるということが挙げられている。『ブラスバンド教

---

[29] 菅原明朗「アマチュア吹奏楽隊の編成に就て」、『ブラスバンド』2 巻 4 号、1934 年、6 頁。

[30] 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、332 頁。

[31] 同上。

本』においては、フレンチ・ホルンが「小編成ではアルトとして使われ」[32]と記述され、あたかもアルトが主で、フレンチ・ホルンが代用であるかのような扱いが見られる。尚、フレンチ・ホルンは、ピストン式とロータリー式の両方が当時の楽器カタログに掲載されており、陸軍戸山学校の編成表にはアルトとともにコール・ア・ピストンが含まれている。

バリトンは、現在の主要な編成表には組み込まれていないが、当時は「吹奏楽の重要位置」にあると記載され、「主旋律、対位進行、伴奏部等」[33]多くの役割を担うと見なされていた。

バスは、日本では「小バス」と呼ばれ、戦前のユーフォニアム（ユーフォニオン）とされていた楽器である（現在、日本で使用されるユーフォニアムとは構造が異なる）。中声部を補うため、バリトンの声部を担当することがある。またコントラバスは「大バス」と呼ばれ、E♭管と BB♭管（オクターブ下の B♭管）の 2 種類があり、行進演奏時にはヘリコンバスが使用される場合もあった。この大・小バスは合わせて、吹奏楽編成の低音部を担った。

トランペットとコルネットは、前述の通り吹奏楽では明確に別の楽器として区別され、両方が用いられている。『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』にはコルネットは「やわらかい感じの音」[34]であるのに対して、トランペットは「いくらか荒く、そのかわりに歯切れの良い音が出て鋭い」[35]とされている。また、「吹奏楽では一番譜よりも二、或は三番譜を受け持つ方がよい」と書かれていることから、コルネットの下声部にトランペットが位置することが想定されていたことがわかる。

トロンボーンについては、前述の通りスライド式とバルブ式があり、各種書籍でも両方が取り上げられている。『ブラスバンド教本』ではバルブ式の記述がスライド式よりも前にあり、「スライドは楽器を歌わせるにはよいが、速いパセージには不適当な場合もあり、寧ろ機械的なヴァルブ・トロンボーヌの方が便利な事もある。殊に初歩のアマチュアバンド等では簡単にして正確である処のヴァルブトロンボーヌを使う方が得策である。」[36]と、バルブ式の使用が推奨されている。菅原も「小編成の曲では、断然ピストンの楽器の方が良いのです。ピストンのトロンボーンはバリトンの代用も出来るし、アルトの和声不足も補っても音が良くなじむし、場合によってはバッソンやサクソフォーン・テノールの譜もふけるのです。

---

[32] 山口常光『ブラスバンド教本』、32 頁。

[33] 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、333 頁。

[34] 同前、331 頁。

[35] 同上。

[36] 山口常光『ブラスバンド教本』、34 頁。

[37]」と小編成でのピストン式の有用性を説いている。『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』にも両方の方式の楽器が記載されており、バルブ式も一般的に考えられていたことがわかる。

[37] 菅原明朗「アマチュア吹奏楽隊の編成に就て」、『ブラスバンド』2 巻 4 号、7 頁。

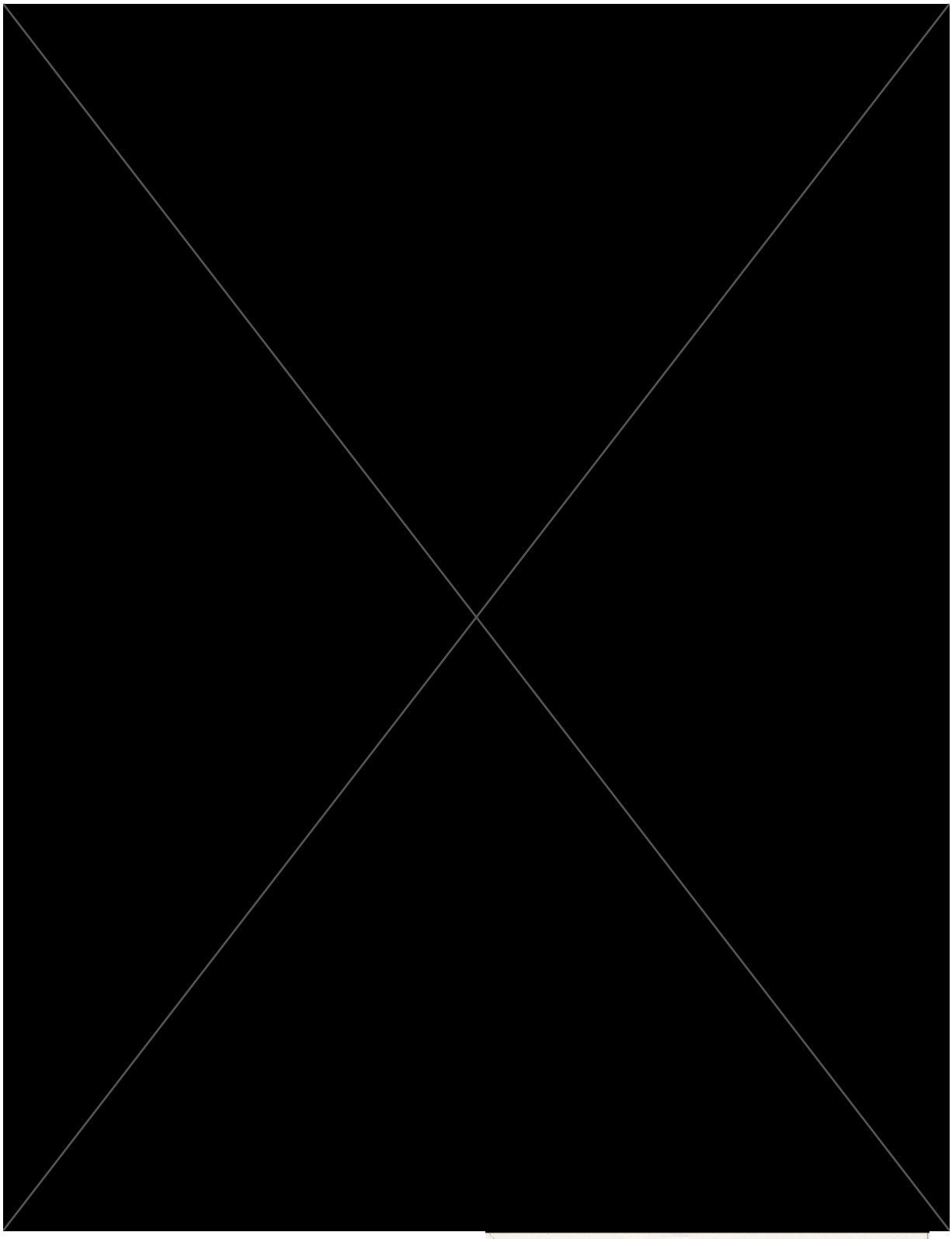


図 2.1　昭和初期のニッカン（日本管楽器株式会社）の楽器カタログ（抜粋）[38]

[38] 出典 :『ブラスバンド』、1 巻 1 号、管楽研究会、1933 年、付録。

第 2 節　その他の編成

吹奏楽およびブラスバンドの定義について、『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』には、以下のような記述がある。

> 吹奏楽は管楽器と打楽器の合奏である。ブラスバンド、喇叭鼓隊、鼓笛隊等総て吹奏楽の中に包含される。ブラスバンドは吹奏楽と同義異語として軍楽隊以外の素人吹奏楽団に総称されているがこの言葉は英語の Brass Band から来たもので、本来の意味は真鍮楽器のバンドのことである。即ち喇叭類と打楽器の合奏のことで欧州で言うファンファールで木管楽器を含まないのである。
>
> 木管楽器を加えた編成は英国ではミリタリーバンド Military Band 仏蘭西ではアルモニィー Harmonie 米国では一般に単にバンド Band 獨逸ではブラスムジーク Br[ママ]ass[M]usik と言う。
>
> …（中略）…
>
> 斯くの如く欧州では吹奏楽の種類に二つの性質があるが我が国では英国で言うブラスバンドは救世団[ママ]のバンドだけで他は殆んど全部ミリタリーバンドである。従ってブラスバンドと吹奏楽は同義異語と解釈して何等差し支いはない。吹奏楽を更に広義に解釈して之に喇叭鼓楽も鼓笛楽も包含せることも之を総称する場合には便宜である。[39]

このように、戦前においては、「ブラスバンド」編成に加えて、喇叭隊、喇叭鼓隊、鼓笛隊なども、吹奏楽の一編成として扱われていたことがわかる。ここからは「ブラスバンド」以外の編成を詳しく見ていく。

---

[39] 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』323～324 頁。

（1）喇叭鼓隊

1927（昭和 2）年、陸軍戸山学校軍楽隊楽長の大沼哲と日本管楽器が中心となって考案された編成である。この編成は、翌 1928（昭和 3）年 9 月 8 日に日比谷公園野外音楽堂にて、陸軍戸山学校の演奏で初披露されている。『喇叭鼓隊教科書』には編成の設立にいたった理由が次のように記述されている。

> 近来、我国には種々の合奏音楽が行われて居る、けれども多くは室内演奏用のものにて主として娯楽を目的とするものであり且つ修習困難なものであって、自己の業務に精励する間、寸暇を利用して心身を鍛錬し、質実剛健なる国民たらんとする吾等青年の士気を鼓舞するに好適なるものが殆んどない。今仮りに勇壮活発にして修習容易なる軍隊用の喇叭を吹奏して此目的を達しようとしても其音律はあまりに単純であって現今の青年の意気にシックリ合わない憾がある。そこで此喇叭に考案の基礎を置き出来上がったのが喇叭鼓隊用の喇叭である。[40]

喇叭鼓隊の特徴としては、楽器の価格が非常に安く、また消耗品や故障の少なさから「長年月の経営維持についても経済的には非常に楽である」[41]こと、「全部の楽器が高音部記号による楽譜を用いるため一通りの楽器智識のある方なら大した苦労もせず指導が出来る」[42]こと、「運指練習の必要が無いので楽器の練習者はブラスバンドの場合よりもずっと早く技術の向上をはかることが出来る」[43]ことが挙げられている。事実、アマチュアの吹奏楽活動の初期の頃は、経費の問題で大人数の吹奏楽編成が組織できなかったこともあり、また極小編成のブラスバンドよりは演奏効果が高いとみなされていたことから、喇叭鼓隊編成は大いに流行している。全日本の大会では初回より部門の一つとして扱われたほか、神戸市喇叭

---

[40] 陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』、共益商社、1928 年、「緒言」。

[41] 川瀬信二「特別編成喇叭鼓隊の効果的な編成と編曲」、『吹奏楽月報』6 巻 10 号、管楽研究会、1940 年、8 頁。

[42] 同前、8 頁。

[43] 同前、9 頁。

連盟主催の「喇叭鼓楽コンクール」[44]のような独自の大会が開催されるまでに至った。しかしながら、ピストンのない楽器の制約から演奏曲が限定される欠点もあった。陸軍戸山学校が青年学校、中等学校向けに『喇叭鼓隊教科書』を作成した後も、1936（昭和 11）年に日本教育音楽協会編集による『喇叭鼓隊教本』、1941（昭和 16）年には管楽研究会から『軍隊喇叭、喇叭鼓隊教本』が出版され、普及に貢献した。

「喇叭鼓隊」は、フランスの軍楽隊におけるファンファール隊の日本語訳であるが、楽器は日本管楽器で日本独自に製造したものが使用された。この編成は大中小それぞれの喇叭（B♭基音の倍音列を演奏し、それぞれ 1 オクターブの音域差がある）と大太鼓と小太鼓により構成される。喇叭は、小喇叭と中喇叭が 2 声部に分けられるため、大喇叭と合わせて 5 声部となることから、従来の「喇叭隊」よりも表現の幅の拡張が実現している。

『喇叭鼓隊教科書』では次の編成を基準に定めている。

表 2.10　喇叭鼓隊編成案[45]

	編成に就て（喇叭鼓隊教科書、1928年）		
	小編成（6人）	中編成（17人）	大編成（26人）
第一小喇叭	1	3	4
第二小喇叭	1	3	4
第一中喇叭	1	2	3
第二中喇叭	1	2	3
大喇叭		1	2
小太鼓	1	4	8
大太鼓		1	1
指揮者		1	1

また同書記載の隊形図からは、「行進奏楽」のみならず、「停止奏楽」、「座奏」などの形態で行われていたことがわかる。

---

[44] 同コンクールには、「喇叭鼓楽の部」と「信号喇叭の部」があった。（「神戸市喇叭連盟主催 第三回喇叭鼓楽コンクール」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』、5 巻 5 号、管楽研究会、1939 年、8〜9 頁。）

[45] 参照：陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』、共益商社、1927 年、39 頁。

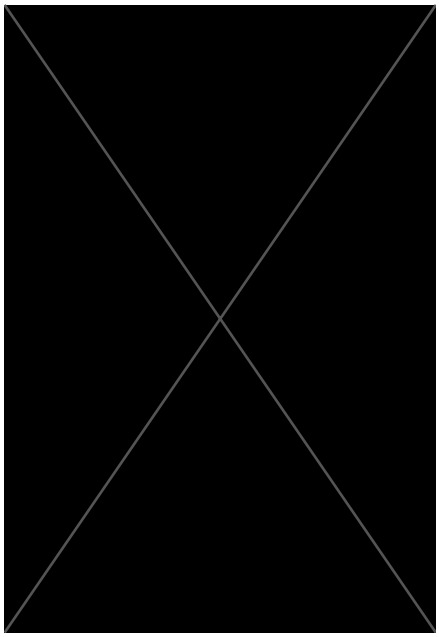


図 2.2　喇叭鼓隊の使用楽器[46]

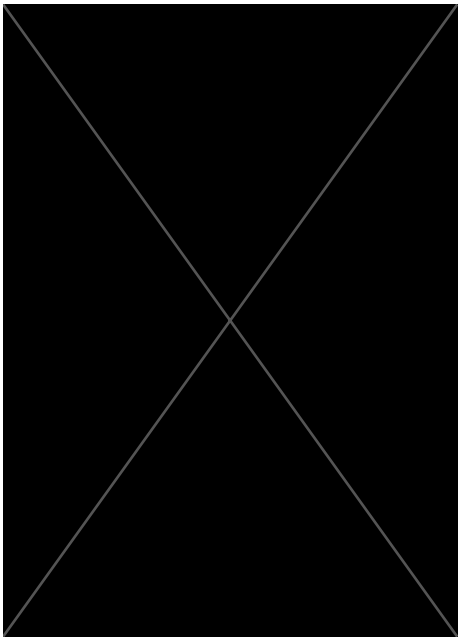


図 2.3　喇叭鼓隊の隊形例[47]

喇叭鼓隊編成の短所としては、長音階や短音階が自在に演奏できない問題があるが、それを解決する方法としてトランペット、バリトン（場合によってバルブ・トロンボーン、小バス）を加えた次のような「特別編成喇叭鼓隊」も考案されている。

表 2.11　特別編成喇叭鼓隊編成表[48]

特別編成喇叭鼓隊編成表				
配置	楽器名	小編成（11人）	中編成（18人）	大編成（27人）
第一小喇叭	トロンペット	2	3	4
第二小喇叭	長喇叭	2	3	4
第一中喇叭	バリトン	1	2	3
第二中喇叭	中喇叭	1	2	3
大喇叭	大喇叭	1	1	2
小太鼓	小太鼓	2	4	8
大太鼓	大太鼓	1	1	1
シンバル	シンバル	1	1	1
指揮	指揮		1	1

この編成表では、第一小喇叭がトランペット、第一中喇叭がバリトンで完全に置き換えられており、また第二小喇叭の位置には「同じ用途の楽器で価格が大差なければ外見の優美な

[46] 同前、34〜36 頁。

[47] 同前、46 頁。

[48] 参照：川瀬信二「特別編成喇叭鼓隊の効果的な編成と編曲」、『吹奏楽月報』6 巻 10 号、11 頁。

方に軍配が上る[49]」との理由で長喇叭が導入されている。トランペット、バリトンが導入されている理由としては、音響的効果から「ブラス・バンドに用いられている吹奏楽器」[50]を用いらなければならないことと、「喇叭の音色を生かす」[51]ため、楽器の選択肢としては金管楽器で、さらに喇叭鼓隊用喇叭と同じB♭管であることとされている。

（2）旋律鼓笛喇叭隊（旋律喇叭隊）

1936（昭和 11）年に、海軍軍楽隊出身の瀬戸口藤吉と田辺吹奏楽器製造所によって考案された編成である。瀬戸口はその設立趣旨を「簡易なる合奏団を作り之に依って娯楽の中に音楽の普及を図り品性を高め」[52]ることを第一の目的としている。

この編成は下図のような楽器によって成り立っている。

表 2.12　旋律鼓笛喇叭隊編成表[53]

旋律鼓笛喇叭隊 楽譜の編成（旋律喇叭鼓隊設立主旨、1936年）	
ピッコロ	旋律
第一ピストン	旋律
第二ピストン	和声
第一バリトン	和声
第二バリトン	和声
大小太鼓	

ピッコロは木管楽器の既存のもの（Db 管）を使用し、ピストンおよびバリトンは 2 本ピストンのついた喇叭である。旋律喇叭隊用の楽譜および教則本は、田辺楽器の出版事業であったバンドの友社より販売されている。旋律喇叭隊の普及状況については、戦後の記述では「値段がそれほど安くなかったので、たいして普及するというほどのこともなく終わったようだ」[54]と書かれている。

---

[49] 同前、11 頁。

[50] 同前、10 頁。

[51] 同前、10 頁。

[52] 瀬戸口藤吉「旋律喇叭隊設立趣旨」、『月刊楽譜』25 巻 6 号、月刊楽譜発行所、1936 年、107 頁。

[53] 参照：同前、107 頁。

[54]『吹奏楽の編成と歴史』、147 頁。

（3）鼓笛隊

鼓笛隊の歴史は、幕末にオランダ式で導入されたことに始まり、日清戦争の頃には陸軍でドイツ式の鼓笛隊を採用する動きがあったが、広く導入されるに至らなかった[55]。

本項で扱うのは、昭和期に入り、陸軍軍楽隊出身の江木理一と小森宗太郎によって小学校や女学校向けの合奏音楽として新たに提案されたもの[56]で、下図のような編成が想定された。

表 2.13　鼓笛隊編成表[57]

鼓笛隊編成 《紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑》 （管楽研究会、1941年）	
横笛	12
小太鼓	3
指揮棒（日之丸旗付）	3

『鼓笛隊指導書並教則本』[58]によると、「横笛」は金属製でキーのない 6 孔のファイフを使用している。また「指揮棒（日之丸旗付）」が 3 人いるのは、ドラムメイジャーの役割として、行進の際、前左右に配置する必要があるためである。この 18 名を 1 個隊とし、「多くは 3 個隊編成 50 数名が標準」[59]となっている。

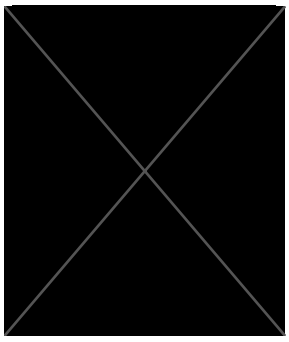


図 2.4　鼓笛隊の使用楽器[60]

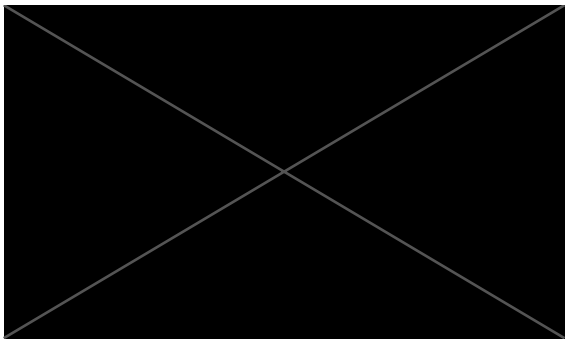


図 2.5　鼓笛隊の隊形例[61]

---

55 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、394 頁。

56 「昭和の鼓笛隊は近年江木理一氏と小森宗太郎氏が主唱され、楽器も独特の形を創案して近代的に磨きをかけられて再生したのである。」（『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、394 頁）の記述のほか、「鼓笛楽普及に関する座談会」（『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 5 号、1939 年、12〜15 頁）に詳しい。

57 参照：同前、395 頁。

58 小森宗太郎、江木理一『鼓笛隊指導書並教則本』、共益商社、1938 年。

59 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、395 頁。

60 小森宗太郎、江木理一『鼓笛隊指導書並教則本』、3 頁。

61 同前、5 頁。

しかしながら、これらの編成の楽曲レパートリーは、当時の楽譜広告の様子（図 2.6.、図 2.7.）からもわかる通り既存の楽曲の編曲作品が主であり、「吹奏楽曲の創作」の主要な場であったとは必ずしも言えない。

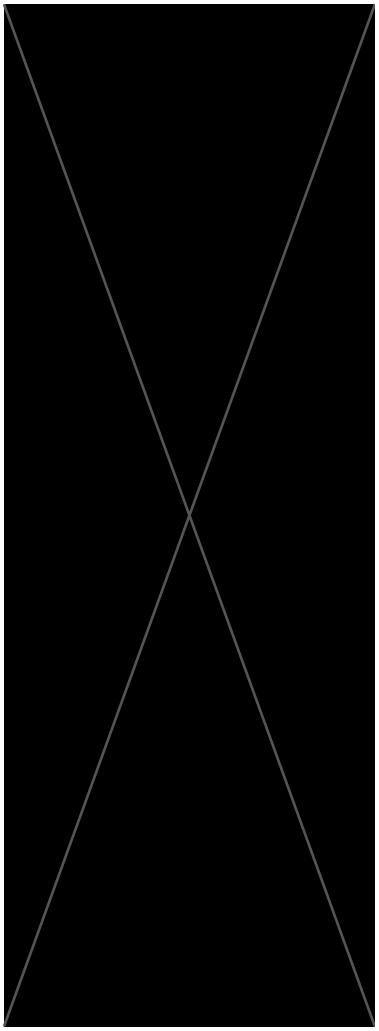


図 2.6. 旋律喇叭隊楽譜広告[62]

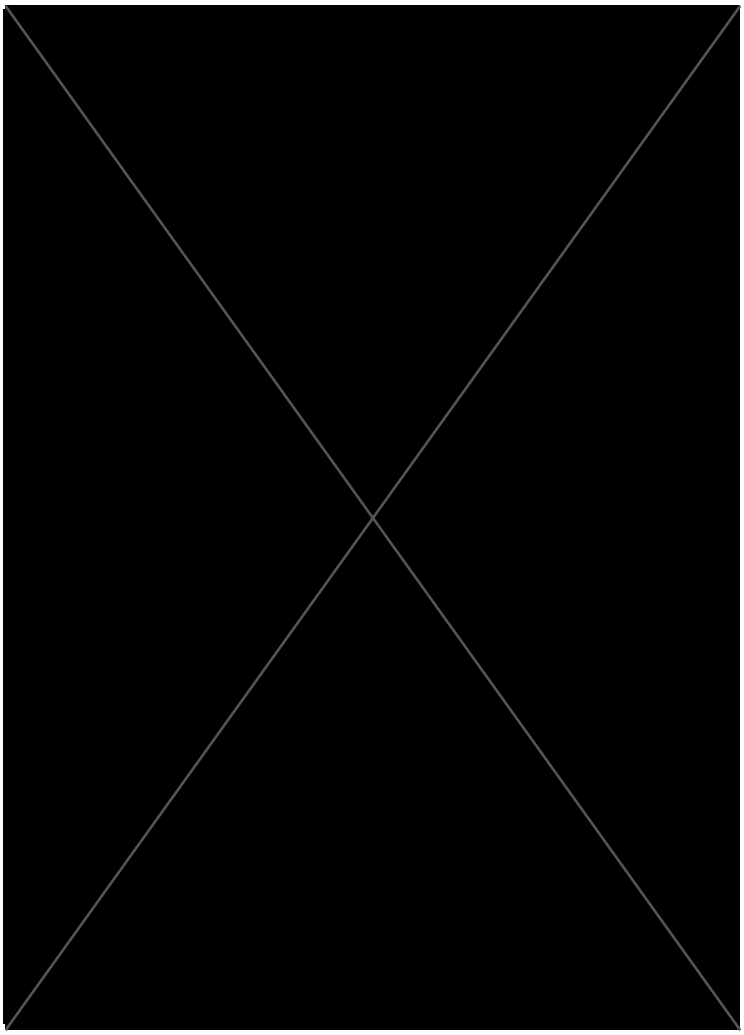


図 2.7. 鼓笛隊楽譜広告[63]

62 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、444 頁。

63 小森宗太郎、江木理一『鼓笛隊指導書並教則本』、46 頁。

第 3 章　第二次世界大戦以前における吹奏楽曲の創作

第 1 節　黎明期（明治～大正時代）の吹奏楽曲

本章では、時代ごとの吹奏楽曲創作に関わる出来事および楽曲の概要を通して、第二次世界大戦以前にどのような吹奏楽曲の創作活動が展開されていたかを考察する。

1869（明治 2）年の薩摩藩軍楽伝習生に始まった吹奏楽は、陸・海軍軍楽隊のほか、1874（明治 7）年に宮内省式部職でも海軍軍楽隊員とジョン・ウィリアム・フェントンの指導の下で行われるようになった。吹奏楽は、1883（明治 16）年に竣工した鹿鳴館で舞踏会の伴奏に用いられるなど、日本の洋楽受容の黎明期を担った。この頃の演奏曲目は以下の様子であった。

表 3.1.　軍楽隊初期の演奏曲（原文ママ）[1]

1876（明治 9）年 9 月 28 日、本郷金助町大槻磐渓邸宅出張演奏（陸軍軍楽隊）
演奏曲譜名 第一　パールドブレー（速歩行進曲） 第二　東京ポルカ 第三　エールシャホンネ（日本の唄「一つとや、こちやまかせ、ねんねこ、エッサホー　ヤッシンヨイ」など？） 第四　バルセロス・ボレーロ（ボレロ舞曲「バルセロナ」） 第五　ランクリューム・ポルカ（ポルカ舞曲「鍛冶」？） 第六　ボルジョ（歌劇の抜萃曲） 第七　ラビ、バリシャンヌ、クヮトリュー（ガドリール舞曲「パリー人の生活」？） 第八　ペクポルー、ポルカ（ポルカ舞曲？） 第九　トレベーゾンド・クヮトリュー（クワドリール舞曲？）

[1] 出典：山口常光『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、三青社、1973 年、43～44 頁。

これらの楽曲は、当時の指導者であったフランス人雇教師、ギュスターヴ・シャルル・ダグロンが「フランス語で言った曲目の発音を、だれかが聞いてそのまま日本語に綴ったものではあるまいか」[2]とあるように、正確な楽曲名の特定は困難で、作曲者も記載されていないが、舞曲、行進曲、日本の唄の編曲作品など幅広いジャンルが取り上げられていることがわかる。また、当時の軍楽隊の指導者であったシャルル・ルルー、フランツ・エッケルトらの手による楽曲も残っている[3]。

やがて軍楽隊の指導が日本人の手で行われるようになると、軍楽隊の幹部による作曲作品が現れる。1900（明治 33）年頃の海軍軍楽隊では、瀬戸口藤吉（1868（慶応 4）年〜1941（昭和 16）年）による行進曲《軍艦》や吉本光蔵（1863（文久 3）年〜1907（明治 40）年）による《君が代行進曲》、1905（明治 38）年の日露戦争を機に作曲された《意想曲「ウラジオ沖の氷海海戦」》、《東京湾観艦式記念行進曲》の 2 曲[4]などの楽曲が生み出されている。しかしながら、作曲年・初演場所については、不明もしくは不確実な場合が多い。

---

[2] 同前、43 頁。

[3] 塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊所蔵楽譜目録 総譜篇」（『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 15 巻、1999 年、5〜76 頁）、日本近代音楽館所蔵資料（警視庁音楽隊所蔵資料の一部のマイクロフィルム化）などに詳しい。

[4] 塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊 : 海軍軍楽長・吉本光蔵の明治 37・38 年日記から」、『東京芸術大学音楽学部紀要』第 40 巻、2014 年、83〜84 頁。

1905（明治 38）年からは、日比谷公園の公園奏楽が始まったことで、一般大衆が定期的に吹奏楽を耳にする機会ができた。第 1 回公演のプログラムでは、日本人作曲の楽曲が 1 曲目に演奏されている。

表 3.2.　日比谷公園音楽堂開堂式での演奏曲目[5]（括弧内は作曲者及び編曲者）

1905（明治 38）年 8 月 1 日　日比谷公園音楽堂
演奏：陸軍戸山学校軍楽隊 指揮：陸軍楽長　永井建子 第一部 ・行進曲「日章旗」（永井建子） ・「歩哨の警報」大序（クロドミール） ・「フォースト」歌劇第一場（グノー） ・ヴァルス「安留爾多」（アルディーティ） ・ポルカ行進曲「タ・ラ・ラ・ボンデレー」（グローネ） 第二部 ・行進曲「米国旗と永久」（スーザ） ・「ギユイヨームテール」大序（ロッシーニ） ・「タンホイゼール」歌劇（ワーグナー） ・日本音楽長唄「老松」 （四世杵屋六三郎、陸軍戸山学校軍楽隊生徒隊編曲） ・ヴァルス「深林の会合」（J.シュトラウス）

永井建子（1865（慶応元）年～1940（昭和 15）年）は、1878（明治 11）年に陸軍軍楽隊に入隊し、シャルル・ルルーの指導を受けた後にフランスへ留学、帰国後に楽長として軍楽隊の指導にあたっていた人物である。この《行進曲「日章旗」》は、国歌「君が代」の主題をモティーフに構成されており、「この曲は日露戦争当時の我が国民性に深く触れたものである」[6]という回想証言からも、日露戦争後の祝勝ムードと、新しく始まった公園奏楽への

[5] 出典：谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、つくばね舎、2010 年、33 頁。

[6] 大沼魯夫「旧事新題（樂界回顧談）」、『楽星』3 巻 9 号、1927 年、50 頁。

期待を象徴するかのような楽曲であったことが窺える。永井作曲の楽曲は、この後、《カドリール・ランサー「餘と倶に」》、《国風「寄山祝」》、《自作行進曲と「ロングサイン」》、《行進曲「青島より凱旋」》、《軍楽と喇叭の併合新分列行進》などが公園奏楽で発表されている[7]。

この頃に日本人によって生み出され現在確認できる楽曲の数は極僅かながら、第二次世界大戦期まで長らく演奏され続けた楽曲も少なくない。しかしながら、上記のプログラムからもわかるとおり、軍楽隊の楽曲レパートリーの大半は専ら海外の作曲家による作品で、吹奏楽のオリジナル楽曲や、管弦楽曲の編曲であり、日本独自のものとしては、邦楽の編曲作品がプログラムに含まれるくらいであった。さらに民間では、多くの人間は吹奏楽を聴取する機会はあっても活動に参加するまではいかず[8]、必然的に吹奏楽曲の創作活動の場は軍楽隊に限られていた。以下、1897（明治 30）年頃の陸軍第四師団軍楽隊の演奏曲に関しての詳細な記述が、このことを裏付けている。

> 私は日清戦争直後の明治二十八年春から同三十三年春までの五年間、大阪で生活をしていたのであるが、その間に私の心を括えていたものの一つに、第四師団の軍楽隊の演奏がある。楽長は永井岩井という将校であったが、次長の小畠賢八郎という人が大いに活躍していた。
> …（中略）…
> その頃の軍楽隊が主にどんな曲を演奏していたかと言うと、第一に軽快なワルツやマーチ類が最も多く、マーチもアメリカ風のものやドイツ風のものが多く選ばれた。日本の軍楽隊で作曲されたマーチでは『君が代マーチ』（観兵式マーチとも称していた）が屢々奏された。有名な『軍艦マーチ』…（中略）…は日清戦争の頃には未だ出来ていなかった。
> …（中略）…

---

[7] 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラムー日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』を参照。

[8] 民間の活動としては、1887（明治 20）年の海軍軍楽隊出身者による東京市中音楽会の開業や、日清戦争期には広告業としてのジンタが現れたこともあったが、「音楽的なものよりも宣伝効果の上がる響きが求められ大衆もそれで満足していた」（谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラムー日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、11 頁）、「街を練り歩くためレパートリーも多くを要」（同上）さなかったなどと指摘されているように、その質の低さから結果として非音楽的とされ衰退した。

その他に第四師団の軍楽隊は日本の俗曲を編曲して多く演奏をした。これらの俗曲は学校では教えなかった。と言うよりも、むしろ教育からは全く排除していた。学校で教えるものは西洋風の唱歌や軍歌に限られていた。それゆえ我々が俗曲に接する機会は、この軍楽隊の演奏が主なるものであった。(そのころ軍楽隊がよく演奏した邦楽曲、その旋律は俗楽そのままで、これを洋楽器で演奏するために簡単なハーモニーを附けた）は長唄の『越後獅子』『勧進帳』『老松』など、また端唄の『松尽し』『春雨』『カッポレ』『お江戸日本橋』などもよく演奏された。これらの俗曲の歌の旋律は、主としてサキソフォンで奏された。

…（中略）…

軍楽隊の連中は俗曲ばかりでなく、当時インテリ階級の間に大きな勢力を持って流行していた「明清楽」の曲も洋楽風にアレンジして演奏していた。有名な『九連環』『算命曲』『茉莉花』『燕子門』『紗窓』『大鼓船』の曲などは軍楽隊でよく演奏されていた。[9]

このように日本人の手によるものとしては編曲作品が多数で、たとえ作品が創作されたとしても、実用的な行進曲やワルツばかりであった期間が長らく続いたが、その中においても吹奏楽曲の芸術性を志向した作品がある。陸軍軍楽隊の大沼哲（1889（明治 22）年〜1944（昭和 19）年）が、1924（大正 13）年に作曲した《皇太子殿下御成婚奉祝前奏曲》はその最初期の楽曲で、皇太子裕仁殿下（昭和天皇）と久邇宮良子女王の「御成婚饗宴の儀」の御前演奏で初演[10]されたのち、日比谷公園音楽堂で公開演奏されている[11]。大沼は、この他にも同時期に《誓忠行進曲》(大正天皇銀婚式のための演奏会用行進曲、管弦楽版と同時作曲)、《行進曲「立派な兵隊」》などの楽曲を手掛けている[12]。

大沼は、陸軍軍楽隊入隊後にフランス帰りの楽長永井建子の薫陶を受け、後に自身も 1925（大正 14) 年にパリのスコラ・カントルム音楽院へと留学し、ヴァンサン・ダンディ（Vincent d'Indy、1851 年〜1931 年）に作曲を学んでいる。大沼は帰国後、フランス式のシステムの導入を図った。前述の通り「喇叭鼓隊」編成は大沼がフランス式のファンファール隊を参考に

---

9 田辺尚雄『明治音楽物語』、青蛙房、1965 年、167〜169 頁。

10 宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』、東京：音楽之友社、1993 年、220〜221 頁。

11 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラムー日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、191 頁。

12 宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』を参照。

日本式に改良したものである。この大沼哲の影響を受けた人物の何人かが、この後の時代吹奏楽曲の作曲家として登場することになる。

1924（大正 13）年 8 月には、山田耕筰（1886（明治 19）年～1965（昭和 40）年）による《英国皇儲歓迎前奏曲》が、日比谷公園音楽堂で海軍軍楽隊により演奏されている。この楽曲は、「先般英国儲殿下御来朝の砌」[13]に作曲され、「殿下より多大なる賞賛を博した名誉ある作品」[14]とされている。

山田は、1908（明治 41）年に東京音楽学校卒業後、ベルリン国立高等音楽学校に留学、1912（大正元年）には、日本人初の交響曲《交響曲ヘ長調「かちどきと平和」》を作曲した[15]。帰国後のこの時期は日本交響楽協会の設立に携わるなど、多方面で活躍する新進気鋭の音楽家であった。

この 2 人の活動の一方、大沼や山田のように吹奏楽の芸術性を追求する人物はこの時代には未だおらず、依然として従来のような行進曲や舞曲が作曲されていくこととなる。

---

[13] 門馬直衛『日比谷公園音楽堂演奏曲目解説集 第一輯』、岡田日栄堂、1926 年、189 頁。

[14] 同上。

[15] 富樫康『日本の作曲家』、327～342 頁。

表 3.3.　この時代の代表的な作曲者と楽曲（楽曲リストより抜粋）

海軍

田中穂積（1855（安政 2）年～1904（明治 37）年）

《行進曲「軍人の精神」》

吉本光蔵（1863（文久 3）年～1907（明治 40）年）

《君が代行進曲》、《意想曲「ウラジオ沖の氷海海戦」》、《東京湾観艦式記念行進曲》

瀬戸口藤吉（1868（慶応 4）年～1941（昭和 16）年）

《行進曲「軍艦」》、《敷島艦行進曲》

陸軍

永井建子（1865（慶応元）年～1940（昭和 15）年

《行進曲「日章旗」》、《カドリール・ランサー「餘と倶に」》、《国風「寄山祝」》、
《自作行進曲と「ロングサイン」》、《行進曲「青島より凱旋」》、
《軍楽と喇叭の併合新分列行進》

山本銃三郎（生没年不明）

《ポルカ「凱旋」》、《意想曲「攻撃」》、《行進曲「王師遠征」》

大沼哲（1889（明治 22）年～1944（昭和 19）年

《奉迎大行進曲》、《行進曲「立派な兵隊」》、《皇太子殿下御成婚奉祝前奏曲》、
《誓忠行進曲》

民間

山田耕筰（1886（明治 19）年～1965（昭和 40）年

《英国皇儲歓迎前奏曲》

第 2 節　昭和期（戦前）の吹奏楽曲

（1）新吹奏楽運動

広岡九一（1898（明治 31）年～1988（昭和 63）年）（関東吹奏楽連盟、大日本吹奏楽連盟理事[16]）は、1929（昭和 4）年、1930（昭和 5）年頃を「新吹奏楽運動」として、この時期が日本人による吹奏楽曲の創作が盛んになる境目であるとし、度々雑誌で言及している。「新吹奏楽運動」以前の様子については以下のように記載している。

> 大体作品を新吹奏楽運動以前の作品とそれ以後の作品とに別けてみようと思う。所謂以前は民間の吹奏楽団が演奏すると云うことは極めて稀であって、たとえ演奏したにしてもラジオと云う機会がなかったから作者にとって興味も反響も少なかったので只軍楽隊の中で演奏したり、特殊な関係で軍楽隊に自分の作ったものを日比谷公園奏楽の際に加えられるくらいなものであった。
> …（中略）…
> 作られた曲は数百もあるかもしれないがその当時の作曲気運もなく作曲学の知識としても充分今の様に普及しているでもない時代にあって、それを押し切って勉学研究の結晶として作り上げるには並大抵なものでなかったであろう事は、今の作家達が恵まれていることを喜ばねばならない。
> 然し明治、大正時代日比谷公園奏楽のプログラムには数える程も日本作家の名が出ていない。[17]

そして「新吹奏楽運動」以後の様子については、以下のように記載している。

> この時代から陸海軍部内の作曲は弥が上に盛んになったのは時局が活気づいて来たことと民間に於て新吹奏楽運動が起こり始めて来たことから軍楽隊が民間吹奏楽団の指導的立場になったこと、作曲熱が我が楽界に満ちてくるとともにその知識習得が容易になってきたこと等が良い傾向を表したのであると思われる。[18]

---

[16] 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、310 頁。

[17] 広岡九一「日本の吹奏楽曲」、『音楽之友』2 巻第 3 号、音楽之友社、1942 年、43 頁。

[18] 同前、44 頁。

この広岡の見解を補足すると、1925（大正 14）年に大日本作曲家協会が発足したのを皮切りに、1930（昭和 5）年の新興作曲家連盟を始め様々な作曲家団体が組織され、邦人作品の新曲発表が相次いで行われた。同時に、時事新報社主催の音楽コンクール（1932（昭和 7）年）、チェレプニン賞（1935（昭和 10）年）、ワインガルトナー賞（1937（昭和 12）年）、新響邦人作曲コンクール（1937（昭和 12）年）などのコンクールも開催され、器楽作品の作曲が盛んになり、新たな作曲家も多数誕生した[19]。

アマチュア吹奏楽活動においては、昭和初期のスクールバンドの増加[20]、1933（昭和 8）年の吹奏楽専門雑誌の季刊誌『ブラスバンド』の創刊、1934（昭和 9）年のアマチュア・ブラスバンド東海連盟結成を皮切りとした、各地の吹奏楽連盟の結成、1935（昭和 10 年）の東京と東海でのコンクールの開始など、民間での吹奏楽活動も大きく動き始めた。そして 1939（昭和 14）年の大日本吹奏楽報国会、大日本吹奏楽連盟の結成と全国規模の活動へと至った。退役軍人らが結成した吹奏楽専門の演奏団体が活動を始めたほか、東京音楽学校[21]をはじめとした音楽専門学校においても吹奏楽団が結成されている。このような要因が重なったことで、結果として吹奏楽曲の創作の活発化に結びついていくこととなる。

---

19 富樫康『日本の作曲家』、16〜21 頁を参照。

20 都賀城太郎「スクールバンドと吹奏楽の普及」（『日本の吹奏楽史』、70 頁）に詳しい。

21 東京音楽学校の吹奏楽団は、1935（昭和 10）年頃、同校教授の萩原英一を中心として活動が始まった（東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　演奏会編 第 3 巻』、音楽之友社、1993 年、94 頁）。昭和 10 年頃の編成は、当時の写真から判別するにピッコロ、フルート、クラリネット、サクソフォーン、トランペット、フレンチ・ホルン、トロンボーン、サクソルン属、打楽器等の様子であった（「ブラスバンド合宿練習」、東京音楽学校学友会編『音楽』16 号、東京音楽学校学友会、1935 年、口絵）。

表 3.4.　大正～昭和初期の作曲に関わる国内の動き

作曲活動
1925（大正 14）年　日本作曲家協会が発足
1930（昭和 5）年　新興作曲家連盟（現・日本現代音楽協会）結成
1932（昭和 7）年　時事新報社主催の音楽コンクール（現・日本音楽コンクール）開催
1935（昭和 10）年　チェレプニン賞開催
1937（昭和 12）年　ワインガルトナー賞、新響邦人作曲コンクール開催
吹奏楽活動
1933（昭和 8）年　管楽研究会より季刊誌『ブラスバンド』の創刊
1934（昭和 9）年　アマチュア・ブラスバンド東海連盟結成
1935（昭和 10）年　東京と東海でのコンクールの開始
1936（昭和 11）年　田辺吹奏楽器の雑誌『バンドの友』の創刊
1939（昭和 14）年　大日本吹奏楽報国会、大日本吹奏楽連盟の結成

ここからは、広岡の「新吹奏楽運動」を軸に、戦前期の吹奏楽曲を詳しく見ていくこととする。

（2）軍楽隊外の作曲家の登場

この時代、吹奏楽曲の作曲を行う人間は依然として軍楽隊出身者ばかりであったが、この時代に民間出身の作曲者 2 人の名前が登場する。

1925（大正 14）年 9 月 21 日、大沼哲のフランス留学にあたり、ラジオで陸軍軍楽隊による「大沼氏告別演奏」[22]の放送がおこなわれたが、そのプログラムの一曲として堀内敬三（1897（明治 30）年〜1983（昭和 58）年）の《行進曲「送別」》[23]が演奏された。

堀内は中学校在学中より大沼哲にピアノと作曲を師事し、渡米後、ミシガン大学で機械工学を専攻しながら音楽学部専科でアール・ヴィンセント・ムーアの指導を受けた。1923（大正 12）年にマサチューセッツ工科大学大学院を修了後帰国し、1926（大正 15）年より日本放送協会の音楽番組の主任、のちに日本音楽雑誌株式会社（現・音楽之友社）社長、全関東吹奏楽連盟顧問、戦後は全日本吹奏楽連盟第 2 代理事長（戦後初の理事長）として日本の吹奏楽を牽引していくこととなる[24]。

1929（昭和 4）年 7 月 6 日の日比谷公園奏楽堂演奏会では、岡部伸平（1896（明治 29）年〜没年不詳）の《行進曲 陸軍軍楽隊に捧ぐ》が陸軍軍楽隊によってプログラムの番外として演奏されている。岡部は早稲田大学商学部出身の民間人[25]でありながら、《行進曲「若人」》、《円舞曲「秋」》、《行進曲「凱旋」》など多くの吹奏楽曲を発表し、レコード、楽譜も発売されている。

---

22 「洋行する楽手大沼哲氏に行進曲送別を作曲」、『日刊ラヂオ新聞』、1925 年 9 月 21 日、第 2 面。

23 この曲の他に、大沼哲作曲の《三つの特徴曲》、《誓忠行進曲》、《皇太子殿下御成婚奉祝前奏曲》が演奏、放送されている。

24 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、597〜598 頁、管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、312 頁を参照。

25 早稲田大学紳士録刊行会編『早稲田大学紳士録 昭和 15 年度版』、1939 年、206 頁。

（3）軍楽隊員の創作活動

この頃の陸軍軍楽隊では、楽長退任演奏会で隊員からの献呈曲の作曲が行われている。そもそも軍楽隊隊員が作曲を行う場合には個人名は出されないことが多く、谷村政次郎によると「軍楽隊員が作曲した曲は、個人名を出さず軍楽隊作曲として発表することが昭和七年頃から始まり、終戦まで続いたことによる。陸軍軍楽隊から始まったようで、海軍軍楽隊もそれに倣ったと思われる」[26]と記述されている。しかしながら、この献呈曲では例外的に作曲者の名前が一部ではあるが掲載され、この後盛んになる作曲活動の萌芽を感じることができる。尚、これらの楽曲は後日ラジオでも放送されている。

表 3.5.　献呈曲一覧[27]

1932（昭和 7）年 6 月 25 日「辻楽長告別演奏会」[28]
辻楽長への献呈曲 甲　行進曲・・・岡部伸平 乙　円舞曲・・・吉田楽手補　［吉田盈照］ 丙　歌謡曲・・・井上一等楽手［井上繁隆］ 丁　序曲・・・佐藤三等楽手［佐藤長助］

②1933（昭和 8）年 11 月 3 日「伊藤隆一楽長送別大演奏会」[29]
伊藤楽長への贈呈曲 甲　行進曲・・・吉田楽手［吉田盈照］ 乙　歌謡曲・・・筒井楽手［筒井快哉］ 丙　行進曲・・・田村楽手補［田村明一］ 丁　「フリュートのための主題と変奏曲」・・・須摩楽手［須摩洋朔］ 戊　行進曲「広漠たる視野」（畏友伊藤楽長の告別を祝す）・・・楽長　永井建子

[26] 谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲 ― 帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、出版共同社、2015 年、26 頁。

[27] ［ ］内には、洋楽放送記録に記載されていた作曲者名を付記した。

[28] 出典：谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム ― 日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、260 頁。

[29] 出典：同前、270 頁。

この演奏会は、そもそも軍楽隊員による作品は各軍楽隊名義で発表されることが原則の中で、各楽曲の作曲者がプログラムに記載されている珍しい機会である。

吉田盈照（生没年不詳）は、《円舞曲「新緑の武蔵野」》が、井上繁隆（生年不詳～1987）は《行進曲「新世界」》、《行進曲「輝く国軍」》、喇叭鼓隊編成の《行進曲「歓喜」》などの代表曲があり、ラジオでも度々放送されている。また田村明一（生没年不詳）は後に関東軍軍楽隊長を務める[30]。

須摩洋朔（1907（明治 40）年～2000（平成 12）年）と佐藤長助（1906（明治 39）年～1985（昭和 60）年）は戦後の吹奏楽においても活躍した人物である。この 2 名は共に大沼哲の薫陶を受けた隊員である。須摩は戦後、初代陸上自衛隊中央音楽隊長を務め、「明石丈夫」名義でも作曲を行なっている[31]。佐藤は除隊の後にキングレコード所属となり、軍歌の作曲家として知られた[32]。また両者の作品は、戦後の全日本吹奏楽コンクールの課題曲として選定されている。

一方、同時期の海軍軍楽隊の代表的人物としては、江口源吾（1903（明治 36）年～1978（昭和 53）年）が挙げられる。江口は海軍入隊後、委託生として東京音楽学校でチェロを学ぶと同時に作曲家を志し、軍楽隊内で吹奏楽曲を手がけるようになる[33]。

《行進曲「千代田城を仰いで」》は 1925（大正 14）年 2 月に完成した江口の処女作である。広岡九一は本楽曲を「日本的のメロデーはひしひしと聴くものをして明朗日本の皇国を称えるであろう」[34]と評しているが、戦前の元旦には、この楽曲を海軍軍楽隊によって演奏することが慣例となっていた[35]。

---

30 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、299 頁。

31 CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 6 須摩洋朔作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）のブックレットによる。

32 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、318 頁。

33 CD『軍楽隊とともに歩んだ・・・日本の吹奏楽 II 江口源吾作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）のブックレットによる。

34 広岡九一「吹奏楽曲解説（2）」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』4 巻 2 号、1938 年、5 頁。

35 CD『軍楽隊とともに歩んだ・・・日本の吹奏楽 II 江口源吾作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）のブックレットによる。

《大序曲「挙国の歓喜」》は、1928（昭和 3）年 11 月 16 日に昭和天皇即位大典演奏会で陸海両軍楽隊の合同演奏により初演された。江口は、1931（昭和 6）年、宮中の内宴での《幻想曲「芳春の幻」》初演を最後に退役し、名前を「夜詩」と改め民間で多くの流行歌に携わったことはよく知られているが、第二次世界大戦期まで吹奏楽曲も数多く手掛けている。

（4）ラジオ放送と吹奏楽

1925（大正 14）年 3 月 22 日の仮放送[36]以来、吹奏楽放送は定期的に行われていた。元旦や各軍記念日などの祝祭日には必ず軍楽隊が登場し、記念演奏を放送している。洋楽放送記録には、この頃の吹奏楽放送を担っていた代表的な演奏団体として、各軍楽隊のほか警視庁音楽隊[37]、大東京吹奏楽団、大阪市音楽隊の名前が見られる。また東京音楽学校に 1935（昭和 10）年に設立された吹奏楽研究部も、設立後まもなく放送に登場している。演奏曲は、やはり当初は海外作品や管弦楽曲の編曲が大多数であったが、1930 年代が下るにつれて邦人作品も徐々に加わるようになった。

山田耕筰作曲による《初春の前奏と行進曲「日出づる国」》は、放送局の委嘱による作品で、1933（昭和 8）年 1 月 1 日の陸軍軍楽隊による初放送以降、終戦後の時期まで正月三が日に放送される楽曲[38]であった。瀬戸口藤吉の《行進曲「軍艦」》も、海軍記念日に放送されることで、国民に強く印象付けられることとなった。

1934（昭和 9）年 10 月 2 日、大阪放送局からの大阪市音楽隊の中継放送は、プログラム全曲が日本人作品により構成され、かつ自作自演である画期的な内容であった（表 3.6）。

---

[36] 仮放送第一日目には、次のように海軍軍楽隊の管弦楽演奏が放送された。「芝浦高等工業学校内仮施設からの試験放送第一日目の番組で、記録の最初に残されている名誉ある初放送は、佐藤清吉軍楽長指揮の海軍軍楽隊による、アルフォード作曲『後甲板にて』というイギリスの行進曲の管弦楽演奏であった。」（谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡』、359～360 頁）

[37] 1934 年（昭和 9）年～1941（昭和 16）年に存在していた戦前の団体。

[38] 洋楽放送記録を参照。

表 3.6.　菅原明朗自作自演プログラムの放送記録[39]

1934（昭和 9）年 10 月 2 日（JOBK）
演奏：大阪吹奏楽団　菅原明朗 指揮 《吹奏楽のための交響楽「夜の水都」》菅原明朗 作曲 ・第一楽章「巷の夜」 ・第二楽章「水の上」 ・第三楽章「遁走曲と天守閣の讃歌」 《二つの小品》菅原明朗 作曲 ・《勇壮なる行進曲》 ・《典雅なる行進曲》

《吹奏楽のための交響楽「夜の水都」》は、フランス式大編成[40]で三楽章から構成されるその規模においても前例のない楽曲であった。

菅原明朗（1897（明治 30）年～1988（昭和 63）年）[41]は、京都府立二中時代に、陸軍第四師団軍楽隊出身の小畠賢八郎の指導のもと吹奏楽を始め、上京後には瀬戸口藤吉の指導を受けるとともに、堀内敬三らと共に大沼哲の私塾に通った。マンドリン・オーケストラのオルケストラ・シンフォニカ・ タケイに参加の後、1930（昭和 5）年～1933（昭和 8）年には帝国音楽学校作曲科にて教鞭を取り、新興作曲家連盟、楽団創生に参加し作曲活動を行なった。その門下からは吹奏楽の作曲家を多数輩出し、後に全関東吹奏楽連盟顧問に就任するなど、戦前の日本の吹奏楽の発展に努めた重要な一人である。その経歴からは、軍楽隊から民間へ吹奏楽曲の創作を橋渡しした人物とも言える。この頃の菅原の吹奏楽作品としては、《海の行進曲》、《空の行進曲》、《行列》があり、また放送記録では、度々吹奏楽曲の編曲者として名前が記載されている。

---

[39] 以後の放送記録に関する項目は、NHK 放送博物館所蔵の『洋楽放送記録』および『番組確定表』を参照したものである。

[40] 富樫康『日本の作曲家』、185 頁。

[41] 富樫康『日本の作曲家』、14～15 頁、181～185 頁を参照。

喇叭鼓隊編成の放送も、陸軍軍楽隊や民間団体の演奏で度々行われている。

表 3.7　喇叭鼓隊の放送記録

1933（昭和 8）年 4 月 15 日　喇叭鼓隊
演奏：陸軍戸山学校軍楽隊　伊藤隆一指揮 《陸軍行進曲》その 1　その 2　陸軍戸山学校軍楽隊編曲 《お伽噺》　グルダン作曲 《青年マーチ》　陸軍戸山学校軍楽隊作曲

1935（昭和 10）年 11 月 25 日　吹奏楽と喇叭鼓楽
演奏：吹奏楽　東京音楽学校生徒吹奏楽団　萩原英一指揮 喇叭鼓楽　専修商業学校喇叭鼓隊　豊岡 稔 指揮 1.吹奏楽 （イ）《序曲「マグネータ」》ハフ作曲 （ロ）《円舞曲「スペイン」》ヴァルドトイフェル作曲 2.喇叭鼓楽 （イ）《行進曲「躍進日本」》和田小太郎作曲 （ロ）《危機を畏れず》ガデンネ作曲 （ハ）《意想曲「太平洋上の波」》和田小太郎作曲

（5）アマチュア活動と地方コンクールのレパートリー

満州事変頃に俄に盛んになったアマチュアの吹奏楽活動[42]は、全国各地へとその流れを広げていった。吹奏楽はそれまでの企業の厚生運動や単なる趣味としてではなく、報国活動として位置付けられたことで、第二次世界大戦期を通して、社会的役割が変化していくこととなる。この時期には、各地での吹奏楽連盟の結成や、楽器講習会、指導者講習会を通して吹奏楽活動の普及が図られるとともに、大規模な行事が計画され始めるようになる。

1933 昭和 8）年からは、日比谷公園音楽堂でアマチュア音楽団演奏大会が開催された。翌 1934（昭和 9）年の第 2 回演奏会では、喇叭鼓隊とブラスバンドの合同演奏の初めての試み[43]として、大沼哲作曲《行進曲「皇軍の門出（皇軍の首途)」》が演奏会の最後のプログラムに加えられた。

1935（昭和 10）年の第 3 回演奏会では、喇叭鼓隊編成とブラスバンド編成それぞれの合同編成が披露されており、演奏曲は喇叭鼓隊が陸軍戸山学校軍楽隊（大沼哲）作曲《青年マーチ》と同じく大沼作曲の《行進曲「精鋭」》、ブラスバンドが《東京市歌》であった。

1934（昭和 9）年に発足したアマチュア・ブラスバンド東海連盟は、1935（昭和 10）年 10 月 6 日に日本で初めて吹奏楽のコンクールを開催した。この時の演奏団体と曲目は次の通りである。

---

[42] 補足として、次の伊藤隆一（元陸軍軍楽隊楽長、大日本吹奏楽連盟常任理事）の発言を記載する。「アマチュア・バンドは満州事変をきっかけと致しまして、都会地は勿論のこと、一寒村に至るまで、非常な勢いを以て普及し発展しつつあります。ブラス・バンドと、申しましても、純粋のブラス・バンドと、それから喇叭鼓隊というものが出来て居りまして、両方とも非常な勢いで発展しつつありますが、都会地に於ては大体ブラス・バンド、各地方の小さな町村に於ては喇叭鼓隊が一般に行われて居ります。」（「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（上)」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』6 巻 2 号、1940 年、10〜11 頁。）

[43] 伊藤隆一「第二回アマチュア音楽団演奏大会合同演奏を指揮して」、『ブラスバンド』2 巻 2 号、1934 年、22 頁。

表 3.8　1935（昭和 10）年 10 月 6 日　アマチュアバンド東海連盟バンド競演会[44]

会場：新愛知講堂

課題曲：《行進曲「歓声」》（陸軍戸山学校）

演奏団体	随意曲	編成
岐阜薬専音楽部	アンビルコーラス （トラバトーレ）	アルト一、トロンボーン一、ペチットバス一、コントラバス一、大、小ドラム二
河合楽器ブラスバンド	ワーソング （ローレンデユ）	フリュート一、グランドクラリネット四、コルネット三、トラムペット一、バリトン二、アルト二、トロンボーン二、ペチットバス二、コントラバス一、大小ドラム二
東邦商業健児音楽隊	西欧の民謡 （ジンノ氏編曲）	ペチットクラリネット一、グランドクラリネット三、コルネット（第一）二、同（第二）三、トラムペット一、サキソホンアルト一、サキソホンテノール一、バリトン二、アルト三、トロンボーン三、ペチットバス三、コントラバス一、大、小ケース
紫友音楽倶楽部	行進曲「御大礼観兵式」 ［作曲者記載なし］ ＊岩井貞麿？	グランドクラリネット二、コルネット三、トロムペット一、サキソフォンアルト一、バリトン一、トロンボン二、ペチットバス一、フリュート一、ピッコロ一、大小ドラム二

[44] 表の作成にあたっては、「アマチュアバンド東海連盟のバンド競演会」（『ブラスバンド』3 巻 3 号、1935 年、28〜31 頁）を参照した。（ ）内は引用元に記載の作曲者名、＊は楽曲リストの調査から明らかとなった作曲者名を記載した。

東洋毛織ブラスバンド	狂詩曲インド遠征 ［作曲者記載なし］	グランドクラリネット三、コルネット三、トラムペット一、バリトン一、アルト一、トロンボン一、ペチットバス二、コントラバス一、大小ドラム二
半田楽友会	行進曲「観艦式」 （海軍軍楽隊） ＊江口源吾	グランドクラリネット三、コルネット三、トロムペット一、アルト一、トロンボン二、ペチットバス二、ヘリコンバス一、大小ドラム二
岐阜商業ブラスバンド	円舞曲「青きドナウ」 （シュトラウス）	グランドクラリネット三、コルネット三、トラムペット一、バリトン二、アルト一、トロンボン二、ペチットバス二、コントラバス二、大小ドラム二
近藤毛織音楽部	行進曲「輝く日章旗の下に」 ［作曲者記載なし］ ＊陸軍軍楽隊	グランドクラリネト［ママ］三、コルネット三、バリトン二、トロンボン二、ペチットバス一、アルト一、大小ドラム二
丸織ブラスバンド	円舞曲「新緑の武蔵野」 （陸軍軍楽隊） ＊吉田盈照	グランドクラリネット二、コルネット四、トラムペット一、バリトン二、アルト一、トロンボン二、ペチットバス二、大小ドラム二
中津商業音楽隊	ポルカ凱旋 ［作曲者記載なし］ ＊山本銃三郎	ピッコロ一、グランドクラリネット三、コルネット三、バリトン二、アルト一、トロンボン二、ペチットバス二、コントラバス一

岐阜高農ブラスバンド	［曲名不明］	クラリネット二、コルネット二、バリトン一、アルト一、トロンボン一、ペチットバス一、大小ドラム二
瀬戸電吹奏楽団	［曲名不明］	クラリネット三、コルネット三、ホルン一、バリトン一、トロンボン二、ペチットバス一、大小ドラム二
日本陶器音楽部	戦勝旗の下に （フランツ・ブローン）	ピッコロ一、フリュート一、クラリネット二、コルネット二、トラムペット一、バリトン二、トロンボン一、アルト一、ペチットバス二、大小ドラム二
名古屋鉄道ブラスバンド	［曲名不明］	ピッコロ一、ペチットクラリネット一、クラリネット二、コルネット二、トラムペット一、アルト一、バリトン二、トロンボン二、ペチットバス二、コントラバス一、大小ドラム二

このコンクールでは、審査の結果、第一位は東邦商業学校健児音楽隊、次位優秀団体として河合楽器ブラスバンド、紫友音楽クラブ、東洋毛糸ブラスバンドが選ばれた。

演奏曲目を見ると、陸軍軍楽隊作曲の課題曲のほか、随意曲においても日本人の作品が見られ、アマチュアバンドでも日本人の楽曲が流通していることがわかる。

また編成からは、本コンクールではブラスバンド編成のみが出場しており、楽器数や使用楽器に差異がある実態を見ることができる。

同年 11 月 10 日、東京でも第三回音楽週間の催し物の一つとして、吹奏楽コンクールが開催された。雑誌上で事前に発表された、コンクールの参加団体と編成、および演奏曲目は次の通りである。

表 3.9　1935（昭和 10）年 11 月 10 日　第三回音楽週間　吹奏楽コンクールと行進演奏[45]

課題曲

ブラスバンド：Magneta Overture … Will Huff

喇叭鼓隊：Fantaisie Faceau Danger … G.Gadenne

演奏団体	随意曲	編成
石川島造船所自彊吹奏楽団	ビッグマーチ ＊海軍軍楽隊	ブラスバンド
東京電気株式会社マツダ音楽団	行進曲旅団行進	ブラスバンド
日本橋区室町一丁目青年団	青年マーチ　外数曲 ＊大沼哲	ラッパ鼓隊
東京三河島健児団	［曲名不明］	ラッパ鼓隊
専修商業学校	［曲名不明］	ラッパ鼓隊
巣鴨中商業学校	アレルト	ラッパ鼓隊
荒川区青年団	光は極東より ＊和田小太郎	ラッパ鼓隊
東京市一橋高等小学校	［曲名不明］	ラッパ鼓隊
牛込区青年団	輝ク日本	ラッパ鼓隊
川越商業学校	青年マーチ ＊大沼哲	ラッパ鼓隊
中野区青年団	前進又は君が代マーチ ＊陸軍軍楽隊	ラッパ鼓隊
八王子市連合青年団	輝ク行軍	ラッパ鼓隊
河合楽器会社音楽部	星と縞	ブラスバンド
深川区青年団	［曲名不明］	ラッパ鼓隊
府立第一商業学校	［曲名不明］	ブラスバンド
入谷商工青年団	騎士	ブラスバンド

[45] 表の作成にあたって「第三回音楽週間 吹奏楽コンクールと行進演奏」（『ブラスバンド』3 巻 3 号、1935 年、26～27 頁）を参照した。引用元に作曲者の記載はなし。＊は楽曲リストから明らかとなった作曲者名を記載した。

大会の結果は、ブラスバンドの第一位が東京電気株式会社マツダ音楽団、第二位が石川島造船所自彊吹奏楽団で、喇叭鼓隊の第一位が専修商業学校、第二位が荒川区青年団、第三位が八王子青年団であった[46]。尚、コンクールに先立ってはこの年に結成したばかりの東京音楽学校の吹奏楽団が演奏を行い、高い評価を受けている[47]。

次に、翌 1936（昭和 11）年に開催された第 2 回コンクール参加団体を掲載する。

表 3.10　1936（昭和 11）年 11 月 8 日　第二回吹奏楽コンクール[48]

課題曲

ブラスバンド：「天色の恩恵」

喇叭鼓隊：「剛健」

演奏団体	随意曲	編成	人員
日立鉱山吹奏楽団	行進曲　立派な兵隊 ＊大沼哲	ブラスバンド	二十五名
東京中央電信局中電バンド	［曲名不明］	ブラスバンド	十四名
東京石川島造船所自彊吹奏楽団	行進曲　石川島	ブラスバンド	三十三名
足立区青年団喇叭鼓隊	分列行進曲 ＊大沼哲	喇叭鼓隊	十七名

46 「吹奏楽の豪華盤 音楽週間中の吹奏楽コンクール」、『ブラスバンド』3 巻 4 号、1935 年、24 頁。

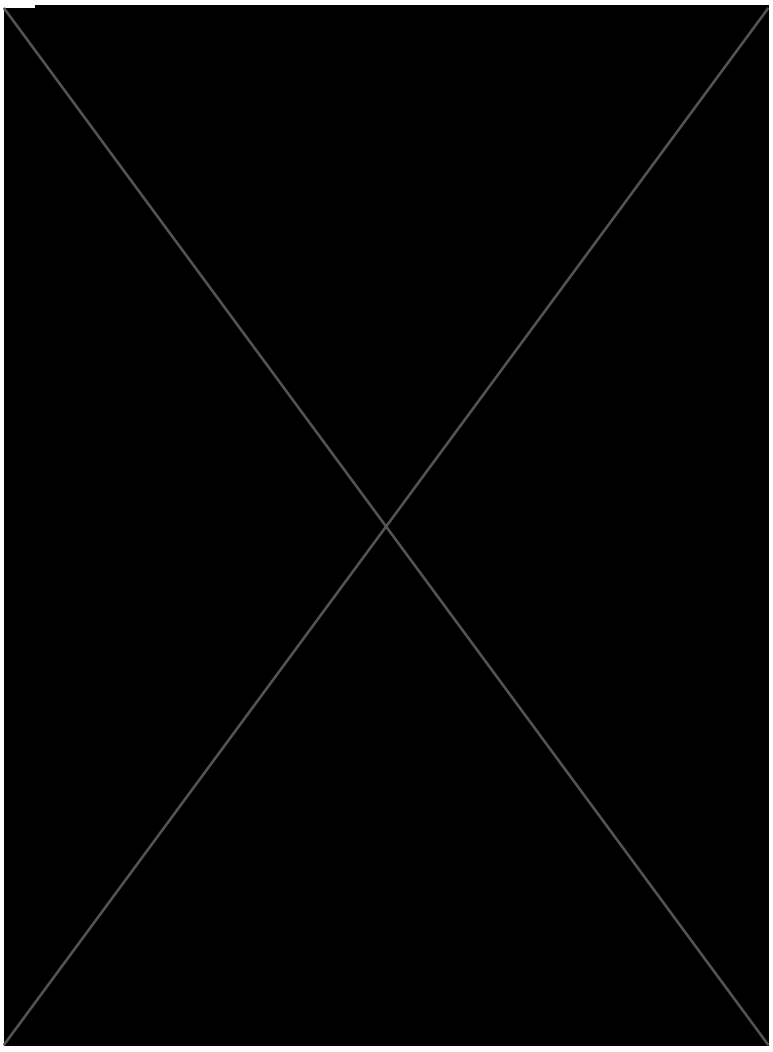
47 「この日は十二時半より東京音楽学校生徒吹奏楽団の皮切りに依って演奏会が行われたのである。これはこの日のコンクールとは関係の無いものではあったが、然し今年の初めに初めて音楽学校に組織された吹奏楽団の最初の公開演奏とも云われるべきものであっただけに、その期待と興味は大したものであった。このバンドは未だ組織されてから僅かな月日よりたってはいないのであるが、さすがは専門家の団体だけに、その進歩も目覚ましいものであった。（平林勇「吹奏楽コンクールに関する所感」、『ブラスバンド』3 巻 4 号、27 頁。）

48 表の作成にあっては、「吹奏楽秋の呼物 第二回吹奏楽コンクール」（『ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』2 巻 10 号、1936 年、4〜5 頁）を参照した。引用元に作曲者の記載はなし。＊は楽曲リストの調査から明らかとなった作曲者名を記載した。

逗子開成中学校振武隊	軍艦行進曲 ＊瀬戸口藤吉	ブラスバンド	二十七名
埼玉県川越商業学校	戦捷行進 ＊和田小太郎 編曲	喇叭鼓隊	二十七名
日本フェルト音楽部	行進曲　勇気 ＊陸軍軍楽隊	ブラスバンド	二十一名
東京電気株式会社マツダ音楽団	［曲名不明］	ブラスバンド	三十名
私立共立モス館林工場青年学校音楽隊	吾等の軍隊 ＊和田小太郎、大沼哲	ブラスバンド	十二名
荒川区青年団	陸軍マーチ其ノ二 ＊陸軍軍楽隊	喇叭鼓隊	四十名
八王子市連合青年団	青年マーチ ＊大沼哲	喇叭鼓隊	四十名
東京府立第二商業学校音楽部	龍騎兵	ブラスバンド	十七名
東京府立第一商業学校スクールバンド	［曲名不明］	ブラスバンド	三十名
神戸喇叭修得団	美しき故郷	喇叭鼓隊	十七名
浜松市河合楽器音楽部	我等の軍隊 ＊和田小太郎、大沼哲	ブラスバンド	三十名
巣鴨商業学校 巣鴨中学校	我等の軍隊 ＊和田小太郎、大沼哲	喇叭鼓隊 喇叭鼓隊	三十名
中野区青年団	前進又は君が代マーチ ＊陸軍軍楽隊	喇叭鼓隊	二十一名
専修商業学校喇叭鼓隊	輝く御稜威 ＊和田小太郎	喇叭鼓隊	三十六名
小石川区青年団	行進曲　分列 ＊大沼哲	喇叭鼓隊	二十名
東京市高等小学校吹奏楽団	君が代行進曲 ＊吉本光蔵	ブラスバンド	四十八名
日立製作所温交会音楽部	［曲名不明］	ブラスバンド	二十五名
中川吹奏楽団	［曲名不明］	ブラスバンド	二十三名

関東の大会では、第一回大会では喇叭鼓隊が大多数、第二回大会でもほぼ半数を占めており、喇叭鼓隊編成が広く導入されていたことがわかる。参加団体全体を見ると、東京のみならず地方からの参加団体もあり、団体数も第一回から第二回で倍増していることから、吹奏楽コンクールへの関心の高さを感じることができる。演奏曲は、日本人の楽曲が多く取り上げられるようになった一方で、同一の楽曲が多いのは、図 3.1 の当時の楽譜広告が示す通り、出版されている楽譜の数が未だ少なく、選択の余地がなかったためと推測される。また、この広告からは、ブラスバンド編成よりも喇叭鼓隊編成の楽譜の方が大きく扱われている様子が窺える。

図 3.1　昭和初期の吹奏楽楽譜広告[49]



[49] 『ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』2 巻 8 号、1936 年、付録。

喇叭鼓隊編成向けの楽曲は、その編成の普及にあたって中心的な人物であった陸軍軍楽隊の大沼哲、和田小太郎（1887（明治 20）年～1974（昭和 49）年）らが多くを手掛けている。また楽曲リストを見ると、楽曲は陸軍軍楽隊出身者によるものがほとんどで、民間出身者にも多少見られる一方、海軍出身者は全く楽曲を創作していないことも特徴であろう。

1938（昭和 13）年 11 月 6 日に、音楽週間理事会主催の下、東京音楽学校奏楽堂で開催された吹奏楽器個人競演会では、木管、金管、打楽器に喇叭鼓隊部門を加えて本選が行われた[50]。全関東吹奏楽連盟が主催となった 1940（昭和 15）年 11 月 8 日の第 3 回の各部門は、①ピッコロ・フルート、②オボー・サキソフォン・バズン、③クラリネット、④コルネット・トロンペット、⑤アルト・バリトン、⑥トロンボーン・バス、⑦小・中・大喇叭、⑧打楽器の 8 つの部門[51]が設けられており、喇叭鼓隊が主要な編成であったことがわかる。

（6）作品公募の開始

このように、日本全体として吹奏楽発展の機運が高まる中で、吹奏楽曲の創作にも関心が向けられていくこととなる。

1939（昭和 14）年、大日本音楽協会は吹奏楽曲の作曲コンクールである、「瀬戸口作曲賞」を創設した。当時の雑誌に掲載されたコンクールの募集規定は次の通りである。

第一回　瀬戸口作曲賞作品公募規定[52]

一、募集作品ノ種類　吹奏楽用トシテ用イ得ルベキ行進曲　但シピアノ独奏ニテ演奏シ得ル譜面トシテ提出スル事　ピアノ譜ニ吹奏楽用編曲ノ場合ノ楽器指定ヲ書込ミ又ハ吹奏楽用或ハ管弦楽用ノ総譜ヲ添付スルモ差支ナシ

二、応募作品ノ届先　応募作品ハ大日本音楽協会内瀬戸口作曲賞委員会宛

三、締切期日　昭和十四年四月三十日

四、入賞発表期日　昭和十四年五月下旬頃

五、賞金　一等　金百円也　二等　金五十円也

---

[50] 目黒三策「アマチュア・バンドのあゆみ」、『吹奏楽の編成と歴史』1983 年、音楽之友社、160～161 頁。（新版 吹奏楽講座 7）

[51] 出典：管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、89 頁。

[52] 「瀬戸口作曲賞作品公募規定」、『バンドの友』4 巻 4 号、1939 年、5 頁。原文は縦書きである。

入賞ハ右二名トス　但シ右等級ノ何レカニ該当者ナシト認メタル時ハ其ノ一ヲ除キ或ハ其ノ何レノ等級ニモ該当者ナキ場合ハ其ノ全部ヲ除クコトアルベシ

六、瀬戸口作曲賞委員（五十音順）　大沼哲、京極鋭吾、小松耕輔、瀬戸口藤吉、田村虎蔵、内藤清五、堀内敬三、増澤健美、武藤与市　以上

上記のように、この賞は「吹奏楽用トシテ用ヒ得ルベキ行進曲」を対象とし、吹奏楽の新曲の創出を狙ったものであった。もっとも、応募の際に編成に厳密な指定はなく、募集はピアノ・スコアの形で行われ、ピアノ・スコアには任意で吹奏楽の楽器指定を記すか、吹奏楽あるいは管弦楽用の楽譜を添付することとされた。

第 1 回コンクールでは、審査員は瀬戸口藤吉のほか、海軍関係者の内藤清五、陸軍関係者の大沼哲、らが担当し、第一等に白磯巖（1908（明治 41）年～没年不明）作曲《行進曲「艦隊の威容」》、第二等に陶野重雄（1908（明治 41）年～1985（昭和 60）年）の《行進曲「若人」》が入賞した。当時の雑誌には、審査結果とともに《艦隊の威容》のピアノ・スコアが掲載[53]され、楽譜は共益商社より出版された。

白磯巖は、海軍軍楽隊出身で退役後はコロムビアに所属し流行歌の場で活躍した[54]。白磯の名前は、この後戦時中に行われる様々な吹奏楽曲創作運動の中によく現れることとなる。陶野重雄は広島高等工業学校出身で軍楽隊員ではないが、諸井三郎、菅原明朗に個人的に作曲を学び、同時期には第 7 回日本音楽コンクールにも入選している[55]。戦後も吹奏楽をはじめ様々な分野で作曲活動をおこなった。

翌 1940（昭和 15）年には第 2 回が実施されたが、作品の種類に「文部省祝祭日唱歌『明治節』の旋律をトリオに採り入れた行進曲」[56]との指定が付けられた。

この回の結果には等級が付けられず、松倉五郎（生没年不明）の《明治節行進曲》と、安倍盛（1905（明治 38）年～1955（昭和 30）年）の《行進曲「明治大帝讃仰」》の 2 曲を入賞とした。

---

[53]『月刊楽譜』28 巻 8 号や、『バンドの友』4 巻 7 号の付録楽譜として掲載。

[54] 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、351 頁を参照。

[55] 富樫康『日本の作曲家』、362 頁、大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、196 頁を参照。

[56] 『月刊楽譜』29 巻 4 号、1940 年、40 頁。

松倉五郎は陸軍軍楽隊出身であり、安倍は軍楽隊員ではない。安倍は同年開催された皇紀二千六百年奉祝曲の公募で、吹奏楽部門と管弦楽部門で入選しているほか、戦中期を通して多くの吹奏楽曲を作曲している[57]。安倍の楽曲は、《行進曲「明治大帝讃仰」》、後述の《行進曲「紀元二千六百年」》のほか、《小品三部曲「永遠の光」》、《円舞曲「輝光」》、《描写曲「ますらを」》など多く出版されている点も特徴であろう。

《明治節行進曲》は、1940（昭和 15）年 9 月 17 日に日比谷公会堂で開催された「軍艦行進曲四十年記念大演奏会」にて、後楽会（海軍軍楽隊出身者）による演奏で披露されている[58]。プログラムでは瀬戸口藤吉の《行進曲「軍艦」》と続けて演奏されていることから、日本人による最新の行進曲として紹介する意図もあったのであろう。しかしながら、この精力的な試みも、戦時体制移行のため第 2 回で休止されることとなった。

このように、軍楽隊員に限らず多くの作曲家により吹奏楽曲の創作活動が展開されるようになった一方で、広岡は「純音楽方面の作曲家が行進曲を書くと、経験がないため思想や構成、作曲技法の点では音楽的であっても吹奏楽としてしっくりこない箇所がある。もっと多くの曲を作ってほしい。」[59]とも指摘している。

---

[57] 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、23 頁、管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、270 頁を参照。

[58] 「軍艦行進曲四十年記念大演奏会」、『バンドの友』5 巻 9 号、1940 年、46 頁。

[59] 広岡九一「日本の吹奏楽曲」、『音楽之友』2 巻 3 号、1942 年、42～46 頁。

第 3 節　戦中期の吹奏楽曲

世界情勢の悪化と第二次世界大戦の開戦に伴い、敵性国からの作品の入手困難や、敵性国作品の演奏禁止の動きがあったにもかかわらず、吹奏楽の厚生音楽としての奨励もあり、民間の活動の活発化、吹奏楽の放送回数の増加などの理由による楽曲需要の急増が重なったことで、多くの邦人吹奏楽曲が作曲され、行進曲以外の作品も現れ始めた。特に大きな契機となったのが、1940（昭和 15）年の紀元二千六百年であり、日本国内で行われた様々な奉祝行事の中で、吹奏楽及び吹奏楽曲が大いに活用されることとなった。

1941（昭和 16）年には管楽研究会より紀元二千六百年奉祝事業として『吹奏楽年鑑』[60]が刊行された。この年鑑は翌 1942（昭和 17）年にも発行されており、掲載されている吹奏楽団体や関連人名一覧からは、吹奏楽が全国規模で隆盛を極めていた様子が窺える。掲載広告を見ると、管楽研究会、共益商社、バンドの友社、ヲグラ楽譜出版、白眉出版社などから吹奏楽の楽譜が多数出版されるようになっていることがわかる。

このように、日本では紀元二千六百年を契機に吹奏楽の一大ブームが到来し、それに伴って創作が盛んとなった一方で、戦時統制下のため、楽曲レパートリーも国威発揚的な内容に変化していくこととなった。

---

[60] 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、1941 年。

（1）大日本吹奏楽連盟のコンクールと演奏曲目

この時期、各地方で吹奏楽連盟が結成され活動を行なっていく中で、雑誌では、「アマチュア吹奏楽団制統機関設立の可否」[61]のような大々的な特集が組まれるなど、全国規模の吹奏楽連盟の結成が求められるようになってきた。

1939（昭和 14）年には、関東、関西、東海の各吹奏楽連盟が集まり、大日本吹奏楽連盟が結成された[62]。

11 月 11 日の結成記念演奏会では、各地区の代表のほか、ブラスバンド、喇叭鼓隊の編成ごと、および両編成合わせての合同演奏が行われるなど大規模の内容となった。尚、合同演奏については同日に全国放送されている。結成記念演奏会の演奏団体と演奏曲目は次の通りである。

1939（昭和 14）年 11 月 11 日　大日本吹奏楽連盟結成式[63]
結成記念演奏会曲目

第一部　ブラスバンド
一、全関東吹奏楽団連盟代表
出演　東京府立第一商業学校音楽部　簡易保健局音楽部
指揮　佐藤清吉
　　一、行進曲「歓喜」　チュリーン作曲
　　二、序曲「海洋少年」　ローレンデュー編曲
二、全東海吹奏楽団連盟代表
出演　名古屋東邦商業学校健児音楽隊　私立岐阜商業学校音楽部
指揮　神納照美
　　一、行進曲「凱旋」　陸軍軍楽隊作曲
　　二、序曲「生活の楽しみ」
　　三、円舞曲「飛行船上より」　イワノフ作曲

---

61 「アマチュア吹奏楽団制統機関設立の可否」、『ブラスバンド』2 巻 3 号、1934 年、4〜10 頁。

62 「全日本吹奏楽団を糾合して大日本吹連楽奏盟［ママ］結成さる」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 11 号、1939 年、15 頁。

63 参照：『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』5 巻 11 号、1939 年、15〜17 頁。

三、全関西吹奏楽団連盟代表

出演　大阪市立東商業学校音楽部　大阪松下電器歩一会音楽部

指揮　斎藤兼司

一、行進曲「白衣の天使」　大阪市音楽隊作曲

二、描写曲「ペルシヤの市場」　ケテルビー作曲

第二部　ブラスバンド各連盟代表合同

指揮　林亘

一、陸軍観兵式分列行進曲　陸軍軍楽隊作曲

二、序曲「挨拶」　マール作曲

三、軍艦行進曲　瀬戸口藤吉作曲

第三部　喇叭鼓隊合同

関東連盟代表　専修商業学校喇叭鼓隊

関西連盟代表　神戸喇叭修得団

指揮　板倉林司

一、行進曲「若人」　伊藤隆一作曲

二、戦捷行進曲　和田小太郎作曲

ブラスバンド喇叭鼓隊全合同

指揮　伊藤隆一

一、行進曲「我等の軍隊」　陸軍戸山学校軍楽隊作曲

一、行進曲「盟友」　全関東吹奏楽団連盟作曲

愛国行進曲　内閣情報部撰定

君が代

ブラスバンドと喇叭鼓隊の合同演奏曲の《行進曲「盟友」》は、全関東吹奏楽連盟結成記念曲であったが、全日本の連盟結成時にも演奏されている。大阪市音楽隊名義での作品からは、地方でも吹奏楽曲創作が行われ始めていることを示している。

1940（昭和 15）年には、紀元二千六百年記念として初の全国規模の吹奏楽コンクールである、「紀元二千六百年奉祝・第一回集団音楽大行進並大競演会」が開催された。このコンクールは、ブラスバンドは 20 人以上、喇叭鼓隊は中編成以上：17～18 人の出演人数とし、制限時間なしで課題曲と随意曲 2 曲（ステージ演奏、行進演奏）が課された。出演団体と演奏曲は次の通りである。

1940（昭和 15）年 11 月 23 日　紀元二千六百年奉祝・集団音楽大行進並大競演会[64]

会場　橿原神宮、大阪朝日会館

課題曲
吹奏楽部：行進曲「大日本」（海軍軍楽隊）
喇叭鼓楽部：意想曲「野営の篝火」（大沼　哲）

表彰
１等　学生部　文部大臣賞
　　青年部　厚生大臣賞
２等　学生部・青年部とも連盟賞（楯）
別に優秀団体に「永井建子賞」を授与

●吹奏楽・学生部
東京府立第一商業学校吹奏楽団／広岡九一
行進曲「スペアミント」（チュリーヌ）、歌劇「タンホイザー」抜粋曲（R.ワーグナー）
大阪市立東商業学校音楽部／黒羽資雄〈優勝〉

64 参照：全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』、2019 年、66 頁。団体名の横の名前は指揮者名を示す。

「愛国行進曲」（大日本帝国軍楽隊）、歌劇「セヴィリヤの理髪師」序曲（G.ロッシーニ）
東邦商業学校健児音楽隊／小川太一
行進曲「立派な兵隊」（大沼　哲）、行進曲「進む日の丸」（大沼　哲）

●青年部
日本管楽器株式会社吹奏楽団／村上彦三
行進曲「我等の軍隊」（陸軍戸山学校軍楽隊）、歌劇「アイーダ」より行進曲（G.ヴェルディ）
大同製鋼熱田工場吹奏楽団／金田芳一
行進曲「紀元 2600 年」（海軍軍楽隊）、行進曲「希望に燃えて」（陸軍戸山学校軍楽隊）
金光教玉水青年会吹奏楽団／水谷藤太郎〈優勝〉
行進曲「銃後の人」（陸軍戸山学校軍楽隊）、意想曲「爆撃機」（江口夜詩）
門司鉄道局管弦楽団吹奏楽部／平井淳衛
行進曲「軍艦」（瀬戸口藤吉）、幻想曲「ベートーヴェンの思い出」（トバニ編）

●喇叭鼓楽・学校部
埼玉県川越商業学校喇叭鼓隊／塩野茂吉〈優勝〉
行進曲「若人」（伊藤隆一）、描写曲「襲撃」（大沼　哲）
山口県立下関中学校／佐々木哲郎
行進曲「青年」（陸軍戸山学校軍楽隊）、序曲「星」（山口常光）
育英商業学校／奥晴之
行進曲「若人」（伊藤隆一）、描写曲「襲撃」（大沼　哲）

●青年部
榎青年学校喇叭鼓隊／山本春男
行進曲「青年」（陸軍戸山学校軍楽隊）、行進曲「健国」（大沼　哲）
神戸喇叭修得団／諸田義雄〈優勝〉
行進曲「銃後の護り」（水島数雄）、意想曲「非常時日本」（和田小太郎）

☆賛助出演
日立戸畑工場青年学校吹奏楽団／近藤三代喜

☆特別出演

大阪府警察音楽隊／山口　真

行進曲「皇軍の門出」（陸軍戸山学校軍楽隊）、序曲「バグダッドの大守」（ボアエルデュー）、行進曲「進め荒鷲」（深海善次）

続く 1941（昭和 16）年の第二回大会では、新たに鼓笛隊と喇叭の部門が加えられた。また出場者の規定として、「大日本吹奏楽連盟に加盟している地方連盟で選抜あるいは推薦された団体で、単位団体であって混成することはできない、また、団体の構成員はアマチュアで、申込みしめ切前 6 ヶ月以上その団体に所属していること」[65]とされたが、このアマチュアの定義は、「かつて陸・海軍軍楽隊に在籍したことがあっても、現在退職してその人が工場に所属してから、6 ヶ月以上在籍していればよろしい」[66]と解釈された。また編成は、吹奏楽が 18〜30 名、喇叭鼓隊は中編成または大編成、喇叭隊は 6〜10 名、鼓笛隊は 15〜30 名とされた。審査では「行進間の随意曲、ステージにおける課題曲、それから規律統制」[67]が対象とされた。出演団体と演奏曲は次の通りである。

1941（昭和 16）年 11 月 23 日　第 2 回全日本吹奏楽大行進大競演会[68]

会場　名古屋市鶴舞公園・朝日会館

課題曲（行進演奏随意曲）

イ．吹奏楽団　行進曲「皇軍の精華」（陸軍軍楽隊）

ロ．喇叭鼓隊　意想曲「非常時日本」（和田小太郎）

ハ．喇叭隊　「青年マーチ」（第 1 小喇叭曲）（陸軍軍楽隊）

ニ．鼓笛隊　行進曲「くろがねの力」（小森宗太郎）

---

65 『吹奏楽の編成と歴史』、155 頁。

66 同上。

67 同上。

68 全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』、2019 年、67 頁。団体名の横の名前は指揮者名を示す。

●吹奏楽・学生部

東京府立化学工業学校音楽部／渡辺鋼夫（３位）

行進曲「航空日本」（陸軍軍楽隊編）

大阪市立東商業学校音楽部／黒羽資雄（２位）

行進曲「大日本」（陸軍軍楽隊）

名古屋東邦商業学校吹奏楽団／栗木守男（１位・永井賞）

［曲名記載なし］

●一般部

株式会社日立製作所戸畑工場青年学校吹奏楽団／中岡勇（３位）

序曲「天色の恩恵」（ポンテ）

日本管楽器株式会社吹奏楽団／岡田良雄（１位・厚生大臣賞）

「大軍隊の競技」（ローガン）

大同製鋼熱田工場吹奏楽団／金田芳一（２位）

行進曲「太平洋」（海軍軍楽隊）

●喇叭鼓隊・学生部

神戸村野工業学校音楽班／折野十才（２位）

意想曲「剛健」（ガデンヌ）

下関中学校喇叭鼓楽班／田中文雄（３位）

意想曲「剛健」（ガデンヌ）

埼玉県川越商業学校喇叭鼓隊／田沼　清（１位・文部大臣賞）

行進曲「若人」（伊藤隆一）

●一般部

神戸喇叭修得団／諸田義雄（1 位・厚生大臣賞）

序曲「星」（山口常光編）

榎青年学校喇叭鼓隊／松井辰三郎（２位）

描写曲「襲撃」（大沼　哲）

●喇叭隊・学生部

神戸市東兵庫国民学校喇叭隊／上家　悟（２位）

「速歩行進」（陸軍軍楽隊）

愛知県一宮中学校／木村文雄（１位・文部大臣賞）

「分列行進其の一」（一宮中学校喇叭隊編）

●一般部

神戸塚本喇叭隊／奥　晴之（１位・厚生大臣賞）

「戦捷行進」（陸軍軍楽隊）

●鼓笛隊・学生部

福岡県門司高等女学校鼓笛隊／大岳京子（１位・文部大臣賞）

「軍艦マーチ」（平井　淳編）

日出高等女学校鼓笛隊／福家軍平（２位）

「維新マーチ」（福家軍平編）

四條畷高等女学校／正司憲太郎（３位）

「愛国行進曲」（正司憲太郎編）

●一般部

株式会社丸永商店鼓笛隊／池谷　軾（２位）

「愛国行進曲」（池谷　軾編）

日本紡績名古屋工場鼓笛隊／小野君子（１位・厚生大臣賞）

「護れ太平洋」（丸山和一編）

1942（昭和 17）年の第３回は、６つの地方連盟（東北、関東、東海、関西、中国、九州）から代表が参加する大会となったが、続く第４回大会は戦局悪化のため中止されることとなった。第３回大会の参加団体と演奏曲は次の通りである。演奏団体中、川越商業学校と神戸喇叭修得団は過去 2 年連続優勝のため、「特選」団体として模範演奏を行なった。

1942（昭和 17）年 11 月 23 日　第３回大日本吹奏楽大会[69]

会場　福岡市東公園・福岡中学校講堂

課題曲

行進演奏

イ．吹奏楽団　行進曲「航空日本」（陸軍軍楽隊）

ロ．喇叭鼓隊　「戦捷行進」（和田小太郎）

ハ．喇叭隊　「速歩行進其の一」

ニ．鼓笛隊　「国民進軍歌」（小森宗太郎編）

舞台演奏

イ．吹奏楽団　行進曲「アジアの力」

ロ．喇叭鼓隊　幻想曲「喜悦」（山口常光）

ハ．劇吠隊「君が代」「国の鎮め」各１回、「集れ」「気を付け」「休め」「解れ」各２回

ニ．鼓笛隊「少年楽手」（明石丈夫）

●吹奏楽・学生部

東北中学校／白鳥奥郎

行進曲「大東亜戦争海軍の歌」（海軍軍楽隊）

東京府立科学工業学校／高木正夫（２位）

行進曲「大東亜戦争海軍の歌」（海軍軍楽隊）

東邦商業学校／神納照美（１位・文部大臣賞・永井建子賞）

行進曲「連隊」（モルネー）

天理中学校養徳報国団／森川晴三郎（３位）

行進曲「千代田城を仰いで」（江口源吾）

広島松本商業学校／三宅健二郎

序曲「栄光」（ハルツ）

---

[69] 全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』、2019 年、67-68 頁。団体名の横の名前は指揮者名を示す。

小倉陸軍造兵廠技能者養成所学校／大塚斗喜太
行進曲「大東亜戦争海軍の歌」（海軍軍楽隊）
●一般部
東京鉄道局大宮工機部／岡本末蔵（３位）
意想曲「攻撃」（陸軍軍楽隊）
岡本工業株式会社／赤坂幸造（１位・厚生大臣賞）
序曲「ピックダム」（スッペ）
松下電気産業報国歩一会／斉藤兼司（２位）
行進曲「大東亜戦争海軍の歌」（海軍軍楽隊）
広島鉄道局奉公会本部／藤沢善七
序曲「ルストスーピル」（ケラ・ベラ）
日立製作所戸畑工場青年学校／目野　正
行進曲「太平洋」（海軍軍楽隊）

●喇叭鼓隊・学生部
専修商業学校／大田黒　渉（１位・文部大臣賞）
「剛健」（ガデンヌ）
大垣市東国民学校／安田正一（３位）
「青年マーチ」（戸山学校）
神戸村野工業学校／中村勇（２位）
行進曲「精鋭」（大沼　哲）
下関中学校／和田方義
意想曲「非常時日本」（和田小太郎）
川越商業学校／吉野　勇（特選）
意想曲「襲撃」（大沼　哲）

●一般部
神戸喇叭修得団／諸田義雄（特選）
意想曲「襲撃」（大沼　哲）

●喇叭隊・学生部

一ノ宮中学校／伊藤義郎（２位）

「戦捷行進」（和田小太郎）

浪華商業学校／尾崎信夫（１位）

行進曲「分列」（永井建子）

神戸塚本六喇叭隊／奥　晴之（１位[70]）

「連隊行進」（陸軍軍楽隊）

●鼓笛隊・学生部

東京商業実践女学校／永田和子（１位・文部大臣賞）

「進軍」（井上繁隆）

四條畷高等女学校／嵯峨山　緑（３位）

「愉快なる行進」（同校編）

福岡県立門司高等女学校／杉山年代（２位）

「軍艦行進曲」（瀬戸口藤吉、平井淳衛編）

●一般部

荒川ノーシン千種工場／早川　猛（１位・厚生大臣賞）

行進曲「希望に燃えて」（丸山和一編）

株式会社丸永商店／森　恵美子（２位）

「海国日本」（明石丈夫編）

演奏曲は、この頃には邦人作品が多くレパートリーとして取り上げられ、定着していることを示す一方で、軍楽隊関係者による作品がほとんどを占めている。また、鼓笛隊編成の楽曲は指導者によって編曲がなされていることが多いのが特徴であろう。

1942（昭和 17）年の大会では、同年に発表された《行進曲「大東亜戦争海軍の歌」》が早くも多くの団体で取り上げられており、同曲が全国的に流行していたことがわかる。この楽曲は、同名の海軍選定歌《大東亜戦争海軍の歌》をトリオに使用した行進曲で、作曲者は海

[70] 註：喇叭隊・一般部の１位である。

軍軍楽隊員の片山正見（1914（大正 3）年～2009（平成 21）年）である。尚、同時期に陸軍でも《大東亜戦争陸軍の歌》をトリオに使用した《行進曲「大東亜戦争陸軍の歌」》が作曲されているが、作曲者名は明らかになっていない。片山の作品はほとんどが海軍軍楽隊名義での発表であるが、《組曲「三つの港風景」》、《行進曲「祝勝」》、《円舞曲「薫る菊花」》などをはじめとして多くが管楽研究会から出版されている。また、戦後も海上自衛隊東京音楽隊第二代隊長を務めるなど、長らく吹奏楽の分野で活躍した人物である[71]。

（2）紀元二千六百年奉祝曲

1940（昭和 15）年 1 月 1 日、ラジオでは、陸海軍軍楽隊により紀元二千六百年を記念すべく以下のような吹奏楽の放送が行われた。

1940（昭和 15）年 1 月 1 日（月）懸賞募集吹奏楽行進曲　入選三曲発表放送

一、行進曲「紀元二千六百年」　深海善次作曲
二、行進曲「紀元二千六百年」　水島数雄作曲
三、行進曲「紀元二千六百年」　安倍　盛作曲

番外
一、序曲「祝賀」　陸軍軍楽隊作曲
二、行進曲「太平洋」　海軍軍楽隊作曲
三、行進曲「紀元二千六百年」　海軍軍楽隊作曲

日本放送協会は、紀元二千六百年を記念して、前年 1939（昭和 14）年末に、《行進曲「紀元二千六百年」》の懸賞募集をおこなった。公募には水島数雄（1902（明治 35）年～1972（昭和 47）年）、深海善次（1904（明治 37）年～1997（平成 9）年）、そして前述の安倍盛の 3 人が入選した。

---

[71] CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 4 片山正見作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）のブックレットに詳しい。

水島数雄は陸軍軍楽隊出身で、《行進曲「希望に燃えて」》、《序曲「歓声」》などの楽曲を手がけたほか、終戦後は佼成吹奏楽団（現・東京佼成ウィンドオーケストラ）の指揮者を務めた[72]。

深海善次は海軍軍楽隊出身で、退役後に東京音楽学校講師、ビクター専属の作曲家として活動した[73]。作曲活動としては、《行進曲「空の荒鷲」》、《行進曲「青空高く」》、皇太子殿下御誕生奉祝演奏会のための《御降誕奉祝前奏曲》などの吹奏楽曲のほか、管弦楽曲なども手がけ、ラジオでも度々放送されていた。

また同放送では、入選曲以外に海軍軍楽隊員の斉藤丑松（1912（大正元）年～1994（平成6）年）作曲による《行進曲「紀元二千六百年」》も発表された。この楽曲は増田好生作詞、森儀八郎作曲の《奉祝国民歌「紀元二千六百年」》をトリオの旋律に使用した楽曲であった。この入選結果は、陸軍、海軍、そして民間の作曲家3人が揃った、あたかも挙国一致体制を象徴する出来事であろう。『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』では「何も各々特色あり、奉祝の熱意を曲に盛り上げた後世に残る名曲」[74]と評されている。この4曲は管楽研究会から楽譜が出版され、以後も度々放送が行われた。

（3）陸海軍の競作

前項では、陸軍・海軍・民間の領域からの作品が揃った機会を紹介したが、この頃の陸海軍では互いに競い合うかのように、対照的な楽曲を発表している。

・《愛国行進曲》と《行進曲「愛国」》

《行進曲「愛国」》については、谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲』[75]の記述を参考とする。

時代は遡るが、1937（昭和12）年に国民歌謡《愛国行進曲》の募集が行われ、歌詞は森川幸雄、そして楽曲は元海軍軍楽隊長の瀬戸口藤吉のものが選ばれた。内閣情報部では、この国民歌謡《愛国行進曲》を中間部に使用した行進曲を企画し、陸・海軍両軍楽隊に依頼した。

---

[72] 「船橋ヘルスセンターの水島数雄」、東京佼成ウィンドオーケストラ編『東京佼成ウィンドオーケストラ60年史』、東京：新潮社、2021年、28～29頁を参照。

[73] 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、566頁を参照。

[74] 管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、4頁。

[75] 谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲 ― 帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、東京：出版共同社、2015年。

当初、陸海軍は合同で行進曲を作ることとし、陸軍からは須摩洋朔、海軍からは鹿倉（斉藤）丑松が代表として選抜された。この後の展開については、谷村が両名から直接次のようなエピソードを聞いている。

> 須摩氏からは“鹿倉兵曹は控え目でいつも私を立てていました。”と伺ったが、齋藤氏は陸軍の先任者との合作では、どうしてもうまく作れず悩んでいたという。見かねた内藤隊長から“自分なりに作ってみたらどうだ！”と勧められ、密かに行進曲「観艦式」と同じスタイルで作曲し、隊長に提出した。
>
> 出来上がった合作の行進曲「愛國」が披露され、決定しかかった際“もう一曲あるので聞いてもらいたい！”という内藤隊長の発言で、その行進曲が演奏された。陸軍側としては、全く寝耳に水であった。
>
> 結果的に帝国軍楽隊作曲として発表されたのは、鹿倉兵曹が単独で作った方であった。陸軍軍楽隊としては当然面白くなく、後々まで恨みを買うことになってしまった。[76]

この記述の通り、斉藤が単独で作曲したものが帝国軍楽隊作曲の《行進曲「愛国」》として知られるようになるが、須摩も後に自身の《行進曲「愛国」》[77]を作曲している。須摩は戦後、トリオを変更し、名前を「美しき祖国」と改めた上で、『バンドジャーナル』1963（昭和 38）年 5 月号の付録に提供している。

斉藤（旧姓：鹿倉）丑松は海軍軍楽隊入隊後、東京音楽学校派遣を経ながら終戦時まで海軍軍楽隊に所属し、多くの軍歌、行進曲を残している[78]。特に一連の紀元二千六百年奉祝曲では、斉藤の名前が最も多く登場する。斉藤の他の作品としては、《行進曲「太平洋」》、東京放送会館落成記念曲の《行進曲「伸びゆく電波」》、《行進曲「大政翼賛」》などがある。

---

[76] 同前、119〜120 頁。

[77] 尚、《行進曲「愛国」》の名称の楽曲は 1937 年以前にも存在する。（陸軍軍楽隊 作曲、1935 年 1 月 11 日（放送）、演奏：陸軍軍楽隊など）

[78] CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 3 斉藤丑松作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）ブックレットに詳しい。

・《行進曲「大日本」》

1940（昭和 15）年、日本文化中央連盟[79]は、「皇紀二千六百年奉祝芸能祭」の制定曲として、陸海両軍楽隊に《行進曲「大日本」》を委嘱した[80]。海軍軍楽隊は斉藤丑松、陸軍軍楽隊は隊員の合同で作曲がおこなわれ、同年に相次いで発表されている。斉藤丑松作曲の方は、前述の通り大日本吹奏楽連盟の第 1 回大会の課題曲に制定された。また両曲の楽譜は、共益商社より出版された。

・建国祭本部委嘱の紀元二千六百年記念奉祝曲

紀元二千六百年の前年の 1939（昭和 14）年、建国祭本部は奉祝曲として、「陸軍に序曲、海軍にマーチ、音楽学校にオーヴァチュア」[81]を委嘱した。この制定過程には、当時の大日本吹奏楽連盟理事の伊藤隆一による以下のような発言がある。

> 建国際は既に一昨年当時の委員長の香坂閣下が先づ初の主唱者になられて、この紀元二千六百年を祝福する為に、建国祭本部として永久に百年の終まで残るような立派な音楽を一つ拵えたいということを云われましてそれを建国祭の役員委員等も協議に上せましてそれは大変結構なことである、是非とも建国祭本部として大日本紀元二千六百年を祝福して作った曲として永久に残そう、建国祭本部そのものは音楽とは何ら

---

79 文部省補助金と民間寄付金によって運営された文化団体で、皇紀二千六百年記念事業を行うことを主たる目的とし、1937（昭和 12）年 8 月 8 日に設立された財団法人。事業は紀元二千六百年以降も続けられ、1945（昭和 20）年 12 月 22 日に解散した。（参照：宮﨑刀史紀「皇紀二千六百年奉祝芸能祭に関する一考察」、『演劇研究センター紀要 I 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム 〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』第 1 巻、2003 年、238～226 頁。）

80 「…（中略）…陸海軍々楽隊は協力して吹奏楽行進曲をつくることに逸早くも相談一決した…（以下略）」（「皇紀二千六百年奉祝歌曲・舞踏創定準備進む」、日本文化中央連盟編『文化日本』3 巻 2 号、1939 年、12 頁。）、「洋楽部会 協議事項…（中略）…（六）吹奏楽（行進曲）約十五分程度のもの。曲名は行進曲『大日本』とする。」（「奉祝歌曲・舞踏相次いで部会を開始」、日本文化中央連盟編『文化日本』3 巻 3 号、1939 年、11 頁。

81 「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（下）」、『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』6 巻 3 号、1940 年、18 頁。

関係はないものでありますが、建国祭本部の事業として一つやろうということになったのであります。

先ずどういう方法でそういう曲を作るかということに付て、いろいろ協議の結果、懸賞募集しようというようなこともあったのでありますが、結局懸賞募集でなく、権威ある団体にお願いして一つ作曲して貰おうということになりまして、陸軍軍楽隊、海軍軍楽隊、それから宮内省楽部、東京音楽学校に御願いしようということになりまして、それぞれその団体の方にお集りを願って協議して結局陸軍軍楽隊と海軍軍楽隊にはそれぞれ専門である所のブラスバンドで出来るような曲をやって貰おう。それから音楽学校はオーケストラで出来るような曲、若くは合唱の曲をお願いしよう。それから宮内省は宮内省としての関係から、雅楽を基調とした一つのオーケストラ楽曲を作って貰おう、こういうことになったのでございます。[82]

この委嘱では、陸軍軍楽隊では水島数雄、須摩洋朔合作により《序曲「悠久」》、海軍軍楽隊では斉藤丑松により《行進曲「建国」》がそれぞれ作曲された。堀内敬三は、紀元二千六百年記念曲発表演奏会後、この 2 曲について次のように高い評価を与えている。

海軍々楽隊の大行進曲「建国」は壮麗な曲で故伊沢修二氏作曲の紀元節祝歌を中心に織り上げたものである。行進曲という形式自身の持つ本質的な力強さが良く現わされた雄潭な作品であり、演奏も高度に磨かれていた。

陸軍々楽隊の序曲「悠久」は吹奏楽曲としては最も困難な技巧を駆使して作られた作品で、雅楽調の応用に清新さがあり変化対照も適切であった。

…（中略）…

この三曲[83]はいづれも日本古典的要素を洋楽から学び得た構成方法によって慮理し、新しい様式を作ったもので模倣期を脱して創造期に進み入った作品であることを感じさせる。[84]

---

[82] 「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（下）」。『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』6 巻 3 号、1940 年、18〜19 頁。

[83] 他に橋本国彦作曲《交響曲第 1 番 ニ調》（後述）があった。

[84] 堀内敬三「模倣期を脱す 紀元二千六百年記念曲を聞く」、『月刊楽譜』29 巻 7 号、1940 年、61 頁。

この他には、『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』でも、前述の《行進曲「大日本」》とともに「吹奏楽曲として世界に誇るべき名曲である」[85]と評されている一方で、伊藤は「相当陸軍のも海軍のも曲としては可成りむづかしい曲」[86]で、「未熟なアマチュアの技術では容易にこれは演奏できない」[87]と指摘している。尚、他の楽曲に関しては、宮内省に関しては結果的に委嘱を行わず、東京音楽学校の委嘱曲は最終的に橋本国彦（1904（明治 37）年～1949（昭和 24）年）の《交響曲第 1 番 ニ調》が完成している。東京音楽学校教授であった橋本は、楽壇の指導的な立場として、戦時下において国民歌から純音楽まで多くの楽曲に携わった[88]。吹奏楽曲も例外ではなく、《行進曲「興亜」》、満洲国建国十周年記念曲の《満州大行進曲》、第五回報国音楽週間連合女子音楽体育大会用の《行進曲「若人よ！」》などを作曲している。

これ以外の陸海両軍による対照的な作品の発表としては、前述の 1942（昭和 17）年の《行進曲「大東亜戦争海軍の歌」》と《行進曲「大東亜戦争陸軍の歌」》、1943（昭和 18）年の「大東亜戦争二周年記念曲」である海軍軍楽隊作曲《行進曲「必勝」》と陸軍軍楽隊作曲《行進曲「前進」》などが、楽曲リストから確認できる。

---

85 『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、4 頁。

86 「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（下）」、『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』6 巻 3 号、1940 年、20 頁。

87 同上。

88 富樫康『日本の作曲家』、232～236 頁を参照。

（4）戦時下の放送

吹奏楽放送では、他の音楽放送と同様に同盟国以外の西洋作品を取り上げなくなる一方、吹奏楽放送自体の回数は年々増加しており[89]、結果として演奏曲目で取り上げられる邦人作品も急増することとなった。放送記録では、軍楽隊出身者によって編成された海洋吹奏楽団、星桜吹奏楽団などいくつかの吹奏楽専門団体が活動をおこなっている様子が見られる。

中でも、東京交響吹奏楽団・東京放送奏楽団で自作の吹奏楽曲を多数発表していた服部逸郎（1907（明治40）年〜1973（昭和48）年）の活動には注目すべきものがある。

服部は慶應義塾大学卒業後、ハワイ留学を経て作曲家・指揮者として活動し、戦後は「レイモンド服部」の別名で、吹奏楽、歌謡曲と幅広く活躍した[90]。白眉出版からは、「服部逸郎先生監修 東京交響吹奏楽団楽譜シリーズ」の一連の出版譜が発売されている。代表曲には《行進曲「挙国の感謝」》、《円舞曲「追想」》、《行進曲「大好きな兵隊さん」》、《組曲「朝鮮風景」》などがある。

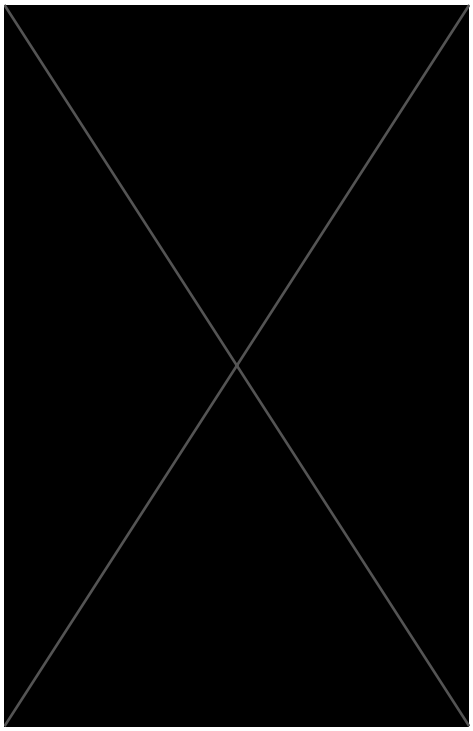


図 3.2　白眉楽譜雑誌広告[91]

ラジオ放送に関するこの他の事項としては、コンクールや各種記念演奏会の放送で、アマチュアの団体も多数登場している。また陸軍戸山学校生による喇叭隊や、扶桑喇叭鼓隊、東京喇叭鼓隊などによる喇叭鼓隊の放送が定期的に行われ、小森宗太郎指導の小森鼓楽隊に

---

89 洋楽放送記録掲載の吹奏楽放送数（吹奏楽、喇叭鼓隊、鼓笛隊の楽曲が放送されたもの。吹奏楽伴奏の軍歌のみの放送やアンサンブルの放送、喇叭隊の放送は除く。また海外団体の放送を含む。）：1937年・・52回、1938年・・50回、1939年・・63回、1940年・・83回、1941年・・165回と、（洋楽放送数自体が増加していることもあるが）吹奏楽がラジオで放送される機会は年々増加していることがわかる。

90 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、740頁を参照。

91 『吹奏楽』3巻3号、1943年、付録。

よる鼓笛隊の放送の様子も記録されており、聴衆はこのような放送に日常的に親しんでいた様子が窺える。

表 3.11　戦中期の喇叭隊の放送例

1943（昭和 18）年 10 月 14 日　喇叭
演奏：古田弘、南里文雄、伊藤恒久、河合三郎 国の鎮め、誓忠行進、英雄行進、勇気行進、分列行進

1943（昭和 18）年 10 月 28 日　喇叭
演奏：戸山学校乙種学生 （解説：山口常光） 敬礼譜、号音譜、命令号音、警報号音、行進譜（速歩行進、駈歩行進、戦捷行進）

表 3.12　戦中期の鼓笛隊の放送例

1941（昭和 16）年 11 月 1 日　鼓笛楽（金管四重奏と鼓笛隊の合同放送）
演奏： 小森鼓楽隊　小森宗太郎指揮 橋本鑒三郎、関口　董、鈴木忠規（以上トロンボーン）、佐藤倉平（チューバ） 鼓笛楽 維新行進曲（小森宗太郎編曲） 鉄の力（江口源吾作曲　小森宗太郎編曲） ドイツの鼓楽（小森宗太郎編曲） 鼓楽と金管合奏 遷歩と駈歩（小森宗太郎編曲） オーストリアの鼓楽（小森宗太郎編曲） 日の丸の旗行進曲（小森宗太郎作曲）

（5）民間での公募・献納運動

この時期になると、日本全体としての作曲活動の隆盛とともに、吹奏楽の分野でも非軍楽隊員による楽曲が多くみられるようになる。

・日本文化中央連盟芸能祭制定曲

日本文化中央連盟は、前述の《行進曲「大日本」》を委嘱した紀元二千六百年奉祝芸能祭以後も芸能祭を開催し、その度に吹奏楽曲を含む洋楽の新作を国内の作曲家に依頼した[92]。吹奏楽曲の委嘱曲は次の通り。

1942（昭和 17）年　白磯 巌：《行進曲「青春」》、弘田龍太郎：《舞曲》[93]
1943（昭和 18）年　安倍 盛：《行進曲「征空」》、清水 脩：《小組曲》[94]

これらの楽曲のうち、《行進曲「青春」》は放送での発表とレコードの発売[95]、および厚生雑誌『吹奏楽』2 巻 2 号の付録楽譜、《舞曲》は放送での発表は中止されたが、レコードが発売されており[96]、また《行進曲「征空」》、《小組曲》は放送と演奏会の記録[97]を確認している。作曲者は、退役海軍軍楽隊員の白磯以外は軍楽隊出身者ではない。

---

[92]「本連盟主催皇紀二千六百一年芸能祭の音楽部門に就ては、かねてより関係各方面で協議の上準備中であったが、此程本年の芸能祭音楽全般の企画を決定、現下高度国防国家建設期に於ける我国現代音楽の芸術的向上を期すことを主眼とし、他面明朗溌溂たる厚生音楽の普及を図ることとなり、左記の通り夫々特定の作曲家に作曲を委嘱した。…（以下略）」（「皇紀二千六百一年芸能祭制定音楽作曲委嘱」、日本文化連盟『文化日本』5 巻 8 号、1941 年、94 頁。）

[93]「文化中央連盟の芸能祭 洋楽新作完成」、『音楽文化新聞』第 1 号、1941 年、第 12 面。

[94]「日本文化中央連盟の洋楽曲二種決定」、『音楽文化新聞』第 33 号、1942 年、第 1 面。

[95] レコード（コロムビア 32050）では、《行進曲「艨艟」》となっている。

[96] 「コロムビア 32050」。

[97]「傷病軍人並戦力状況士気昂揚慰安会」（1942 年 6 月 27 日、神田共立講堂）（日本文化中央連盟『文化日本』7 巻 8 号、1942 年、63 頁。）での演奏を確認している。

弘田龍太郎（1892（明治 25）年〜1952（昭和 27）年）は東京音楽学校卒業後、ドイツ留学を経て東京音楽学校教授を務めた人物で、歌謡曲や童謡を多数手がけた[98]。コロムビアからは弘田作曲の吹奏楽曲のレコードがいくつか発売されている。

清水脩（1911（明治 44）年〜1986（昭和 61）年）は作曲活動の傍ら大日本産業報国会で厚生音楽の普及に従事し、戦後にはカワイ楽譜社長を務めた人物である[99]。

・日本音楽文化協会の献納運動

1941（昭和 16）年、大戦下の日本では、国策強化のため、既成の作曲団体・音楽団体は解散させられ、同年設立された日本音楽文化協会に組み込まれることとなった。日本音楽文化協会では様々なジャンルの楽曲の公募・献納を頻繁に行っていたが、吹奏楽曲関連としては次のものが挙げられる。

1942（昭和 17）年、日本音楽文化協会は、陸海軍への献納曲として吹奏楽曲を募集した。当時の応募規定は以下の通りであった。

> 吹奏楽曲献納
> 大東亜建設の為に日夜あらゆる困難を冒し身命を擲うって戦いつつある陸海軍の将兵に対し、我々日本人は常に無限の感謝と萬腔の信頼を感じているが、この我々の心情を披瀝し感謝の一端ともする為に、愛国の至誠送る吹奏楽曲を作曲して陸海軍へ献納することを作曲部で決定した。現代日本に生きた立派な、そして力強い吹奏楽曲を一つでも多く作上げる為にも是非全作曲部員欣然と、この運動に参加して頂き度いと思う。規定は——
> 一、士気を振揚させる吹奏楽曲、形式は任意。
> 一、編成は陸海軍軍楽隊の演奏に適すもの
> 一、演奏時間は三分位
> 一、応募締切は一月十日（ピアノスコアにても可）
> 一、演奏者著作権は献納のこと、但し出版の場合は考慮する
> 一、応募作品の送付先は本会作曲部宛

---

98 大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、216 頁。

99 富樫康『日本の作曲家』、167 頁。

尚お献納に先立って発表演奏が行われる予定である。[100]

この要項でも、瀬戸口作曲賞の時と同様ピアノスコアでの応募が可能となっている一方、陸海軍軍楽隊に適するようにとの指示がされ、それぞれの編成への配慮が見られる。この時の採用結果は以下の通りである[101]。

・陸軍軍楽隊献納楽曲

石田 一郎：《密林を征く》
市川 都志春：《吹奏楽のための詩曲「熱風」》
柿本 七郎：《総進軍》
八木 伝：《美しき行進曲》
山下 孝：《興亜の凱歌》、《聖戦の曲》

・海軍軍楽隊献納楽曲

安部 幸明：《行進曲「南十字星下を征く」》
石井 五郎：《我艦隊》
小倉 朗：《行進曲》
太田 忠：《東亜の巨歩》
小山 徳彦：《海ゆかば》
草川 信：《召されたる勇士》
須賀田 礒太郎：《逞しき前進》
田中 準：《東亜の黎明》
松平 頼則：《行進曲》
山下 孝：《悠遠なる光》、《荒鷲の凱歌》
山本 直忠：《堂々たる皇軍入城》

---

100 『音楽文化新聞』第 1 号、1942 年、第 5 面。

101 「吹奏楽曲十五曲を陸海軍へ献納」（『吹奏楽』2 巻 7 号、1942 年、72 頁）および「陸海軍へ作曲献納」（『音楽文化新聞』第 17 号、1942 年、第 10 面）を参照。

陸軍軍楽隊出身の八木伝（1908（明治 41）年？[102]～1984（昭和 59）年）以外は全て軍楽隊出身者ではなく、軍楽隊員関係以外の作曲家からまとまった数の楽曲が発表された最初期の出来事であった。

八木伝は、陸軍軍楽隊除隊後、日本大学にて大木正夫と堀内敬三に師事し、吹奏楽曲、管弦楽曲と幅広く作曲活動を展開した[103]。八木は、《里踊》（管弦楽組曲《民族舞曲》より抜粋）、《組曲「夏」》のほか、行進曲など多数の吹奏楽曲を作曲している。非軍楽隊員では、大沼哲に師事した石田一郎（1909（明治 42）年～1990（平成 2）年）[104]や、大沼哲の影響を受けた菅原明朗に師事した須賀田礒太郎（1907（明治 40）年～1952（昭和 27）年）、小倉朗（1916（大正 5）年～1990（平成 2）年）[105]らのような、軍楽隊から民間の作曲家への繋がりも見られる。また、草川信（1893（明治 26）年～1948（昭和 23）年）、市川都志春（1912（明治 45）年～1998（平成 10）年）、安部幸明（1911（明治 44）年～2006（平成 18）年）、柿本七朗（1909（明治 42）年～没年不明）ら東京音楽学校出身者の名前も多数見られる。

しかしながら、これらの楽曲は放送記録やレコードからはほとんど発見できず、八木伝の作品がレコードとして発売されていた[106]ということだけであった。

1943（昭和 18）年には、戦死した連合艦隊司令長官・山本五十六に因み、21 人の作曲家が管弦楽曲、吹奏楽曲、合唱曲を海軍に献納をおこなった。このうち、吹奏楽曲は以下の楽曲が集まった[107]。

深井 史郎：『英魂を送る（葬送行進曲）』
山田 耕筰：『連合艦隊行進曲』
江口 夜詩：『民族の誓い』
杉山 長谷夫：『英雄魂』

---

[102] 生年に複数記述あり（1907 年（明治 40）年（大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、共益商社、1941 年、239 頁。）、1908（明治 41）年（富樫康『日本の作曲家』、319 頁。）など）。

[103] 富樫康『日本の作曲家』、319～321 頁を参照。

[104] 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、54～55 頁を参照。

[105] 同前、353～354 頁を参照。

[106] 品番は「コロムビア 30231」。

[107] 『音楽文化新聞』第 52 号、1943 年、第 1 面。

深井史郎（1907（明治 40）年〜1959（昭和 34）年）と山田耕筰は非軍楽隊員、江口夜詩は海軍出身で流行歌の作曲家として活動中であり、杉山長谷夫（長谷雄）（1889（明治 22）年〜1952（昭和 27）年）は東京音楽学校出身で、当時は陸軍戸山学校嘱託であった。それぞれの楽曲については、山田の行進曲は 1932（昭和 7）年に軍人勅諭渙発五十年記念曲として作曲・演奏されていた楽曲であり、江口夜詩の作品は海軍軍楽隊による放送記録[108]が確認できた。

大戦末期の 1944（昭和 19）年には、「決戦楽曲」として、器楽曲、声楽曲など様々なジャンルを対象とした楽曲の公募が行われた[109]。実施目的は、『日本音楽文化協会会報』によると、「時局愈々緊迫化し空襲に対し万全の策を講ずべき時に当り非常時の演奏に適し国民の士気を彌が上にも昂揚すべき各種の決戦下楽曲を作製しその優秀なるものを銓衡するため当協会では、先頃より広く作曲家を動員し之が作曲を依嘱」[110]した、とある。提出された楽曲中、吹奏楽曲は次の通りである。

小吹奏楽曲（新作七曲）
石田 一郎：《うるわしき国序曲》
伊藤 昇：《美しき歓声》
佐藤 長助：《行進曲「勝利への途」》
仁木 他喜雄：《沈勇》
深海 善次：《序曲「悲壮」》
八木 伝：《舞曲「土の唄」》
渡辺 浦人：《必勝祈願太鼓》

108 1942 年 7 月 1 日、海軍軍楽隊。

109 『日本音楽文化協会会報』第 1 号、1944 年、第 4 面。

110 同上。

作曲者の中で、軍楽隊出身者は海軍出身の深海善次と伊藤昇（1903（明治 36）年～1993（平成 5）年)、陸軍出身の佐藤長助である。

伊藤昇は、海軍退役後に新交響楽団、コロナ・オーケストラなどに参加の傍ら、山田耕筰と菅原明朗に作曲を学び、当時は前衛的な作風で知られた作曲家である[111]。

仁木他喜雄（1901（明治 34）年～1958（昭和 33）年）はハタノ・オーケストラ、新交響楽団の団員を経て、コロムビア所属の作曲家であった[112]。渡辺浦人（1909（明治 42）年～1994（平成 6）年）は 1941（昭和 16）年の毎日音楽コンクールで《交響組曲「野人」》が 1 位を受賞し、国内外で非常に多く取り上げられるなど注目されていた人物である[113]。

上記の楽曲のうち、《沈勇》は放送[114]とレコード発売[115]、《必勝祈願太鼓》は放送[116]されているものの、やはりこれらの楽曲も、ほとんどが演奏記録を確認することができない。

「決戦楽曲」の吹奏楽曲は、この他に小吹奏楽のための編曲作品として、杉山長谷夫編曲の《愛国歌集第一編》、服部正（1908（明治 41）年～2008（平成 20）年）編曲の《愛国歌集第二編》、服部逸郎編《愛国歌集第三編》も提出されている。この「決戦楽曲」は募集に当たって、器楽曲は、小管弦楽曲、小吹奏楽曲、小合奏曲など、小編成が想定されており、戦局の悪化により活動の縮小を余儀なくされていた様子を推測できる。

このように、戦中期には軍楽隊出身者のみならず、純音楽から大衆音楽まで様々な作曲家が吹奏楽のための作品を書き、多くの作品が創出され始めていたことがわかる。これらの活動は、非軍楽隊員の音楽家による国家奉仕の形ではあるが、体制に協力しなければ満足な創作活動を展開できなかったという側面もあろう。いずれにせよ、時局柄楽曲名は戦時色を強く感じさせるものとなってしまったことが窺える。

---

111 細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、71～72 頁を参照。

112 同前、497～498 頁を参照。

113 同前、748 頁を参照。

114 1944 年 7 月 22 日、東京放送吹奏楽団。

115 品番は「ニッチク JX1225」。

116 1945 年 7 月 8 日、陸軍軍楽隊。

第 4 節　吹奏楽作品創作に関する議論

これまで見てきたように、「新吹奏楽運動」以後、日本人作曲家による楽曲が増加していく中で、日本人の吹奏楽曲創作への態度はどのように変化していったのか、同時代の人間はこれらの楽曲をどう感じていたのか、当時の雑誌記事から考察していく。

1934（昭和 9）年、国内で俄に吹奏楽活動が盛んになり始めた頃に『ブラスバンド』2 巻 1 号誌面上で特集された、「座談会『吹奏楽発展に関する諸問題』」の中で、吹奏楽曲の創作については次のような意見があった。発言者は当時東京音楽協会理事の堀内敬三、日本管楽器の中島惣策、作曲家の菅原明朗、京橋商業学校教諭の桑原武夫である。

楽譜の問題

堀内　そこで私、皆さんにお諮りしたいことがあるのです。殊に陸海軍の軍楽隊なり、先輩の人に特にお願いしたいのですが、実は陸軍の指揮［ママ］と海軍の指揮［ママ］とは軍楽隊の譜の書き方が違う。これにはどうも困る。それにアメリカあたりから輸入して来ると又譜の書き方が違っている。これは世界的統一は無理だが、何とか日本だけでも或る種の標準を拵えて、外国の譜を持って来ても直ぐ間に合うと言うような方法はありませんかしら？

…（中略）…

堀内　楽譜を買ってきても自分が書直さなければならぬ。それが出来ればいいが、出来ない人が多いだろうと思う。楽譜は全国を通じて統一して行きたい。

…（中略）…

作曲・編曲

中島　曲がなくて困るのです。菅原さんどうでしょう、素人向の極く易しいのから作曲して戴けませんかね。

菅原　少人数で、而も大人数に楽器を応用してもいいようなものですね。

桑原　広島の工業学校の校長が来てブラスバンドを作りたいというのです。それで私の所から持っていった曲は結果むづかしくていかぬ。私の方で編曲した―というと大

きいが―初等向のものから始められて大分効果を挙げて居るようです。…（中略）…戸山学校あたりに伺っても、吾々の学校の生徒のやるような易しい曲はない。

堀内　これはどうしても何とかしなければならぬ。程度は初等、中等、高等と分けて、初等は突ッかかりに出来るようなものを拵えなければ駄目だ。軍楽隊から譜を借りて来ても高等程度ばかりだからどうにも仕様がない。[117]

記事の内容からは、この時代には未だ入手できる楽曲が少なく、さらに各バンドの編成が統一されていないことが問題とされていたことがわかる。そして当時入手できる楽曲は難易度が高く、小編成かつ簡単な楽曲がまずは必要であると述べられている。

時代は下り、1940 年代の雑誌では、音楽関係者によって度々吹奏楽曲の創作活動についての自説が様々に展開された。ここで挙げられている意見をいくつか紹介しよう。

戦時体制下において、同盟国以外の海外作品が敵性音楽として演奏されなくなった結果、日本人の作品が求められるようになったことは前述のとおりである。この状況について堀内敬三は以下のように述べている。

吹奏楽曲は非常に求められているが、一向に良い曲が出ない。…（中略）…従来楽譜の多く輸入されていたアメリカが敵国になってしまえば其の方の曲は封じられるし、独伊からは譜が入って来ないし、止むを得ず昔ながらの序曲や歌劇抜萃曲や低級な描写曲などで曲目をうづめることになるが、それらに勇壮な曲が乏しいものだから行進奏楽などになると俞々当惑するのである。どうしても日本の作曲家に新しい吹奏楽曲を作って貰わねばならない。[118]

堀内は「吹奏楽で必要な曲は先づ第一に行進曲である」[119]とし、演奏会用行進曲や芸術曲ではなくて、実際の行進用に使える行進曲を、日本人作曲家に求めている。そして他のジャ

---

117 「座談会『吹奏楽発展に関する諸問題』」、『ブラスバンド』2 巻 1 号、1934 年、8〜9 頁。

118 堀内敬三「吹奏楽曲の作曲へ！」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年、4 頁。

119 同前、5 頁。

ンルの例も挙げながら、最後は「器楽曲はどこまでも形式のがっちりしたもの、内容の高いものではなくてはならない」[120]と締め括っている。

同じく広岡九一も、多方面の作曲家が行進曲を作るようになったが実用的ではない楽曲も多いとしながらも、芸術的志向が高まることには寧ろ期待を持っている。

> 斯の世紀に及んで行進曲を作る作曲者が二方面に別れている事も吹奏楽界向上に喜ばしい現象である。即ち元来は軍楽隊関係の作者ばかりであった者が日本楽界としての作曲家がこれに関心を以って行進曲を作り出して居るし、楽界外の後援的団体がこれに作品を依頼する等とすべての吹奏楽の品位を高められることにのみ向かって居ることは嬉しく…（中略）…これら新展開面の作者群で軍隊畑の人達は実際に吹奏楽の演奏者として幾年かの経験者として吹奏楽作曲上の約束とか習慣は充分に飲み込んで居る人達であるから、作る者の良し悪しは兎も角、演奏しやすかったり、力の表出が自然であったりして割合い安易に演奏が出来る様である。一方純音楽作家が作ったものは現在の所何んといっても実地経験が少い為めに机上での原理はそうであっても、多少誤差を生じることや艶やかな幻想にとらわれて行進曲に餘り望をかけ過ぎる傾向が表われて居るが、時日の問題であって漸次に要を得た好ましい、しかも芸術的薫りの高い日本行進曲が出来るだろうと期待をかけて居る者である。[121]

加えて、深海善次は、日本の純音楽の作曲家から発表される楽曲が、吹奏楽として実用的ではない理由として、従来の日本の作曲家は吹奏楽を管弦楽より価値の低いものと見なし、吹奏楽を学んで来なかったからだと指摘している。

> 深海　今迄の日本の作曲者はオーケストラばかり勉強して居りまして、吹奏楽は第二義的或は素人のものの如くに非常に軽んじていた傾向があり…（中略）…放送局あたりではそういう作曲家たちに対して、吹奏楽の仕事をして貰いたいというので、最近いろいろの方面に委嘱したりなんかして居りますが、その人達は吹奏楽が色々の点で管弦楽とは別種の制限を受けて居ることを餘り知らないで書いて居る為に、非常に名曲が

---

[120] 同前、6 頁。

[121] 広岡九一「日本の行進曲に就いて」、『吹奏楽』2 巻 3 号、1942 年、10〜12 頁。

出来たに拘らず、演奏して見ると調子の関係から旨く行かなかったというような点が目立って見えます。だから先づ第一に作曲者がもう少し吹奏楽というものについて関心を持つことが必要です。[122]

軍楽隊外の作品に期待が持たれる一方、深海の意見のような純音楽の作曲家の作品への批判も目立つ。例えば、前述の各献納運動で提出された吹奏楽曲に関しては、吹奏楽雑誌編集者の目黒三策、三戸知章から次の様な厳しい意見があった。

目黒　近頃放送局がいろいろ作曲者に頼んでマーチを書かしたり、音楽文化協会が陸海軍に献納するために作曲者に書かしたり、或いは日本文化中央連盟が一昨年あたりから吹奏楽曲を書かして居りますが、それ等の曲がどれも余りやられて居りませぬが、…（中略）…お客さんを考えて作られてないからか知れませぬね

三戸　もう一つの問題は、吹奏楽を軽蔑し、マーチを度外視して居った連中が今になって時局が斯うなったから、マーチを書き、吹奏楽曲を書き出した。ところがマーチのマの字も知らないような連中が慌てて作った所で良いものが出来る筈がない。その点非常に難しいですが、陸海軍には優秀な方がたくさん居られますし…（中略）…一つ大いに書いて戴きたいと思います。[123]

一方、吹奏楽の地位を向上し、吹奏楽曲をさらに芸術的に高めるためには、行進曲以外を創出すべきとの意見も見られる。作曲家の高木東六は次のように述べている。

今日の時代位、行進曲を必要とした時代はかつて吾が国には見られなかった。之等の行進曲の殆ど全部は勇壮活発のものである限り、その行進曲効果を挙げる為には最も適当なものが吹奏楽がよいとされているのは勿論のことである。
…（中略）…

---

122 「吹奏楽曲を語る ― 座談会」、『吹奏楽』3 巻 4 号、1943 年、12 頁。

123 「吹奏楽曲を語る ― 座談会」、『吹奏楽』3 巻 4 号、1943 年、16 頁。

併し吹奏楽は行進曲を演奏するためにのみある楽器ではないということを、あまり当然過ぎることではあるけれど、此の点を深く認識せねばならないと思う。

…（中略）…

われわれは吹奏楽の作曲者達に出来る限り、多くの交響楽、交響詩を作曲して欲しいと思う。作曲の如何によって吹奏楽の地位も左右されることは言うまでもあるまい。

…（中略）…

吹奏楽作曲は、われわれの知る限りに於て未だ本格的な芸術品は出ていないと見るべきだ。敢て交響楽とは言わぬ。組曲でよし、舞踏曲でよい、吾々は吹奏楽曲としての芸術品にまもなく接する時が来るような確にベートーヴェンの交響曲もよきアレンヂを俟って全楽章を通じて聴けるような状態を望むのは吾々ばかりではあるまい。[124]

また、伊藤昇は、吹奏楽曲の芸術性を高める一つの手段として、専門の作曲家への委嘱やコンクールを活用する方法を提案している。

吹奏楽曲は我国のもので行進曲以外に殆んど見るべきもののないのは、吹奏楽曲の為に、積極的に作曲奨励や促進運動が行われないのに原因があるようである。

…（中略）…

作曲促進の為には、吹奏楽連盟や日本音楽文化協会、日本放送協会あたりを主として各作曲家に委嘱し優良作品を得る様な手段を講ぜらるべきであると思う。また別途東日の音楽コンクールの作曲の部と管弦楽のみの作品だけでなしに吹奏楽に拠る作品を毎年加える様にしたいものである。

厚生運動に結びついた吹奏楽はもっと高い芸術的地位に迄進歩させなければならない。[125]

さらに、作曲家の守田正義は、行進曲を含めた様々なジャンルの純吹奏楽の創出には、まずは軍歌を芸術的に優れたものとするべきだと意見を述べている。

---

[124] 高木東六「吹奏楽と作曲（吹奏楽の作曲促進運動について）」、『吹奏楽』2 巻 5 号、1942 年、20〜21 頁。

[125] 伊藤昇「吹奏楽曲作曲促進の為めに」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年、22〜23 頁。

どこの国でも同様であるが吹奏楽の発達はいきなり純吹奏楽曲の発達に促されて行われたことはきわめて稀であって、多くの場合愛国的軍歌の唱和に伴なって発達して来たのである。従ってわが国にあっても吹奏楽の発達をはかるべく、真に音楽的にも好ましい軍歌の作曲がまづもって期待される。なぜなら吹奏楽の最も特徴ある効果は行進曲において発揮されるものだからである。

…（中略）…

しかしてその時こそ純吹奏楽曲として傑れた大行進曲を始め様々な種類の吹奏楽用序曲等々の作曲も促されるのである。[126]

また吹奏楽の編成が定まっておらず、出版楽譜で統一された規格が無いことに対する問題も挙げられている。

管弦楽の総譜は縮刷版がいくらでも手に入る。…（中略）…ところが吹奏楽の総譜は縮刷版が出ていないのみならず、大判の譜でも総譜の付いていないのが多い。また総譜を手に入れたところでそれをレコードやラジオとくらべると楽器法がちがっているのが通例である。それは吹奏楽にいろいろの型があって国によって編成がちがうので編曲のしかたが一定しないからである。[127]

この出版楽譜と編成の不統一の問題について、次の記事での議論の様子からは、当時から広く問題視され、現場が混乱している状況がわかる。

トランペットの問題（性能）

三戸　トランペットの問題ですが、最近の曲にはコルネット一番二番或は三番と別にトランペットというパートを入れて編曲作曲しておられるのが大分あります。…（中略）…今日のトランペットとコルネットは性能に於て全然変りがないのであるから、別にトランペットというパートを作る必要はないぢゃないかと思います。

126 守田正義「吹奏楽と作曲」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年、20 頁。

127 堀内敬三「吹奏楽曲の作曲へ！」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年、7 頁。

堀内　素人の吹奏楽団は作る必要はないと思います。唯陸軍の軍楽隊はコルネットの外にトランペットを持って居ります。

…（中略）…

実音移調式の可否

三戸　それから低音楽器の楽譜の問題ですが、吹奏楽連盟、報国会というような民間の団体に於て一刻も早く統一して貰いたい。……（以下略）

深海　ところが軍を別にすると、軍でマーチみたいな曲が盛に出るでしょう…

三戸　軍は実音でやっても移調でもかまわない、民間でやる時には移調なり実音に統一されたものにして出版するようにすれば

…（中略）…

目黒　連盟ができてから六七年になりますが、この移調式か実音式かと言うことは最初から問題になって居り統一しなければいかぬ問題になって居りますし、私共のような楽譜出版社としても困って居ります。[128]

以上をまとめると、1930 年代の「新吹奏楽運動」以後の約 10 年で、吹奏楽曲に求められるものが、難易度が易しく、指導者、演奏者ともに取り組みやすいものから、より深い音楽的内容を備えるものへ変化した。しかしながら、規格化した編成が存在していないことや、そのことから生じる楽譜の出版の障害は依然として解決していないことがわかる。またこれまでの雑誌記事のように、特に 1940 年代以降は、吹奏楽曲創作に関して様々な問題意識のもと活発な意見交換が行われる段階になった。楽曲レパートリーは依然として行進曲が大多数であったが、より芸術性を志向した創作の動きの萌芽も見られるようになる。このように戦時下で発展を始めた吹奏楽曲創作の動きは、1945（昭和 20）年の終戦とともに一旦の中断を余儀なくされたのである。

128 「吹奏楽曲を語る――座談会」、『吹奏楽』3 巻 4 号、1943 年、20～21 頁。

第 4 章　吹奏楽曲の作曲手法

これまでの章では、楽曲リストをもとに、第二次世界大戦以前に作曲された吹奏楽曲の全体を俯瞰してきた。ここで、いくつか実際の楽曲を取り上げて分析を行う。

第 1 節では、第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽曲の主要形式である「行進曲」について、特に第二次世界大戦以前のもの特有の様式を考察する。第 2 節では、第 1 節の様式以外の楽曲を例示する。第 3 節では、喇叭鼓隊編成の楽曲の構造と、喇叭鼓隊・ブラスバンド合同編成用の楽曲の分析を行う。第 4 節では、第 2 章で述べた編成の多様性について、実際の楽曲の分析を通して実態を明らかにする。

本章で使用する楽譜は、筆者個人で所蔵しているものに加えて、国会図書館、日本近代音楽館所蔵のもの、また海上自衛隊東京音楽隊よりご提供いただいたものを使用した。また大沼哲の楽譜の一部は、宮内孝子氏（大沼哲ご子女）よりご提供いただいた。尚、今回の楽譜の調査にあたっては、新型コロナウィルス（COVID-19）の影響で施設への入館が制限されるなどの理由により、当初予定していたよりも限定的なものとなってしまった。そのため、今回の楽曲分析は、筆者が入手することができた資料の中で調査できる範囲に留めることとし、より詳しい調査は次の機会を待ちたい。本分析で使用した楽譜は次の通り。

①第二次世界大戦以前のもの
・自筆譜または手稿譜
・出版楽譜
・雑誌付録楽譜

②第二次世界大戦以後のもの
・出版楽譜
・雑誌付録楽譜

当時の吹奏楽譜の出版社としては、『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』に掲載の広告から、管楽研究会、共益商社、白眉出版、バンドの友社、ヲグラ楽譜などが挙げられる。

当時の吹奏楽関連雑誌には、管楽研究会発行の『ブラスバンド』、『ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』、『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』、『吹奏楽月報』、およびバンドの友社発行の『バンドの友』、そして戦時体制下での 2 社の合併誌である厚生音楽雑誌『吹奏楽』があり[1]、楽譜が付録としてつけられることがあった。付録楽譜はブラスバンドあるいは喇叭鼓隊編成で、総譜が付けられることは少なく、原則パート譜のみの掲載であった。また、『バンドの友』の付録楽譜はさらに小編成向けに簡易に編曲されている[2]。

また、一部で第二次世界大戦後に復刊された楽譜や、改題されて再発表された楽曲（第 5 章で詳述）の楽譜も使用した。さらに、楽譜が入手できないものについては、必要に応じてレコード録音を参考に用いた。

尚、本章の譜例は手稿譜、自筆譜、出版譜を元に筆者が作成した。また楽器名は原則作成元の楽譜に準拠した。

---

[1] 吹奏楽雑誌の変遷については、目黒三策による次の記述がある。「吹奏楽の専門誌というのは、昭和八年に自分が創刊した季刊『ブラスバンド』が最初であるから、今日まで丁度十年生存を続けたことになる。最初の頃は季刊のブラスバンドと同時に報導を主にした『ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』という十六頁の月刊雑誌も併せ発行していた。季刊のものは五年目に休刊したが、ニュースは中頃『吹奏楽』となり、『吹奏楽月報』と改題し、昭和十六年十二月に『バンドの友』と合併して本誌に継承されたのである。」目黒三策「思い出すまゝ」、『吹奏楽』3 巻 10 号、1943 年、21 頁。

[2] 例えば、『バンドの友』4 巻 6 号の付録楽譜『太平洋行進曲』には、次のような解説がある。「我が社出版部では海軍々楽隊の編曲に基づき、更にアマチュア用に補筆して、新刊タナベ・バンド楽譜として刊行いたしますが、これはコルネットに於てイ長調のものであり、いさゝか、一般アマチュアにむづかしいと思われますので、更に一段とやさしくしたト長調のものを本誌特別附録として、掲載しました。」（31 頁。）

第 1 節　行進曲の楽曲傾向

第 1 章の楽曲リストの分析の通り、第二次世界大戦以前の吹奏楽で最も多く作曲されていた楽曲ジャンルは行進曲であった。しかしながら、次章で詳述する通り、第二次世界大戦後の日本において、第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽曲の否定に用いられたのも、これら行進曲であった。この「行進曲」について、楽曲リストを再度用いてその傾向を分析した結果は次の通り。

題名：

楽曲リストからも分かる通り、軍楽隊関係者による楽曲は、軍隊関連の内容や国威発揚を感じさせる題名の楽曲が多い。また、戦時中には民間でも多く戦争関連の楽曲が作曲されている。また「愛国」、「歓声」、「建国」などは、同名の楽曲も多く作成されている。

形式：

楽曲リストをもとに、楽譜や録音、放送記録の調査を行なった結果、器楽曲としての行進曲には次のパターンがあることが明らかとなった。

1) オリジナルの器楽曲として全曲が作られたもの。
楽曲例：『行進曲「大日本」』、『行進曲「立派な兵隊」』など

2) 題名に関連する既存の楽曲（軍歌、国民歌など）をトリオ等、曲中に使用したもの[3]。

---

[3] この形態の行進曲の作曲者名の表記について、谷村政次郎は次のように記述している。
「海軍軍楽隊では、他の人の作曲になる軍歌などをトリオにして行進曲を作曲した場合は、編作曲、自身の作品を使って行進曲にした場合は作編曲と呼んで区別していた。」、谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲―帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、116 頁。このことから、行進曲の作曲者と原曲の作曲者は、必ずしも一致しない。当時の放送記録を見ると、海軍以外の楽曲にもこの原則が適用されていることがわかる。尚、本記述は筆者の谷村氏への聞き取りによると、片山正見の発言によるものであるとのこと。しかしながら、当時の記録では、同一の楽曲であっても「作曲」、「編曲」、「作編曲」、「編作曲」と表記が混在している場合があるため、本章では器楽曲として改めて作曲されたものについては、全て「作曲」に統一した。

ここでは、特に 2)のパターンの行進曲を詳しく取り上げることとする。この形態の行進曲で使用（引用）されている既存の楽曲は、作品の成立経緯に基づき次の種類がある。

・吹奏楽曲の新規作曲に際し、題材に関係する象徴的な楽曲を引用したもの。

楽曲例）瀬戸口藤吉作曲《行進曲「軍艦」》など

小学唱歌掲載の鳥山啓の歌詞に瀬戸口藤吉が新たに作曲した軍歌「軍艦」の主題を主部に、儀制曲「海行カハ」の主題をトリオに使用した楽曲[4]。　　など

・レコード販売用の楽曲（レコードの片面を原曲の歌、もう一方の面を吹奏楽曲とすることが多い)。

楽曲例）陸軍軍楽隊作曲《行進曲「闘う東条首相」》

小田俊彦作詞、古関裕而作曲《闘う東条首相》を曲中に使用した楽曲。同曲のレコードの片面に収録[5]。　　など

・記念曲として作られた楽曲（この場合の行進曲は、記念行事等で原曲と合わせて披露されることが多い)。

楽曲例）海軍軍楽隊（斎藤丑松）作曲《行進曲「紀元二千六百年」》

紀元二千六百年奉祝会及び日本放送協会制定の増田好生作詞、森儀八郎作曲の奉祝国民歌《紀元二千六百年》をトリオに使用した楽曲[6]。第 3 章で記述した通り、1940（昭和 15）年 1 月 1 日の、紀元二千六百年を記念した懸賞募集吹奏楽行進曲入選三曲発表放送で発表された。　　など

---

[4] 参考 CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 1 瀬戸口藤吉作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

[5] 収録レコードの品番は「ニッチク 100842」。

[6] 参考 CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 3 斉藤丑松作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

さらに、2)のパターンの楽曲の構造は、次の 3 通りに分類することができる。

表 4.1　行進曲の構造[7]

a) 中間部に軍歌等の旋律を使用し、前後に新規部分を追加した楽曲

主部（新規作曲）	中間部（歌）	主部（新規作曲）

b) 主部に軍歌等の旋律を使用し、中間部を新規追加した楽曲

主部（歌）	中間部（新規作曲）	主部（歌）

c) 主部、中間部に異なる楽曲の旋律を使用した楽曲

主部（歌 1）	中間部（歌 2）	主部（歌 1）

谷村政次郎は、海軍式の行進曲として、軍歌《観艦式》と江口源吾作曲《行進曲「観艦式」》の例を挙げている。

> この歌をトリオ（中間部）に入れて行進曲「観艦式」を作曲したのは江口源吾（大正八年入団）であった。当時海軍軍楽隊の作曲のエースとして将来を嘱望されていたが、昭和六年に退役して歌謡界に転じ、江口夜詩の名前で多くの名曲を残している。トリオ（中間部）は、祝砲が轟くようなリズムで入り、「観艦式」のメロディーと並行して、トランペットによる喇叭譜「君カ代」が巧みに組み込まれている。このスタイルが、以後の軍歌を主題とした海軍行進曲のモデルとなっている。それ以前は、行進曲「軍艦」のように、前奏の後軍歌が繰り返され、トリオに「海ゆかば」のような旋律が流れ、後奏に入るようなものもあったが、一定の形式は確立されていなかった。[8]

このことからは、第二次世界大戦期頃には、ある程度様式を意識して行進曲が作曲されていたことがわかる。ここからは、実際の楽曲をこの構造パターンに基づき詳しく分析していく。

---

[7] 中間部後の主部の再現は省略されることもある。

[8] 谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲―帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、92～93 頁。

（1）中間部に軍歌等の旋律を使用し、前後に新規部分を追加した楽曲例

①海軍軍楽隊 作曲 《行進曲「小国民進軍」》[9]
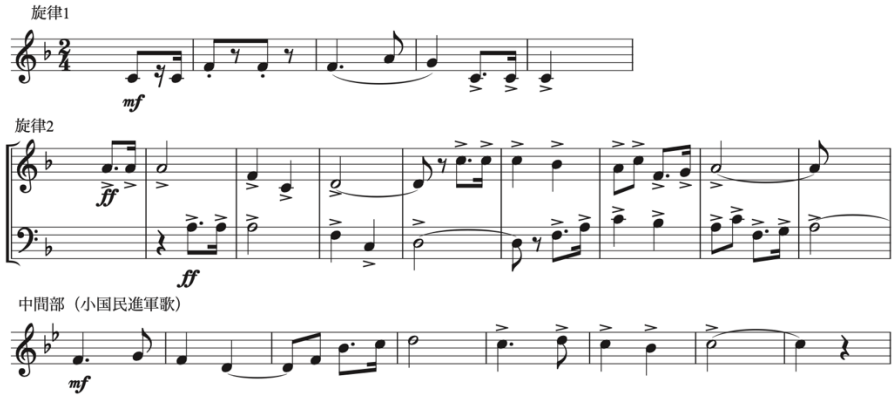
2/4 拍子、ヘ長調（中間部：変ロ長調）

表 4.2 《行進曲「小国民進軍」》の楽曲構造

(Fine) D.C.				
序奏	主部 A	B	（経過句）	中間部 （小国民進軍歌）
1～4	5～21	22～38	39～40	41～73
	繰り返しあり	繰り返しあり		繰り返しあり

行進曲の作曲者名は明らかになっていない。長坂徳治作詞、佐々木すぐる作曲の小国民進軍歌が楽曲中に使用されている。主部の A（第 1 の旋律）、B（ポリフォニックな第 2 の旋律）がそれぞれ反復し、中間部の軍歌へ続き主部へと戻る【譜例 4.1】、典型的な三部形式である。主部の 2 つの旋律と中間部の軍歌の間に関連性は見られない。

【譜例 4.1】



[9] 『吹奏楽』3 巻 3 号（1943 年）付録楽譜と、レコード（ニッチク 100655）を分析に使用。

②古関裕而 作曲 《行進曲「空征く日本」》[10]

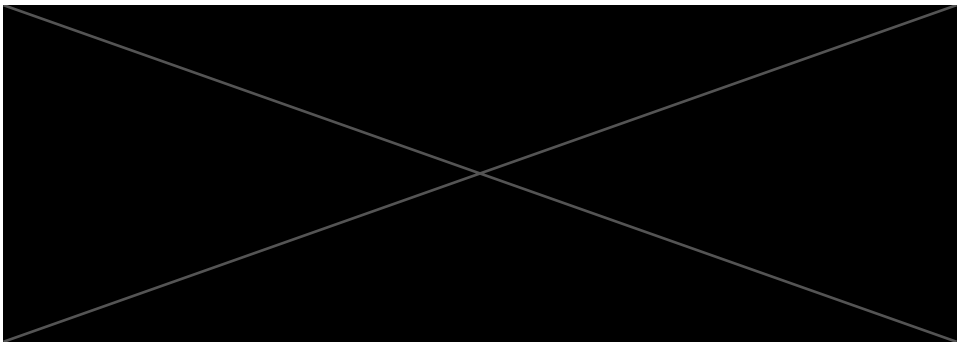
2/4 拍子、ハ長調（中間部：ヘ長調）。

表 4.3 《行進曲「空征く日本」》の楽曲構造

		(Fine)		D.C.
序奏	主部 A	B	（経過句）	中間部 （空征く日本）
1～12	13～28	29～46	47～50	51～84
	繰り返しあり	繰り返しあり		繰り返しあり

軍楽隊外の作曲家によっても同様に、軍歌を引用した形式による作品が作られていた。野村俊夫作詩、古関裕而作曲の日本蓄音器レコード文化協会制定歌《空征く日本》のレコードの片面に収録された楽曲で、同曲を中間部に使用した行進曲である。尚、本行進曲は、原曲の作曲者である古関自身が手がけている[11]。本楽曲も主部と、中間部の軍歌との旋律的な関連性は希薄だが、中間部の高音部で序奏のフレーズを使用することで、楽曲としての統一が図られている【譜例 4.2】。

【譜例 4.2】



[10] 『吹奏楽』2 巻 10 号（1942 年）付録楽譜と、レコード（コロムビア 100608）を分析に使用。

[11] 尚、片面の歌は奥山貞吉編曲である。

③橋本国彦 作曲 《行進曲「興亜」》[12]

2/4 拍子（中間部は 4/4 拍子）、ヘ長調（中間部は変ロ長調）。
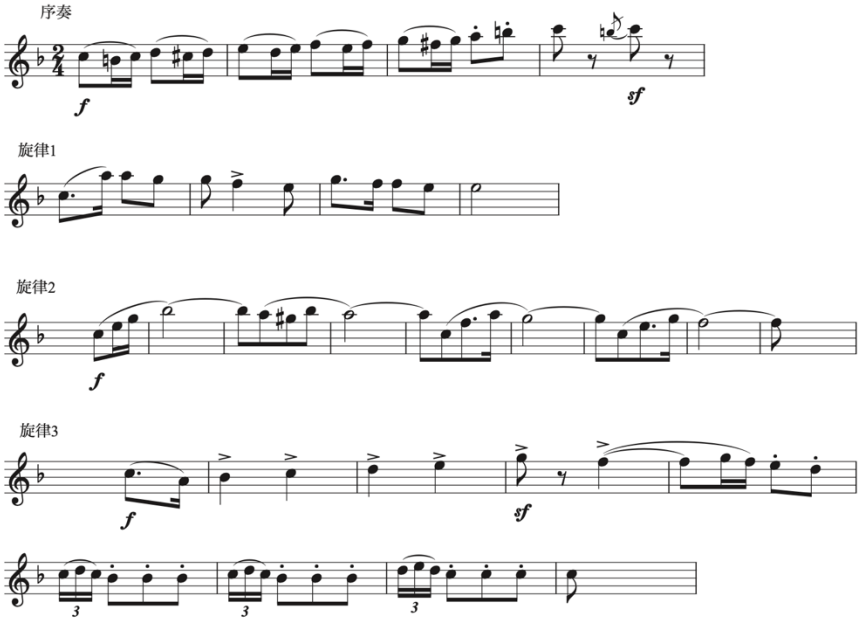
表 4.4 《行進曲「興亜」》の楽曲構造

			(Fine)		D.C.
序奏	主部 A	B	C	（経過句）	中間部 （興亜行進曲）
1～4	5～21	22～37	38～54	55～59	60～75
	繰り返しあり	繰り返しあり			繰り返しあり

1940（昭和 15）年に朝日新聞が懸賞募集した、「支那事変 3 周年記念歌」の《興亜行進曲》（作詞：今沢ふきこ、作曲：福井文彦）を中間部に使用した行進曲。
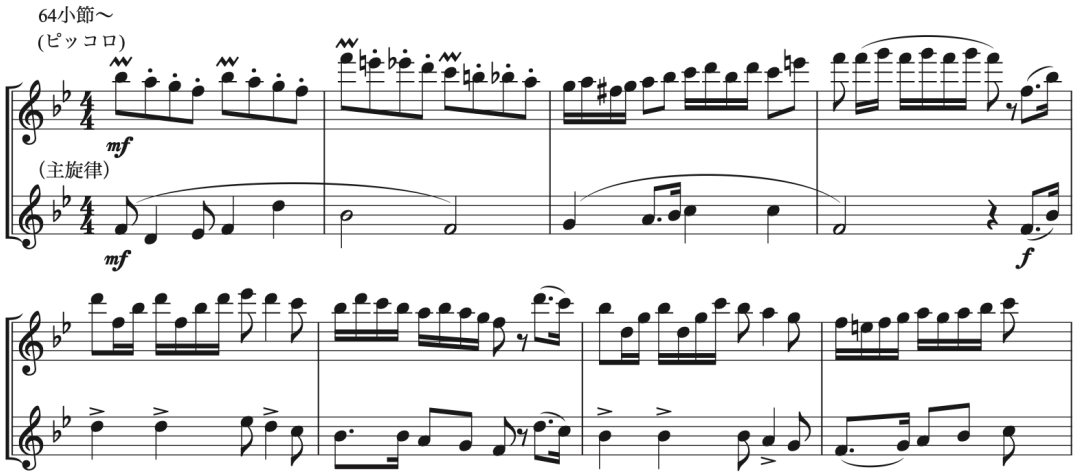
属調の長音階を装飾したシンプルな序奏に始まり、主部では順次進行を基調とした 3 つの旋律が現れる【譜例 4.3】。中間部の繰り返し時には、ピッコロの対旋律が加わるが、この旋律は《興亜行進曲》の主題を装飾したものである【譜例 4.4】。

【譜例 4.3】



[12] 共益商社版の楽譜と、レコード録音（CD『戦前日本の名行進曲集～陸軍軍楽隊篇～』（東京：キングレコード、1995 年）に収録のポリドール（P-5044）のレコード復刻音源）を分析に使用した。

【譜例 4.4】



(2) 主部に軍歌等の旋律を使用し、中間部を新規追加した楽曲例

この構造の楽曲は少なく、今回の調査で確定できたのは下記の楽曲のみであった。

飯田信夫作曲の《行進曲「アジアの力」》[13]は、日本放送協会選定の『興亜大行進曲「アジヤの力」』（江口隼人作詞、飯田信夫作曲）を主部とし、中間部が加えられた行進曲で、前述の通り 1942（昭和 17）年の第 3 回大日本吹奏楽大会の吹奏楽団部門の舞台演奏課題曲として使用された。

佐藤長助作曲の《行進曲「日本行軍歌」》は、軍歌《日本行軍歌》（時雨音羽作詞、陸軍軍楽隊作曲）のレコード[14]片面に収録された楽曲で、同曲を主部に使用し、中間部を新たに加えた行進曲である。

---

[13] 参考 CD：『進め!荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集』、東京：キングレコード、1992 年。尚、歌唱版が収録されたレコード（ビクターA-4270）の片面には、吹奏楽版と同様の構成の管弦楽版（日本ビクター管弦楽団、飯田信夫編曲、指揮）が収録されている。

[14] 品番は「キングレコード と 346」。

(3) 主部、中間部に異なる楽曲の旋律を使用した楽曲例

陸軍軍楽隊（須摩洋朔） 作曲 《行進曲「愛馬進軍曲」》[15]

2/4 拍子（主部途中に 6/8 拍子）、ヘ長調（中間部：ニ短調）。

【表 4.5】《行進曲「愛馬」》の楽曲構造

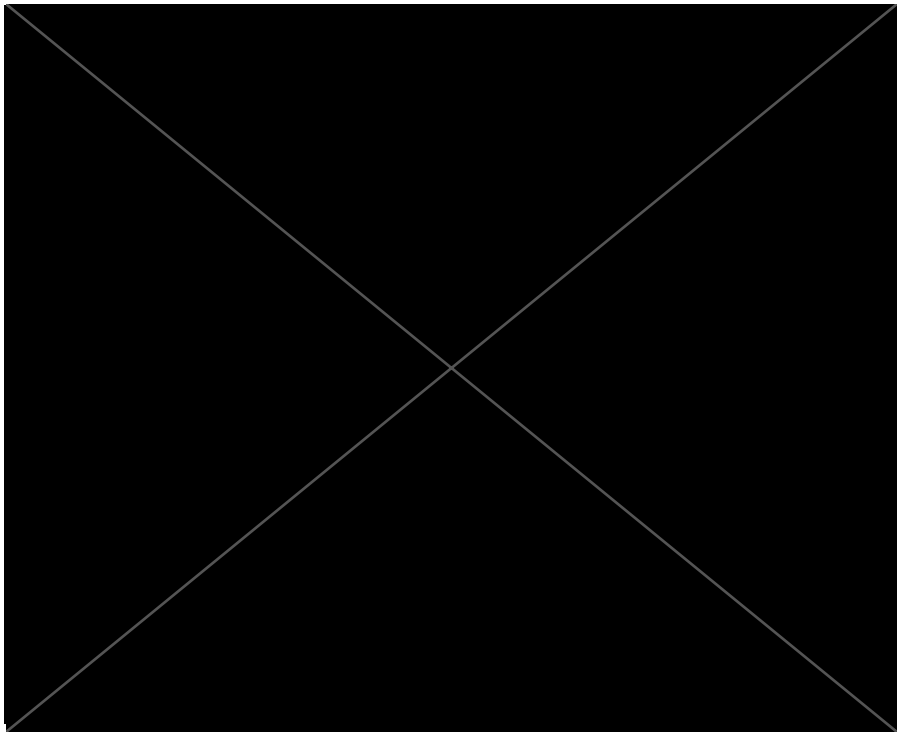
			(Fine)		D.C.
序奏	主部 A 愛馬進軍歌	B	A 愛馬進軍歌	（経過句）	中間部 須摩洋朔作曲の 愛馬進軍歌
1～4	5～21	22～33	34～49	50～57	58～105
	繰り返しあり	繰り返しあり			

陸軍省馬政課、農政省馬政局による公募の当選作品、久保井信夫作詞、新城正一作曲「愛馬進軍歌」を主部に、トリオに須摩自身の応募作品の旋律を使用した行進曲である。

主部は新城正一の《愛馬進軍歌》を主題とした三部形式であり、中間部では平行調に転調し、須摩洋朔の《愛馬進軍歌》を主題とした短調の行進曲となる【譜例 4.5】。

[15] 本分析では、戦後、『バンドジャーナル』1966（昭和 41）年 11 月号の付録として再録された楽譜を使用した。参考 CD は次の通り：『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 6 須摩洋朔作品集』（東京：日本クラウン、1995 年）、『戦前日本の名行進曲集～陸軍軍楽隊篇～』（東京：キングレコード、1995 年）。

【譜例 4.5】



以上のように、第二次世界大戦以前の、特に戦中期の行進曲は、戦争や軍隊に関連する題材であるのみならず、軍歌やそれに準ずる楽曲の旋律自体を、曲中に引用する場合が多々あった。筆者作成の楽曲リストの行進曲全 522 曲のうち、軍歌等の他の楽曲からの引用が明らかである楽曲は 114 曲[16]である。このことに関連して、大沼哲は「行進曲と軍歌の作曲」[17]の中で、器楽曲の行進曲の旋律の作曲法について軍歌の曲調を応用して論じている。大沼のこの論説や、これまでの楽曲例を見ても、行進曲と軍歌の創作が密接であったことは明らかである。

---

[16] 確認は次の方法で行った。①楽譜、②レコード、CD 等の音源、③放送記録からの確認（放送記録では、原曲の歌の作曲者名と行進曲の作曲者名が、それぞれ作曲・編曲として記載されている場合があり、楽曲中に軍歌等が使用されていることが明らかなもの）この他に、音源を確認することはできなかったが、レコード片面が行進曲と同名の歌曲であり、行進曲中に旋律が使用されている可能性がある楽曲が 19 曲ある。

[17] 大沼哲「行進曲と軍歌の作曲」、北原鉄雄編『管楽器・打楽器の実技』、アルス、1936 年、第 7 巻、243～268 頁。（アルス音楽大講座 7）

第 2 節　その他の様式

前章のように、楽曲中に軍歌や唱歌を含み、行進演奏でも使用することができた「実用性の高い」行進曲が主要楽曲であった中で、機会音楽として作曲された楽曲もある。

(1) 大沼 哲 作曲 《奉祝前奏曲》[18]

概説：

大沼哲作曲の《奉祝前奏曲》(《皇太子殿下御成婚奉祝前奏曲》)は、第 3 章で紹介した通り、大沼が 1924（大正 13）年の皇太子裕仁殿下（昭和天皇）と久邇宮良子女王の「御成婚饗宴の儀」のために委嘱をうけて作曲をした楽曲である。

大沼は、当初祝宴曲として弦楽四重奏曲に着手していたが[19]、式典の直前に宮内省からの通達により急遽吹奏楽曲を作ることとなった。

初演は 1924（大正 13）年 6 月 3～4 日に開かれた宮中豊明殿の「饗宴の儀」の中で、陸軍軍楽隊（指揮：春日嘉藤治楽長）の演奏で行われた[20]。初演直後の 6 月 5 日には、日比谷公園野外音楽堂で開催された「摂政宮殿下御成婚奉祝大音楽会」で、陸軍軍楽隊により一般への公開演奏がなされた[21]。この楽曲は、昭和期以前の楽曲には珍しい、日本人によって作曲された、行進曲以外の形式の吹奏楽曲であるだけではなく、楽曲構造の緻密さや長さにおいても、同時代において他に類を見ない楽曲である。

---

[18] 宮内孝子氏所蔵の手稿譜を分析に使用した。

[19] 宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』、東京：音楽之友社、1993 年、217～218 頁。

[20] 同前、221 頁。

[21] 谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラムー日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、191 頁。

編成：

表 4.6

《奉祝前奏曲》（大沼 哲）
Petite Flûte ut
Grand Flûte ut
Hautbois ut (div.2)
Petite Clarinette mi♭ (div.2)
Grand Clarinette si♭ 1,2,3 (div.2)
Sax. Alto mi♭ (div.2)
Sax. Tènor si♭
Sax. Baryton mi♭
Basson ut (div.2)
Piston si♭ 1,2
Bugle si♭ 1,2
Trompette si♭
Alto mi♭ 1,2 (div.3)**
Cor mi♭ (div.2)
Trombone ut 1,2,3
Baryton si♭
Basse si♭
C. Basse mi♭
C. Basse si♭
Caisse

まずは、スコアの編成を示す（表 4.6)。この編成表からは、使用楽器の種類の多さに加え、各パート divisi で声部が分けられ、当時としてはかなりの大編成が想定されていたことが分かる。《行進曲「日章旗」》と同様、木管低音楽器が少なく（スコアでは、バリトン・サックスとバスーンが木管楽器の最下段に位置している)、金管楽器の種類が豊富である。金管楽器に注目すると、サクソルン属の楽器が各音域に配置されており、実質的に木管楽器、金管楽器、サクソルン属、打楽器の 4 セクションとしての運用が可能となっている。尚、「Baryton」、「Basse」、「C. Basse　si♭」は B♭管の移調表記である。打楽器はスネア・ドラム、バス・ドラム、シンバルの軍楽隊として最低限の編成であり、シンバルはバス・ドラムのパートに併記されている[22]。

楽曲冒頭の第一主題部は、サクソルン属とサクソフォーンを主体とした音響となっている。サクソフォーンは、木管楽器としての性格に加えて、金管楽器との音色的親和性から、サクソルン属と共に用いられるか、このようにサクソルン属と木管楽器の中立ちとして機能する様子も見られる【付録資料 2-別冊譜例 1】。

楽器数の多さを生かすと、第一主題変奏部（第 36 小節～）のような、大胆な声部の書法も可能となる【別冊譜例 2】。ここでは、吹奏楽全体が、木管中低音域、金管中低音域の旋律部、金管高音域のファンファーレ、木管高音域と金管楽器中音域（Alto, Cor）の伴奏形の 3 声部に、バランス良く分けられている。金管高音域は、「Piston」、「Bugle」が重複して使用されることが多いが、「Piston」は主要な旋律楽器として、「Bugle」はサクソルン・セクションとしても利用されている。「Trompette」は、専ら和声体で「Piston」、「Bugle」声部の下声部、または「Alto」、「Cor」声部の上声部の補助に当たっている【付録資料 2-別冊譜例 2】【付録資料 2-別冊譜例 3】。

「Alto」、「Cor」は重複して同一の内容を演奏することが多いが、和声の声部の拡張や、2 声部の旋律を演奏する場合もある。いずれにせよ両方の楽器が独立した用例は少なく、また

[22] このようにバス・ドラムパートに併記することは他の楽曲にも見られるが、その際は符頭を×印やダイヤ型などに変更して表記している。尚、バス・ドラムとシンバルの演奏方法については、第 2 章第 1 節の軍楽隊の編成の項を参照。

伴奏楽器としての使用が主である。一方、「Trombone」は、行進曲の伴奏楽器的な用法と異なり、旋律楽器としての使用が目立つ。「Baryton」は「Alto」、「Cor」の下声部の増強のほか、金管中音域の旋律楽器としても機能している。「Basse」は「Baryton」とともに中音域の旋律を担当するか、「C.Basse」と共に、または独立して金管の低音域を担っている。

このように、各音域ごとの楽器数が充実しているため、（132 小節～）のような「余白のある」構造であっても、オーケストレーションによって貧弱な音響にならず楽曲の性格を損なうことはない【付録資料 2-別冊譜例 4】。一方、再現部（357 小節～）のような全体合奏部では、声部の多さを生かして、各楽器群に異なる役割を与えている【付録資料 2-別冊譜例 5】。このように、様々な楽器の組み合わせによる音色の多彩さは、この編成の特徴となっている。

楽曲構造：

手稿譜の裏表紙に記載されている楽曲の解説を以下に引用する。
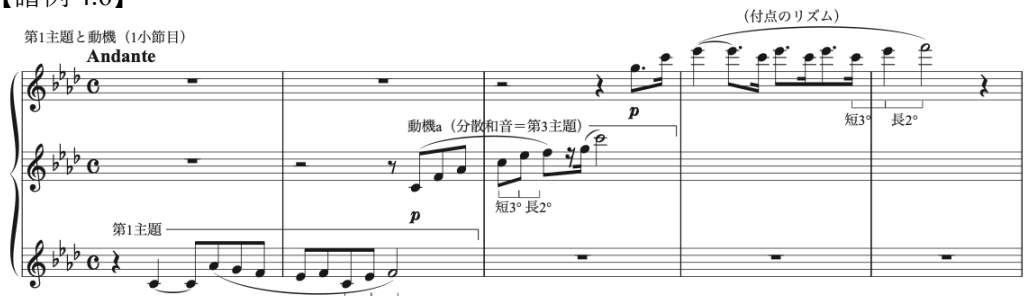
> 本曲ノ始メ静カナル部分ハ御婚約ヲ拝聞シタル国民ノ悦ニシテ此第一主題ハ次第ニ強調サレ第二主題ニ入ル此部分ハ御成婚ヲ祝スル国民ノ声ニシテ次ニ来ル壮大ナル第三主題ハ国民ノ歓呼ニシテ第四主題ハ舞曲風ニテ国民ノ欣喜雀躍ヲ表ス次ニ第一主題ハ再ヒ現レ最後ニ国歌ノ一節ヲ以テ幾千代迄モト壽ギ奉ル国民ノ熱誠ヲ表シテ曲ヲ結ブ。

この解説によると、楽曲中の各主題には、音楽的な内容というよりはそれぞれ情景的なテーマが与えられ、楽曲全体で国民が歓喜に沸く様相を表現しようとしている。以後、この解説に従って、楽曲構造を整理していく。
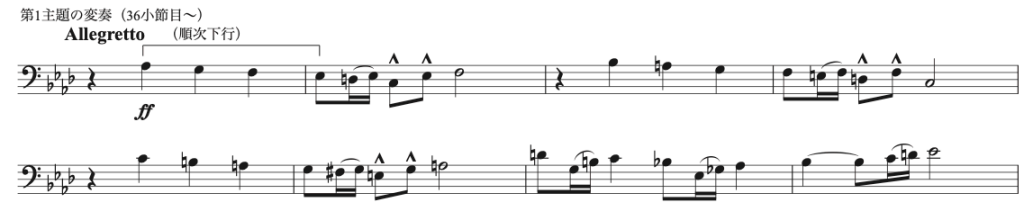
楽曲全体は、自由なソナタ形式と捉えることができる。4 つの主題が登場するが、その内第 1 主題と第 2 主題には、楽曲の最後にも引用されている《君が代》の旋律との関連性が見られ、また第 4 主題は後述するように他の主題の変奏と捉えることができる。

冒頭すぐに、「御婚約ヲ拝聞シタル国民ノ悦」を表す、旋法的な第 1 主題が木管楽器に現れる【譜例 4.6】。この 2 小節の主題は、下行する順次進行の音型を内包しており、同時に現れる分散和音の音型（第 3 主題の動機）とともに楽曲全体を支配する主要な要素となる。主題は、転調を繰り返しながら反復していく（第 17〜35 小節）。主題の提示・確保の後、テンポは Allegretto へと変化し、快活な三連符の伴奏の中で、第 1 主題が中低音音域で勇壮な曲調で変奏される（第 36〜47 小節）【譜例 4.7】[23]。続いて、第 2 主題「御成婚ヲ祝スル国民ノ声」が木管楽器で演奏され、順次進行を基調としたオブリガートが重ねられる（第 48〜67 小節）【譜例 4.8】。この第 2 主題は第 1 主題と対照的に、導音の処理によって調性音楽的なフレーズとなっている。
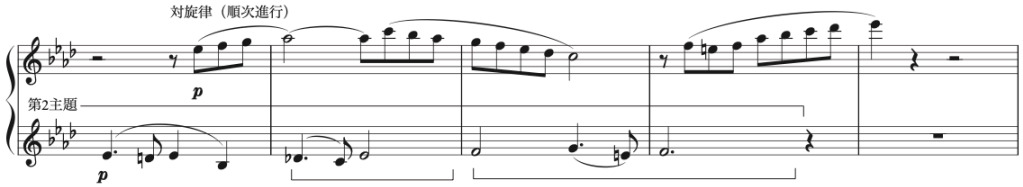
【譜例 4.6】



【譜例 4.7】
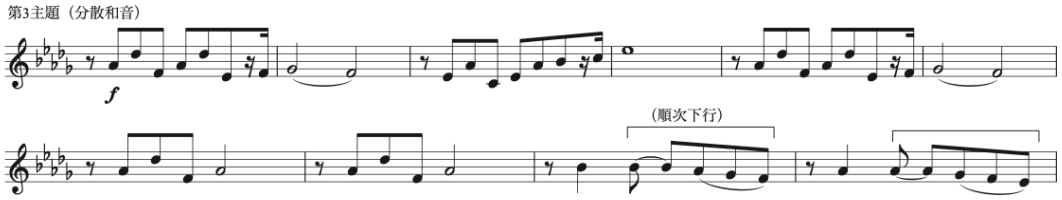


【譜例 4.8】
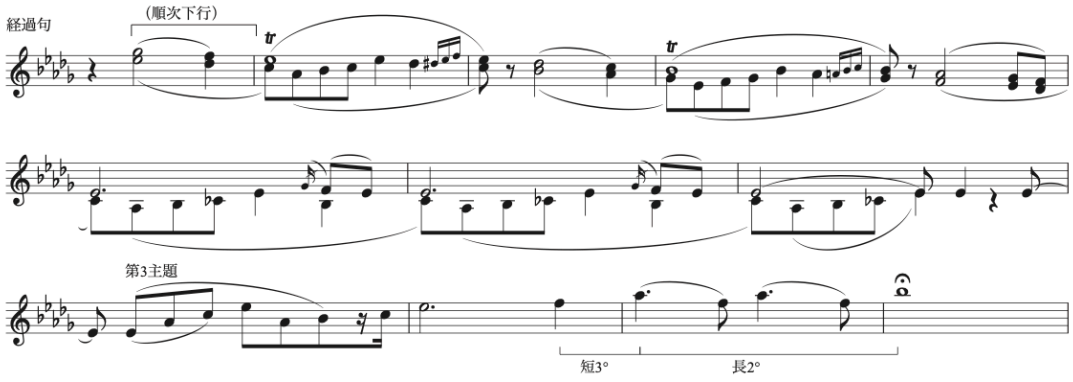


[23] 尚、第 36 小節目以降を主部・第 1 主題とし、冒頭を序奏部として動機の提示と捉えることもできるが、今回の分析では第一主題の扱いを手稿譜の解説に準拠した。

間を空けずに、変ニ長調の第 3 主題「国民ノ歓呼」が、金管楽器主体による強奏（第 68〜77 小節）【譜例 4.9】、木管楽器主体による弱奏で現れ（第 78〜89 小節）、順次進行下降音型による経過句（第 90〜107 小節）【譜例 4.10】へと移り、一旦静止する。

【譜例 4.9】
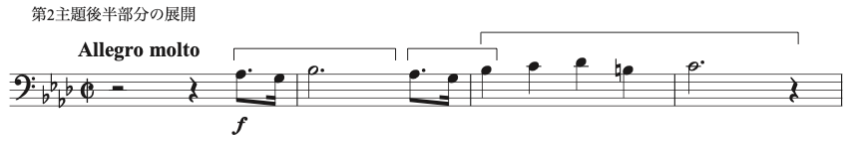


【譜例 4.10】
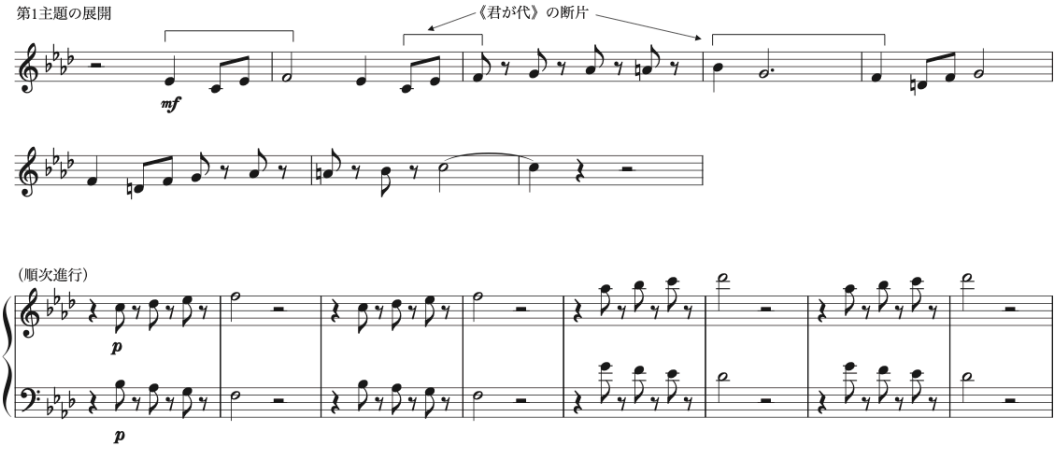


第 108 小節からの展開部では、スネア・ドラムによる導入に始まり、これまでの主題の動機的展開がなされる。最初に、第 2 主題後半部分に基づく低音楽器による旋律【譜例 4.11】と半音階の伴奏形が登場し（第 108〜131 小節）、続いて第 1 主題後半部分や第 2 主題に基づく旋律などが、ポリフォニックな展開を見せる部分が現れる（第 132 小節〜161 小節）【譜例 4.12】。

【譜例 4.11】
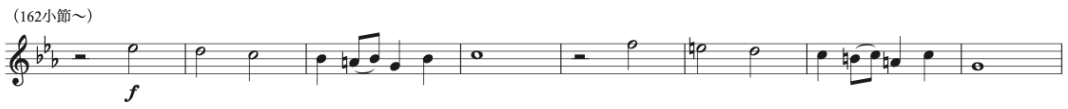


【譜例 4.12】



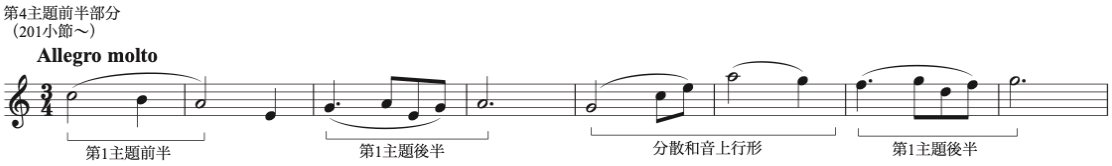
第 162 小節からは、第 1 主題の変奏主題（第 36 小節〜）の回帰（第 162〜185 小節）【譜例 4.13】と、第 2 主題の回帰（第 186〜200 小節）を辿る。

【譜例 4.13】
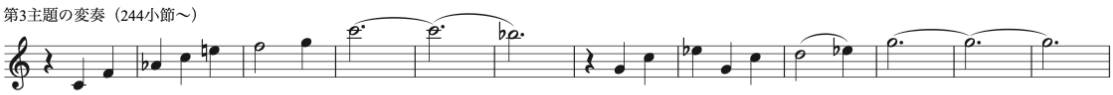


第 201 小節からは楽想が 3 拍子の舞曲へと変わり、「国民ノ欣喜雀躍ヲ表ス」第 4 主題が登場する（第 201〜243 小節）【譜例 4.14】。この主題の冒頭は、第 1 主題前半の順次下行する音型と後半の音型に、第 3 主題の分散和音の要素が組み合わされており、これまでの主題の変奏とも言える。

【譜例 4.14】
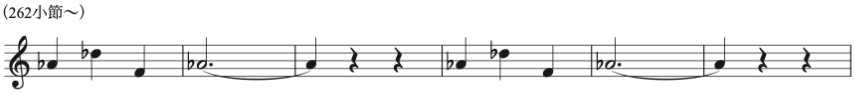


第 244 小節からは第 3 主題が三拍子の短調で変奏・反復され【譜例 4.15】、間に長調のエピソードが挿入される（第 244〜356 小節）【譜例 4.16】。分散和音上行音型と順次進行下行音型の畳み掛けの後【譜例 4.17】、再現部へと入る。
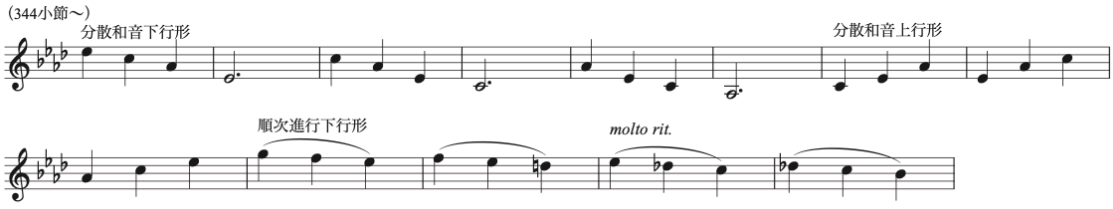
【譜例 4.15】



【譜例 4.16】
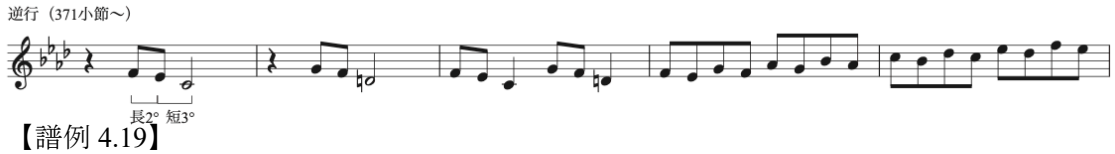


【譜例 4.17】

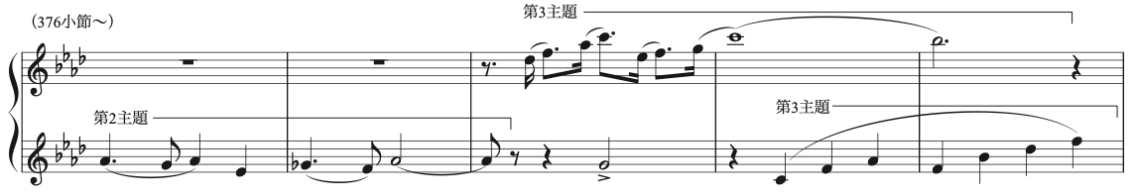


第 357 小節からは 4 拍子となり、長 4 度上に移行した第 2 主題に、第 1 主題後半の音型による、金管楽器のファンファーレが組み合わされる（第 357〜370 小節）【譜例 4.18】。続く第 371 小節からは､第一主題後半の音型が主要素となり高揚していく（第 371〜375 小節）【譜例 4.19】。

【譜例 4.18】
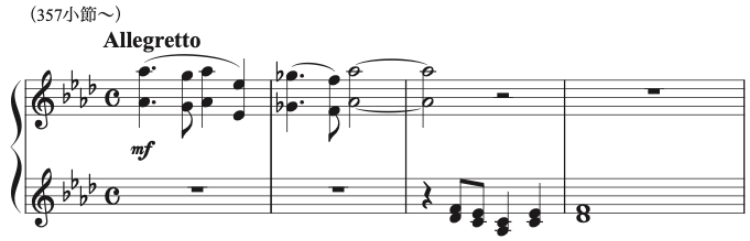


【譜例 4.19】



第 376 小節からは、第 2 主題に第 3 主題が組み合わされ【譜例 4.20】、打楽器とシンバルが加わる。第 390 小節からは、第 2 主題を軸に、二連音、付点音符、三連符の音型が絡み合うリズム的に複雑な展開を見せ、クライマックスへと向かう。
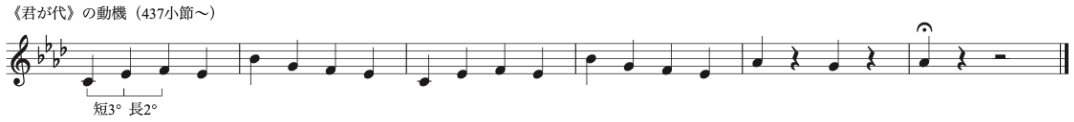
【譜例 4.20】



第 421 小節から始まるコーダでは、第 1 主題の変奏主題（第 36 小節〜）が盛大に回帰する。第 436 小節から《君が代》の旋律の断片が現れた後【譜例 4.21】、盛り上がりの中で楽曲は終わる。

《君が代》の旋律を楽曲中に使用した理由として、本楽曲が皇室に深く関係する楽曲だということもあるだろう。しかしながら同時代の他の楽曲にも、この旋律を日本の象徴として、動機や主題として使用した楽曲がいくつか存在しており、当時の作曲家が用いた主要なモティーフであったことがわかる。楽曲リストに掲載の楽曲では、瀬戸口藤吉作曲《日本海海戦行進曲》[24]、吉本光蔵作曲《君が代行進曲》、《東京湾観艦式行進曲》[25]、永井建子の《行進曲「日章旗」》のほか、行進曲以外では大沼の楽曲に加えて、山田耕筰作曲《英国皇儲歓迎前奏曲》[26]などがある。

【譜例 4.21】



[24] CD『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 1 瀬戸口藤吉作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

[25] 谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲 ― 帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、94 頁。

[26] 門馬直衛『日比谷公園音楽堂演奏曲目解説集 第一輯』、東京：岡田日栄堂、1926 年、189 頁。

(2) 橋本国彦 作曲 《満州大行進曲》[27]

概説：

1942（昭和 17）年、満州国建国十周年記念曲として東京音楽学校に委嘱され、橋本国彦が作曲を行った楽曲である。吹奏楽版と管弦楽版の両方が作成され、同年 8 月 1 日に、東京音楽学校で開催された満州大行進曲献呈式で初演[28]された。その後、東京音楽学校の学生および教員による満州建国十周年慶祝出張演奏でも演奏され、民衆には下記のように好意的に迎えられたようである。

> 八月には満洲国建国十周年を迎え、音楽使節として音楽学校総力を挙げての満鮮旅行となった。演奏曲目は信時潔曲の《海道東征》がメインに組まれ、橋本國彦の最新作《大満州行進曲》が圧倒的好評だった。素晴らしく良くできた曲だが、内容が内容だけに戦後は一度も演奏されていない。[29]

> 日本より派遣の建国十周年慶祝使節として音楽学校の一行団長乗杉校長外百三十余名が予定通り、大連の演奏会を終えて、九月十三日新京駅に着した。…（中略）…日本使節一行が特に今回作曲して満州国に献納した「満洲大行進曲」のトリオ部分は大好評にて、十月一日催された全満の学校児童唱歌コンクールにも課題曲として歌われ目下満洲で大流行である。[30]

---

[27] 『吹奏楽』2 巻 9 号（1942 年）付録楽譜、および CD『東京音楽学校関係作曲及演奏附属図書館所蔵 SP レコード』（東京：東京芸術大学附属図書館、2008 年）を分析に使用。

[28] 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　演奏会編 第 2 巻』（東京：音楽之友社、1993 年、682 頁）を参照。

[29] 畑中良輔『音楽青年誕生物語 ― 繰り返せない旅だから 2』、東京：音楽之友社、2004 年、236～237 頁。

[30] 村松道彌「満洲音楽情報」、『音楽之友』2 巻 12 号、1942 年、113 頁。

編成：

次の編成表(表 4.7)を見ても分かる通り、これまでの楽曲と比べて変則的である。木管楽器は、フルートが無いほか、サクソフォーンがセクションごと存在しない。他方、金管楽器はおおよそ標準的に揃っている。

表 4.7

《満州行進曲》（橋本国彦）
Piccolo
E♭ Clarinetto
B♭ Clarinetto 1,2,3
B♭ Trombe 1,2,3
E♭ Alto 1,2
Tromboni 1,2
B♭ Bariton
C. Bassi (C, div.2)
Tamb. Miltr.
Gr. Cassa
Triangolo

《満州大行進曲》は吹奏楽版と管弦楽版が同時に作成されたというのは、前述の通りである。そのうち管弦楽版については東京音楽学校演奏のレコードが残っており、録音からは吹奏楽版と異なる点がいくつか明らかとなった。

特に大きな違いとして、管弦楽版の録音では、中間部の繰り返し時から合唱パートが加わっている。さらに、吹奏楽版はクラリネットに割り当てられたソロが、管弦楽版ではオーボエになっている。この他にも、吹奏楽版には存在しないオブリガートが加えられており、装飾音符や細かなリズムの違いが見られるなど、印象は大きく変化している。この吹奏楽版と管弦楽版の関係については、当時の東京音楽学校の学生による、次のような記述が存在する。

> 橋本先生の「満州大行進曲」は、慶祝の意味に於て政府から学校の方へ作曲を依頼され、東京音楽学校の名の下に、満州建国十週年慶祝会へ献呈された曲であり、オーボエのソロから入るトリオ部分は、その旋律が実に満州的で美しい。原曲は吹奏楽曲で、これを管弦楽曲化し、それに又トリオの部分だけを風巻景次郎先生の作詞でコーラスにしたのである[31]。

この記述からは、《満州大行進曲》は合唱付きの管弦楽版に先行し、吹奏楽曲をオリジナルとして作曲された楽曲である、ということがわかる。

---

[31] 新井潔「満州建国十週年 慶祝音楽使節団報告記」、『東京芸術大学百年史　演奏会編 第 2 巻』、692 頁。

楽曲構造：

4/4 拍子、変ホ長調（中間部：変イ長調）。
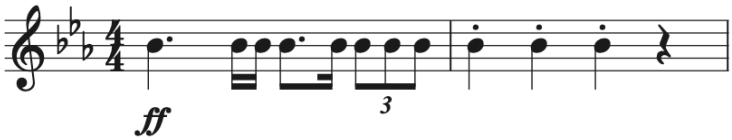
表 4.8　《満州大行進曲》の楽曲構造

						(to Coda)
序奏	主部 旋律 1	旋律 2	（経過句）	旋律 1	（展開）	経過句
1～2	3～19	20～35	36～47	48～59	60～71	72～77
	繰り返しあり					
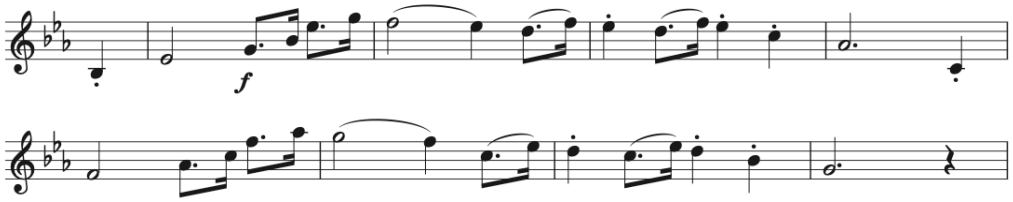
				D.C.		Coda
中間部 旋律 1	展開	旋律 1	（経過句）	旋律 1		
78～93	94～109	110～125	126～137	138～153		(Coda:1～Coda:5)
繰り返しあり						

ファンファーレ風の短い序奏の後【譜例 4.22】、主部に入り、付点音符が特徴の旋律 1 が木管楽器に現れる【譜例 4.23】。三連符に特徴付けられる旋律 2【譜例 4.24】は、一度目は金管低音楽器、二度目は高音楽器に低音楽器がポリフォニックに重なる。続いて、旋律 1 の変奏風な付点リズムを基調とした旋律と、三連符のファンファーレが演奏される経過句が続き、最初の旋律が回帰する。旋律 1 の後半部で数小節展開した後、経過句を挟んで中間部が開始する。
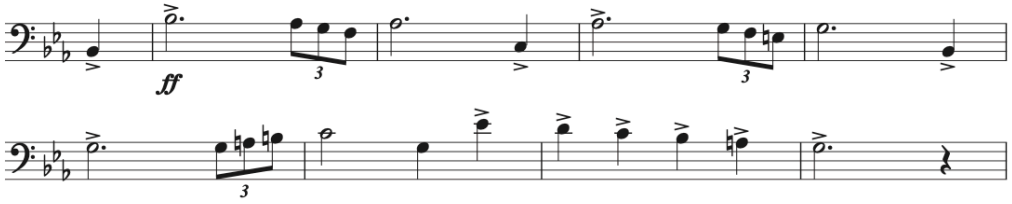
【譜例 4.22】



【譜例 4.23】
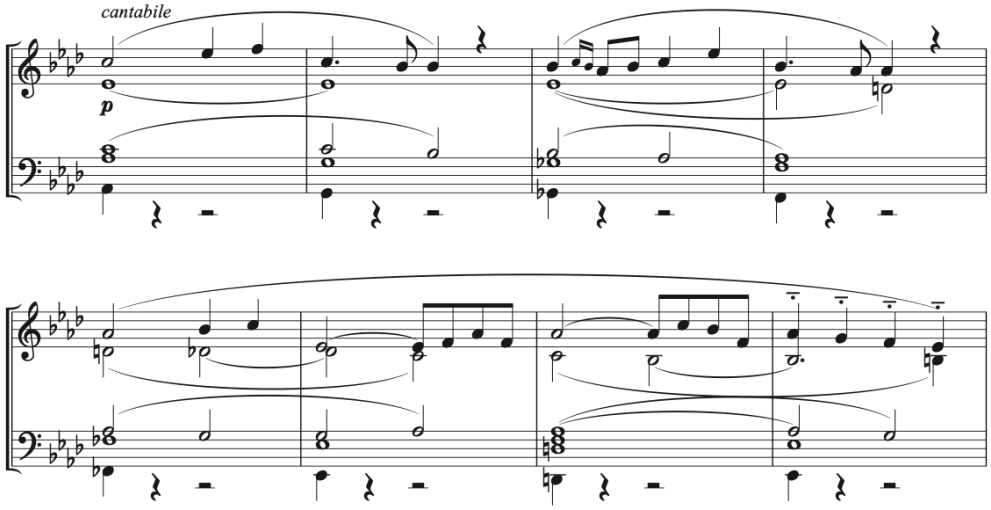


【譜例 4.24】

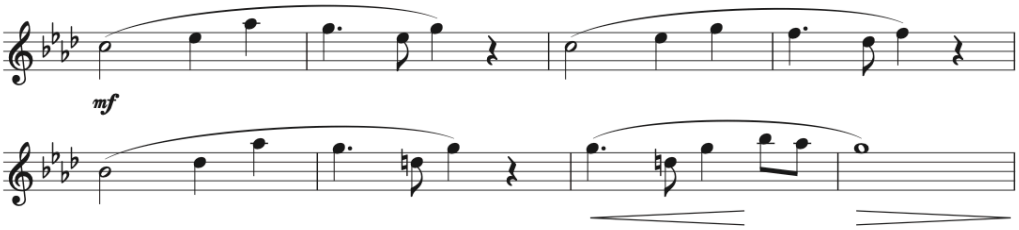


中間部は、楽想が大きく変化し、五音音階風の B♭クラリネットのソロ主題を中心としたコラールから始まる【譜例 4.25】。繰り返しの後、短い展開部【譜例 4.26】を経て、旋律が回帰する。さらに経過句【譜例 4.27】を挟み、三度旋律が回帰の後、冒頭に戻り、コーダで終わる。これまで挙げた行進曲の例と比較しても大規模な構成で、行進演奏での使用には適さず、演奏会形式での上演を目的とした、いわゆる「演奏会用行進曲」であることは、同時代の楽曲の中で珍しい点である。
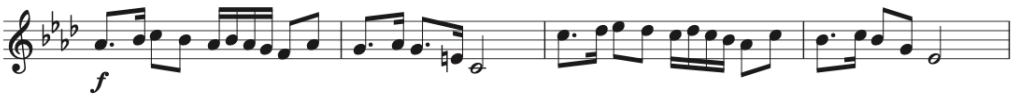
【譜例 4.25】



【譜例 4.26】



【譜例 4.27】



(3) 服部逸郎 作曲 《大行進曲「挙国の感謝」》[32]

概説：

服部逸郎作曲の《大行進曲「挙国の感謝」》は、放送用に作曲された吹奏楽曲でありながら、楽譜の出版も行われている。出版に際しては、楽譜の表書きに「日本放送吹奏楽団 使用」と記載され、放送で使用したことを強く強調している。また楽曲解説には放送日も記載されているが、出版日よりも前の日付であることから、放送後の出版となっている。

楽曲解説によると、この楽曲は 1942（昭和 17）年にシンガポール陥落を記念して作曲され、同年 3 月 10 日の陸軍記念日と 4 月 25 日に演奏されている。

編成：

スコアの編成（表 4.9）からは、第二次世界大戦以前の楽曲としては、かなり大規模の編成であることがわかる。サクソフォーン・セクションはバスまで含み、ティンパニーやピアノ（一部コードネーム表示）まで存在することに加えて、各楽器も複数パート使用されている。しかしながら、第 2 章で紹介した当時のアマチュア・バンドの編成状況と比較してみると、楽譜が実際の放送内容と一致していたとしても、実用的な出版譜であるとは言い難い[33]。

表 4.9

《大行進曲「挙国の感謝」》（服部逸郎）	
Piccolo	
Flute (div.2)	
Oboe in C (div.2)	
E♭ Clarinet	
B♭ Clarinet 1,2,3	
Alto Saxophone	
Tenor Saxophone	
Alto Horn in E♭ 1,2,3,4	
Trumpet in B♭ 1,2,3	
Baritone	
Trombone in C 1,2,3	
Piano	
Baritone Saxophone	
Bass Saxophone	
Euphonium in C	
Bass	
Drums	Snare Drum
	Bass Drum
Tympani & Triangle	

[32] 白眉出版の楽譜を分析に使用した。

[33] 出版譜と放送内容に関する事項については、第 2 章第 4 節「吹奏楽作品創作に関する議論」も参照のこと。

楽曲構造：

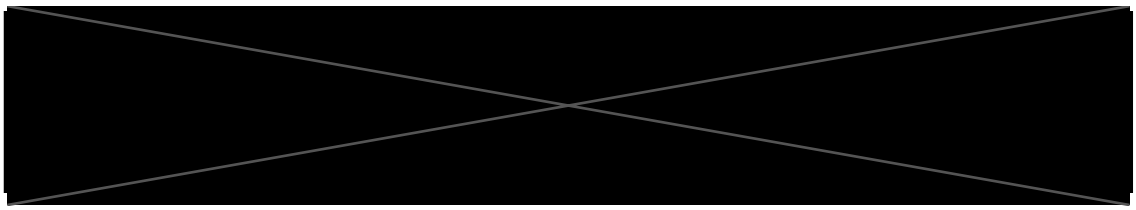
表 4.10　《大行進曲「挙国の感謝」》の楽曲構造

Andantino	Allegretto			Andante	Moderato maestoso	
序奏	第 1 部 旋律 1	旋律 2	（経過句）	第 2 部	第 3 部	Coda
1～4	5～13	14～22	23～26	27～35	36～43	44～49
	繰り返しあり	繰り返しあり		繰り返しあり	繰り返しあり	

楽曲は主部に戻らない三部構成で、目まぐるしくテンポが変化するのが特徴の「演奏会用行進曲」である（表 4.10）。

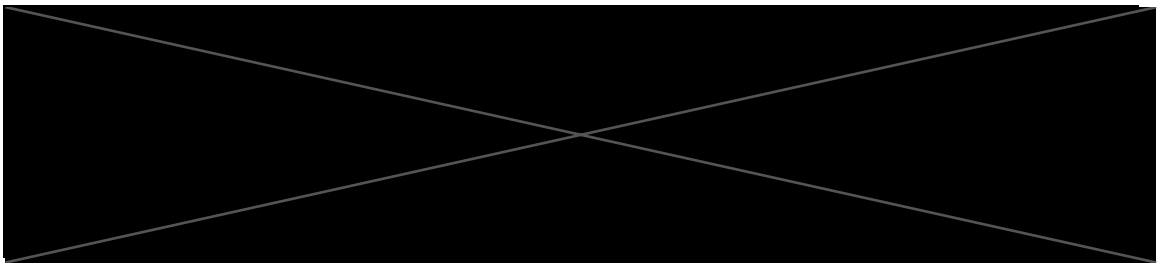
序奏は、金管全楽器による三連符を主体としたファンファーレで始まる【譜例 4.28】。

【譜例 4.28】



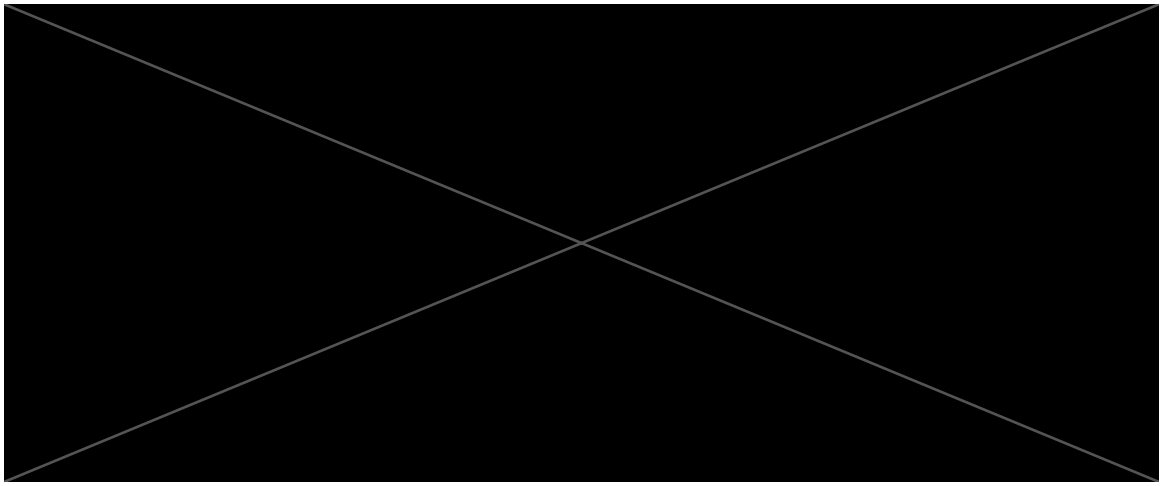
第一部は快速なテンポの行進曲で、前半部分は、十六分音符の細かな動きの旋律が木管高音楽器とトランペットによって演奏される【譜例 4.29】。

【譜例 4.29】



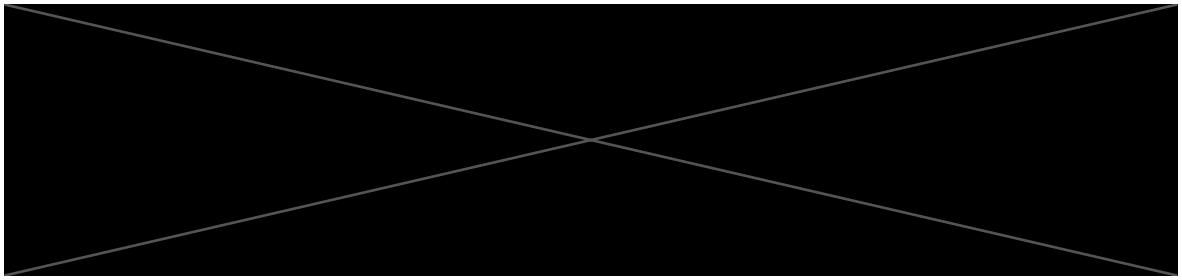
第一部後半部分は、木管・金管の中低音楽器による音価の長い旋律に、木管楽器のオブリガートが重なる【譜例 4.30】。

【譜例 4.30】



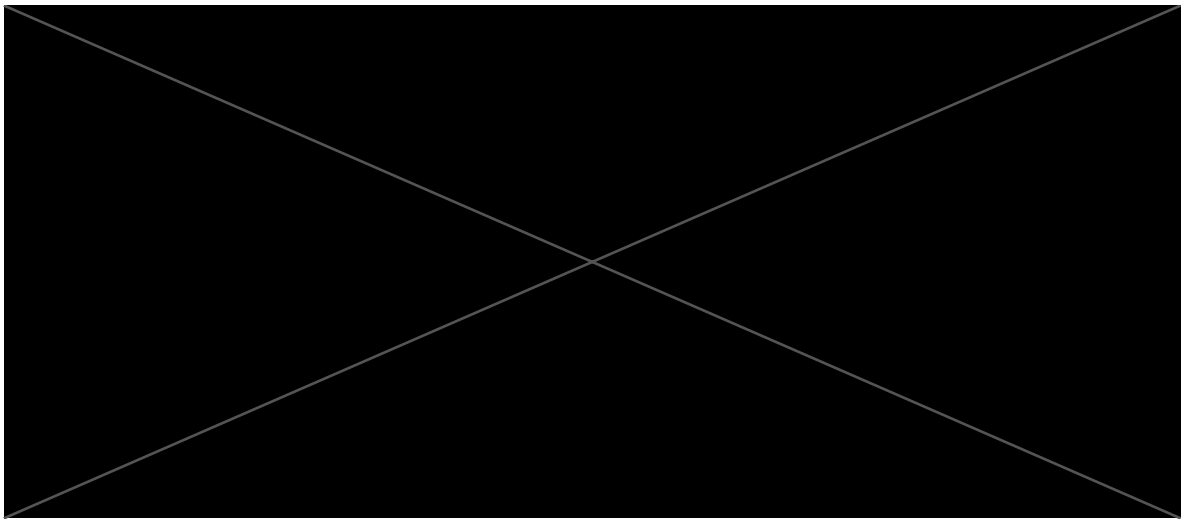
経過句はフェルマータで静止し、スロー・マーチとなる楽曲の後半部分へと続く。
第二部は、スコアの解説によると「前線に対する銃後の信頼を現」わす部分である。金管楽器とサクソフォーンによって、朗々とした主題が歌われる【譜例 4.31】。

【譜例 4.31】



第三部は、第二部に切れ目なく続き、スコアの解説によると「八紘一宇に光被する御稜威の盛なる様を称え」る音楽である【譜例 4.32】。コーダでは、穏やかなテンポのまま、全楽器によるプラガル終止で壮大に楽曲は終わる。

【譜例 4.32】



第 3 節　喇叭鼓隊編成の楽曲

(1) 井上繁隆 作曲 《行進曲「必勝日本」》[34]

《行進曲「必勝日本」》の編成表は次の通り（表 4.11）であるが、第 2 章の喇叭鼓隊編成案と全く一致している。そもそもの楽器の種類も少ないことから、ブラスバンド編成と比較すると、編成の自由度が少ない分、画一化された編成であったと言える。

表 4.11

《行進曲「必勝日本」》（井上繁隆）
第一小喇叭
第二小喇叭
第一中喇叭
第二中喇叭
大喇叭
小太鼓
大太鼓
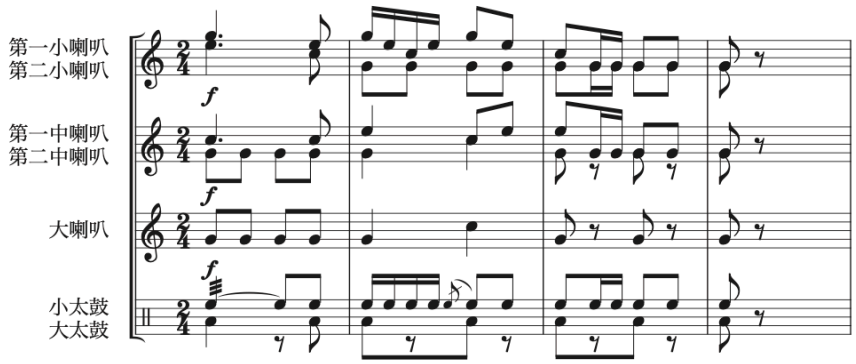
表 4.12　《行進曲「必勝日本」》の楽曲構造

			(Fine)			D.C.
序奏	主部 A	B	A	（経過句）	中間部 A	B
1～4	5～21	22～38	39～54	55～58	59～66	67～75
	繰り返しあり	繰り返しあり			繰り返しあり	

表 4.12 を見ても分かる通り、ブラスバンド編成の実用的な行進曲と構造上の差はない。

【譜例 4.33】は序奏部であるが、喇叭鼓隊編成の楽曲の特徴として、音高に制限があったことから、曲調がこのような所謂「軍隊喇叭調」になってしまうことは、先に述べた通りである。
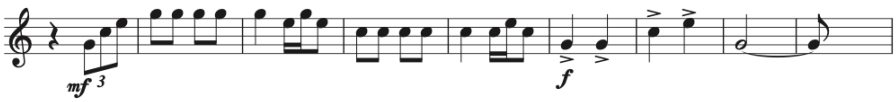
【譜例 4.33】



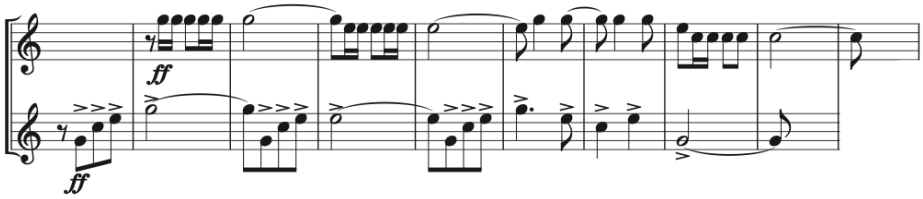
[34] 『吹奏楽』3 巻 10 号（1943 年）付録楽譜を分析に使用した。

主部は三部形式で、第一小喇叭が主旋律【譜例 4.34】の A と、中喇叭、大喇叭が主旋律で小喇叭がオブリガートとして扱われる B の部分【譜例 4.35】から成り立つ。

【譜例 4.34】
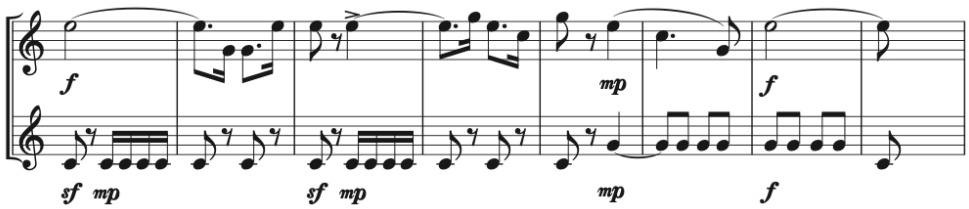


【譜例 4.35】
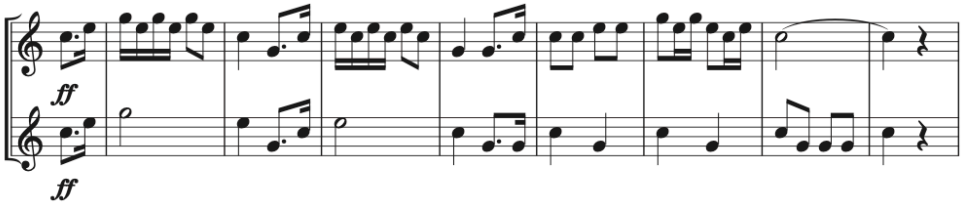


中間部前半は、伴奏形のリズムの反復の上に、小喇叭、第一中喇叭の付点のリズムを基調としたフレーズが演奏される【譜例 4.36】。

【譜例 4.36】



後半部では、全楽器一体となり一つのファンファーレを形成する【譜例 4.37】。その後、再度主部を演奏した後、楽曲が終わる。

【譜例 4.37】



このように、喇叭鼓隊の制限された音組織の中ではあるが、リズムや強弱の変化を駆使してキャラクターの対比を行うことで、楽曲が成立するよう工夫している様子が見られる。

(2) 全関東吹奏楽連盟 作曲 《行進曲「盟友」》[35]

概況：

第二次世界大戦以前には、喇叭鼓隊編成とブラスバンドとの合同演奏用の楽曲も作成されていた。《行進曲「盟友」》は、1937（昭和 12）年の全関東吹奏楽団連盟結成式の際に初演された楽曲（作曲家名は不詳）である。広岡九一は、この楽曲について次のように述べている。

> 「盟友」は全関東吹奏楽団連盟発会結成式の際に当連盟の名のもとに発表され全加盟団総員一千名と称する大合奏が行われさしもの日比谷公園大音楽堂ステーヂは指揮者の席を押し出さんばかり奏者で盛上がり轟く音は全公園を圧し聴く者は斯も偉大なる音の力よと感極まり只その荘［ママ］大なるに胸を打たれ、その集団力に驚歎するばかりであった。[36]

ブラスバンドと他編成の合同演奏用の楽曲には、この他にも楽曲リストに掲載している中で下記のようなものがある。

喇叭鼓隊と吹奏楽

和田小太郎、大沼 哲 作曲 《行進曲「我等の軍隊」》

大沼 哲 作曲 《行進曲「皇軍の門出」》

陸軍軍楽隊 作曲 《意想曲「爆弾三勇士」》

大日本吹奏楽連盟 作曲 《行進曲「東亜の黎明」》

鼓笛隊と吹奏楽

山本 力 作曲 《行進曲「向日葵」》

山本 力 作曲 《行進曲「伝書鳩」》

喇叭隊と吹奏楽

永井建子 作曲 《軍楽と喇叭の併合新分列行進》

---

[35] 管楽研究会版の楽譜を分析に使用した。

[36] 広岡九一「吹奏楽曲解説」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 1 号、1939 年、10 頁。

構造：

編成表（表 4.13）を見ると、楽器名の表記は、喇叭鼓隊は日本語である一方、ブラスバンド側は陸軍式編成のフランス語表記で、「Basse」、「C.Basse」は B♭の移調管となっている。

表 4.13

《行進曲「盟友」》（全関東吹奏楽連盟）
Flute ut
Hautbois ut
P.Clarinette mi♭
Clarinette si♭ 1,2
Sax. Alto mi♭
Sax. Tènor si♭
Sax. Baryton mi♭
Bugle si♭ 1,2
Cornet à piston si♭ 1,2
Alto mi♭ 1,2,3
Trombone ut 1,2,3
Baryton si♭
Basse si♭ 1,2
C.Basse mi♭
C.Basse si♭
小喇叭 第一、第二
中喇叭 第一、第二
大喇叭
小太鼓
大太鼓

表 4.14 《行進曲「盟友」》の楽曲構造

(Fine)					D.C.
序奏	主部 旋律 1	旋律 2	中間部 A	B（ファンファーレ）	A
1～8	9～25	26～44	45～60	61～68	69～84
	繰り返しあり	繰り返しあり			
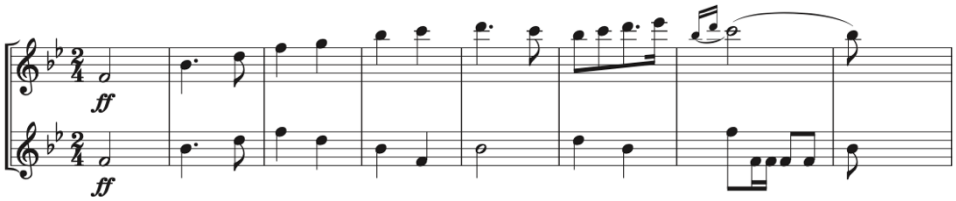
楽曲構造はオーソドックスな行進曲の形式であるが、中間部に金管直管楽器（Cornet、Trombone、第一・第二小喇叭、第一中喇叭）と打楽器によるファンファーレ部が挿入されていることは特異な点である（表 4.14）。

序奏は、全管楽器によるユニゾンから開始する【譜例 4.38】。主部前半は、木管楽器のレガートの旋律に、金管高音域（Cornet、Bugle、第一小喇叭）のファンファーレが重なる【譜例 4.39】。主部後半は中低音楽器に旋律が移り、金管高音域（Cornet、Bugle、第一・第二小喇叭、中喇叭）は異なるファンファーレへと変わる【譜例 4.40】。
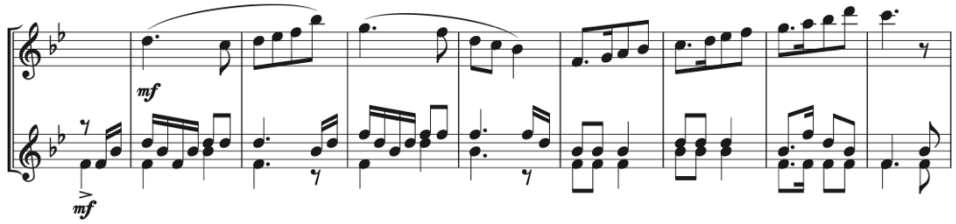
中間部前半（A）は、2 つの旋律（それぞれ低音楽器と木管高音楽器が担当する）と、ファンファーレ風の音形を持つ伴奏が現れる【譜例 4.41】。ファンファーレ部（B）【譜例 4.42】の挿入の後、前半部分がオーケストレーションを変更して回帰した後、主部を再度演奏し楽曲は終わる。

楽器法上の特徴としては、喇叭鼓隊が独立して用いられるのではなく、ブラスバンドの金管楽器と融合した形で用いられ、楽曲全体が木管楽器群と金管楽器群の対比で成立している点が挙げられる。
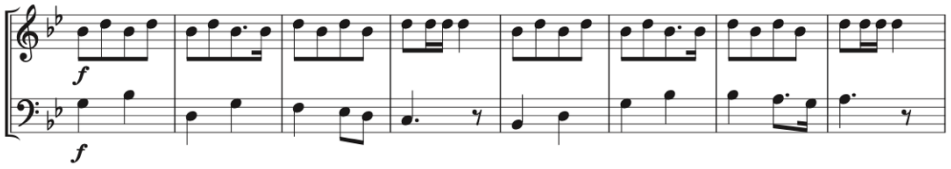
【譜例 4.38】
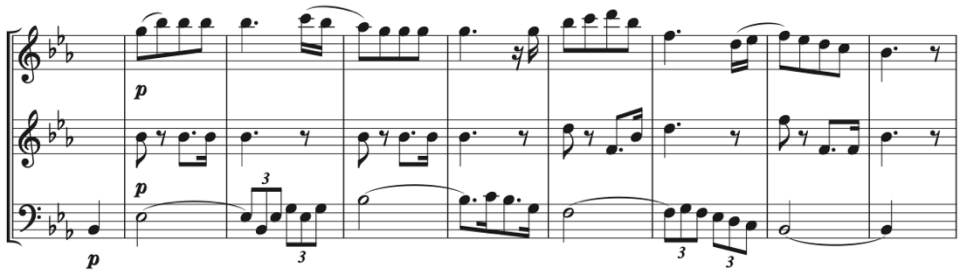


【譜例 4.39】
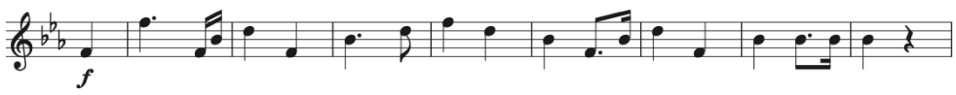


【譜例 4.40】



【譜例 4.41】



【譜例 4.42】



第 4 節　多様化する編成

第二次世界大戦以前の日本においては、陸軍式・海軍式編成を軸に、吹奏楽曲の編成が統一されていなかったことは、第 2 章で述べた通りである。

表 4.15 は、前述の日比谷公園音楽堂開堂式で演奏された、永井建子作曲の《行進曲「日章旗」》[37]の編成表である。この編成表からは、フランス語表記の楽器名や、楽器の種類の多さなど、改めてフランスの軍楽隊の方式を採用した、陸軍式の編成の特徴が窺える。この編成の特徴として、サクソルン属による金管楽器の種類の豊富さと対照的に、木管低音楽器の少なさがある。また、楽譜の表記は、「Baryton」、「Basse」、「C.Basse si♭」は B♭管の移調表記（Baryton はト音記号表記）となっており、海軍式の実音表記とは異なっている。

表 4.15

《行進曲「日章旗」》（永井建子）
Petite Flûte ut
Hautbois (div.2)
P. Clarinette
Clarinette 1,2,3
Soprano Saxophone
Alto Saxophone (div.2)
Tenor Saxophone (div.2)
Baryton Saxophone
P. Bugle
Bugle 1,2
Piston 1,2
Alto 1,2,3
Trompette 1,2
Baryton 1,2
Trombone 1,2,3,4
Basse
C. Basse mi♭
C. Basse si♭
（打楽器）

この、陸軍・海軍式の編成で見られたような編成の不統一の状態は、軍楽隊外での吹奏楽にも影響を与えている。昭和期の吹奏楽曲の公募では、ピアノスコアで募集することが多かったのは既に述べた通りである。例えば、1939（昭和 14）年と 1940（昭和 15）年に開催された「瀬戸口作曲賞」の入賞曲の編成は、表 4.16 のような様子であった[38]。前項にあった「Euphonium」、「Euphonion」、「Bass」の移調管の問題は、実音表記で統一されているものの、両編成とも現在の吹奏楽編成では使用されない D♭管のピッコロ・フルートが組み込まれてい

表 4.16

《行進曲「艦隊の威容」》（白磯巌）		《明治節行進曲》（松倉五郎）
第1回1等入賞曲		第2回入選曲
Piccolo Des		Piccolo D♭
Flute Des		
Oboe 1,2		Oboe
Basson		Bassoon
Clarinet Es		
Clarinet 1,2,3		Clarinet 1,2,3
Alt. sax		Alto Saxophone E♭
Tenor sax		Tenor Saxophone B♭
		Baritone Saxophone E♭
Cornette 1,2		Cornet B♭ 1,2
		Trompet B♭
Althorn 1,2,3		Alto E♭ 1,2,3
Horn in F		
Trombone 1,2,Bass		Trombone 1,2,3
Bariton		Baritone B♭
Euphonium		Euphonion C
Bass（C）		Bass C
Drum	Snare Drum	Side Drum, Chimes
	Bass Drum	Bass Drum
	Cymbal	

[37] 調査には日本近代音楽館所蔵の手稿譜を使用した。

[38] 公募については第 3 章に詳述。尚、入賞曲のうち海上自衛隊東京音楽隊が楽譜を所蔵している 2 曲（共益商社版）の楽譜のみ比較した。

る。《行進曲「艦隊の威容」》ではアルト・ホルンに加えて通常の F 管のホルンも使用されている。《明治節行進曲》では、サクソフォーンがアルトからバリトンまで一通り揃えられている一方、フルートや E♭クラリネットが欠如している。尚、楽譜は両方とも共益商社から出版されており、同じ出版社からのものでも編成が統一されていない状況が分かる。

さらに、第 3 章第 4 節では、レコードや放送などの演奏と市販譜の内容が異なる状況が問題視されていた。表 4.17 では、森屋五郎作曲《戦野を征く》の自筆譜と雑誌付録の編成を並べている[39]が、移調管の違いに加え使用楽器も大きく改変されている様子を見て取ることができる。

表 4.17

《戦野を征く》（森屋五郎）	
自筆譜	吹奏楽月報7巻7号 付録
P. Flûte ré ♭	Piccolo C
	Flute C
Hautbois ut	Oboe
Basson ut	
P. Clarinette mi ♭	Clarinet E ♭
Clarinette si ♭ 1,2,3	Clarinet B ♭ 1,2,3
S. Alto mi ♭	Alto Saxophone E ♭
S. Tenor si ♭	
Bugle si ♭	
Cornet si ♭ 1,2	Cornet B ♭ 1,2
Alto mi ♭ 1,2	Alto E ♭ 1,2
Trombone ut 1,2	Trombones C 1,2
Baryton si ♭	Baritone B ♭
Basse si ♭	Euphonium C
Contrabasse mi ♭	
Contrabasse si ♭	Bass C
P.Caisse	Drums
G.Caisse	

ここで、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲の編成例の一覧を見てみよう（別冊付録資料 3）。

ここに掲載しているのは、今回楽譜を調査することができたごく一部の楽曲ではあるが、様々な吹奏楽（ブラスバンド）の編成形態が混在していたことを理解できる。

全体を分析すると、移調管の違い（フルートの D♭管・C 管、金管低音楽器の B♭管・C 管）、サクソフォーン・セクションの有無、オーボエ、バスーンの欠如、トランペット・コルネット・ビューグルの金管高音域楽器の使用、などの傾向が見られる。

ここまでの分析で、陸軍式の編成では、サクソルン属を効果的に使用することで、多彩な音色を生かした精巧なオーケストレーションが可能になっていた様子がわかった。一方、前章の雑誌記事でも度々問題に挙げられていた、編成が統一されていないことによる不具合（特に移調管による楽譜の記譜の相違）が、大きな問題であったことが、この編成の比較により裏付けられた。

この点は「編曲」という行為自体が、現代とは異なる認識であったことが一つの要因であると考える。例えば、当時の楽譜には次のような解説が付けられている。

---

[39] 手稿譜は警視庁音楽隊所蔵の作曲者本人の自筆譜、雑誌付録は『吹奏楽月報』7 巻 7 号（1941 年）付録楽譜を参照した。

> 此の総譜は最低五人から二十四人迄の楽器編成を目標に編曲したものである。故にそれ等のバンドに於いてはその編成に従って、必要なパートを摘出せねばならない。
> …（中略）…
> 若し此の編曲に無い楽器を有するならば、適当に書き加うればよい。例えばサクソフォーンアルトを有するバンドであれば第二クラリネット、或いはアルトのパートから採譜すればよい。[40]

このことから、少なくとも当時の吹奏楽の出版楽譜は、編曲されることが前提で販売され、必ずしも各団体でそのままの型で演奏されることを目指していなかったため、編成を統一する機会が無いままになってしまった、とも考えられるのではないだろうか。

[40] ミカエリス作曲、管楽研究会編『意想曲「森の鍛冶屋」』総譜（シンフォニー楽譜出版社、1939 年）の楽曲解説を参照。

第 5 章　戦後への影響

第 1 節　大戦末期と終戦直後のレパートリー

（1）終戦前後の放送記録

1945（昭和 20）年 8 月 15 日の終戦の詔書の放送以前、終戦前最後の吹奏楽の放送は次の内容であった。

表 5.1　終戦前最後の吹奏楽放送記録

1945（昭和 20）年 8 月 11 日
星桜吹奏楽団　指揮：大和田由松 《行進曲「大航空」》　航空局制定 《「南国風景二題」》　安倍 盛 作曲 《意想曲「進め貫け」》　杉山長谷雄 作曲

国内の動静では、8 月 10 日にポツダム宣言受諾が決定し連合国側に通知を行ったが、日本国民には公表はされていなかったことから、上記のような《進め貫け》のような戦時色の強い楽曲が依然として放送されていた。

その後、8 月 14 日にポツダム宣言受諾に関する詔書を発布、15 日正午には玉音放送が放送され、翌 16 日に陸海軍に停戦命令が下されるとともに、陸海軍軍楽隊は解隊されることとなった。番組確定表では、18 日に海軍軍楽隊による「軍歌と吹奏楽」の放送が予定されていたが、斜線で修正されている。8 月 28 日はアメリカ軍の日本占領部隊が厚木飛行場に到着、30 日には連合国軍総司令官のダグラス・マッカーサーが到着した。吹奏楽放送が復活したのは、翌月 9 月 1 日であり、放送内容は次の通りであった。

表 5.2　終戦後最初の吹奏楽放送記録

1945（昭和 20）年 9 月 1 日
海洋吹奏楽団　指揮：宮下豊次 《行進曲「大日本」》　海軍軍楽隊 作曲 《円舞曲「美の極み」》　ワルドトイフェル 作曲 《耕作の歌》　清瀬保二 作曲 《村祭》　石田一郎 作曲

演奏曲は、戦争と関係のない題材のものを中心とする一方で、海軍軍楽隊の斉藤丑松が紀元二千六百年に作曲した《行進曲「大日本」》も取り上げられている。尚、フランス人作曲家のエミール・ワルトトイフェル、清瀬、石田それぞれの楽曲は戦前から演奏されていたものである。

9 月 2 日、日本政府は米戦艦ミズーリ艦上で降伏文章に調印し、連合国軍による占領統治が始まった。9 月 25 日には「日米放送音楽会」の題で、マッカーサー司令部附第二三三楽団（指揮：ウォークマン准尉）が放送に登場、スーザの楽曲などを演奏し、日本側は日本交響楽団（指揮：山田和男）の演奏で答えた。

表 5.3　日米放送音楽会の演奏曲

1945（昭和 20）年 9 月 25 日　日米放送音楽会
吹奏楽 マッカーサー司令部附第二三三楽団　ウォークマン准尉 指揮 ・《行進曲「コットン王」》　スーザ 作曲 ・コルネット三重奏：《三人の王様》　ワルター・スミス 作曲 ・《操り人形の葬送行進曲》　グーノー 作曲 ・《玩具の兵隊の観兵式》　イエッセル 作曲 管弦楽 日本交響楽団　山田和男 指揮 ・《舞踏への招待》　ウェーバー 作曲 ・《真夏の夜の夢》より〈結婚行進曲〉　メンデルスゾーン 作曲 ・《喜歌劇「蝙蝠」序曲》　ヨハン・シュトラウス 作曲

戦時中は時局と結びついた活動が極めて多かった吹奏楽ではあるが、放送はこの様に終戦後間もない時期から再開している。以下、10 月から年末までの吹奏楽の放送記録を掲載する。

表 5.4　1945（昭和 20）年 10 月～12 月の吹奏楽放送記録

10 月 4 日　東京都音楽団　内藤清五 指揮
・《行進曲「国民の意気」》　斎藤丑松 作曲
・《序曲「エグモント」》　ベートーヴェン 作曲
・《歌劇「メリーウィドウ」円舞曲》　レハール 作曲
・《行進曲「美中の美」》　スーザ 作曲

10 月 12 日　星桜吹奏楽団　大和田由松 指揮
・《行進曲「美中の美」》　スーザ 作曲
・《南国風景二題》　安倍 盛 作曲
・《朝の喜び》　服部 正 作曲
・《村祭》　石田一郎 作曲

10 月 14 日　日本放送吹奏楽団　服部逸郎 指揮
行進曲集
・《行進曲「雷神」》　スーザ 作曲
・《行進曲「怒涛を越えて」》　服部逸郎 作曲
・《行進曲「母の微笑」》　キャンベル 作曲
・《行進曲「キャンプの火」》　カール 作曲
・《行進曲「大日本」》　海軍軍楽隊 作曲

10 月 17 日　禁衛府皇宮奏楽隊　山口常光 指揮
・《童謡「秋祭り」》　佐藤長助 編曲
・《組曲「ヤンキアナ」》　サーバン 作曲
〈行進曲「強きアメリカ」〉
〈小夜曲「鐘の歌」〉
〈描写曲「士官候補生隊の到着」〉

11 月 1 日　星桜吹奏楽団　大和田由松 指揮
・《行進曲「美の極み」》　スーザ 作曲
・《序曲「狸囃子」》[1]　深海善次 作曲
・《二つの舞曲》　伊藤 昇 作曲
〈中国の踊〉、〈満洲の踊〉
・《ワシントンポスト》スーザ 作曲

11 月 8 日　東京都吹奏楽団　内藤清五 指揮
・《幻想曲「亜米利加」》　トバニー 編曲
・《円舞曲「愛の天使」》　ワルドトイフェル 作曲

11 月 16 日　禁衛府皇宮奏楽隊　山口常光 指揮
・《序曲「セミラーデ」》　ロッシーニ 作曲
・《描写曲「狩りの風景」》　ブカロッシ 作曲

11 月 18 日　日本放送吹奏楽団　服部逸郎 指揮
・《行進曲「守備隊士官」》 ジュウエル 作曲
・《意想曲「自動車乗り」》　リーヴス 作曲
・《描写曲「吹奏楽競演会」》　ローガン 作曲

12 月 8 日　新興吹奏楽団　萩原庸禎 指揮
・《行進曲「星條旗」》　スーザ 作曲
・《ハンガリア舞曲 第六番》　ブラームス 作曲
・《序曲「印度の女王」》　キング 作曲
・《行進曲「国民の象徴」》[2]　スーザ 作曲

12 月 15 日　東京都吹奏楽団　内藤清五 指揮
・《組曲「四季」》　グラズーノフ 作曲

[1] 洋楽放送記録には「不要」と注記あり。

[2] 洋楽放送記録では、赤棒線で削除されている。

12 月 27 日　禁衛府皇宮奏楽隊　小山卯三郎 指揮
・《組曲「ペールギュント」》　グリーグ 作曲 ・《行進曲「勇敢なる闘牛士」》　ポピー作曲 作曲

12 月 28 日　星桜吹奏楽団　大和田由松 指揮
・《日本民謡集》　伊藤 昇 作曲 ・《里踊り》　八木 伝 作曲

翌 1946（昭和 21）年 1 月 8 日の星桜吹奏楽団（指揮：大和田由松）の放送を見ると、演奏予定であった「旧陸軍軍楽隊編曲」の《老松》が、服部正作曲《朝の喜び》と差し替えとなっている。《老松》に関しては、以後の放送の際「東京都吹奏楽団編曲」[3]と表記されていることから、この頃から旧軍関係の事項に対して何らかの配慮があったと推測される。

これらの演奏団体のうち、以下の団体は旧陸海軍軍楽隊の流れを汲む組織であった。

東京都音楽団は、終戦後 9 月 21 日に元海軍軍楽隊員を中心に結成された団体で、管弦楽団と吹奏楽団の 2 つの編成となっていた。団長は山田耕筰、副団長管弦楽部を早川弥左衛門、副団長吹奏楽部を内藤清五が務めた[4]。翌 1946（昭和 21）年 8 月には管弦楽編成は廃止され、1949（昭和 24）年 7 月に発足した東京消防庁音楽隊の母体となった。10 月 1 日の東京都音楽団の放送は、戦後初の日本人によるアメリカ人作曲家の吹奏楽曲の演奏[5]であった。

禁衛府皇宮奏楽隊は、終戦後の 9 月 10 日に山口常光を隊長として元陸軍軍楽隊員によって編成された。禁衛府は皇居守護のため新設された組織であったが、GHQ の指導により 1946（昭和 21）年 3 月 31 日に解散させられた。団員の多くは日本放送協会に移籍し、「日本放送吹奏楽団」として活動をおこなったが、同年 7 月に解散し、団員のうち数名が東京放送管弦楽団団員として残るのみとなった。山口常光は 1948（昭和 23）年に新設された警視庁音

[3] 1947（昭和 22）年 1 月 1 日東京都吹奏楽団（指揮：内藤清五）の放送など。

[4] 城崎幾太郎「海軍軍楽隊から東京消防庁音楽隊へ」、楽水会編『海軍軍楽隊―日本洋楽史の原典』、211 頁。

[5] 尚、日本においても、第二次世界大戦以前は、アメリカ人作曲家の楽譜を入手することは可能であった。例えば、1939（昭和 14）年のタナベバンド楽譜広告（『バンドの友』4 巻 8 号、46～47 頁）には、スーザの行進曲 6 曲が掲載されている。

楽隊の創設に参加し、指導者として迎えられた[6]。それ以降の記録では、新興吹奏楽団、東京都消防庁音楽隊、警視庁音楽隊、東京シンフォニックブラスバンド（指揮：服部逸郎）などによって定期的な吹奏楽放送が行われていた。レパートリーの傾向としては、新興吹奏楽団が他の団体に比べて邦人作品を積極的に取り上げており、戦前からの楽曲に加えて新作を演奏している様子が度々見られる。これらの放送記録からは、海外の作品、主にアメリカの作品が多く取り上げられるようになった一方で、戦前の日本人作品のレパートリーも、多少配慮は見られつつもこの時期は依然として取り上げられ続けていることがわかる。

（2）戦後の吹奏楽コンクールの演奏記録

終戦後の数年間、混乱の中でアマチュアの吹奏楽活動は満足に行うことができなかった。1947（昭和 22）年に関東吹奏楽連盟が再建され、日比谷公園音楽堂で新憲法実施記念演奏会を開催した。同年より新学制が実施され、学校教育の中での吹奏楽活動が再開していくこととなる。1950（昭和 25）年 4 月には、大阪市音楽団が戦後初となる第 1 回定期演奏会を開催している。1951（昭和 26）年には関西吹奏楽コンクールが再開、関東吹奏楽連盟では管楽器個人コンクールが再開し、また東京芸術大学吹奏楽研究部が第 1 回定期演奏会を開催[7]している。1952（昭和 27）年の関東吹奏楽連盟の加盟団体数は「中学 7 校、高校 9 校、職場 15 団体の合計 31 団体」[8]で未だ復活途上の様相であったものの、この年に関東地区の吹奏楽コンクールが再開している。1953（昭和 28）年より東京藝術大学で吹奏楽指導者講習会が開催されるようになり、全国的な吹奏楽活動再興の機運が高まる中、各地区連盟の再開も相俟って 1954 年（昭和 29）年には、全日本吹奏楽連盟が再発足することとなった。1956（昭和 31）年 12 月 9 日には、戦前から通算第 4 回目の全日本吹奏楽コンクールが大阪で開催され、北海道、関東、東海、関西西部地区の代表が参加した。1960（昭和 35）年の第 8 回大会になり、ようやく全国 9 支部の代表が揃うこととなった。

このように戦後順次復活をたどった吹奏楽コンクールであったが、楽曲のレパートリーはどのようになっていたのだろうか。1956（昭和 31）年の第 4 回全日本吹奏楽コンクールの演奏曲目は次の通りであった。

---

[6] 解散後の陸軍軍楽隊員の活動は山口常光『陸軍軍楽隊史 ― 吹奏楽物語り』505～514 頁に詳しい。

[7] 『東京芸術大学百年史　演奏会編 第 3 巻』、93 頁。

[8] 「全日本吹奏楽連盟の再建と吹奏楽界の推移」、全日本吹奏楽連盟編『吹奏楽連盟 40 年史』、1978 年、33 頁。

1956（昭和 31）年 12 月 9 日　全日本吹奏楽コンクール[9]

会場　大阪府立体育館

課題曲

中学校の部　行進曲「トム・タフ」（ビンディング）

高等学校の部　行進曲「花のほほえみ」（キャンベル）

職場の部　行進曲「エル・キャピタン」（J.スーザ）

一般・大学の部　行進曲「大空」（須摩洋朔）

●中学校の部

東川中学校吹奏楽団／星 隆夫（北海道・28 名、5 位）

　序曲「十字勲章」（ガリベール）

紅葉中学校吹奏楽団／三戸知章（関東・30 名、3 位）

　序曲「女神イシターの凱旋」（J.オリヴァドーティ）

蒲郡中学校吹奏楽団／山本 誘（東海・28 名、1 位）

「ペルシャの市場にて」（ケテルビー）

上京中学校吹奏楽団／山下清孟（関西・29 名、4 位）

「ハンガリー舞曲第 6 番」（J.ブラームス）

宮之城中学校吹奏楽団／井上 了（西部・30 名、2 位）

幻想曲「荒城の月」（三戸知章編）

●高等学校の部

旭川商業高等学校吹奏楽部／早勢宗雄（北海道・30 名、5 位）

行進曲「忠誠」（J.スーザ）

大宮工業高等学校吹奏楽団／秋山紀夫（関東・30 名、2 位）

音楽物語「ガラスの靴」（P.ヨーダー）

東邦高等学校吹奏楽団／稲垣伸哉（東海・30 名、3 位）

序曲「アンフィオン」（E.シュミット）

天理スクールバンド／矢野 清（全関西・30 名、1 位）

---

[9] 全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』、2019 年、68～69 頁を参照。団体名の横の名前は指揮者名を示す。

組曲「ルーマニア民族舞曲」（B.バルトーク）

片渕少年吹奏楽研究会／宮副吉彦（西部・40 名、4 位）

円舞曲「カルメン・シルバー」（イヴァノヴィッチ）

●職場の部

富士製鉄室蘭吹奏楽団／高橋沢五郎（北海道・28 名、1 位）

喜歌劇「軽騎兵」序曲（F.スッペ）

日本鉱業株式会社日立本山吹奏楽団／軍司恒雄（関東・30 名、2 位）

歌劇「椿姫」抜粋（G.ヴェルディ）

旭化成旭陽会吹奏楽団／谷村正光（西部・30 名、3 位）

音楽物語「ガラスの靴」（P.ヨーダー）

●一般・大学の部

蒲郡中学校 OB 吹奏楽団／山本 誘（東海・28 名、1 位）

序曲「アポロの神」（ヴィオロット）

上京中学校 OB 吹奏楽団／山下清孟（全関西・30 名、2 位）

歌劇「タンホイザー」大行進曲（R.ワーグナー）

☆特別演奏

池田市立呉服小学校吹奏楽部／嶋 泱（28 名）

行進曲「歓喜」（チュリーヌ）

☆賛助特別演奏

大阪市音楽団・大阪府警察音楽隊・大阪府音楽団合同（95 名）

行進曲「旧友」（タイケ）／指揮　東 信太郎

「オクラホマ」（ロジャース）／指揮　山口 貞

「交響曲第 4 番」フィナーレ（チャイコフスキー）／指揮　辻井市太郎

自由曲は第二次世界大戦中のレパートリーとは打って変わり海外作品およびクラシックの編曲作品が多数を占めるようになったが、むしろ 1930 年代のレパートリーへ戻ったような様子でもある。課題曲も同様に、英米の作曲家の作品が取り上げられている。また《行進曲「大空」》は須摩洋朔が 1951（昭和 26）年の警察予備隊創立一周年祝賀観閲式での演奏曲として作曲した楽曲であり、この頃の課題曲は全て既存の楽曲から選ばれていた。それでは、戦前に作曲された楽曲は果たして全く演奏されていなかったのであろうか。ここで、戦後の吹奏楽コンクールの地方・全国大会の演奏記録から、戦前の吹奏楽曲リストに掲載の楽曲の演奏記録を示す。

表 5.5　吹奏楽コンクール全国大会および各地区大会における演奏記録[10]

瀬戸口藤吉　《行進曲「軍艦」》	
1956（昭和 31）年　西部支部大会　高等学校 A 部門	福岡県立修猷館高等学校
1963（昭和 38）年　西部支部大会　中学校 A 部門	豊後高田市立高田中学校

江口源吾　《幻想曲「芳春の幻」》	
1960（昭和 35）年　四国支部大会　職場 A 部門	国鉄四国支社

佐藤長助　《蘇る民族》	
1960（昭和 35）年　全国大会　高等学校 A 部門	東邦高等学校
1962（昭和 37）年　関東支部大会　高等学校 A 部門	千葉県立千葉工業高等学校

大沼 哲　《行進曲「立派な青年」》[11]	
1956（昭和 31）年　関東支部大会　中学校 A 部門	北区立稲付中学校
1956（昭和 31）年　関東支部大会　中学校 A 部門	日立市立助川中学校
1956（昭和 31）年　東海支部大会　中学 A 部門	蒲原町立蒲原中学校

[10] 参照：吹奏楽コンクールデータベース – Musica Bella. http://www.musicabella.jp/concours/ . 2021 年 4 月 10 日参照。

[11] 2011（平成 23）年、第 54 回中部日本吹奏楽コンクール課題曲としても使用されている。

片山正見　《組曲「三つの港風景」》	
1959（昭和 33）年　東海支部大会　高等学校 A 部門	静岡県立浜松商業高等学校

徳田三郎　《組曲「南の幻想」》	
1957（昭和 32）年　西部支部大会　高校 A 部門	山口県立水産高等学校
1965（昭和 40）年　西部支部大会　高校 A 部門	筑紫工業高等学校
1966（昭和 41）年　西部支部大会　職場 A 部門	ブリヂストンタイヤ久留米工場吹奏楽団

水島数雄　《行進曲「希望に燃えて」》	
1953（昭和 28）年　第 2 回関東吹奏楽コンクール中学校の部課題曲	
1956（昭和 31）年　西部支部大会　職場 A 部門	鹿児島信用金庫

吉本光蔵　《君が代行進曲》	
1956（昭和 31）年　北海道支部大会　中学 A 部門	紋別市立紋別中学校
1956（昭和 31）年　西部支部大会　中学 A 部門	志免町立志免中学校

このようにコンクールの記録からは、回数は少ないものの 1950～1960 年代には依然として戦前に作曲された吹奏楽曲が演奏されていることがわかる。

（3）録音・出版記録

さらに 1950〜1960 年代には、次のような戦前の楽曲が収録されたレコードが販売されている。1951（昭和 26）年 1 月に、キングレコードよりキング大吹奏楽団の演奏で《君が代》と《君が代行進曲》のレコード[12]が、同年 9 月にはコロムビアより、コロムビアブラスバンドの演奏で《君が代行進曲》と《新しい日の行進曲》（古関裕而作曲）の戦後教育盤レコード[13]が発売されている。1952（昭和 27）年 2 月には、コロムビアから、「日本ブラスバンド」演奏の「日本行進曲集」として《行進曲「軍艦》》と《行進曲「暁に祈る」》[14]、《君が代行進曲》と《敷島艦行進曲》[15]、《愛国行進曲》と《愛馬行進曲》[16]のレコードが発売されているが、実態は戦前の海軍軍楽隊や陸軍軍楽隊の演奏のレコードの再発売であった[17]。1950 年代後半からは、消防庁音楽隊、陸上自衛隊音楽隊の演奏で戦前の吹奏楽曲を収録したレコードが多数発売されている[18]。1961（昭和 36）年にフランスのギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団が来日した際には、《行進曲「軍艦」》、《君が代行進曲》、《行進曲「立派な青年」》などが録音[19]された。

---

[12] 品番は「C649」。

[13] 品番は「AK172」。

[14] 品番は「A1337」。

[15] 品番は「A1338」。

[16] 品番は「A1339」。

[17] 筆者が確認したところでは、《敷島艦行進曲》は「コロムビア 33795（海軍軍楽隊・内藤清五指揮）」と、《愛馬進軍歌》（須摩洋朔：《行進曲「愛馬進軍曲」》は「コロムビア 33793（陸軍軍楽隊・田村明一指揮）」と、《君が代行進曲》はコロムビア 32064（海軍軍楽隊・内藤清五指揮）と、《愛国行進曲》（斉藤丑松：《行進曲「愛国」》）はコロムビア 30001（海軍軍楽隊・内藤清五指揮）と、《軍艦行進曲》は「コロムビア 29837（海軍軍楽隊・内藤清五指揮）」と同一音源であった。

[18] 例えば、『日本行進曲集 第三集』（コロムビア：AL-149）（演奏：陸上自衛隊中央音楽隊、須摩洋朔指揮）には、《軍艦行進曲》、《君が代行進曲》、《敷島［艦］行進曲》、《愛国行進曲》などが収録されている。

[19] 収録レコードは『ギャルド・レピュブリケーヌ 日本マーチ集』（品番は「エンジェル（東芝音楽工業）：YDA5001）)。

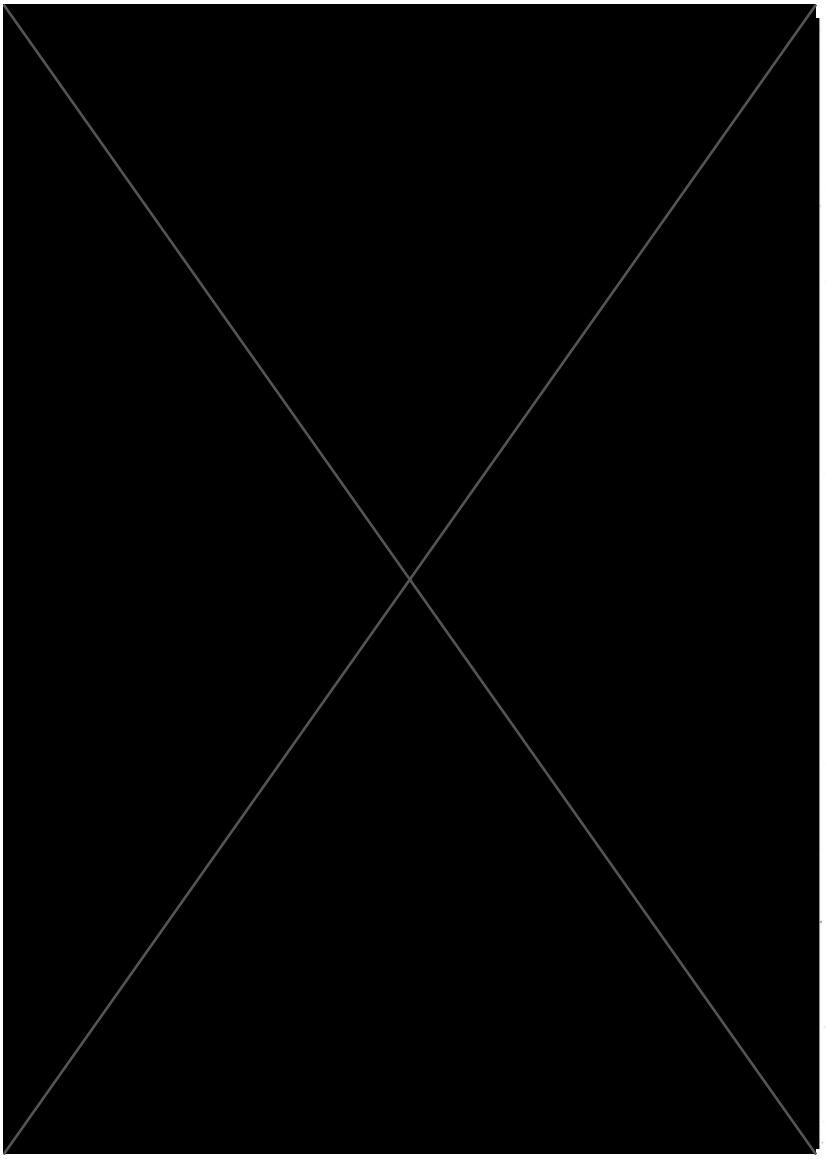
戦後の楽譜販売の状況としては、1951（昭和 26）年頃に共同楽譜出版社、1952（昭和 27）年に音楽之友社が吹奏楽譜の出版を開始した。その際、編成を現代（当時）のバンドに合わせ編曲が行われていた。1960 年代までには、表 5.6.の戦前の楽曲が、改題を行うなどして戦前の要素を取り除きながら再出版されている。また、吹奏楽専門雑誌『バンドジャーナル』（1959（昭和 34）年創刊）の付録として収録されている楽譜もある。

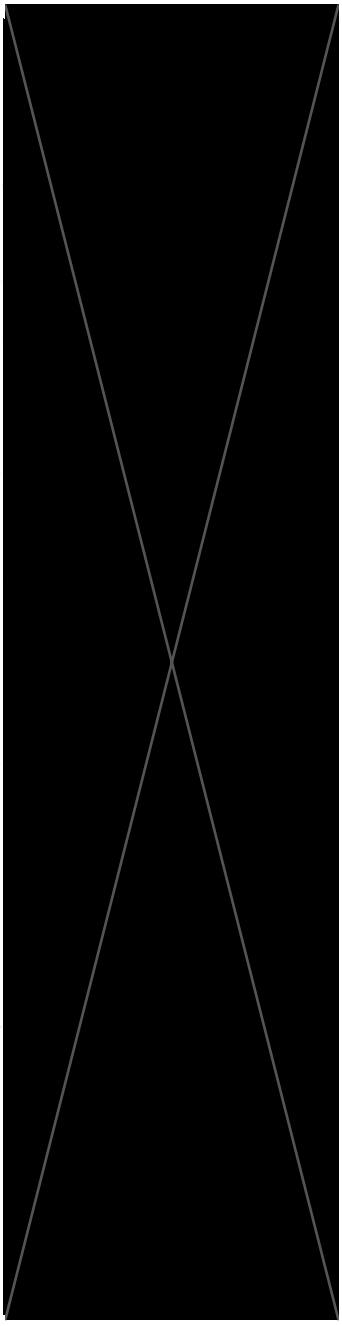
表 5.6　1960 年代までに出版された戦前の吹奏楽曲一覧

共同音楽出版社	
吉本 光蔵　《君が代行進曲》	
大沼 哲　《行進曲「立派な青年」》	《行進曲「立派な兵隊」》を改題
瀬戸口藤吉　《行進曲「軍艦」》	
水島数雄　《行進曲「希望に燃えて」》	
須摩洋朔　《行進曲「少年旗手」》	戦前は「明石丈夫」名義で発表
渡辺永吉　《行進曲「威風堂々」》	

音楽之友社	
吉本光蔵　《君が代行進曲》	
山本銃三郎　《凱旋ポルカ》	
瀬戸口藤吉　《行進曲「軍艦」》	
水島数雄　《行進曲「希望に燃えて」》	
深海善次　《行進曲「空の王者」》	《行進曲「進め荒鷲」》を改題
深海善次　《行進曲「青空高く」》	
服部逸郎　《トランペット・マーチ》	《行進曲「大好きな兵隊さん」》を改題

『バンドジャーナル』付録	
1962（昭和 37）年 2 月号	海軍軍楽隊名義で発表した《円舞曲「薫る菊花」》を改題
片山正見　《円舞曲「富士を仰ぎて」》	
1963（昭和 38）年 5 月号	《行進曲「愛国」》のトリオを《愛国行進曲》から別曲に変更した楽曲
須摩洋朔　《行進曲「美しき祖国」》	
1963（昭和 38）年 9 月号	
八木 伝　《里踊》	
1966（昭和 41）年 11 月号	陸軍軍楽隊名義で発表した《行進曲「愛馬進軍曲」》を改題
須摩洋朔　《愛馬》	





1960 年代の楽譜広告

左）図 5.1　共同音楽出版社吹奏楽譜広告[20]

右）図 5.2　音楽之友社吹奏楽楽譜広告[21]

[20] 『吹奏楽研究』1964 年 3 月号、吹奏楽研究社、付録。

[21] 『バンドジャーナル』2 巻 2 号、音楽之友社、1960 年、47 頁。

第 2 節　1950 年代以降の吹奏楽曲の処遇

1950〜1960 年代は、前述のコンクールや放送の再開のほか、様々な吹奏楽活動が復活を経て新たな進歩を始めた時期であった。1951（昭和 26）年には、警察予備隊と海上保安庁に音楽隊が創設され、組織の変遷を経て 1954（昭和 29）年にそれぞれが陸上自衛隊音楽隊、海上自衛隊音楽隊となった。また、1957（昭和 32）年には航空自衛隊にも音楽隊が創設され、各自衛隊音楽隊の活動が始まっている。

1949（昭和 24）年に学制改革により大学に昇格した東京藝術大学では、早くも 1950（昭和 25）年頃に当時助教授であった山本正人を中心として、非公式ながら吹奏楽研究部が創設された。翌 1951（昭和 26）年 10 月 17 日に演奏会を開催し、これを第 1 回として吹奏楽定期演奏会が開催されるようになった[22]。この時期には、各専門音楽大学でも管楽器科の拡大とともに吹奏楽活動が始まっている。1963（昭和 38）年には、山本を中心にプロ吹奏楽団である東京吹奏楽団が創立されている。

このような中で、戦前の両軍楽隊を中心として成立した吹奏楽から、新たな形態をもって吹奏楽の制度を整備しようとする動きが現れた。

堀内敬三は、終戦後間も無くの時期に以下のように記述している。

> 新しい日本は軍国調を一切拭い去って、明るい平和な文化の国にならねばならない。吹奏楽も、明るい平和な文化的な音楽を大衆に贈る美しい使命に蘇るべきである。
> …（中略）…
> とは云え、戦争中に流行したような軍国的な吹奏楽は全然やめるべきである。人の心を戦争に向って駈り立てるものは総てもう要らないどころか有ってはならない。
> …（中略）…
> 音楽と云う名を附けるのに恥かしいような行進曲や宣伝歌曲などをいいかげんに吹きまくって、太鼓の音でドンチャンドンチャンと誤魔化して行くような吹奏楽はもうやめようではないか。吹奏楽はそんな低級なものではない筈だ。
> …（中略）…
> 今の場合、日本で演奏してならないのは、「愛国」「軍艦」「太平洋」「愛馬」其の他多くの軍隊礼讃の行進曲や戦争を記念する行進曲や軍歌等であり、また「旧友」「槍と刀」「カ

[22] 『東京芸術大学百年史　演奏会編 第 3 巻』、92〜93 頁。

ール王」「双頭鷲」のような獨逸の行進曲（シューベルトの軍隊行進曲は古典だから別として）である。こう云う曲は軍国主義的な連想を断ち切れないから演奏を差控えなければならない。アメリカやイギリスの行進曲は多く平和の時の産物で平和の目的に用いられていたのだから別であるが、誰にとっても戦敗の思い出は苦いのだから戦敗に一番縁の深い軍国主義的な音楽は、封じ去るのが当り前である。

…（中略）…

吹奏楽の編成について是まで長い間の癌であった陸軍式・海軍式の差別は、今こそ改めて一つの式に統一してしまわねばならぬ。楽器の名も二通り、編成も二通り、編曲法も二通りと云うのは一つの国としてまことにをかしな事である。

…（中略）…

将来の問題として公平に考えて一番妥当だと思うのはアメリカ式の編成である。これは金管楽器の種類が一番尠く、編成が一番簡単であってしかも良く鳴るからである。それに今後アメリカの譜の輸入が当然多くなる筈と思われるから、是を採るのがよいと思う。

従来の海軍式編成は殆どアメリカ式であった。ちがう点として海軍式ではユーフォニウムの外にテノルホルンを使っていたがテノルホルンは不必要であろう。

従来の陸軍式編成は金管が多種類且つ多人数すぎた。これも技倆が良くて且つ多人数の団体ならば良いが、三十人やそこらの素人団体では短所ばかり目立ってしまう。但し陸軍式に含まれる小バスは素人団体では大バスの代用として有用な場合があるから、これを代用と云う意味で保存してよく、また陸軍式では金管の低音楽器を移調式にしているが此の方法も素人団体では保存（ただ移調式の場合は高音部譜表を使うことにして）することに意味があると思う。

楽器の名は英語式に統一してよかろうと思う。従前でも民間では英語式を一番多く使って居て、陸海軍それぞれの名称は却って解りにくかったのである。調子の名などは日本語が一般に適用するからそれが良い。

吹奏楽の指導者は是までの状態から脱却し新らしい立派な吹奏楽をつくる責任がある。平和の利器としての吹奏楽の使命は大きい。[23]

この記事は、連合国軍占領下かつ吹奏楽活動の再開の見込みが立たない時期のものであるが、従来の軍楽隊の制度から脱却し、アメリカ式への切り替えを行うことが強く推奨され

[23] 堀内敬三「吹奏楽の再建と革新」、『音楽の友』4 巻 1 号、1946 年、36〜38 頁。

ている。「日本で演奏してはならない」として示されている楽曲からは、当時の日本人の中でどのような楽曲が軍国主義的な楽曲であると捉えられていたかがわかる。アメリカ式編成の推奨理由として、編成のしやすさ（金管楽器の少なさ）と、アメリカからの楽譜の輸入が増えることを挙げており、従来の編成の金管楽器の多さを改善すべきとしている。尚、堀内は前述の通り全日本吹奏楽連盟の戦後最初の理事長として、復興を担うこととなる。

また、1951（昭和 26）年に発足した警察予備隊では、初代隊長の須摩洋朔によっていわゆる旧海軍式（ドイツ・アメリカ式）の編成が導入された。須摩は前述の通り陸軍軍楽隊出身であり、「将来アメリカ軍から支援のあることを予期し、長い間慣れてきた陸軍式を捨て、海軍式を採用した。しかし、アメリカ軍からの援助はなかった。」[24]と編成決定の経緯を述べているものの、このことが後の編成の統一化への重要な契機の一つとなったことは事実である。

1950〜1960 年代には、アメリカから軍楽隊が多数来日し各地で演奏会を開催し、軍楽隊員が指導に当たることで、日本の音楽関係者にアメリカの吹奏楽曲や演奏法を広めている。この時期について、チューバ奏者の大石清は以下のように回想している。

> このように吹奏楽の先進国であるアメリカよりバンドがきたり、指導者の来日がふえ、資料が日本に多くもたらされてきたことは、今までのようにヨーロッパの軍楽隊から学んだ日本の吹奏楽に新しいあり方を考えさせ、吹奏楽に対する認識をあらたにさせてくれた。[25]

---

[24] 大石清「アマチュアバンドのあゆみ（1945 年以後）」、『吹奏楽の編成と歴史』、167 頁。

[25] 同前、198〜199 頁。

1960 年代に入ると、アメリカへの吹奏楽視察や、アメリカ人講師による指導者講習会などを通して、さらにアメリカ式の吹奏楽が日本に浸透することとなった。1965（昭和 40）年頃のヤマハの楽器編成表では、金管楽器の種類は戦前よりも減少し、既に現在の標準編成化の様子が見られる。

表 5.7　ヤマハのバンド編成表[26]

	バンド編成表（ヤマハ）							
	15名	20名	25名	30名	40名	45名	50名	64名
ピッコロ	1	1	1	1	1	1	1	1
フルート		1	1	1	2	2	2	3
オーボー						1	1	2
E♭クラリネット				(1)	(1)	(1)	1	1
B♭クラリネット	3	5	6	8	10	12	14	18
アルトクラリネット						1	1	1
バスクラリネット					(1)	1	1	2
バズーン							1	2
アルトサキソホーン		1	1	1	2	2	2	2
テナーサキソホーン			1	1	1	1	1	1
バリトンサキソホーン				1	1	1	1	1
コルネット	2	2	2	3	3	4	4	6
トランペット		1	2	2	2	2	2	2
メロホン 又は アルト / フレンチホルン	2	2	3	3	4	4	4	4
テナートロンボーン	2	2	2	2	2	3	3	4
バストロンボーン			1	1	1	1	1	1
ユーホニューム 又は　バリトン	1	1	2	2	2	2	2	3
B♭バス 又は E♭バス / B♭スーザホン	1	1	1	2	2	2	3	3
小太鼓	1	1	1	1	1(2)	1(2)	2	2
大太鼓	1	1	1	1	1	1	1	1
シンバル	1	1	1	1	1	1	1	1
ティンパニー					1	1	1	1

吹奏楽コンクールでは、年々編成の上限が拡大していったこともあり[27]、より大規模の吹奏楽団が実現可能となり楽曲レパートリーの幅が広がった。

---

[26] 参照：『バンドジャーナル』7 巻 8 号、1965 年、付録。

[27] 吹奏楽コンクールの編成に関する特記事項としては、1961 年（昭和 36）度の吹奏楽コンクールからはストリング・ベースが使用可能となったほか、全日本吹奏楽コンクールの人数制限は、開始当初の 1956（昭和 31）年が各部門 30 名、翌 1957（昭和 32）年に 40 名、1964 年（昭和 39）年に大学、高校を 45 名（翌年に高校を 40 名に戻す）、1974（昭和 49）年に中学・高校を 45 名、大学職場 55 名、一般 60 名と順次増加した。以降現在に至るまで増加を続けている（秋山紀夫『吹奏楽の歴史 : 学問として吹奏楽を知るために』（ミュージックエイト、2013 年、94〜99 頁。）の年表を参照）。

このような状況の中で、日本人作曲家による吹奏楽曲の創作活動も徐々に再開の兆しが見えてきた。

第二次世界大戦末期の 1944（昭和 19）年に、東京音楽学校から陸軍戸山学校に入隊した学生たち[28]は、その多くが戦後の日本の音楽界を牽引していくことになるが、その中でも奥村一（1925（大正 14）年〜1994（平成 6）年）、斎藤高順（1924（大正 13）年〜2004（平成 16）年）、早川博二（1925（大正 14）年〜2004（平成 16）年）などの人材が、戦後に吹奏楽曲を手がけていくこととなる。また團伊玖磨（1924（大正 13）年〜2001（平成 12）年）が 1959（昭和 34）年に作曲した《祝典行進曲》[29]は、今日に至るまで日本の吹奏楽行進曲の主要なレパートリーである。音楽学校出身者以外の軍楽隊員も、須摩洋朔、片山正見ら戦前からの作曲家のほか、名取吾朗（1921（大正 10）年〜1992（平成 4）年）らも吹奏楽曲の作曲家として活躍した。1964（昭和 39）年の東京オリンピックでは吹奏楽が大いに活用され、各イベントにおいて、自衛隊、警察、消防、大学の各吹奏楽団のほか、アマチュア・バンドも総出で演奏を行なった[30]。大会用の吹奏楽曲は、今井光也の《オリンピック東京大会ファンファーレ》のほか、古関裕而、團伊玖磨、清水脩、小倉朗らが手がけている[31]。

---

[28] 東京音楽学校生徒の陸軍軍楽隊入隊については、『東京芸術大学百年史　音楽学部編 第 2 巻』、374〜399 頁に詳しい記述がある。この時、陸軍富山学校に入学した生徒は、芥川也寸志、伊藤栄一、石津憲一、内田富美彌、奥村一、梶原完、北爪規世、斎藤高順、鈴木良一、團伊玖磨、早川博二、萩原哲昌、藤島義勝、沼田元一の十四名であった（同前 375〜6 頁）。そのうち、芥川、奥村、斎藤、團の作曲を専攻していた 4 名については、斎藤による次のような記述がある。「もと作曲科で勉強をしていた團さんや私たちは四人とも一人ずつピアノ付の個室を与えられ、作曲作業を命ぜられました。リムスキー＝コルサコフの管弦楽法などを参考にしながら、吹奏楽の曲を書くと仲間の隊員がパート譜を書いて、すぐ大編成で音を出してくれるのです」（同前 379 頁）。警視庁音楽隊所蔵の旧陸軍軍楽隊の資料は作曲者名が記載されていないものが多く、この 4 人が作成した楽曲を特定することは不可能であったが、各パート譜には浄書を担当した隊員名（芥川、斎藤など）が記載されていた。

[29] 大石清「アマチュアバンドのあゆみ（1945 年以後）」、『吹奏楽の編成と歴史』、199 頁。

[30] 同前、203 頁。

[31] オリンピック関連楽曲は、レコード『オリンピック・ハイライト』（日本クラウン：LW-5094、1965 年）、東京オリンピック実況中継レコード『東京オリンピック COLUMBIA OLYNPIC RECODS』（コロムビア：ADM-1〜5、1965 年）などで聴くことができる。

吹奏楽コンクールの課題曲は、戦後の復活後しばらくは海外作品を使用していたが、1962（昭和 37）年度には日本人作曲家に作品を依頼し、中学部門課題曲として片山正見《行進曲「若人」》、その他の部門の課題曲として須摩洋朔《行進曲「鬨の声」》がそれぞれ取り上げられている（表 5.8.）。1964（昭和 39）年度の課題曲では作曲家に行進曲以外の形式が依頼され、中学校部門用に石井歓（1921（大正 10）年〜2009（平成 21）年）の《序曲「曠野をゆく」》、その他の部門用に兼田敏（1935（昭和 10）年〜2002（平成 14）年）の《バンドのための楽章「若人の歌」》が作曲された。その後のコンクールの課題曲は、1965（昭和 40）年度と 1970（昭和 45）年度が海外作品であった以外は、日本人の作品が取り上げられるようになり、1972（昭和 47）年度からは課題曲の一般公募で選ばれたものも使用されるようになった。1960 年代の課題曲を手がけた日本人としては、川崎優（1924（大正 13）年〜2018（平成 30）年）、小川原久雄(生没年不明)、石井歓、兼田敏、大栗裕（1918（大正 7）年〜1982（昭和 57）年）、岩河三郎（1923（大正 12）年〜2013（平成 25）年）、服部公一（1933（昭和 8）年〜 ）ら新興の作曲家のほか、佐藤長助、陶野重雄、塚原晢夫ら戦前から名前の見られた作曲家がいる。

表 5.8　1950～1960 年代の全日本吹奏楽コンクール課題曲と出版（制作）一覧[32]

年度	曲名（部門）　中・・中学　高・・高校　職・・職場 大・・大学　一・・一般	作曲者／ 編曲・補作	出版（制作）
1956（昭 31）	行進曲「トム・タフ」（中）	Binding	音楽之友社
	行進曲「花のほほえみ」（高）	Cambel	共同楽譜
	行進曲「エル・キャピタン」（職）	J.P.Sousa	音楽之友社
	行進曲「大空」（大一）	須摩洋朔	共同楽譜
1957（昭 32）	行進曲「ミリタリー・エスコート（中）	H.Bennett	共同楽譜
	行進曲「剣と槍」（高）	Starke	共同楽譜
	行進曲「マラソン」（職）	Borgen	共同楽譜
	行進曲「マンハッタン・ビーチ」（大一）	J.P.Sousa	音楽之友社
1958（昭 33）	行進曲「先頭指揮官」（中）	H.Bennett	共同楽譜
	行進曲「前衛隊」（高）	J.O.Humu／全日吹連	音楽之友社
	行進曲「ウェリントン将軍」（職）	W.Zehle／全日吹連	音楽之友社
	行進曲「剛毅潔白」（大一）	C.Teike／全日吹連	音楽之友社
1959（昭 34）	行進曲「R.M.B.」（中）	R.C.Jarrett	Volkwein
	「祝典行進曲」（高）	團 伊玖磨	音楽之友社
	行進曲「グロリアス・ユース」（大職一）	H.S.Whistler	共同楽譜
1960（昭 35）	行進曲「リトル・ジャイアンツ」（中）	H.Moon／全日吹連	音楽之友社
	行進曲「スカイ・ウェイ」（高大職一）	P.Yoder	音楽之友社
1961（昭 36）	行進曲「ブースター」（中）	J.G.Klein／Hayes	Carl Fischer
	行進曲「ジュビリー」（高大職一）	E.D.Gorldman	Leo Feist
1962（昭 37）	行進曲「若人」（中）	片山正見	音楽之友社
	行進曲「鬨の声」（高大職一）	須摩洋朔	音楽之友社
1963（昭 38）	行進曲「朝のステップ」（中）	小川原久雄	音楽之友社
	行進曲「希望」（高大職一）	川崎 優	音楽之友社
1964（昭 39）	序曲「曠野をゆく」（中）	石井 歓	音楽之友社
	バンドのための楽章「若人の歌」（高大職一）	兼田 敏	音楽之友社
1965（昭 40）	序曲「ティアラ」（中）	F.D.Cofield	Hal Leonard
	歌劇「パリスとヘレナ」序曲（高職）	C.W.Gluck／Barnes	東亜音楽社
	「シンフォニック・プレリュード」（大一）	A.Reed	東亜音楽社

[32] 参照：『全日本吹奏楽連盟 80 年史』、457 頁。

1966（昭 41）	「学園序曲」（中）	佐藤長助	音楽之友社
	「吹奏楽のための小狂詩曲」（高大職一）	大栗 裕	音楽之友社
1967（昭 42）	吹奏楽のための序曲「北の国から」（中）	服部公一	音楽之友社
	「バンドのためのディヴェルティメント」（高大職一）	兼田 敏	音楽之友社
1968（昭 43）	吹奏楽のための「序・破・急 ト調」（中）	陶野茂雄	音楽之友社
	吹奏楽のための幻想曲「移り気な五度のムード」（高大職一）	塚原晢夫	音楽之友社
1969（昭 44）	吹奏楽のための小品「ふるさとの情景」（中）	川崎 優	音楽之友社
	吹奏楽のための音詩「南極点への序曲」（高大職一）	岩河三郎	音楽之友社
1970（昭 45）	オラトリオ「サムソン」序曲（中）	G.F.Handel／P.Whear	東亜音楽社
	「音楽祭のプレリュード」（高大職一）	A.Reed	東亜音楽社
1971（昭 46）	行進曲「輝く銀嶺」（中）	斎藤高順	カワイ
	行進曲「太陽の下に」（高大職一）	奥村 一	カワイ
1972（昭 47）	シンコペーテッド・マーチ「明日に向かって」（中）	岩井直溥	全日吹連
	「シンフォニック・ファンファーレ」[33]（高大職一）	三沢栄一	全日吹連

1967（昭和 42）年に創立した日本吹奏楽指導者協会（JBA）は、翌 1968（昭和 43）年に吹奏楽専門の作曲賞の募集を行い、岩河三郎作曲の《吹奏楽のための音詩「冬山にゆける若者の祈り」》が受賞した[34]。この賞は以後継続し、1975（昭和 50）年からは「下谷賞」と改称し 2006 年（平成 18）年まで公募が続けられた[35]。このように 1950～1960 年代の時期には、吹奏楽編成にアメリカ式の基準が設けられ、様々な活動が開始したことで、現在に繋がる吹奏楽曲創作の流れができたのである。

[33] 課題曲公募最初の入選作品。

[34] 『吹奏楽の編成と歴史』、212 頁。

[35] 2021（令和 3）年現在は、21 世紀の吹奏楽実行委員会主催のイベント「響宴」に選出された作品の中から JBA 下谷賞を贈呈する形式となっている。

結章

第 1 節　本研究の総括

第 1 章では、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲を収集・リスト化することによって、これまで前例のない戦前の楽曲レパートリーの全体像の把握を試みた。このリストの分析の結果からは、第二次世界大戦以前に日本人によって作曲された吹奏楽曲のレパートリーのほとんどが行進曲であったことの裏付けが取れた一方、行進曲以外の楽曲ジャンルも多様に展開されている様子が明らかとなった。また作曲者には軍楽隊出身者のみならず、軍楽隊関係以外の人間の名前も多数見られ、第二次世界大戦期以前に既に吹奏楽が日本の主要な音楽ジャンルとして定着していた様子を窺うことができた。

第 2 章では、第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽編成について、当時楽器会社が雑誌や書籍で提示した編成表を比較、整理した。結果として、大規模な軍楽隊の編成と比較し、民間の編成は小編成で運用されており、吹奏楽曲が創作されていた場である軍楽隊と、民間との間には大きな隔たりがあったことがわかった。

第 3 章では、明治期から第二次世界大戦期までの日本の吹奏楽の発展を辿り、時代ごとの作品と作曲家を、出来事とともに整理した。初期は海外の作曲家による吹奏楽曲、もしくは管弦楽曲の編曲作品が主な楽曲レパートリーであり、当時の演奏会プログラムから見ても、日本人による作品が演奏されることは稀であった。しかし、ラジオでの吹奏楽放送の増加や、コンクールをはじめとした民間の活動の隆盛、さらには戦争期の奉国を目的とした楽曲献納運動などを通して、1930 年代から戦中期にかけて吹奏楽曲のレパートリーが急激に拡大していった様子が明らかとなった。

第 4 章の楽曲分析では、今回の調査によって入手した当時の楽譜を使用し、編成や作曲様式の調査、分析を通して、第二次世界大戦以前の楽曲から見える具体的特徴を探った。まず、当時最も多く作曲されていた行進曲に関して、軍楽隊関係者による楽曲は軍事関係の内容や国威発揚を感じさせる題名のものが多く、オリジナルの器楽曲として作られたものと、題名に関連する軍歌や国民歌を引用した楽曲の 2 パターンが存在した。さらに、軍歌や国民歌を引用した楽曲はその旋律の使用箇所からさらに 3 パターンの構造が存在し、創作にはある一定の様式がとられている事を述べた。

次に、前述の行進曲の様式に該当しない楽曲について、いくつか取り上げた。大沼哲の《奉祝前奏曲》は、楽曲構造の緻密さや長さにおいて同時代では類を見ない秀作であった。この楽曲では曲中君が代の旋律を用いているが、君が代の旋律を日本の象徴として、動機や主題に用いた楽曲は他にもあり、当時の作曲家の中では主要なモチーフであったと言える。橋本国彦の《満洲大行進曲》は楽曲の中間部にコラールを挟むなど、演奏会形式での上演を目的とした楽曲という点で価値のある楽曲であった。

喇叭鼓隊編成で書かれた楽曲の分析では、ブラスバンド編成と比較して編成上自由度の低い分、曲調が軍隊喇叭調になってしまうものの、喇叭鼓隊の制限された音組織の中でリズムや強弱の変化を駆使してキャラクターの対比を行うことで、楽曲が成立するよう工夫している様子が見られた。喇叭鼓隊編成とブラスバンドの合同編成として書かれた《行進曲「盟友」》では、喇叭鼓隊とブラスバンドが融合した形のオーケストレーションが取られていた。

収集した楽譜の編成を比較すると、ブラスバンド編成は、現在とは異なり様々な編成形態が見られ、前述のように編成の特性を生かした作曲が試みられていた一方、統一化された編成が存在しないことによる不具合（特に移調管による記譜法の相違）が大きな問題となっていたことを再確認した。その要因としては、当時の吹奏楽の出版楽譜は「編曲」が前提で販売され、必ずしも各団体で楽譜上指定された楽器編成で演奏されることを目指していなかったため、編成を統一する機会を逸してしまったのではないか、と指摘した。

第 5 章では、戦後の吹奏楽の形態の変遷を考察した。ポツダム宣言受諾の翌月から再開した吹奏楽放送では、海外の作品、特にアメリカの吹奏楽作品を多く放送していたが、時局に配慮しつつも日本人作曲家の作品も依然として取り上げていた。一方で戦後の混乱の中、アマチュアの吹奏楽の活動はしばらくの間満足に行うことができず、1950 年代の各地区での吹奏楽コンクールの開催を皮切りに、順次再開していくこととなった。当時のコンクールで取り上げられた楽曲レパートリーは、1940 年代の様子とは異なり、海外作品及クラシック作品の編曲が多数を占めていた。しかし、吹奏楽コンクールの演奏記録を見る限りでは、回数は少ないものの、戦前に日本人作曲家によって作曲された吹奏楽曲が演奏されている様子が明らかとなった。

1950～1960 年代には、海軍軍楽隊や陸軍軍楽隊演奏の戦前の楽曲が収録されたレコードの再販や、消防庁音楽隊、陸上自衛隊音楽隊の演奏で録音された戦前の吹奏楽曲のレコードがいくつか販売された。さらに同時期には各出版社より、戦前の吹奏楽作品の楽譜が改題を

行うなどして戦争の要素を取り除きながら販売されていた。このことから、戦前に創作された吹奏楽曲は、上記の事実から見ても戦前の否定として必ずしも一斉に排除されたわけではない、ということを確認した。

第 2 節　吹奏楽曲における戦前・戦後の連続性と非連続性

さて、第二次世界大戦以後の過程を経て、現代は最も吹奏楽活動が盛んな時代であると言えるが、なぜ今日ではこれほど存在していたはずの戦前の楽曲のほとんどが、演奏される機会を失っているのだろうか。前述の通り、戦後直後の演奏記録では決して演奏されていないわけではなかった。谷村政次郎は、戦後の軍歌の規制の有無について次のように記載している。

> 連合国軍総司令部は、いろいろな「覚え書き」を出して占領政策を進めたが、どこをどう探しても「軍艦」をはじめとして、軍歌や戦時歌謡の演奏を禁止した[1]記録がない。また当時から吹奏楽界で演奏活動をしていた人からも、そのような記憶はないという証言を得ている。[2]

このように、何か厳格な規制があったというよりは、大衆側によるある種の配慮の下に自粛されていったのである。従来は、戦前の旧体制下で作られたという状況や、戦争・軍隊賛美の的性質から戦後に楽曲が排除されたとの考えにまとめられていたが、これまでの研究をもとに論説を加えてみようと思う。

第一に、放送記録に見られたように、戦前に軍楽隊名義で発表され、なおかつ戦後の時点で作・編曲者が不明であった作品は演奏が控えられてしまった、ということである。作曲者

---

[1] 連合国軍総司令部の宣伝用刊行物没収の対象に指定された楽譜は、以下の日本放送出版協会発行の国民歌謡の楽譜 13 種のみであった。

《英霊讃歌》、《興亜奉公の歌》、《誓》、《嗚呼北白川宮殿下》、《航空日本の歌》、《靖国神社の歌》、《燃えゆる大空》、《南方の歌》、《青年歌》、《空を征く》、《出征兵士を送る歌》、《紀元二千六百年頌歌》、《海を渡る荒鷲》（文部社会教育局編『連合国軍総司令部から没収を命ぜられた宣伝用刊行物総目録 : 五十音順』、文部省社会教育局、1949 年、418 頁。）

[2] 谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡』、大村書店、2000 年、180～181 頁。

名が明らかとなっている作品は戦後も演奏されている。または作曲家自身が吹奏楽作品の存在を抹消している場合もあるだろう。

第二に、楽譜の編成と出版の関係の問題である。前項に関連するが、軍楽隊名義で発表されたような楽曲は、戦後の再出版時に作曲者名が明記されるようになった。また、戦前の楽曲は前述の通り編成が統一されておらず、戦後に新たにアメリカ式編成を参考として規格化された中では、編曲した上で再出版する必要があった。さらに、戦前の楽曲はバンドごとの編曲が前提とされて出版されていたが、著作権等の法律やコンクールの制度の整備とともにそれは不可能になっていった。作曲者自体が、戦後に音楽活動をやめてしまった、死亡してしまったなどの理由から、再出版が働きかけられなかった例もあるだろう。また、喇叭鼓隊編成は戦後に編成自体が消滅してしまっている。

第三に、1950〜1960 年代の日本では、戦前の日本の楽曲のみならず、いわゆる「ミリタリー・マーチ」全体を低いものとみなす傾向があったことである。当時の雑誌には次のような記事がある。

課題曲に行進曲適否について

音楽コンクールに課題曲を用いる…ということは、絶対に必要な条件ではないのである。

…（中略）…

それが、いつとはなしに何となく、「ミリタリー・マーチ」を課題曲とするようになってずるずるとつづいた。

行進曲にもいろいろある。いろいろあるが、「ミリタリー・マーチ」というものは、芸術音楽の範疇に入れることはできない。

…（中略）…

しかしこれまで吹奏楽のコンクールに課題された「行進曲」は次の諸曲であった。これらの曲は、「ミリタリー・マーチ」としての評価は、必ずしも低いものばかりではないかも知れないが、コンサートの音楽としては決して通用しないものであった。

トムタフ、ミリタリー・エスコート、マンハッタンビーチ、マラソン、赤い翼、エルキャピタン、剣と槍、先頭指揮官、前衛隊、剛毅潔白、ウェリントン将軍、RMB、祝典、輝く若人、リトルジャイアンツ、スカイウエイ、ブースター、ジュビリー、etc…

これらの「ミリタリー・マーチ」を課題したことは、日本のアマチュア・バンド、特にその大部分である”スクール・バンド”の正しい方角への進路に障害であったことは、全国の、スクール・バンドの指導者が、誰一人として痛感しなかったものはないと思う。これを感じなかった指導者は、吹奏楽を、戦前のミリタリーバンドという観念から抜けきれていない思想の持ち主だけであろう。[3]

やめてほしい行進曲課題

…（中略）…

全日本が再建されて以来は、課題曲は、ミリタリー・マーチばかりが用いられるようになった。そして採点上の比重は、このミリタリー・マーチを六割、随意曲を四割として最近の数年は行われている。

吹奏楽に二つの種別がある。吹奏楽団もこれに従って二つの種別に大別される。その一つは、吹奏楽は、野外演奏効果の実用面を発揮することによる演奏を目標として編成されるものである。

…（中略）…

この種のバンドを集めてのコンクールの場合に、ミリタリー・マーチを課題するのは少しも妙ではないのである。

ところが、今日の吹奏楽は、上記のようなバンドの外に、厳然と区別されるべき、音楽的目標の、管楽器合奏体の吹奏楽が存在している。

…（中略）…

この種の吹奏楽は、その練習の目標が、絃を除いたオーケストラのたてまえをとるのが正しいのであって、ただ吹奏楽の特徴の故に、場合によっては野外の奏楽も行うけれども、これはあくまで第二義的なものとされなくてはならない。音楽芸術の実践を吹奏楽で行うことが主目的とされなくてはならない。

…（中略）…

それにもかかわらず、ブカドン行進曲の課題曲をおしつけているのは、吹奏楽連盟自体が、吹奏楽を他のオーケストラや合唱よりレベルの低い音楽と自認していると云わなくてはならない。

---

[3] 「ことしの吹奏楽コンクール課題曲と随意曲」、『月刊吹奏楽研究』1964 年 3 月号、3 頁。

しかもブカドンマーチに採点の比重を多くしているのである。我が国の吹奏楽を、真に、芸術的に向上させるためには、ミリタリー・ミュージックでない、芸術的、音楽的吹奏楽の方向を、各バンドに示す必要がある。

…（中略）…

次のコンクールの課題曲は、序曲、幻想曲、組曲、交響詩などから選ぶべきである。全曲でなくてもよい。曲中の一部分の二分か三分でやれるところをぬき出して課題してもよいであろう。

聴衆は座席できいている。行進しているのではない。それなのに吹奏楽の演奏会で行進曲を演奏するということ自体、少し変である。マーチをやらないでも、きかせる音楽は無限にある筈である。ましてや、コンクールで、マーチをドンガラとやらせることは、日本の吹奏楽の音楽的発展にブレーキをかけるように思われる。

ミリタリー・マーチは芸術ではない。[4]

上記の例のような過激なミリタリー・マーチ批判から、行進曲が大半であった戦前のレパートリーは、一部の主要な曲を残して殆どが演奏されなくなり、作曲家の名前も同時に忘れ去られていったのではないだろうか。加えて、行進曲以外のレパートリーは、第 4 章で取り上げたような機会音楽としての性質を持つことが多いということも、一つの大きな要因であろう。

以上の点から、第二次世界大戦以前に創作された吹奏楽曲が戦後に演奏されなくなった経緯を、次のように推測した。

まず、放送やコンクールでの演奏記録を見ても、戦後に一斉に楽曲が排除されたということではない。事実、《行進曲「軍艦」》、《君が代行進曲》のように、一定のステータスを持った楽曲は現在でも演奏され、広く認知されている。

日本では戦後、アメリカの吹奏楽を規範に、編成の規格化をはかった。一方で、1960 年代には、いわゆるシンフォニック・バンド化を指向し始め、日本人作品に限らないミリタリー・マーチ軽視のような考えも、行進曲が大多数の戦前の楽曲離れを後押ししたと考えられる。また戦前の楽曲は楽譜、演奏団体共に編成が不統一であるが故に、編曲を前提とするなど現在とは異なる感覚であった。この時期に、戦前の楽曲が、楽譜の出版や編成を見直すな

[4] 香河幾太郎「やめてほしい行進曲課題」、『月刊吹奏楽研究』1963 年 2 月号、25 頁。

どの「現代への適応化」がされなかったことに加え、1960 年代後半からの作曲公募の興りとともに、日本人による吹奏楽曲の創作が再び盛んになったため、戦前の楽曲は、戦後の編成の変化と規格化が進む中でレパートリーとして定着することができなかった。このことで、結果として戦前の吹奏楽曲は多くが復活の機会を逸することとなったのではないか、と考える。

第 3 節　課題と展望

現在の日本では、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲に対して純粋に音楽的観点から論じられ、評価されることが少ない。筆者は、その大きな要因が、調査可能な楽譜資料へのアクセスが限られていることであると、今回の調査から感じた。特に吹奏楽曲の資料は少なく、日本近代音楽館のような音楽専門の資料館にさえ、所蔵は限られている現状である。

今後の希望としては、このデジタル社会の中で、各所に散逸しているであろう、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲資料のアーカイヴ化が推進され、楽譜資料の調査が行いやすくなることで、先人たちの音楽的功績が広く認知されるような機会が来ることを期待したい。

さらに、楽譜調査が進むことで、作曲された当時の楽器編成による「復元演奏」の可能性も広がるだろう。その時、改めて第二次世界大戦以前の洋楽受容黎明期～発展期の中に日本独自の発想の下に作曲された楽曲の、より本質的な魅力に気がつくことができるのではないだろうか。

謝辞

まず初めに、日頃のレッスンでのご指導に加え、本研究を始めるにあたって背中を押して下さった、主任指導教員の小鍛冶邦隆先生に深く感謝いたします。

そして、副指導教員の三人の先生方、不慣れな私にきめ細やかな論文指導をして下さった塚原康子先生、調査の方法に関する適切なご助言を下さった橋本久美子先生、また一年間だけでしたが、私の研究に新たな視点を与えて下さった土田英三郎先生に、心より御礼を申し上げます。さらに、石川亮子先生にも、論文執筆に関する様々なご相談に乗っていただきました。ここまで順調に研究を進めることができたのも、日頃のレッスンや授業等で、諸先生方よりいただいた的確な助言と激励のおかげであると深く感じております。

谷村政次郎様からは、ご自身が進めておられた研究の成果を快くご提供してくださったのみならず、専門家の立場から、軍楽隊に関する様々な事項をご教授いただきました。谷村様とお会いできたことによって、今回の論文に完成に繋がったと言っても過言ではありません。ここに深く感謝の意を表します。

宮内孝子様には、大沼哲氏に関する非常に貴重な資料の数々をご提供いただきました。本当に有り難うございました。

海上自衛隊東京音楽隊（隊長：樋口好雄様）、警視庁音楽隊（隊長：佐藤親悟様）には、貴重な楽譜資料の調査に関しまして快諾をいただきました。また、渡邉大海様（海上自衛隊東京音楽隊）、佐野純也様（警視庁音楽隊）を始めとした隊員の皆様には、新型コロナウィルスの影響で業務に制限がある中でありながら、調査に多大なるご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

NHK 放送博物館、日本近代音楽館をはじめ、所蔵資料の調査にご協力いただいた諸機関にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

この他にも、様々な便宜を図って下さった斎藤順様、斎藤民夫様（斎藤高順氏ご子息）、大滝哲也様を始めとしまして、今回の調査にあたっては非常に多くの皆様にお世話になりました。改めまして、皆様に心から感謝いたします。本当に有り難うございました。

中嶋　達郎

参考文献

書籍・論文

秋山紀夫『吹奏楽の歴史 : 学問として吹奏楽を知るために』、東京：ミュージックエイト、2013 年。

阿部勘一、他『ブラスバンドの社会史 : 軍楽隊から歌伴へ』、東京：青弓社、2001 年。

大森盛太郎『日本の洋楽』（全 2 巻）、東京：新門出版社、1986 年。

音楽之友社編『吹奏楽の編成と歴史』、東京：音楽之友社、1983 年。（新版吹奏楽講座 7）

音楽之友社編『日本の作曲 20 世紀』、東京：音楽之友社、1999 年。（『音楽芸術』別冊）

音楽之友社編『別冊レコード芸術 Summer 1999』、東京：音楽之友社、1999 年。

楽水会編『海軍軍楽隊―日本洋楽史の原典』、東京：国書刊行会、1984 年。

管楽研究会編『紀元二千六百一年版 吹奏楽年鑑』、東京：管楽研究会、1941 年。

北原鉄雄編『管楽器・打楽器の実技』、東京：アルス、1936 年。（アルス音楽大講座 7）

ゴチェフスキ・ヘルマン他『近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究 : お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に』、平成 26〜30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、2019 年。

小森宗太郎、江木理一『鼓笛隊指導書並教則本』、東京：共益商社、1938 年。

佐野光司編『日本戦後音楽史・上 戦後から前衛の時代へ』、東京：平凡社、2007 年。

塩津洋子「『吹奏楽』の概念の変遷」、『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 10 巻、1992 年、29〜41 頁。

塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊所蔵楽譜目録 総譜篇」、『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 15 巻、1999 年、5〜76 頁。

塩津洋子「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」、『大阪音楽大学音楽研究所年報「音楽研究」』第 14 巻、1998 年、43〜80 頁。

全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 40 年史』東京：全日本吹奏楽連盟、1978 年。

全日本吹奏楽連盟編『全日本吹奏楽連盟 80 年史』東京：全日本吹奏楽連盟、2019 年。

大日本音楽協会編『昭和十六年度版 音楽年鑑』、東京：共益商社、1941 年。

田辺尚雄『明治音楽物語』、東京：青蛙房、1965 年。

田辺祥隆編『田辺隆太郎遺稿集』、東京：田辺球瓊子、1977 年。

谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡――日本吹奏楽史に輝く「軍艦マーチ」の真実を求めて』、東京：大村書店、2000 年。
谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム――日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』、東京：つくばね舎、2010 年。
谷村政次郎『海の軍歌と禮式曲――帝國海軍の音樂遺産と海上自衛隊』、東京：出版共同社、2015 年。
丹下聡子「陸軍第三師団軍楽隊による鶴舞公園での音楽会」、『愛知県立芸術大学紀要』第 48 巻、2018 年、169～181 頁。
塚原康子、平高典子「海軍軍楽隊長・吉本光蔵のベルリン留学日記」、『東京芸術大学音楽学部紀要』第 37 巻、2011 年、43～60 頁。
塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊：海軍軍楽長・吉本光蔵の明治 37・38 年日記から」、『東京芸術大学音楽学部紀要』第 40 巻、2014 年、71～89 頁。
東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』（全 11 巻、別巻 1）の音楽篇全 6 巻、東京：音楽之友社、1987～2003 年。
東京佼成ウィンドオーケストラ編『東京佼成ウィンドオーケストラ 60 年史』、東京：新潮社、2021 年。
戸ノ下達也著『音楽を動員せよ：統制と娯楽の十五年戦争』、東京、青弓社、2008 年。
日本著作権協会『文化人名録 昭和 32 年度版』、東京：日本著作権協議会、1957 年。
戸ノ下達也編『日本の吹奏楽史：1869～2000』、東京：青弓社、2013 年。
富樫康『日本の作曲家』、東京：音楽之友社、1956 年。
畑中良輔『音楽青年誕生物語――繰り返せない旅だから 2』、東京：音楽之友社、2004 年。
福田滋『日本の作曲家と吹奏楽の世界』、東京：ヤマハミュージックメディア、2012 年。
細川周平『近代日本の音楽百年：黒船から終戦まで』（全 4 巻）、東京：岩波書店、2020 年。
堀内敬三『音楽五十年史』（全 2 巻）、東京：講談社、1977 年。
宮内孝子『作曲家 大沼哲の生涯』、東京：音楽之友社、1993 年。
宮﨑刀史紀「皇紀二千六百年奉祝芸能祭に関する一考察」、『演劇研究センター紀要 I 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム 〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』第 1 巻、2003 年、238～226 頁。
文部社会教育局編『連合国軍総司令部から没収を命ぜられた宣伝用刊行物総目録：五十音順』、東京：文部省社会教育局、1949 年。

門馬直衛『日比谷公園音楽堂演奏曲目解説集 第一輯』、東京：岡田日栄堂、1926 年。
山口常光『ブラスバンド教本』、東京：管楽研究会、1935 年（1938 年に改訂再販）。
山口常光編『陸軍軍楽隊史 吹奏楽物語り』、東京：三青社、1973 年。
陸軍戸山学校『喇叭鼓隊教科書』、東京：共益商社、1928 年。
早稲田大学紳士録刊行会編『早稲田大学紳士録 昭和 15 年度版』、東京：早稲田大学紳士録刊行会、1939 年。

事典

日外アソシエーツ編集部編『新撰 芸能人物事典――明治～平成』、東京：日外アソシエーツ、2010 年。
細川周平、片山杜秀監修、日外アソシエーツ株式会社編『日本の作曲家：近現代音楽人名事典』、東京：日外アソシエーツ、2008 年。

雑誌・新聞

・『音楽』、東京：東京音楽学校学友会
「ブラスバンド合宿練習」（口絵）、『音楽』16 号、1935 年。

・『音楽之友』、東京：音楽之友社
広岡九一「日本の吹奏楽曲」、『音楽之友』2 巻 3 号、1942 年。
村松道彌「満洲音楽情報」、『音楽之友』2 巻 12 号、1942 年。
堀内敬三「吹奏楽の再建と革新」、『音楽の友』4 巻 1 号、1946 年。

・『音楽文化新聞』、東京：音楽之友社（1941 年～1943 年）

・『音楽文化協会会報』、東京：日本音楽文化協会（1944 年～1945 年）

（上記 2 点を合わせた復刻版：戸ノ下達也編『音楽文化新聞 ： 戦時期文化史資料』（全３巻）、金沢：金沢文圃閣、2011 年。）

・『楽星』、東京：岡田日栄堂

大沼魯夫「旧事新題（樂界回顧談）」、『楽星』3 巻 9 号、1927 年。

・『月刊楽譜』、東京：月刊楽譜発行所

瀬戸口藤吉「旋律喇叭隊設立趣旨」『月刊楽譜』25 巻 6 号、1936 年。

堀内敬三「模倣期を脱す 紀元二千六百年記念曲を聞く」、『月刊楽譜』29 巻 7 号、1940 年。

・『月刊吹奏楽研究』、東京：吹奏楽研究社

香河幾太郎「やめてほしい行進曲課題」、『月刊吹奏楽研究』1963 年 2 月号。

「ことしの吹奏楽コンクール課題曲と随意曲」、『月刊吹奏楽研究』1964 年 3 月号。

・『心の花』、東京：竹柏会

佐佐木信綱「朝永研一郎君を悼みて」、『心の花』58 巻 4 号、1954 年。

・『吹奏楽』、東京：吹奏楽発行所（1941 年～1943 年）

広岡九一「日本の行進曲に就いて」、『吹奏楽』2 巻 3 号、1942 年。

高木東六「吹奏楽と作曲（吹奏楽の作曲促進運動について）」、『吹奏楽』2 巻 5 号、1942 年。

伊藤昇「吹奏楽曲作曲促進の為めに」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年。

堀内敬三「吹奏楽曲の作曲へ！」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年。

守田正義「吹奏楽と作曲」、『吹奏楽』2 巻 6 号、1942 年。

「吹奏楽曲十五曲を陸海軍へ献納」、『吹奏楽』2 巻 7 号、1942 年。

「吹奏楽曲を語る――座談会」、『吹奏楽』3 巻 4 号、1943 年。

目黒三策「思い出すまゝ」、『吹奏楽』3 巻 10 号、1943 年。

・『吹奏楽月報』、東京：管楽研究会（1940～1941 年）

川瀬信二「特別編成喇叭鼓隊の効果的な編成と編曲」、『吹奏楽月報』6 巻 10 号、1940 年。

・『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』、東京：管楽研究会（1937～1940 年）

広岡九一「吹奏楽曲解説 (2)」、『吹奏楽 ： ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』4 巻 2 号、1938 年。

広岡九一「吹奏楽曲解説」、『吹奏楽 : ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 1 号、1939 年。

「神戸市喇叭連盟主催 第三回喇叭鼓楽コンクール」、『吹奏楽 : ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』、5 巻 5 号、1939 年。

「鼓笛楽普及に関する座談会」、『吹奏楽 : ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 5 号、1939 年。

「全日本吹奏楽団を糾合して大日本吹連楽奏盟［ママ］結成さる」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』5 巻 11 号、1939 年。

「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（上)」、『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』6 巻 2 号、1940 年。

「紀元二千六百年祝典と吹奏楽（下)」、『吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』6 巻 3 号、1940 年。

・『日刊ラヂオ新聞』、東京：日刊ラヂオ編集社

「洋行する楽手大沼哲氏に行進曲送別を作曲」、1925 年 9 月 21 日。

・『バンドジャーナル』、東京：音楽之友社

秋山紀夫「日本人の作品について」、『バンドジャーナル』4 巻 10 号、1962 年。

・『バンドの友』、東京：バンドの友社（1936～1940 年）

「瀬戸口作曲賞作品公募規定」、『バンドの友』4 巻 4 号、1939 年。

「ブラスバンド編成法」、『バンドの友』4 巻 10 号、1939 年。

「軍艦行進曲四十年記念大演奏会」、『バンドの友』5 巻 9 号、1940 年。

花田寧「吹奏楽に於けるピッコロの重要性」、『バンドの友』6 巻 2 号、1941 年。

・『ブラスバンド』、東京：管楽研究会（1933～1937 年）

「ブラスバンドの編成法」、『ブラスバンド』1 巻 1 号、1933 年。

「座談会『吹奏楽発展に関する諸問題』」、『ブラスバンド』2 巻 1 号、1934 年。

「アマチュア吹奏楽団制統機関設立の可否」、『ブラスバンド』2 巻 3 号、1934 年。

菅原明朗「アマチュア吹奏楽隊の編成に就て」、『ブラスバンド』2 巻 4 号、1934 年。

伊藤隆一「第二回アマチュア音楽団演奏大会合同演奏を指揮して」、『ブラスバンド』2 巻 2 号、1934 年。

「アマチュアバンド東海連盟のバンド競演会」、『ブラスバンド』3 巻 3 号、1935 年。

「第三回音楽週間 吹奏楽コンクールと行進演奏」、『ブラスバンド』3 巻 3 号、1935 年。

「吹奏楽の豪華盤 音楽週間中の吹奏楽コンクール」、『ブラスバンド』3 巻 4 号、1935 年。

平林勇「吹奏楽コンクールに関する所感」、『ブラスバンド』3 巻 4 号、1935 年。

・『ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』、東京：管楽研究会（1936～1937 年）

「吹奏楽秋の呼物 第二回吹奏楽コンクール」、『ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』2 巻 10 号、1936 年。

・『文化日本』、東京：日本文化中央連盟

「皇紀二千六百年奉祝歌曲・舞踏創定準備進む」、『文化日本』3 巻 2 号、1939 年。

「奉祝歌曲・舞踏相次いで部会を開始」、『文化日本』3 巻 3 号、1939 年。

「皇紀二千六百一年芸能祭制定音楽作曲委嘱」、日本文化連盟『文化日本』5 巻 8 号、1941 年。

録音資料

・CD

『大沼哲作品集』、東京：白樺録音企画、2000 年。

『音楽で綴る日本海海戦 100 周年』、東京：白樺録音企画、2005 年。

『黒船以来 吹奏楽 150 年の歩み』、東京：キングレコード、2003 年。

『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 1 瀬戸口藤吉作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 2 江口源吾作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 3 斉藤丑松作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。

『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 4 片山正見作品集』､東京:日本クラウン､1995 年。
『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 5 大沼哲作品集』、東京：日本クラウン、1995 年。
『軍楽隊とともに歩んだ…日本の吹奏楽 6 須摩洋朔作品集』､東京:日本クラウン､1995 年。
『軍艦行進曲』（世界のマーチ・ベスト・コレクション 7)、東京：フィリップス、1987 年。
『警視庁音楽隊創設 50 周年 ＝The 50th anniversary』、東京：AMD、1999 年。
『新・祝典行進曲 吹奏楽による日本慶祝曲集』東京：日本クラウン、1993 年。
『進め!荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集』、東京：キングレコード、1992 年。
『戦前日本の名行進曲集～海軍軍楽隊篇～』、東京：キングレコード、1995 年。
『戦前日本の名行進曲集～陸軍軍楽隊篇～』、東京：キングレコード、1995 年。
『戦前日本の名行進曲集～秘蔵名盤篇～』、東京：キングレコード、1995 年。
『奏楽堂の響き Vol.2』、東京：スリーシェルズ、2009 年。
『奏楽堂の響き Vol.3』、東京：スリーシェルズ、2010 年。
『東京音楽学校関係作曲及演奏附属図書館所蔵 SP レコード』、東京：東京芸術大学附属図書館、2008 年。
『日本の吹奏楽の変遷』、東京：国立音楽大学、2003 年。
『日本のマーチ』、東京：キングレコード、2007 年。
『日本のマーチ（戦前編)』、東京：キングレコード、2019 年。
『日本のマーチ・ベスト 20（戦前篇)』、東京：キングレコード、1990 年。
『不滅の日本行進曲傑作集 第 1 集』、東京：ユニバーサル・ミュージック、2003 年。
『不滅の日本行進曲傑作集 第 2 集』、東京：ユニバーサル・ミュージック、2004 年。
『よみがえる軍楽隊～分列行進曲 軍艦行進曲～ベスト』､東京:キングレコード､2017 年。

・LP
『帝國海軍軍楽隊の遺産 ： オリジナル原盤より集録』、東京：日本コロンビア、1970 年。
『帝國陸軍軍楽隊の遺産 ： オリジナル原盤より集録』、東京：日本コロンビア、1970 年。

オンライン資料

大沼哲ホームページ（http://satoruonuma.web.fc2.com)、2021 年 4 月 10 日参照。
国立国会図書館歴史的音源（https://rekion.dl.ndl.go.jp)、2021 年 4 月 10 日参照。

吹奏楽コンクールデータベース –Musica Bella（http://www.musicabella.jp/concours/）、2021 年 4 月 10 日参照。
東京藝術大学音楽学部楽理科／大学院音楽文化学専攻音楽学分野
海軍・陸軍軍楽隊データベース（http://musicology.geidai.ac.jp/wp/research/militarybanddb/）、2021 年 4 月 10 日参照。
東京音楽学校在籍者データベース（http://musicology.geidai.ac.jp/wp/research/ongakugakkoudb/）、2021 年 4 月 10 日参照。

楽譜

安倍盛『行進曲「紀元二千六百年」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
安倍盛『聖戦萬里』、東京：管楽研究会、1941 年（『吹奏楽月報』7 巻 9 号 付録）。
井上繁隆『行進曲「必勝日本」』、東京：吹奏楽発行所、1943 年（『吹奏楽』3 巻 10 号 付録）。
江木理一『行進曲「一億一心」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 2 号 付録）。
海軍軍楽隊『行進曲「海の進軍」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
海軍軍楽隊『行進曲「祝勝」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
海軍軍楽隊『行進曲「小国民進軍」』、東京：吹奏楽発行所、1943 年（『吹奏楽』3 巻 3 号 付録）。
海軍軍楽隊『行進曲「大詔奉戴」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
海軍軍楽隊『行進曲「大東亜戦争海軍の歌」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
海軍軍楽隊『行進曲「ハワイ大海戦」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
古関裕而『行進曲「空征く日本」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 10 号 付録。）
斎藤丑松『行進曲「大日本」（原典版）』、静岡：ネクサス音楽出版、2019 年。
白磯巌『行進曲「艦隊の威容」』、東京：共益商社、出版年不明。
白磯巌『行進曲「青春」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 2 号 付録）。
菅原明朗『海の行進曲』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 7 号 付録）。
全関東吹奏楽連盟『行進曲「盟友」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
永井巴『建国行進曲』、東京：管楽研究会、出版年不明。
永井巴『行進曲「航空士官」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 6 号 付録）。
橋本国彦『行進曲「興亜」』、東京：共益商社、1940 年。

橋本国彦『満州大行進曲』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（吹奏楽 2 巻 9 号 付録）。
服部逸郎『大行進曲「挙国の感謝」』、東京：白眉出版社、1943 年。
深海善次『行進曲「紀元二千六百年」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
深海善次『行進曲「進め！荒鷲」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
松倉五郎『明治節行進曲』、東京：共益商社、出版年不明。
ミカエリス、管楽研究会編『意想曲「森の鍛冶屋」』、東京：シンフォニー楽譜、1939 年。
宮下紫水『行進曲「少年航空兵」』、東京：管楽研究会、出版年不明。
森屋五郎『戦野を征く』、東京：管楽研究会、1941 年（『吹奏楽月報』7 巻 7 号 付録）。
山本銃三郎『意想曲「攻撃」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 8 号 付録）。
陸軍軍楽隊『行進曲「戦捷」』、東京：吹奏楽発行所、1942 年（『吹奏楽』2 巻 3 号 付録）。
陸軍軍楽隊『行進曲「大日本」』、東京：共益商社、出版年不明。

その他

海上自衛隊東京音楽隊所蔵資料
警視庁音楽隊所蔵資料
NHK 放送博物館所蔵資料 『洋楽放送記録』、『番組確定表』
谷村政次郎氏所蔵資料
宮内孝子氏所蔵資料

令和 3 年度

東京藝術大学大学院音楽研究科

博士学位論文

「第二次世界大戦以前の日本の吹奏楽曲創作の実態」

別冊付録

中嶋 達郎

目次

付録資料 1　第二次世界大戦以前の日本人作曲家による吹奏楽曲一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1〜15

付録資料 2　大沼哲作曲《奉祝前奏曲》譜例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16〜20

付録資料 3　吹奏楽曲の編成例・・・21〜28

付録資料1　第二次世界大戦以前の日本人作曲家による吹奏楽曲一覧

参考演奏記録の団体略記：放吹・・東京放送吹奏楽団、陸軍・・陸軍軍楽隊関係、海軍・・海軍軍楽隊関係、星桜・・星桜吹奏楽団、海洋・・海洋吹奏楽団、大東京・・大東京吹奏楽団、警視庁・・旧・警視庁音楽隊。特記のないものは日比谷公園音楽堂での演奏。

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
1	Reception March	行進曲	山本銑三郎	ブラスバンド			陸軍						10
2	ああZ旗	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 9. 1放吹（放送）					2
3	愛国	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1938年	共益商社、ヲグラ楽譜出版、バンドの友社、白眉出版	海軍	1938. 4. 23海軍	ポリドール2573 コロムビア30001 ほか	日本の吹奏楽III 斉藤丑松作品集		内閣情報部選定。森川幸雄作詞、瀬戸口藤吉作曲の国民歌「愛国行進曲」の旋律をトリオに使用。レコードには「作曲 帝国軍楽隊」の表記。	1、3、d、j
4	愛国	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1938年	バンドジャーナル1963年5月号付録（美しき祖国）（戦後）	陸軍		ビクターA-1	日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集		トリオに「愛国行進曲」を使用。戦後、トリオを別曲に変更（「美しき祖国」としてバンドジャーナルの付録に収録）。	3、9、a、j
5	愛国	行進曲	筒井佚哉	ブラスバンド			陸軍						9
6	愛国	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1935年以前		陸軍	1935. 1. 11陸軍（放送）					2
7	愛国機	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会 / ブラスバンド1巻3号付録	陸軍	1933. 5. 6陸軍				楽曲中に、佐藤惣之助作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の軍歌を使用。	2、4、d
8	愛国行進	行進曲	和田小太郎（編曲？）	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）	1945. 6. 19扶桑（放送）					2、4、d
9	愛馬進軍曲	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1939年	共益商社 / バンドジャーナル1966年11月号付録（戦後）	陸軍	1939. 6. 3陸軍	ビクターJ-54533	日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集、戦前日本の明行進曲集～陸軍軍楽隊編～		陸軍軍楽隊名義。陸軍省選定。陸軍省馬政課、農政省馬政局の募集による、久保井信夫作詞、新城正一作曲「愛馬進軍歌」を主旋律に、トリオに須摩の応募作品を使用した行進曲。	1、4、a、d
10	愛馬進軍歌	行進曲	長津義司	ブラスバンド	1939年		民間		ポリドール9041-B			久保井信夫作詞、新城正一作曲の「愛馬進軍歌」をトリオに使用。	3
11	青空高く	行進曲	深海善次	ブラスバンド		管楽研究会 / 音楽之友社	海軍（民間）	1944. 3. 28海洋（放送）					2、5
12	赤誠	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1942年		海軍		コロムビア100627				3
13	赤誠	行進曲	松倉五郎	喇叭鼓隊		管楽研究会	陸軍				管楽研究会入選曲。		5
14	暁	円舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 7. 20海軍（放送）					2
15	暁に祈る	行進曲	斉藤定人	ブラスバンド	1940年以降		海軍	1944. 6. 13海洋（放送）					2
16	暁に祈る	行進曲	白鴎巌	ブラスバンド	1941年		海軍（民間）		コロムビア32030、コロムビアA1337（戦後）	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編		映画「暁に祈る」の主題歌、野村俊夫作詞、古関裕而作曲の「暁に祈る」をトリオに使用。	3
17	暁の御旗	行進曲	赤崎彦二	ブラスバンド			海軍						b
18	暁の突撃	意想曲	江口源吾	ブラスバンド	1942年		海軍（民間）	1942. 12. 5東京交響吹奏楽団（放送）	コロムビア30387				2、3、d
19	暁の日本太鼓	その他	渡辺浦人	ブラスバンド	1945年	ルディック社（ロバート・クレイ編曲）（戦後）	民間			日本の吹奏楽の変遷		海軍軍楽隊委嘱。発表当初の楽曲名は「祈願太鼓」。	a
20	暁の夢（幻想曲）	その他	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1931. 12. 6大阪市音楽隊（放送）					2
21	秋	円舞曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1930. 10. 5陸軍					4、d
22	秋晴の凱歌	行進曲	水井建子	ブラスバンド			陸軍	1933. 9. 30陸軍（放送）					1、2
23	あけぼの	不明	服部逸郎	喇叭鼓隊			民間	1943. 8. 25放吹（放送）					2
24	朝の喜び	その他	服部正	ブラスバンド	1942年		民間	1943. 7. 18放吹（放送）	ニッチク21459				2、3、i
25	旭の御旗	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍		ビクター51580-B			中間部に合唱付。	3
26	旭日昇天	行進曲	三戸知章（編曲？）	ブラスバンド		バンドの友6巻3号（1941年）付録	民間					原曲不明。	5
27	アジアの力	行進曲	飯田信夫	ブラスバンド	1941年	管楽研究会	民間		ビクターA4270	進め!荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集	1942年、第3回大日本吹奏楽大会吹奏楽団舞台演奏課題曲。	吹奏楽連盟史では作曲者「不明」。CD、雑誌広告では飯田信夫。大政翼賛会、大日本興亜同盟、日本放送協会選定の『興亜大行進曲「アジヤの力」』（江口隼人作詞、飯田信夫作曲）を主部とし、トリオが加えられている。	5、a、b、c
28	足柄	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1937年頃		海軍	1937. 8. 12海軍	コロムビア29500	日本の吹奏楽III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。海のますらを（中村正晴）の詩に斉藤が作曲した歌をトリオに使用（合唱付き）。	3、a
29	新駐	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						9
30	荒鷲	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1938年頃		海軍（民間）	1940. 7. 20木場少年音楽隊（紀元二千六百年奉祝銃後士気振興吹奏楽第四回大演奏会）	ビクターZ-282				3、4
31	荒鷲気質	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1944. 11. 25星桜（放送）					2
32	荒鷲出動	行進曲	清水脩	ブラスバンド			民間	1944. 7. 16放吹（放送）					2
33	荒鷲の凱歌	不明	山下孝	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』には記載なし。『音楽文化新聞』第17号に記載あり。『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
34	荒鷲を讃えて	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 10. 3海軍（放送）					2
35	女南王の行列	意想曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1942. 8. 6星桜（放送）					2、d、h
36	戦野を征く	行進曲	森屋五郎	ブラスバンド	1938年	吹奏楽月報7巻7号付録	陸軍	1941. 12. 17星桜（放送）	ビクターA4319			吹奏楽月報7巻7号付録。作曲年が原譜に記載。	2、5、9、d
37	いざ突撃（ガロップ）	舞曲	田中豊明	ブラスバンド			海軍	1944. 1. 21放吹（放送）					2
38	石川島	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1936. 12. 6石川島造船所自彊吹奏楽団（第2回吹奏楽コンクール）（放送）				放送記録では、作曲者は「石川島自彊吹奏楽団」名義。	2
39	維新マーチ	行進曲	不明	鼓笛隊		共益商社	不明						11
40	伊勢崎市行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1940年		陸軍		テイチク特295			朝日新聞社選定。レコード片面は下村社史作詞、陸軍軍楽隊作曲、杉山長谷雄編曲の「伊勢崎市歌」。	3
41	偉大なる武人	行進曲	小原政治	ブラスバンド	1934年	海上自衛隊東京音楽隊	海軍	1934. 6. 4海軍（放送）	ポリドール4177-B キング21144 ほか	日本のマーチ（戦前編）		海軍軍楽隊名義。東郷平八郎追悼演奏曲。	1、2、a、d、j
42	一億の征討	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1943. 10. 15放吹（放送）					2
43	一億の底力	行進曲	堀内敬三	ブラスバンド			民間	1941. 6. 17陸軍（放送）					2、d

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
44	一億一進	行進曲	江木理一	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1942-2-2）	陸軍	1940. 10. 17皇桜（放送）				放送記録では、作曲者名が「吾妻翠」の場合あり。吹奏楽2巻2号付録楽譜。	2、5
45	一致団結	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド			民間	1943. 9. 4皇桜（放送）					2
46	伊藤楽長への贈呈曲「歌謡曲」	その他	筒井快哉	ブラスバンド			陸軍	1933. 11. 3陸軍			吉田、筒井、田村、須摩、永井による「伊藤楽長への贈呈曲」中の楽曲。	放送記録に作曲者名記載。	1、2
47	伊藤楽長への贈呈曲「フリュートの為の主題と変奏曲」	その他	須摩洋朔	ブラスバンド			陸軍	1933. 11. 3陸軍			吉田、筒井、田村、須摩、永井による「伊藤楽長への贈呈曲」中の楽曲。	放送記録に作曲者名記載。	1、2
48	伊藤楽長への贈呈曲「行進曲」	行進曲	田村明一	ブラスバンド			陸軍	1933. 11. 3陸軍			吉田、筒井、田村、須摩、永井による「伊藤楽長への贈呈曲」中の楽曲。	放送記録に作曲者名記載。	1、2
49	伊藤楽長への贈呈曲「行進曲」	行進曲	吉田盈照	ブラスバンド			陸軍	1933. 11. 3陸軍			吉田、筒井、田村、須摩、永井による「伊藤楽長への贈呈曲」中の楽曲。	放送記録に作曲者名記載。	1、2
50	伊藤楽長への贈呈曲『行進曲「広漠たる視野」』	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1933. 11. 3陸軍			吉田、筒井、田村、須摩、永井による「伊藤楽長への贈呈曲」中の楽曲。		1、9
51	威風堂々	行進曲	渡辺永吉	ブラスバンド	1934年以前	管楽研究会 / 共同音楽出版社（No. 40）（戦後）	陸軍	1933. 3. 10陸軍（放送）	ビクター53210-B	進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集		陸軍軍楽隊名義。放送記録、共同音楽出版社の楽譜には渡辺永吉作曲とあり。	2、3、4、5、d
52	祝捷ポルカ	舞曲	山本統三郎	ブラスバンド			陸軍	1939. 1. 16皇桜（放送）					2
53	印度航空作戦の歌	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 8. 1放吹（放送）				山田耕筰作曲の同名歌を曲中に使用。	2
54	印度国民軍行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍						9
55	上村将軍	行進曲	早川弥左衛門	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 1. 12海洋（放送）					2
56	美しき行進曲	行進曲	八木伝	ブラスバンド	1940年		陸軍（民間）		コロムビア30231		日本音楽文化協会陸軍献納曲。	レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3、5、5、6、i
57	宇都宮師団部隊行進曲	行進曲	白鐵巌	ブラスバンド			海軍（民間）		コロムビアA-708			宇都宮師団部隊撰歌、瀬戸口藤吉作曲「宇都宮師団部隊歌」をトリオに使用した行進曲。	3
58	移りゆくもの	組曲	辻井市太郎	ブラスバンド			民間	1934. 6. 19大阪市音楽隊（放送）			「過去」、「未来」		2
59	海原越えて	円舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 7. 5海洋（放送）					2
60	海行く日本	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド	1942年	白眉出版	民間		キング67063			逓信省海務院選定、大毎、東日新聞募集の池田誠一郎作詞、細川武夫作曲「海行く日本」を曲中に使用。	3、5
61	海南島	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1939年頃以前		海軍	1944. 8. 13海軍（放送）	ポリドール2787			レコードでは「帝国海軍軍楽隊作・編曲」（放送記録では海軍軍楽隊作曲）。松島慶三作詞、椿原良作作曲の「海南島上陸の歌」をトリオに使用。	2、b
62	海国日本	行進曲	宮田清蔵	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、b
63	海の夕焼（幻想曲）	その他	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 6. 19海軍（放送）					2
64	海の威力	行進曲	田中豊三	ブラスバンド			海軍	1942. 8. 9海洋（放送）					2
65	海の祝曲	序曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	海軍						5
66	海の行進曲	行進曲	菅原明朗	ブラスバンド	1935年	吹奏楽付録（1942-2-7）	民間					吹奏楽2巻7号付録楽譜。	5、i
67	海の祭典	序曲	片山正見	ブラスバンド			海軍	1941. 9. 13海軍	キング と302			海軍軍楽隊名義。	3、b、d
68	海の進軍	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1941年	管楽研究会	海軍	1941. 7. 19海軍		日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。読売新聞社撰歌、海老名正男作詞、斉藤作曲の同名曲をトリオに使用。	1、5、a
69	海の戦士	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1936. 8. 29海軍	ビクターJ-54008				1、3、d
70	海鷲	行進曲	服部正	ブラスバンド			民間	1944. 8. 21皇桜（放送）					2
71	海鷲	行進曲	弘田龍太郎	ブラスバンド	1942年頃？		民間		コロムビア33757				3
72	ウラジオ沖の氷海戦	意想曲	吉本光蔵	ブラスバンド	1905年		海軍	1905. 3. 6海軍（初演）		音楽で綴る日本海海戦100周年			1、b、d、g
73	うるわしき国	序曲	石田一郎	ブラスバンド	1944年		民間			日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。		『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	6
74	麗わしの帝都	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）	1930. 4. 13陸軍				陸軍軍楽隊名義。	1、9
75	運動会	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30233			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
76	永遠の光（小品三部曲）	組曲	安倍盛	ブラスバンド		管楽研究会	民間	1944. 1. 8海洋（放送）			「出征メヌエット」・「月下の露営」・「戦勝ポルカ」		2、4、d
77	永久の平和	円舞曲	澤田礎敬	ブラスバンド		バンドの友社	不明						5
78	栄光	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1934. 11. 27海軍（放送）					2
79	栄光と共に	行進曲	佐野鵜	ブラスバンド			民間	1942. 2. 18放吹（放送）					2
80	栄光の兜	行進曲	石田一郎	ブラスバンド	1938年		民間	1938. 11. 7陸軍（放送）					2、9、d、i
81	英国皇儲歓迎前奏曲	前奏曲	山田耕筰	ブラスバンド	1924年		民間	1924. 8. 30海軍				曲中に「ルール・ブリタニア」と「君が代」を使用。	1、7
82	英国頌歌	前奏曲	山田耕筰	ブラスバンド	1922年頃		民間	1922. 7. 15海軍（大阪中央公会堂）					b
83	英雄魂	不明	杉山長谷夫	ブラスバンド			陸軍（民間）				1943年、日本音楽文化協会の海軍献納「山本元帥讃頌」の一曲。	『音楽文化新聞』第52号、第1面。	6
84	英霊讃歌	その他	安倍盛	ブラスバンド			民間	1944. 4. 23海洋（放送）					2
85	王師遠征	行進曲	山本統三郎	ブラスバンド	1904年	共益商社	陸軍	1942. 3. 10陸軍（放送）					2、d
86	王者ぞわれら	行進曲	山口常光	ブラスバンド			陸軍						9
87	大詔奉戴	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1942年	管楽研究会	海軍	1942. 6. 6海軍	ポリドールP-5285	日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。尾崎喜八作詞・信時潔作曲の「大詔奉戴日の歌」と、信時潔作曲の「海ゆかば」を使用した行進曲。	1、3、5、a、d
88	大阪師団	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		ビクターA-4259			トリオに大阪師団進軍歌をトリオに使用。	3
89	大阪湾	円舞曲	辻井玉之助	ブラスバンド			不明	1934. 5. 14大阪市音楽隊（放送）					2
90	大空高く	行進曲	八木伝	ブラスバンド	1940年	共益商社	陸軍（民間）	1940. 12. 20皇桜（放送）	コロムビア30236			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	2、3、4、d、i
91	太田製作所工場歌行進曲	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1939年		海軍（民間）		ビクターPR-171			レコード片面は、佐藤惣之助作詞、辻順治作曲の「中島飛行機株式会社太田製作所工場歌」。	3
92	大楠公	行進曲	宮田清蔵	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、b
93	大山元帥	行進曲	山本統三郎	ブラスバンド			陸軍	1929. 3. 10陸軍（放送）					2、d
94	小川	円舞曲	広岡九一	ブラスバンド			民間						d
95	興国日本	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 1. 8海軍					2
96	躍る黒潮	円舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 7. 20海軍（放送）					2
97	思い出（謡風曲）	その他	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1940. 7. 27陸軍					1
98	思い出のまま	円舞曲	須摩洋朔	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍						4、d
99	オリンピック行進曲	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）						4
100	御盾	円舞曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1945. 3. 7海洋（放送）					2
101	音楽に依る目覚め	不明	不明	ブラスバンド			不明						b
102	音楽の花篭	不明	野坂栄太郎	ブラスバンド			海軍						b
103	恩師大沼楽長に捧ぐ	行進曲	平尾貴四男	ブラスバンド			民間	1938. 9. 27陸軍					1
104	恩師に捧ぐ	行進曲	石田一郎	ブラスバンド			民間	1938. 9. 27陸軍					1
105	御社の朝	円舞曲	片山正見	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	海軍	1940. 4. 29海軍		日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。	5、a、b、d
106	御稜	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 12. 12皇桜（放送）					2
107	凱歌	舞曲	山本統三郎	ブラスバンド			陸軍	1942. 11. 3放吹（放送）					2、10

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	奏法
108	海軍	行進曲	深海善次	ブラスバンド			海軍（民間）	1943. 4. 25海洋（放送）					2、d
109	海軍（交響詩）	その他	内田元（海軍軍楽隊 編曲）	ブラスバンド			その他		ニッチク100839		朝日新聞社企画、松竹映画「海軍」挿入曲。	内田元（民間）作曲、海軍軍楽隊編曲。	b
110	海軍特別陸戦隊	不明	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 12. 21海軍（放送）					2
111	海軍の華	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド			民間	1939. 6. 27海軍（放送）					1、2、4
112	海水浴（描写曲）	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 8. 2放吹（放送）					2
113	凱旋	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド	1932年以前	管楽研究会	民間	1932. 6. 30陸軍（放送）	ビクター52527-B	陸軍軍楽隊の遺産（LP）			2、3、4
114	凱旋	行進曲	荻野理喜治	ブラスバンド			陸軍	1934. 6. 8陸軍（放送）	キング33796	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		陸軍軍楽隊名義。トリオに加藤義清作詞、荻野作曲の軍歌「喇叭の響き」を使用した行進曲。	2、3、a、d
115	凱旋	行進曲	久保田憲吉	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1938. 4. 17巣鴨中学商業学校喇叭鼓隊（放送）					2
116	凱旋部隊	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間						5、d
117	凱旋ポルカ	舞曲	山本統三郎	ブラスバンド	1906年以前	音楽社 / 音楽之友社（OTB014）（戦後）	陸軍	1906. 11. 25陸軍					1
118	快速部隊	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 6. 24陸軍（放送）					2
119	貫路	行進曲	不明	ブラスバンド			不明			よみがえる軍楽隊～分列行進曲 軍艦行進曲～ベスト			a、9
120	輝く皇軍	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍						5、d
121	輝く軍容	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		共益商社	陸軍	1942. 12. 10海洋（放送）					2、5、9、d
122	輝く興亜	円舞曲	水島敬雄	ブラスバンド			陸軍	1941. 6. 7陸軍	ビクターA3179				1、9、d
123	輝く日章旗	行進曲	筒井快哉	ブラスバンド			陸軍	1934. 5. 5陸軍（放送）				陸軍軍楽隊名義。楽譜に作曲者名記載。	2、9
124	輝く入城	行進曲	澤田幸宏	ブラスバンド		管楽研究会	不明						4
125	輝光	円舞曲	安倍盛	ブラスバンド		管楽研究会	民間	1943. 1. 31全関東吹奏楽団連盟選抜隊（放送）					2、4、5
126	輝く朝日	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1936年		民間		コロムビア28843		1936年、ベルリン・オリンピックの日本現代作曲家聯盟「オリンピック芸術競技作品」。	オリンピック行進曲。1932年のロサンゼルス・オリンピック派遣選手応援歌、斎藤龍作詞、山田耕筰作曲の「走れ大地を」をトリオに使用。	3、f
127	輝く皇軍	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）	1938. 8. 29満蒙開拓青少年義勇軍訓練所喇叭鼓隊（放送）	管楽研究会C201-A				4、d
128	輝く国軍	行進曲	井上繁隆	ブラスバンド	1930年頃		陸軍	1930. 3. 10陸軍（放送）	ビクター51102-B、コロムビア26824	陸軍軍楽隊の遺産（LP）		陸軍軍楽隊名義。	1、2、4、a
129	輝く東亜	行進曲	宮田東峰	ブラスバンド			民間	1944. 6. 10放吹（放送）					2
130	輝く日本	行進曲	上羽仙松	ブラスバンド		バンドの友社	陸軍（民間）					広告に「2/4拍子マーチ」の記載あり。	5
131	輝く日本	行進曲	田村孝史	喇叭鼓隊			不明	1940. 11. 17函館船渠株式会社喇叭鼓隊（函館市吹奏楽連盟結成記念演奏会）					4
132	学生行進曲	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1930年以前		海軍		ビクター51215-A			谷村氏資料には「海軍学生行進曲」で若松喜八作曲とある。	3、b
133	学徒	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 2. 8陸軍（放送）					2、9
134	学徒空の進軍	行進曲	堀内敬三	ブラスバンド	1943年頃		民間		ビクターA4470			読売新聞社選定、吉田健次郎作詞、大内三郎作曲の国民唱歌「学徒空の進軍」を行進曲にしたもの。	3
135	かけあし行進曲	行進曲	平尾貴四男	ブラスバンド	不明		民間						f
136	翔けよ勇士	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1936年		海軍	1938. 6. 4海軍		日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。	2、a、d
137	牙城陥落	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1943. 2. 15星桜（放送）	テイチク3285				2、3
138	勝関	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1941年		海軍	1942. 5. 24海軍	ビクターA-4300	日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。古賀登代作詞、内藤清五作曲の「勝関」をトリオに使用した行進曲。合唱付きもあり。	1、2、3、a
139	勝関	行進曲	須摩洋朗	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1940. 10. 4陸軍				「関の声」の別名もあり。戦後に「歓声」と改題。	5、9、d
140	勝関	円舞曲	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間	1938. 4. 17東京府立第一商業学校（放送）					4、5、d
141	桂冠青年	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1927. 5. 24陸軍（放送）					1、2
142	カドリール	舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1934年以前		海軍		コロムビア33254		No. 1春 No. 2夏 No. 3秋 No. 4冬 No. 5萬歳		3
143	カドリール・ランサー「餘と倶に」	舞曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1906. 10. 28陸軍					1
144	神風	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1942. 4. 3陸軍（放送）					2、9
145	神鷲の出撃	意想曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1945. 3. 23海軍（放送）					2
146	可憐な少女（回旋曲）	舞曲	大沼哲	ブラスバンド		共益商社	陸軍	1938. 9. 27陸軍				1915～1916年作曲のピアノ曲の編曲。	1、4、d、h
147	観艦式	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1930年頃	管楽研究会	海軍（民間）	1933. 8. 29海軍（放送）	キング21143	日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～		池田敬之助作詞、佐藤清吉作曲（後述）の軍歌「観艦式の歌」と、喇叭「君が代」をトリオに使用。「海の軍歌と礼式曲」によると、軍歌の作曲者は蔵田泰平。軍歌付き行進曲。	2、3、4、a、d、j
148	歓喜	行進曲	井上繁隆	喇叭鼓隊		吹奏楽付録楽譜（1943-3-9）	陸軍	1933. 12. 30陸海軍合同（放送）				吹奏楽3巻9号付録楽譜。	2、5
149	歓喜	序曲	片山正見	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	海軍	1941. 5. 25海軍 ほか		日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。	1、2、5、a、d
150	歓喜の祝典	円舞曲	不明	ブラスバンド			不明						b
151	歓呼の響	行進曲	三戸知章（編曲？）	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間						b
152	歓声	序曲	水島敬雄	ブラスバンド			陸軍	1934. 6. 8陸軍（放送）				陸軍軍楽隊名義。	1、2、d
153	歓声	序曲	吉田盈照	ブラスバンド			陸軍	1943. 8. 13海洋（放送）					2、9
154	歓声	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 4. 15陸軍			1935年、アマチュアブラスバンド東海連盟による第1回吹奏楽コンクールの課題曲。	ブラスバンド3巻3号。	1、5
155	艦隊	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1933. 3. 21海軍（放送）		日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～		池田敬之助作詞、江口源吾作曲「艦隊行進曲」を曲中に使用。	2、b
156	艦隊の威容	行進曲	白鴎巌	ブラスバンド	1939年頃	共益商社	海軍（民間）	1939. 7. 15海軍		日本のマーチ（戦前編）	1939年、大日本音楽協会選定、第1回瀬戸口賞一等当選曲。		1、4、5、a、d
157	関東軍行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1936年		陸軍		ポリドール2309-B				3
158	観兵式行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1932年以前		陸軍	1933. 7. 1陸軍	ニット-5832B	陸軍軍楽隊の遺産（LP）		ルル一作曲の「陸軍分列行進曲」の前半にギャロップを付け加えた楽曲。	1、3、a
159	喜悦（幻想曲）	その他	山口常光 編曲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1938. 5. 12川越商業学校喇叭鼓隊（放送）			1942年、第3回大日本吹奏楽大会喇叭鼓隊舞台演奏課題曲.	原曲不明。	2、4、c
160	菊	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1935. 11. 3陸軍（放送）					2、4、5、d
161	紀元二千六百年頌歌	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1940. 12. 10海軍（放送）					2
162	機甲団	行進曲	大沼哲	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1941-1-1）	陸軍	1942. 4. 3陸軍（放送）	ポリドールP-5165			陸軍機甲本部選定、軍歌「機甲団の歌」（山田國太郎作詞、大沼哲作曲）を曲中に使用。吹奏楽1巻1号付録楽譜。	2、3、b

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
163	北白川宮殿下奉賛行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1943. 9. 2陸軍（放送）					2
164	騎馬軍楽行進曲	行進曲	杉山長谷夫	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 4. 17陸軍					1
165	貴賓送迎曲	不明	萩原英一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4
166	騎兵隊	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30237			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
167	希望に燃えて	行進曲	水島敎雄	ブラスバンド	1933年	管楽研究会 / 音楽之友社、共同音楽出版社（No. 80）（戦後）	陸軍	1933. 7. 28陸軍（放送）		不滅の日本行進曲傑作集 第1集		陸軍軍楽隊名義。	1、2、4、9、a、ほか多数
168	君が代行進曲	行進曲	吉本光蔵	ブラスバンド	1902年頃	共同音楽出版社（No. 1）（戦後） / 音楽之友社（OTB004）（戦後）	海軍	1931. 6. 11海軍（放送）	ビクター28351 キング21143 テイチク15075 ほか			「君が代」を主旋律に、トリオに伊澤修二作曲「皇国の守り」が使用されている。	1、2、a、b、ほか多数
169	君が代マーチ	行進曲	陸軍軍楽隊	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						4、5
170	旧友行進曲	行進曲	三戸知章	ブラスバンド		バンドの友社	民間						4
171	今日も元気で	行進曲	安部幸明	ブラスバンド	1941年		民間	1943. 4. 14放吹（放送）					2
172	行列	不明	菅原明朗	ブラスバンド	1943年		民間	1943. 5. 5陸軍（放送）					2、i
173	協和	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1944. 4. 16海軍（放送）				満州帝国協和会選定。	2
174	極東の空	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 7. 26陸軍（放送）					1、2、d
175	挙国の感謝	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド	1942年	白眉出版社	民間	1942. 3. 10放吹（放送）		日本のマーチ・ベスト20（戦前篇）			2、5、a
176	挙国の歓喜	序曲	江口源吾	ブラスバンド	1928年		海軍（民間）	1930. 5. 27海軍	コロムビア29714, 29715	日本の吹奏楽II ～江口 源吾作品集～	昭和天皇即位大典演奏会用。		a、d
177	挙国の歓声	序曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1933. 12. 30陸海軍合同（放送）					1、2
178	漁村風景	意想曲	石井留之助	ブラスバンド		管楽研究会	海軍	1942. 5. 24海軍				海軍軍楽隊名義。	1、5、b
179	漁村の想出	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 8. 29海軍					1、b
180	銀の翼	円舞曲	小倉朗	ブラスバンド			民間	1943. 2. 11放吹（放送）	ニッチクAK-633				2、3
181	錦旗奉じて	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1936. 11. 27海軍（放送）					2
182	金鵄の輝き	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1943. 10. 5皇桜（放送）					2
183	銀嶺の乱舞	円舞曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1944. 1. 27放吹（放送）					2
184	空軍の威力	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1936年		海軍	1936. 4. 12海軍（初演）		世界のマーチ・ベストコレクション7「軍艦行進曲」		海軍軍楽隊名義。水島洋作詞の軍歌を曲中に使用。	a、d
185	空襲何ぞ恐るべき	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1941. 10. 10陸軍（放送）（防空の歌発表会中継）					2、d
186	空中進撃	円舞曲	水島敎雄	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 9. 17皇桜（放送）					2
187	草に折る	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1943年		陸軍			日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集			a
188	靴が鳴る行進曲	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1939年		陸軍		コロムビア33664			運動会用行進曲。弘田龍太郎作曲の「靴が鳴る」を楽曲中に使用。	3
189	国氏恤兵歌	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍						d
190	国奉る	序曲	藤井弘也	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 12. 27海洋（放送）					2
191	国の幸	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1941. 7. 1陸海軍合同	ビクターA-3120			海軍軍楽隊名義。谷村氏資料では片山正見編曲。秋山紀夫によると斉藤丑松作曲。	1、2、b、d
192	国の護り	行進曲	平尾貴四男	ブラスバンド			民間	1938. 11. 7陸軍（放送）					2、4、9、f
193	くろがねの力	行進曲	小森宗太郎	鼓笛隊		共益商社	陸軍	1942. 4. 29（放送）			1941年、第2回全日本吹奏楽大行進大競演会鼓笛隊課題曲。	大日本体育協会選定、朝井新一作詞、江口夜詩作曲の「くろがねの力」の編曲。	2、5、11、c
194	軍楽行進	行進曲	和田小太郎	ブラスバンド		共益商社	陸軍（民間）						b
195	軍楽と喇叭の併合新分列行進	行進曲	永井建子	喇叭隊とブラスバンド			陸軍	1913. 10. 31陸軍					1
196	軍歌陸軍	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1945. 5. 2陸軍（放送）					2
197	軍艦金剛	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1931年		海軍（民間）		ポリドール896-B	日本の吹奏楽II ～江口 源吾作品集～			a
198	軍艦	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1900年頃	共益商社、バンドの友社、白眉出版 / 共同音楽出版社（No. 64）（戦後）、音楽之友社（戦後）	海軍	1910. 7. 16海軍	キング21144 ほか	日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集		小学唱歌掲載の鳥山啓の歌詞（作曲は山田源一郎）に瀬戸口が新たに作曲した軍歌「軍艦」の主題を主部に、儀制曲「海行かば」の主題をトリオに使用。	1、4、9、a、d ほか多数
199	軍艦旗	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1938年	管楽研究会	海軍	1938. 11. 3海軍（放送）	キング31002 ビクターX-2	日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。佐佐木信綱作詞、瀬戸口藤吉作曲の「軍艦旗の歌」をトリオに使用した行進曲。	2、3、5、a、j
200	軍艦進水式の歌	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1933. 11. 16海軍（放送）				軍歌付き行進曲。武富邦茂作詞、江口作曲。	2
201	軍艦三笠	行進曲	岩国茂太郎	ブラスバンド			民間	1931. 12. 23大阪市音楽隊（放送）				放送記録では「庄司義也作曲」と記載あり。	2
202	軍旗の下に	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1945. 6. 26陸海軍合同（放送）					2
203	軍神（交響詩）	その他	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 8. 25海軍（放送）					2
204	軍人精神	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）						d
205	軍人の精神	行進曲	田中穂積	ブラスバンド			海軍	1945. 6. 26陸海軍合同（放送）		海軍軍楽隊の遺産（LP）		田中穂積作曲の軍歌「軍人勅諭」をトリオに使用。	2、a
206	軍隊生活行進曲	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍			世界のマーチ・ベストコレクション7「軍艦行進曲」			3
207	決死隊	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 6. 3海軍（放送）					2
208	元寇の役	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍		ポリドール10042	進め!荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集		永井建子作詞作曲「元寇」をトリオに使用した行進曲。	3、a
209	建国	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1938年	管楽研究会	海軍	1940. 7. 1陸海軍合同	ビクターA-3071	日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。建国祭本部制定曲。陸軍の序曲「悠久」と対。伊沢修二作曲「紀元節」を曲中に使用。戦後に「紀元節」部分を削除し、大行新曲「民族の誇り」に改題。	4、1
210	建国	行進曲	永井巴	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍（民間）					副題に「紀元節祝典用」。	4、d
211	建国	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1940. 11. 23榎青年学校喇叭鼓隊（コンクール）					4、c

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	奥揚
212	建国行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		ポリドール-3537	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		建国祭懸賞当選歌、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の『「建国行進曲」其の二』を主部に、「紀元節」をトリオに使用した行進曲。	3、a、d
213	憲法祭（奉国行進曲）	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 4. 16海軍（放送）					2
214	興亜行進曲	行進曲	深海善次	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 4. 8星桜（放送）					2
215	興亜の響	行進曲	田村明一	ブラスバンド			陸軍	1942. 6. 3陸軍（放送）					2、9
216	興亜	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1943年以前	共益商社	民間	1942. 12. 26放吹（放送）	ポリドールP-5044、コロムビア100100、キング47033、ビクター ほか	日本のマーチ（戦前編）、戦前日本の名行進曲集～陸軍軍楽隊編～		朝日新聞懸賞募集、陸海軍文部三省後援の支那事変3周年記念「興亜行進曲」（詞に今沢ふきこ、曲に福井文彦が選出）をトリオに使用。	4、a、d
217	興亜の花	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 10. 20放吹（放送）					2
218	興亜の光	不明	上羽仙松	ブラスバンド		ヲグラ楽譜出版	陸軍（民間）						4
219	興亜の光	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 10. 18放吹（放送）					2
220	黄海海戦記念	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍	1921. 5. 27海軍	コロムビア2551-B、ビクターK-115 ほか	日本のマーチ（戦前編）		曲中に田中穂積作曲の軍歌「黄海の大捷」と「勇敢なる水兵」を使用。	1
221	校旗の下に	不明	小森宗太郎	鼓笛隊		共益商社	陸軍						5
222	航空決戦	行進曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1943. 11. 29星桜（放送）					2
223	航空	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1940. 10. 4陸軍					4
224	航空士官	行進曲	永井巴	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1942-2-6）	陸軍（民間）	1944. 6. 18星桜（放送）				吹奏楽2巻6号付録楽譜。	5
225	航空日本	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	陸軍	1940. 10. 4陸軍		進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集	1942年、第3回大日本吹奏楽大会吹奏楽団行進演奏課題曲。	朝日新聞社選定、舟木集（中川英雄？）作詞、佐々木すぐる作曲の「航空日本の歌」をトリオに使用。管楽研究会広告には「航空日本の歌」とある。	5、a、c、d
226	皇軍の進発	意想曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1937. 8. 12海軍					b
227	行軍帰途	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30238			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
228	皇軍讃歌	行進曲	深海善次	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 12. 7陸軍（放送）（大東亜戦争一周年記念大行進曲発表演奏会）					2
229	皇軍進発	意想曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1935. 1. 28海軍（放送）					2
230	皇軍に捧げて	行進曲	河野佐七	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1937. 2. 21八王子連合青年団喇叭鼓隊（放送）					2
231	皇軍入城	不明	宮下崇水	ブラスバンド		バンドの友社	民間						5
232	皇軍之頌	行進曲	河南史郎	ブラスバンド		日本管楽器（シンフォニー楽譜）	不明				管楽研究会入選曲。		5
233	皇軍の意気	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 12. 8（放送）					2、d
234	皇軍の門出	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊とブラスバンド|ブラスバンド	1932年	共益商社 / 管楽研究会	陸軍	1937. 8. 28陸軍	ビクター52204-B	日本の吹奏楽V 大沼哲作品集		陸軍軍楽隊名義。トリオに「維新マーチ」を使用。ブラスバンド編成（共益商社）、ブラスバンドと喇叭鼓隊合同編成（管楽研究会）の2種類がある。	1、a、d、i
235	皇軍の精華	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1933年	管楽研究会	陸軍	1933. 5. 6陸軍		日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集	1941年、第２回全日本吹奏楽大行進大競演会吹奏楽団課題曲。	陸軍軍楽隊名義。警視庁音楽隊の楽譜の楽曲名は、「征戎の剣」を棒線で削除し「皇軍の精華」となっている。	4、5、9、a
236	皇軍を讃う	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1939. 2. 5海軍（放送）					2
237	攻撃	意想曲	山本統三郎	ブラスバンド	1931年以前	共益商社、吹奏楽付録楽譜（1942-2-8）	陸軍	1931. 12. 10陸軍（放送、中継）	ビクター52527-A コロムビア33806 ニットー5211 ほか	陸軍軍楽隊の遺産（LP）		吹奏楽2巻8号付録楽譜。	2、5、a、d
238	工場の朝	円舞曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 9. 26星桜（放送）					2
239	荒城の月（幻想曲）	その他	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1940. 12. 8東響吹					2、4
240	行進曲「陸軍軍楽隊に捧ぐ」	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1929. 7. 6陸軍					1
241	行進曲	行進曲	松平頼則	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』には「無題」とある。『音楽文化新聞』第17号では「行進曲」。『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
242	更生	意想曲	不明	ブラスバンド			不明	1936. 11. 9満洲国陸軍新京軍楽隊合同（放送）					2
243	高等小学校	行進曲	東京市小学校吹奏楽連盟	喇叭鼓隊とブラスバンド			その他	1940. 7. 20東京市小学校吹奏楽連盟（紀元二千六百年奉祝銃後士気振興吹奏楽第四回大演奏会）					4
244	校風	行進曲	不明	ブラスバンド		白眉出版	不明						b
245	故郷の歌	その他	伊藤昇	ブラスバンド			海軍（民間）	1944. 5. 23海洋（放送）					2
246	故郷の祭	舞曲	大木正夫	ブラスバンド			民間	1944. 2. 8陸軍（放送）					2、9
247	国軍の象徴（幻想曲）	その他	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1936. 5. 6陸軍（放送）					2、9
248	国風「壽山祝」	不明	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1906. 11. 25陸軍					1
249	告別	序曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍	1932. 6. 30陸軍（放送）					2
250	告別行進曲	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍		ポリドール511-A	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編		『オールド・ラング・サイン（蛍の光）』をトリオに使用した行進曲。	3
251	国防の鐘	行進曲	小森宗太郎	ブラスバンド			陸軍（民間）	1933. 8. 11愛国吹奏楽団（放送）					2
252	国防婦人	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1940年		陸軍		テイチクT3082	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編			3、a
253	行熊の踊り	不明	石田一郎	ブラスバンド			民間	1943. 3. 13星桜（放送）					2
254	国民の名誉	行進曲	吉田盈照	ブラスバンド			陸軍	1934. 4. 6陸軍（放送）				陸軍軍楽隊名義。楽譜に作曲者名記載。	2、9
255	国民義勇隊	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1945年		海軍	1945. 6. 24陸海軍合同（放送）		日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		堀内敬三、佐伯孝夫、勝承夫、藤浦洸、権木三郎の合作作詞、橋本国彦作曲の「国民義勇隊の歌」をトリオに使用。	2、9、a、d
256	国民協和の歌	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1941年	共益商社	民間						d
257	国民行進曲	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）	1940. 7. 20亀戸喇叭鼓隊（紀元二千六百年奉祝銃後士気振興吹奏楽第四回大演奏会）					4
258	国民神軍	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド			民間	1944. 2, 25海軍（放送）					2
259	国民進軍	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1940. 12. 20星桜				東京日日新聞社、大阪毎日新聞社懸賞募集、陸海軍省、軍事保護院選定の「国民進軍歌」（作詞　光元篤之介　作曲　松田洋平）をトリオに挿入したもの。	4
260	国民進軍	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1940年		民間	1940. 9. 27海軍					2、4
261	国民進軍歌	行進曲	小森宗太郎	鼓笛隊			陸軍				1942年、第3回大日本吹奏楽大会鼓笛隊行進演奏課題曲。		c
262	国民進軍	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1941. 2. 28陸軍（放送）					2、d
263	国民総進軍	行進曲	服部良一	ブラスバンド			民間	1942. 12. 1放吹（放送）	コロムビア55107		少國民用正常歩行進曲集　第二輯。	宮田東峰作曲？	2、3

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
264	国民の意気	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1936年	管楽研究会	海軍	1936. 5. 16海軍（放送）	キング20008	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編		海軍軍楽隊名義。	1、2、3、5、a
265	国有鉄道奉公会歌行進曲	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1942年		民間		ビクターPK-366			レコード片面は、国有鉄道奉公事業委員会制定、橋本国彦作曲「国有鉄道奉公会歌」。	3
266	御降誕（奉祝前奏曲）	前奏曲	深海善次	ブラスバンド	1933年		海軍（民間）	1933. 12. 30陸海軍合同（放送）		新・祝典行進曲吹奏楽による日本慶祝曲集		海軍軍楽隊名義。皇太子殿下御誕生奉祝陸海軍軍楽隊合同大演奏会演奏曲。	2、a、b
267	御大礼奉祝行進曲	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						4、5
268	胡蝶	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30235			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
269	国旗行進曲	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド		バンドの友社	民間						5
270	子猫	その他	大沼哲	ブラスバンド		共益商社	陸軍					1915～1916年作曲のピアノ曲の編曲。	4、9、d、h
271	近衛師団行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1935年		陸軍		ポリドールAT-4-B（委託盤）			レコード片面は、入江為守作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の「近衛師団軍歌」。	3
272	紺碧の空	行進曲	川上昇	ブラスバンド		バンドの友社	不明						5
273	在郷軍人の夢	意想曲	辻順治	ブラスバンド	1928年以前		陸軍	1929. 3. 10陸軍（放送）	ビクター50404				2、3、9
274	埼玉青年	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1940年		海軍		テイチク特302			レコード片面は杉江健二作詞、海軍軍楽隊作曲の「埼玉青年の歌」。	3
275	祭典	前奏曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1942. 12. 25陸軍（放送）					2
276	砂丘の花	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 4. 1放吹（放送）					2、d
277	凱旋行	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 7. 24放吹（放送）					2
278	桜	円舞曲	須摩洋朔	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1933. 5. 6陸軍	ポリドール8759-B			陸軍戸山学校軍楽隊名義。	4、5、b、d
279	桜	円舞曲	渡辺永吉	ブラスバンド			陸軍	1937. 12. 20陸軍（放送）					2
280	さくら（夜祝曲）	不明	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 1. 3放吹（放送）					2、d
281	里踊	舞曲	八木伝	ブラスバンド		バンドジャーナル1963年9月号付録（戦後）	陸軍（民間）	1943. 7. 3星桜（放送）	ニッチクAK-632			管弦楽曲の組曲「民族舞曲」（1942年）より抜粋。	2、3、i
282	沙漠の巡邏兵	不明	須賀田礒太郎	ブラスバンド			民間	1944. 1. 12星桜（放送）					2
283	サラセン舞曲	舞曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年以後		民間						f、i
284	産業青年	行進曲	宮田東峰	ブラスバンド			民間	1943. 11. 13放吹（放送）					2
285	産業戦士	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 5. 14放吹					2
286	産業報国（組曲）	組曲	藤井弘也	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 11. 29星桜（放送）			「農村風景」、「工場風景」、「街頭風景」		2
287	四季（組曲）	組曲	片山正見	ブラスバンド			海軍	1943. 9. 11海軍			「秋、田園の喜び」、「冬、火防祭」、「春、桜」、「夏、夏祭」	海軍軍楽隊名義。	1、2、b
288	自作行進曲と「ロングサイン」	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1915. 8. 28陸軍					1
289	沈勇	その他	仁木他喜雄	ブラスバンド	1944年		民間	1944. 7. 22放吹（放送）	ニッチクJX1225		日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	2、3、6
290	貫実剛健	意想曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						4、5
291	従軍記者	行進曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍		コロムビア				h、i
292	襲撃（描写曲）	意想曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1939. 6. 3陸軍					1、4、9、d
293	銃後の花	行進曲	諏訪本正富	ブラスバンド	1933年	管楽研究会	陸軍	1933. 5. 6陸軍	ポリドール8759-A	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		陸軍軍楽隊名義。曲中に「金剛石」、「婦人従軍歌」を使用。	1、4、9、a、d
294	銃後の青年	行進曲	大阪市音楽隊	ブラスバンド			民間	1942. 4. 12大阪市音楽隊（天王寺音楽堂）					5
295	銃後の日本大丈夫	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1939. 12. 25海軍（放送）	ビクターZ-282			愛国婦人会制定。	2、3
296	銃後の人	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1933. 3. 10陸軍					1、5
297	銃後の守り	行進曲	永島敬雄	喇叭鼓隊			陸軍	1940. 11. 23神戸喇叭修得団（コンクール）					3、4、c
298	祝賀	序曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1939. 5. 14陸海軍合同（放送）					2、4、d
299	祝日（ポルカ）	舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 8. 25陸軍					1、9
300	祝捷	円舞曲	山本銑三郎	ブラスバンド			陸軍	1934. 3. 10陸軍（放送）					2
301	祝勝	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1941年	管楽研究会	海軍	1942. 5. 24海軍		日本の吹奏楽IV片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。	1、5、a
302	祝典	円舞曲	森屋五郎	ブラスバンド			陸軍	1943. 1. 3放吹（放送）				陸軍軍楽隊名義。	2、9、d
303	祝典	前奏曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍						9
304	序曲祝典	序曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）	1940. 7. 20専修商業学校喇叭鼓隊（紀元二千六百年奉祝銃後士気振興吹奏楽第四回大演奏会）					4、d
305	祝福	序曲	久保田憲吉	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1937. 3. 21巣鴨中学商業学校喇叭鼓隊（放送）					2
306	祝砲の轟き	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						b
307	出征兵士を送る歌	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1939年頃		陸軍	1939. 11. 9陸軍（放送）	キング40025	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		大日本雄弁会講談社懸賞募集、陸軍省選定、生田大三郎作詞、林伊佐緒作曲の同名歌をトリオに使用。	2、3、a
308	殉国の英霊に捧ぐ	不明	竹井徳良	喇叭鼓隊			不明	1945. 4. 16扶桑（放送）					2
309	殉国の英霊に捧ぐ	不明	上羽仙松	ブラスバンド		バンドの友社／ヲグラ楽譜出版	陸軍（民間）	1938. 1. 10警視庁（放送）					2、4、5
310	小学遊戯	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						b
311	小組曲	組曲	清水脩	ブラスバンド			民間	1943. 6. 30海洋（放送）			1943年、日本文化中央連盟制定。「富士を仰ぐ」「間奏曲」「忠霊塔」「行進曲」	放送記録に曲名の記載あり。	2、6
312	小国民進軍	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 4. 13陸軍（放送）					2
313	少年鼓手	行進曲	不明	ブラスバンド		白眉出版	不明						b
314	少年旗手	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1931年	管楽研究会／共同音楽出版社（No. 91）（戦後）	陸軍			日本の吹奏楽VI須摩洋朔作品集			4、5、a、d
315	少年航空兵	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、d
316	少年兵	行進曲	鈴木哲夫	ブラスバンド		管楽研究会、バンドの友社、白眉出版	民間	1941. 4. 15芝浦マツダ音楽部（放送）				谷村氏資料では「宮田清蔵 編曲」。	4、b、d
317	乗馬隊分列行進	不明	不明	喇叭鼓隊			不明	1945. 5. 11扶桑（放送）					2
318	小品「北京風景」 北京の街にて	その他	森屋五郎	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1941. 4. 19陸軍			森屋、竹内による小品「北京風景」中の楽曲。		1、5、d
319	小品「北京風景」 馬車に乗って	その他	竹内龍夫	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1941. 4. 19陸軍			森屋、竹内による小品「北京風景」中の楽曲。		1、5、d
320	勝利	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1941. 5. 27海軍（放送）					2
321	勝利の剣	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1938. 5. 20陸軍（放送）					2
322	勝利の誓	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 12. 7陸軍（放送）（大東亜戦争一周年記念大行進曲発表演奏会）					2
323	勝利の行進	行進曲	山本銑三郎	ブラスバンド			陸軍						9
324	勝利の進軍	行進曲	田代晴郎	ブラスバンド			海軍	1941. 6. 10石川島（放送）					2、d

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
325	勝利の進軍	序曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1945. 3. 23海軍（放送）					2
326	勝利の生産	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1943年以降		海軍		ニッチク100837	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編		朝日新聞社選定、国民徴用援護会制定「勝利の生産」（作詞：下敦子、作曲：信時潔）をトリオに使用。	3、a
327	勝利の誓い	円舞曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1943. 8. 25放吹（放送）					2
328	勝利の旗の下に	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 7. 18放吹（放送）					2
329	勝利への途	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド	1944年		陸軍（民間）	1944. 11. 21海洋（放送）			日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	2、6
330	勝利目指して	行進曲	美春錠二（編曲？）	ブラスバンド			不明	1945. 5. 8放吹（放送）				放送記録には、原曲は渋沢一雄作曲と記載。詳細不明。	2
331	初夏の歌	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 7. 1東京交響吹奏楽団（放送）					2
332	女性挺身	行進曲	清水脩	ブラスバンド			民間	1944. 5. 16星桜（放送）					2
333	除隊の曲	不明	山口常光	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						4、d
334	進軍	不明	井上繁隆	鼓笛隊			陸軍	1942. 11. 23東京商業実践女学校（コンクール）					c
335	進軍	行進曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1939. 6. 7陸軍（放送）					2、9
336	進軍行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		ビクター50940-B	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		児玉花外作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲、松竹映画「進軍」の主題歌「進軍の歌」をトリオに使用。信号喇叭「前へ」、陸軍速歩行進其の一、其の二を使用。	a
337	進撃追撃	行進曲	吉本光蔵	ブラスバンド			海軍	1931. 6. 13海軍	ニッポノホン1249	海軍軍楽隊の遺産（LP）		軍歌「戦闘歌（進撃及び追撃）」（むすんでひらいてと同曲）をトリオに使用。	1、3、10、a
338	新生中国	不明	安倍盛	ブラスバンド			民間	1943. 3. 22星桜（放送）					2
339	新世紀	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド			陸軍	1941. 2. 25陸軍（放送）		日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集			2、9、a、d
340	新世界	行進曲	井上繁隆	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍						5、d
341	新中国	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	不明		民間	1943. 3. 28星桜（放送）					2、f
342	進発	行進曲	不明	ブラスバンド		白眉出版	不明						b
343	新満州国	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						9
344	新緑の武蔵野	円舞曲	吉田盈照	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1931. 6. 6陸軍	ビクター52144—B			陸軍軍楽隊名義。	1、5、d
345	陣列の突撃	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1938. 10. 30石川島（放送）					2
346	スケート	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30232			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
347	スケッチ「軍艦生活の一日」	その他	福喜多鎮雄	ブラスバンド			海軍（民間）						b
348	進む日の丸	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1937年	管楽研究会	陸軍	1940. 5. 18陸軍		日本の吹奏楽V 大沼哲作品集			1、4、c、d
349	進め！荒鷲	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1938年頃	管楽研究会 / 音楽之友社OTB009（空の王者）（戦後）	海軍（民間）	1938. 8. 27海軍		進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集		秋山によると、戦後に「空の王者」と改題。	1、4、a、d
350	進め一億火の玉だ	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1941年頃		陸軍	1942. 1. 2陸軍（放送）	キング67015			防衛総司令部選定。大政翼賛会作曲の表記。大政翼賛会作詞、長妻完玉作曲の同名曲を行進曲に編曲。	2、3
351	進め貫け	意想曲	杉山長谷夫	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 10. 26海洋（放送）					2
352	進め若人	行進曲	永井巴	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍（民間）					副題に「青年の為の行進曲」。	4、d
353	スポーツ	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1930. 10. 5陸軍	ビクター51848				1、3
354	皇御国	行進曲	藤井弘也	ブラスバンド			陸軍（民間）	1940. 9. 20星桜（放送）					2、d
355	精鋭	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						1、4、d、h
356	精鋭なる我が空軍	行進曲	辻順治	ブラスバンド			陸軍	1933. 8. 11愛国吹奏楽団（放送）					2
357	正義の皇軍	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド		管楽研究会	民間	1938. 8. 9大東京（放送）					2、4、d
358	世紀の進軍	行進曲	油谷三美	ブラスバンド			陸軍（民間）	1941. 9. 8星桜（放送）					1、2、d
359	正義の光	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1935. 1. 11陸軍（放送）					2、9
360	世紀の若人	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1941-12-1）	陸軍	1942. 2. 20海洋（放送）				楽曲中に大日本青少年団選定、福田伝吉 作詞、林 伊佐緒 作曲の同名曲を使用。吹奏楽1巻1号付録楽譜。	2、5、9
361	誠実な友	行進曲	三戸知章	ブラスバンド		バンドの友社	民間						b
362	青春	行進曲	白鐵巌	ブラスバンド	1940年頃	吹奏楽付録楽譜（1942-2-2）	海軍（民間）	1943. 12. 4放吹（放送）	コロムビア32050		1941年、日本文化中央連盟選定。	1942年、日本文化中央連盟の芸能祭洋楽部門のための委嘱作品。音楽文化新聞によると、同公演では吹奏楽曲は未発表とのこと。吹奏楽2巻2号付録楽譜。『音楽文化新聞』第1号、第12面。コロムビアのレコードでは「鞭鞭」。	2、3、5、6
363	正々堂々	行進曲	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、d
364	聖戦（交響組曲）	組曲	森義八郎	ブラスバンド			民間	1944. 3. 25海軍（放送）			「虐げられた民族」「無敵皇軍の前進」「果敢なる総攻撃」「忠魂に捧ぐ」「勝利は日章旗の下に」		2
365	聖戦の曲	不明	山下孝	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会陸軍献納曲。	『吹奏楽』には記載なし。『音楽文化新聞』第17号に記載あり。『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
366	聖戦萬里	行進曲	安倍盛	ブラスバンド		吹奏楽月報7巻9号付録	民間	1944. 3. 4星桜（放送）				吹奏楽月報7巻9号付録。	2、5
367	青年	行進曲	山口常光	ブラスバンド			陸軍	1943. 6. 14放吹（放送）				陸軍軍楽隊名義。	1、2、d
368	青年	行進曲	和田小太郎	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍（民間）						4
369	青年	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						d
370	青年	円舞曲	箕作秋吉	ブラスバンド			民間	1943. 5. 20星桜（放送）					2
371	青年	行進曲	若松喜八	ブラスバンド			海軍	1941. 7. 11海洋（放送）					2
372	青年大行進	行進曲	鈴木哲夫	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間					2/4拍子の記載。（面白い愉快な曲）という解説あり。	5、d
373	青年行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1930. 7. 19陸軍					1
374	青年士官	行進曲	伊藤宣二	ブラスバンド			民間	1934. 4. 6陸軍（放送）					2、9
375	青年体操伴奏曲	不明	外山国彦	喇叭鼓隊			民間		キング353-A				3
376	青年防空	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1936年		陸軍		テイチク50430			レコード片面は、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の「青年防空の歌」。	3
377	世界一周	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1928. 6. 2陸海軍合同					1
378	世界に雄飛して	不明	和田小太郎	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1945. 6. 19扶桑（放送）					2
379	赤十字	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 4. 28海軍（放送）					2
380	瀬戸の風景	円舞曲	徳田三郎	ブラスバンド	1940年？		海軍					吹奏楽年鑑では福島紅陽作曲。	4、b
381	戦車第一連隊	行進曲	長津義司	ブラスバンド	1940年		民間		ポリドールP-5015			レコード片面は、八波則吉作詞、新城正一作曲の軍歌「戦車第一連隊の歌」。	3
382	戦車の進撃	意想曲	永井巴	ブラスバンド			陸軍（民間）	1944. 3. 11星桜（放送）					2
383	選手の入場	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）		ポリドール357-B				3
384	戦捷	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	海軍						5
385	戦捷	前奏曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 3. 12陸海軍合同（放送）					2
386	戦捷	行進曲	鈴木哲夫	ブラスバンド		バンドの友社	民間					広告に（軍歌集）（勇しい優しい軍歌）の解説あり。	5
387	戦捷	行進曲	竹内龍夫	ブラスバンド			陸軍	1942. 4. 23放吹（放送）					2、9

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
388	戦捷	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1942-2-3）	陸軍	1942. 5. 16陸軍				吹奏楽2巻3号付録楽譜。	5
389	戦場組曲	組曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1942. 11. 26海軍（放送）			「軍旗と共に」「廬山の蝋声」「興亜の光」		2
390	前進	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1943. 12. 8陸海軍合同（放送）				放送記録には「大東亜戦争二周年記念」と記載。	2
391	前進	行進曲	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、5
392	戦陣訓	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1940年	楽苑社	陸軍	1941. 4. 19陸軍		日本の吹奏楽VI 須摩洋朔作品集			1、2、a、b
393	潜水艦	意想曲	斉藤丑松	ブラスバンド			海軍		ビクター3120			海軍軍楽隊名義。	b、d
394	前線と銃後	行進曲	油谷三美	ブラスバンド			民間	1943. 6. 14星桜（放送）					2
395	前奏曲	前奏曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1938. 9. 27陸軍			第一前奏曲か？		1
396	前奏曲	前奏曲	吉田盈照	ブラスバンド			陸軍						9
397	前奏曲	前奏曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 5. 5陸海軍					1
398	前途	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1945. 2. 11陸海軍合同（放送中継）					2
399	船舶兵行進曲	行進曲	市川都志春	ブラスバンド			民間	1944. 7. 16放吹（放送）					2
400	総決起	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1945. 3. 22陸軍（放送）					2
401	装甲列車（描写曲）	意想曲	江口源吾	ブラスバンド	1932年頃		海軍（民間）	1932. 7. 17海軍（放送）		日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～			1、2、a、d
402	増産行進曲	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1943. 2. 11放吹（放送）					2
403	総進軍	その他	柿本七郎	ブラスバンド	1942年以前		民間	1943. 2. 25陸軍（放送）			日本音楽文化協会陸軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）。	2、5、6、9
404	葬送行進	行進曲	和田小太郎 編曲	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）					原曲不明。	4、5
405	送別	行進曲	堀内敬三	ブラスバンド			民間	1925. 9. 21陸軍（放送）				大沼哲フランス留学の送別曲。	2、12、h
406	送別紀念行進	行進曲	荻野理喜治	ブラスバンド			陸軍						9
407	聖戦	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 4. 26海軍（放送）					2
408	祖国の光	不明	宮下紫水	ブラスバンド			民間	1937. 10. 10大東京（放送）					2
409	園の夕焼け	円舞曲	永井建子	ブラスバンド	1935年以前		陸軍	1935. 8. 1陸海軍					1
410	空ゆかば	不明	小山勉彦	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
411	空征く日本	行進曲	古関裕而	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1942-2-10）	民間		コロムビア 100608	海軍軍楽隊の遺産（LP）		日本蓄音器レコード文化協会、大日本飛行協会制定、野村俊夫作詩、古関裕而作曲の「空征く日本」をトリオに使用。吹奏楽2巻10号付録楽譜。	3、5
412	空の勇士	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1940年		陸軍		ビクターA-4107			陸軍省選定、読売新聞懸賞当選、大槻一郎作詞、藏野今春作曲の同名曲を主題に使用。	3
413	空の強者	行進曲	小倉朗	ブラスバンド			民間	1944. 9. 19星桜（放送）					2
414	空の行進曲	行進曲	菅原明朗	ブラスバンド	1935年		民間						1
415	空の護り	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1933年頃	吹奏楽月報7巻8号付録	海軍（民間）	1943. 9. 17星桜（放送）	コロムビア 27461-B	陸軍軍楽隊の遺産（LP）		東京警備司令部（陸軍）推薦曲、町田啓二作詞、江口夜詩作曲、国民歌「護れ大空」をトリオに使用。	2、3、a、b、d
416	第八連隊行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		コロムビアA-310			中間部に町田敬二作詞、陸軍軍楽隊作曲の「野戦重砲兵 第八連隊々歌」を使用。	3
417	体育大行進	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1939年	バンドの友社	海軍	1941. 4. 3海洋（放送）	コロムビア 30376	日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集		大日本体育協会制定。浅井新一作詞、江口夜詩作曲による「くろがねの力」をトリオに使用。	2、3、4、9、a、d
418	第一前奏曲	前奏曲	大沼哲	ブラスバンド	1924年	共益商社	陸軍			日本の吹奏楽V 大沼哲作品集	1923年に作曲したマンドリンオーケストラ曲「第一前奏曲」と同様の旋律を使用して作曲。		4、a、d、h
419	大演習行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		ポリドール 3769-B	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		喇叭譜「突撃」、トリオには土井暁翠作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲「大演習の歌」を使用した行進曲。	a
420	大歓喜	序曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1940. 11. 10陸海軍合同	ポリドールP-5075	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編	紀元二千六百年記念奉祝会演奏曲。		9、a、d、h
421	大建設	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1938年頃	管楽研究会	陸軍	1939. 6. 3陸軍		日本の吹奏楽V 大沼哲作品集		合唱付。柴野猛亥知作詞、大沼哲作曲の国民歌謡「大建設の歌」をトリオに使用。	4、5、9、a、d
422	大航空	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1943年頃		陸軍	1944. 6. 24陸軍（放送）	ビクターA-4474	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		1943年、第4回航空日記念、西條八十作詞、佐々木俊一作曲、国民合唱「大航空の歌」をトリオに使用した行進曲。	2、3、a
423	第三艦隊行進曲	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1932年頃？		海軍（民間）			進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集		酒井慶三作詞、山田耕筰作曲の「第三艦隊警備の歌」をトリオに使用。	a
424	大進軍	不明	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1943. 1. 3放吹（放送）					2
425	大好きな兵隊さん	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド		音楽の友社（0TB-021）（トランペット・マーチ）（戦後）	民間	1943. 4. 29放吹（放送）	ニッチクAK-633			秋山紀夫によると、戦後に「トランペット・マーチ」と改題。	2、3、d
426	大政翼賛	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 4. 11東京交響吹奏楽団（放送）					2
427	大草原（交響的序曲）	序曲	石田一郎	ブラスバンド			民間	1943. 5. 14放吹（放送）					2
428	大典行進曲	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						b
429	大東亜	円舞曲	井上繁隆	ブラスバンド			陸軍	1944. 11. 10星桜（放送）					2
430	大東亜	行進曲	遠藤定夫	ブラスバンド			陸軍	1942. 4. 23星桜（放送）					2
431	大東亜戦記	行進曲	遠藤定夫	ブラスバンド			陸軍	1942. 11. 16星桜（放送）					2
432	大東亜	組曲	吉原規	ブラスバンド			民間	1944. 5. 1陸軍（放送）			「春への前奏曲」「戦争」「黎明」「行進」		2
433	大東亜決戦	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1941年	管楽研究会	海軍	1942. 4. 26海軍	コロムビア 100627B	日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。伊藤豊太作詞、清水（百田）欣和作曲の「大東亜決戦の歌」をトリオに使用。	3、5、a
434	大東亜戦記	その他	深井史郎	管弦楽と朗読とブラスバンド			民間	1942. 12. 11日響、放吹（放送）				放送記録では、深井史郎演出、作編輯並作曲。指揮は山田和男、朗読は和田放送員。	2
435	大東亜戦争海軍の歌	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1942年	管楽研究会	海軍	1942. 5. 26海軍（日比谷、大東亜戦争海軍の歌発表会、放送中継）	コロムビア 100538B	日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。朝日新聞社制作、海軍選定歌の河西新太郎作詞、橋本国彦作曲の「大東亜戦争海軍の歌」をトリオに使用。	2、3、5、a
436	大日本青年団	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1938年頃		海軍（民間）			進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集		日本連合青年団の北原白秋作詞、高階哲夫作曲「大日本青年団歌」をトリオに使用した行進曲。	a
437	大日本	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1939年	共益商社	海軍	1940. 4. 20海軍	ビクターA-3015	日本の吹奏楽III 斉藤丑松作品集	1940年、日本文化中央連盟主催、皇紀二千六百年奉祝芸能祭制定曲。1940年、第1回紀元2600年奉祝・集団音楽大行進並大競演会課題曲（海軍軍楽隊名義）。		1、4、a、d
438	大日本	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1939年	共益商社、ヲグラ楽譜出版	陸軍	1940. 7. 1陸軍	ビクターA-3015	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編	1940年日本文化中央連盟主催、皇紀二千六百年奉祝芸能祭制定曲。		1、4、9、a
439	大日本行進曲	行進曲	藤井弘也	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍（民間）						4
440	大日本傷病軍人	行進曲	須摩洋朔	ブラスバンド	1944年頃		陸軍	1942. 10. 3海軍（放送）	ビクターE-2580	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		陸軍軍楽隊名義。相馬御風作詞、冨田爽（海軍）作曲の愛国歌「大日本傷痍軍人歌」をトリオに使用。	2、3、8、a

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	奥付
441	大日本青少年団	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1941年以降	大日本青少年団（非売品）	民間					大日本青少年団選定、市瀬正生作詞、富原薫作曲の「大日本青少年団の歌」を曲中に使用。吹奏楽3巻6号16～17頁（広岡淑生「吹奏楽曲解説2」）。	5
442	太平洋	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1939年	共益商社、ヲグラ楽譜出版、バンドの友社、白眉出版	海軍	1939. 5. 13海軍	ビクターA-3053	日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。横山正徳作詞、布施元作曲の「太平洋行進曲」をトリオに使用した行進曲。	1、4、d、j
443	太平洋	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド			民間						9
444	太平洋	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1931年		海軍（民間）	1931. 7. 4海軍	ビクターA-3155	日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～		映画「太平洋」の主題歌（武富邦茂作詞、江口夜詩作曲）をトリオに挿入した楽曲。	1、a
445	太平洋	行進曲	坂西久治	ブラスバンド			海軍	1934. 10. 18聯合艦隊軍楽隊（放送）				放送記録では、土井暁翠作詞、坂西作曲。	2
446	太平洋上の波	意想曲	和田小太郎	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1935. 11. 25専修商業学校喇叭鼓隊（放送）					2
447	太平洋上波静か	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）						4、d
448	太平洋を見渡して	行進曲	坂西久治	ブラスバンド			海軍（民間）	1944. 6. 13海洋（放送）					2
449	太洋	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1934. 10. 8海軍（放送）					2
450	大陸行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1938年		陸軍		ビクターA-3054			東日、大毎懸賞募集、鳥越強作詞、中支那派遣軍軍楽隊作曲「大陸行進曲」がトリオに使用されている。	3
451	大陸風景	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	海軍	1943. 9. 11海軍					1、5
452	大陸	行進曲	八木伝	ブラスバンド		共益商社	陸軍（民間）						4、d
453	大陸軍行進曲	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1935年		民間	1942. 6. 10放吹（放送）				放送記録には「北原白秋作詞」と記載あり。	2
454	大陸の歌	組曲	深井史郎	ブラスバンド	1943年		民間	1943. 6. 16星桜（放送）			「前奏曲」「歌」「間奏曲」「終曲」。	管弦楽版の『満洲民謡による交響的組曲「大陸の歌」』の吹奏楽編曲。	2、f、i
455	第六師団行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1933年頃		陸軍		ニットー10115-B			九州日日新聞社、九州新聞社懸賞募集当選曲、山口白陽作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の「第六師団行進曲」をトリオに使用。	3
456	大和	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 8. 25海軍（放送）					2
457	台湾	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						b
458	遥しき前進	不明	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
459	黄昏（交響詩）	その他	八木伝	ブラスバンド			陸軍（民間）	1936. 7. 30陸軍（放送					2、i
460	戦い	行進曲	竹内龍夫	ブラスバンド			陸軍	1939. 4. 20陸軍（放送）					2、d
461	戦うフィリピン	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1945. 2. 8放吹					2
462	闘う東条首相	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1943年		陸軍	1944. 1. 17陸軍（放送）	ニッチク100842			大政翼賛会推薦、聖戦文化奉公会選定の小田俊彦作詞、古関裕而作曲「闘う東条首相」を曲中に使用。	2、3
463	闘う農村	組曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1944. 11. 14陸軍（放送）			「朝焼け」「増産祭り」「土と戦う」		2
464	立川飛行機行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1942年		陸軍		テイチク特345			レコード片面は、立川飛行機株式会社編、陸軍戸山学校音楽隊作曲の「立川飛行機株式会社社歌」。	3
465	楽しい奉仕	行進曲	不明	ブラスバンド		管楽研究会	不明					厚生省、財団法人職業協会選定、朝日新聞社献納の勤労報国隊歌、吉川驚美作詞、伊藤翁介作曲の「楽しい奉仕」を使用。	8
466	楽しき歌声	不明	伊藤昇	ブラスバンド	1944年		海軍（民間）				日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	6
467	楽しき一日	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 7. 24放吹（放送）					2
468	岱安	行進曲	宮下崇水	ブラスバンド			民間						9
469	小組曲「村人の踊り」	組曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1941. 3. 15海軍（放送）			「Allegretto」、「 Adagio」、「Allegro」		2、d
470	小国民進軍	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		吹奏楽付録楽譜（1943-3-3）	海軍		ニッチク100655	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編		軍事保護院、日本青少年国民文化協会が募集した小国民進軍歌（作詞：長坂徳治に佐々木すぐるが作曲）をトリオに使用した行進曲。吹奏楽3巻3号付録楽譜。	3、5、a
471	血染めの鉄筆	意想曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍						m
472	鉄父の風光	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1943. 8. 25放吹（放送）					2
473	忠魂	不明	竹井勉良	喇叭鼓隊			不明	1945. 4. 16扶桑（放送）					2
474	忠誠	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1934. 5. 5陸海軍					4
475	忠誠	序曲	深海善次	ブラスバンド			海軍（民間）	1945. 5. 23放吹（放送）					2
476	朝鮮スケッチ（組曲）	組曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 4. 11東京交響吹奏楽団（放送）			「洛東江」「遠いきぬた（「遠砧」）」「妓生」「舞（「舞姫」）」「水汲み男（「水汲み」）」「アリラン（「民謡調」）」		2、d
477	鎮守祭	舞曲	大沼哲	ブラスバンド		共益商社	陸軍	1935. 10. 18陸軍（放送）				1915～1916年作曲のピアノ曲の編曲。	2、4、d、h
478	青島より氤旋	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1915. 5. 23陸軍					1
479	追想	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド		白眉出版社	民間	1943. 9. 5放吹（放送）					2、5
480	月見踊	舞曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1943. 12. 16星桜（放送）					2
481	辻楽長への献呈曲「歌謡曲」	その他	井上繁隆	ブラスバンド			陸軍	1932. 6. 25陸軍			岡部、吉田、井上、佐藤による「辻楽長への献呈曲」中の楽曲。		1
482	辻楽長への献呈曲「行進曲」	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1932. 6. 25陸軍			岡部、吉田、井上、佐藤による「辻楽長への献呈曲」中の楽曲。		1
483	辻楽長への献呈曲「序曲」	序曲	佐藤三等楽手	ブラスバンド			陸軍	1932. 6. 25陸軍			岡部、吉田、井上、佐藤による「辻楽長への献呈曲」中の楽曲。	作曲者は佐藤長助か。	1
484	辻楽長への献呈曲「円舞曲」	円舞曲	吉田楽手補	ブラスバンド			陸軍	1932. 6. 25陸軍			岡部、吉田、井上、佐藤による「辻楽長への献呈曲」中の楽曲。	作曲者は吉田盈照か。	1
485	辻馬車	その他	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 731海洋（放送）				「小曲」。	2
486	土に輝く	舞曲	弘田龍太郎	ブラスバンド			民間	1943. 5. 20星桜（放送）					2
487	ツラン民族	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1929年頃	共益商社	陸軍	1939. 7. 1陸海軍合同		日本の吹奏楽V 大沼哲作品集		管弦楽曲の吹奏楽編曲。	1、9、a、d、h
488	つわもの	行進曲	井上繁隆	ブラスバンド	1933年以前		陸軍	1933. 8. 26陸軍	ビクター52796-B			陸軍軍楽隊名義。楽譜に作曲者名記載。	1、3、9
489	帝都	行進曲	井上繁隆	ブラスバンド			陸軍	1937. 3. 10陸軍（放送）				陸軍軍楽隊名義。楽譜に作曲者名記載。	1、2、9
490	帝都の守り	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1939年頃	管楽研究会	海軍	1939. 10. 6海軍（放送）		日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。トリオに「横浜海軍航空隊隊歌」（松島慶三作詞、内藤清五作曲）を使用。合唱付きもあり。	2、5、a
491	帝都の守り（変奏曲）	その他	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 6. 25海軍（放送）				放送記録に「横浜海軍航空隊の歌の旋律を主題としたるもの」と記載あり。	2
492	敵は幾万	行進曲	弘田龍太郎	ブラスバンド			民間		コロムビア55107		少國民用正常歩行進曲集　第二輯。	山田美妙斎作詞、小山作之助作曲の「敵は幾万」をトリオに使用。	3
493	鉄半部隊	行進曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1945. 7. 17星桜（放送）					2
494	伝書鳩	行進曲	山本力	鼓笛隊とブラスバンド			民間	1943. 4. 29大日本吹奏楽連盟（放送）					2
495	天長節	行進曲	山本力	鼓笛隊			民間	1943. 4. 29大日本吹奏楽連盟（放送）					2
496	電波の力	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1942. 2. 9放吹（放送）				日本放送協会選定	2
497	東亜共栄	行進曲	長津義司	ブラスバンド	1941年		民間		テイチクT3171			レコード片面は、帝都日日新聞社、内閣情報部選定、藤島勤作詞、長津義司作曲の「東亜共栄を讃うる歌」。	3
498	東亜行進曲	行進曲	鈴木総	ブラスバンド			陸軍	1941. 2. 22陸軍					b、k
499	東亜の曲（漁光曲）	不明	高嶺宕 編曲	ブラスバンド		共益商社	不明					原曲不明。	5
500	東亜の巨歩	不明	太田忠	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
501	東亜の空	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1942. 12. 10海洋（放送）					2、9、d
502	東亜の黎明	行進曲	大日本吹奏楽連盟	喇叭鼓隊とブラスバンド		管楽研究会	その他			日本のマーチ（戦前編）		ブラスバンドと喇叭鼓隊の合同編成。	5、a、d
503	東亜の黎明	不明	田中準	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
504	東京	行進曲	辻順治	ブラスバンド			陸軍	1943. 7. 1陸海軍合同					1
505	東京産報行進曲	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1943年		海軍		ビクターPR-367			レコード片面は東京産業報国会制定、海軍軍楽隊作曲の同名歌。	3
506	東京行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1929. 5. 11陸軍	ビクター51102			軍歌合唱付き（陸軍戸山学校軍楽隊作歌）。	3、d
507	東京唱歌	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1927年以前		海軍	1932. 6. 5陸軍	ポリドール10041-B	日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集		「東京頌歌」、「東京行進曲」の表記も。トリオに「東京頌歌」を使用している。	1、3、a
508	東京第一陸軍造兵廠行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		ビクターPR-282			レコード片面は山田正幸作曲、深海善次編曲の「東京第一陸軍造兵廠歌」。	3
509	東京無線青年学校	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド			海軍						b
510	東京湾観艦式記念行進曲	行進曲	吉本光蔵	ブラスバンド	1905年		海軍	1906. 10. 14海軍	ポリドール10050	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編		トリオに「君が代」を使用。	1、3、a、j
511	東郷元帥	行進曲	坂西久治	ブラスバンド			海軍（民間）	1933. 5. 27海軍（放送）				放送記録では、坂西久治作詞作曲。	2
512	闘魂（銃魂歌）	その他	渡辺浦人	ブラスバンド	1943年		民間					1943年、日本音楽文化協会の海軍献納「山本元帥讃頌」の一曲（管弦楽曲）に同名曲あり（『音楽文化新聞』第52号、第1面）。	f、i
513	堂々たる行軍	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		共益商社	陸軍	1938. 7. 16陸軍	コロムビアE2112				1、5、9、d
514	堂々たる皇軍入城	行進曲	山本直忠	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6、i
515	特別攻撃隊	行進曲	下総皖一	ブラスバンド			民間		コロムビア55108			「小国民用正常歩行行進曲集第二輯」。本間一峡作詞、東京音楽学校作曲の「特別攻撃隊」を中間部に使用。	3
516	逐げよ聖戦	行進曲	長津義司	ブラスバンド			民間	1938. 12. 13陸軍（放送）					2
517	突撃	意想曲	田中豊明	ブラスバンド			海軍	1945. 3. 24海軍（放送）					2
518	怒涛を蹴って	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1936年頃		海軍	1936. 12. 27海軍（放送）		日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		水島洋作詞、斉藤作曲の同名曲がトリオに使用されている。	2、a、d
519	怒涛を蹴って	行進曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1945. 5. 9放吹（放送）					2
520	隣邦	行進曲	八木伝	ブラスバンド	1940年	共益商社	陸軍（民間）		コロムビア30234			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3、i
521	友と語らん	意想曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1940. 11. 3神戸市喇叭連盟主催喇叭鼓楽大演奏会					4、d、h
522	進走曲 変ホ長調	その他	竹内龍夫	ブラスバンド			陸軍	1941. 8. 30陸軍				「恩師大沼隊長に捧ぐ」の副題。	1、d
523	中野区青年団行進曲	行進曲	石田久靈	喇叭鼓隊			不明	1940. 7. 20中野区青年団喇叭鼓隊（紀元二千六百年奉祝銃後士気振興吹奏楽第四回大演奏会）					4
524	仲よく働きましょう	舞曲	上羽仙松	ブラスバンド		バンドの友社	陸軍（民間）					広告に「2/4拍子ワンステップ風に」の記載あり。	5
525	仲良く走ろう	行進曲	足羽章	ブラスバンド	1942年以前		民間		コロムビア33758				3
526	夏	組曲	八木伝	ブラスバンド			陸軍（民間）	1945. 8. 3星桜（放送）			「夕月」「手踊り」		2
527	縄跳び	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30234			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
528	南京陥落	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1938. 12. 13陸軍（放送）					2
529	南京攻略	行進曲	山口常光	ブラスバンド			陸軍	1937. 12. 8陸軍（放送）					2
530	南京祭	行進曲	山口常光	ブラスバンド			陸軍	1942. 10. 25星桜（放送）					2、9
531	南風［諧謔曲］	その他	平尾貴四男	ブラスバンド	1943年		民間	1944. 2. 8陸軍（放送）		奏楽堂の響き2		スコアの題名は「諧謔曲」と書かれていたものを「南風」に変更している。	2、10、a、i
532	南方風景（小組曲）	組曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 12. 21海洋（放送）			「朝」、「花嫁行列」		2
533	日英同盟	行進曲	田中穂積	ブラスバンド			海軍	1907. 10. 26海軍					1
534	日独伊同盟行進曲	行進曲	仁木他喜雄	ブラスバンド	1940年頃		民間		コロムビア100133			レコード片面は、大木惇夫作詞、山田耕筰作曲の日独伊三国同盟の歌『三国旗かざして』。	3
535	日満親善（幻想曲）	その他	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1935. 4. 21陸軍					1、9
536	日満行進曲	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）						d
537	日露戦争紀念祝捷の夜会	円舞曲	山本銑三郎	ブラスバンド			陸軍	1906. 11. 25陸軍					1、9
538	日章旗	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1905. 8. 1陸軍		日本の吹奏楽の変遷		日比谷公園奏楽堂プログラム初の日本人楽曲。「君が代」のモティーフにより構成される楽曲。	1、10、a
539	日章旗	不明	服部逸郎	喇叭鼓隊			民間	1943. 8. 25放吹（放送）					2
540	日章旗の下に	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1938年		海軍（民間）	1938. 7. 18星桜（放送）	ビクターZ-1	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編		海軍軍楽隊名義。佐々木泰夫作詞、中山晋平作曲の同名曲をトリオに使用した行進曲。	2、3、a
541	日本体操大会行進曲	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1938年		民間		コロムビア29767			朝日新聞社、日本体操大会用行進曲。	3
542	日本舞踏曲	舞曲	八木伝	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 1. 10陸軍（放送）					2、9
543	日本医科大予科行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍（民間）						9
544	日本海海戦	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1914年以降	管楽研究会	海軍	1927. 5. 27海軍	ポリドール10133	日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集		大和田建樹作詞、瀬戸口作曲の軍歌「日本海海戦」に、国歌「君が代」、喇叭譜「氣ヲ著ケ」を入れた行進曲。	3、a、d
545	日本海海戦	行進曲	田中豊明	ブラスバンド			海軍	1919. 5. 27海軍				瀬戸口藤吉作曲の軍歌、「日本海海戦」、「日本海夜戦」を使用。	1、2
546	日本海海戦	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1930年		海軍（民間）	1930. 5. 27海軍（放送、中継）		日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～		永井歌水作詞、江口源吾作曲の「日本海大海戦」をトリオに使用。軍歌付きの場合もあり。	1、2、a
547	日本海海戦の想い出（描写曲）	意想曲	深海善次	ブラスバンド	1936年頃		海軍（民間）	1936. 5. 27海軍（放送）	ビクター53990			海軍軍楽隊名義。放送記録には「松島慶三 創案、深海善次 作編曲」と記載。	2、d
548	日本軍の精華	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1911. 9. 23陸軍					1
549	日本行軍歌	行進曲	佐藤長助	ブラスバンド	1944年頃		陸軍（民間）		キング と346			大日本體育会行軍山岳部会・毎日新聞社選定、時雨音羽作詞、陸軍軍楽隊作曲の「日本行軍歌」を主部に使用し、トリオを加えて行進曲にしたもの。	3
550	日本帝国行進 秋乃花	行進曲	古矢弘政	ブラスバンド			陸軍						e
551	日本刀の威力	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド			民間	1938. 10. 13大東京（放送）					2
552	日本晴	行進曲	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、d
553	日本風なメヌエット	舞曲	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、d
554	日本舞曲第二	舞曲	松平頼則	ブラスバンド			民間	1943. 7. 3星桜（放送）		奏楽堂の響き2			2、a
555	日本陸軍	行進曲	宮田清蔵	ブラスバンド	1937年頃	管楽研究会	民間		コロムビア33511				3、b
556	入営の曲	不明	山口常光	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍						4、d
557	入場式	その他	鈴木哲夫	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間					5/8拍子の記載。（グランドに集まる勇ましい気分）という解説あり。	5、d
558	人形の兵隊	行進曲	鈴木哲夫	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間					2/4拍子の記載。（溌剌たる少年兵の行進の有様）という解説あり。	5、d
559	熱風（吹奏楽のための詩曲）	その他	市川都志春	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会陸軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6、i
560	農村の想出	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 8. 27海軍（放送）					2

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
561	伸びゆく日本	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1941年頃	管楽研究会	陸軍	1941. 6. 7陸軍		日本の吹奏楽V 大沼哲作品集			4、9、a、d、h
562	伸びゆく電波	行進曲	斎藤丑松	ブラスバンド	1939年頃		海軍	1939. 5. 14陸海軍合同（放送）	コロムビア AK212	日本の吹奏楽 III 斎藤丑松作品集	東京放送会館落成記念。	海軍軍楽隊名義。	2、3、a、d
563	白衣の天使	行進曲	大阪市音楽隊	ブラスバンド			民間	1939. 11. 11（大日本吹奏楽連盟結成記念演奏会）				ブラスバンド5巻11号。	5
564	爆撃行	意想曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1944. 5. 16星桜（放送）					2
565	爆弾三勇士	意想曲	陸軍軍楽隊	喇叭鼓隊とブラスバンド	ブラスバンド	1932年頃	管楽研究会 / ブラスバンド1巻2号（1933年）付録（合同編成）	陸軍		ポリドール3601		大阪毎日、東京日日新聞懸賞募集曲、与謝野鉄幹作詞、辻順治、大沼哲作曲の「爆弾三勇士の歌」の吹奏楽編曲版。ブラスバンドと喇叭鼓隊の合同編成用の合奏譜もあり。	4、d
566	箱根の山	行進曲	宮田清蔵	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、b
567	花大人	不明	鈴木哲夫	ブラスバンド		バンドの友社	民間					広告に2/2拍子で「合唱付」の記載あり。「広野に我が軍人の勇しい活躍（花井大佐）」の解説あり。	5
568	浜松陸軍飛行学校行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		ビクター53775				3
569	春	円舞曲	石田一郎	ブラスバンド			民間	1939. 4. 20陸軍（放送）					2
570	春の小品二題	組曲	白鐵巌	ブラスバンド			海軍（民間）	1941. 3. 19東京交響吹奏楽団（放送）			「春の円舞曲」「春の夜曲」		2
571	春の幻想曲	その他	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 5. 3海洋（放送）					2
572	ハルピンを謳う（幻想的行進曲）	行進曲	田辺陸太郎	ブラスバンド	1943年	田辺陸太郎遺稿集（戦後）	陸軍（民間）						1
573	ハワイ大海戦	行進曲	片山正見	ブラスバンド	1942年頃	管楽研究会	海軍	1942. 1. 26海軍		日本の吹奏楽IV 片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。軍歌付き行進曲。北原白秋作詞、内藤清五作曲の「ハワイ大海戦」をトリオに使用。海上自衛隊所蔵の楽譜には「岩田重吉作曲？」と書かれている。	2、5、8、a
574	ハワイ大空襲	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 12. 5放吹（放送）					2、d
575	光は極東より	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）	1938. 4. 17巣鴨中学商業学校喇叭鼓隊（放送）	管楽研究会 C202-A				2、4、5、d
576	非常時日本	意想曲	和田小太郎	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）	1937. 10. 11荒川区青年団喇叭鼓隊（放送）	管楽研究会 C201-B		1941年、第3回全日本吹奏楽大行進大競演会喇叭鼓隊課題曲。		2、4、c、d
577	意壮	序曲	深海善次	ブラスバンド	1944年		海軍（民間）				日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	6
578	必勝	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 12. 8陸海軍合同（放送）			放送記録に「大東亜戦争二周年記念」と記載あり。		2、9
579	必勝	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）						4、d
580	必勝祈願太鼓	その他	渡辺浦人	ブラスバンド	1944年		民間	1945. 7. 8陸軍（放送）		現代日本の音楽（東京音楽大学）＊収録は1980年版	日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	2、6
581	必勝日本	行進曲	井上繁隆	喇叭鼓隊		吹奏楽付録楽譜（1943-3-10）	陸軍					吹奏楽3巻10号付録楽譜。	5
582	日の丸	不明	服部逸郎	喇叭鼓隊			民間	1943. 10. 3放吹（放送）					2
583	向日葵	行進曲	山本力	鼓笛隊とブラスバンド			民間					鼓笛隊とブラスバンドの合同編成。吹奏楽3巻9号10、17頁（広岡淑生「吹奏楽曲解説5」）。	5
584	ヒヤシンス	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 5. 30東京交響吹奏楽団（放送）					2、d
585	ビルマ祝典曲	その他	深井史郎	ブラスバンド	1944年		民間				日本政府委嘱。		f
586	広東陥落	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1938. 10. 22陸海軍合同（放送）					2
587	広東陥落	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1938. 10. 22陸海軍合同（放送）					2
588	風雲の上海	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1937. 1. 28海軍					4
589	フーガによる舞曲	舞曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	不明		民間			奏楽堂の響き2			a、f
590	舞曲	舞曲	弘田龍太郎	ブラスバンド	1941年以前		民間	1943. 8. 1放吹（放送）＊未放送	コロムビア 32050		1942年、日本文化中央連盟制定。	1942年、日本文化中央連盟の芸能祭洋楽部門のための委嘱作品。音楽文化新聞によると、同公演では吹奏楽曲は未発表とのこと。『音楽文化新聞』第1号、第12面。	2、3、6
591	伏見若宮殿下行進曲	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍			日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集			a
592	婦人愛国の歌	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1938年		海軍（民間）	1938. 8. 14海軍（放送）	コロムビア 29836			「主婦の友」懸賞当選歌の上條操作詞、瀬戸口藤吉作曲「婦人愛国の歌（皇御国の）」をトリオに使用。	3
593	婦人従軍	行進曲	日本鼓笛楽協会	鼓笛隊			その他	1944. 4. 29大日本吹奏楽連盟（放送）					2
594	二つの舞曲	舞曲	伊藤昇	ブラスバンド			海軍（民間）	1943. 3. 28放吹（放送）			「支那の踊」「満洲の踊」		2
595	二つの南国風景	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	海軍	1941. 7. 19海軍					1、b、d
596	二つのマーチ	行進曲	大塚淳	ブラスバンド		共益商社	民間						b
597	二つの行進曲	行進曲	菅原明朗	ブラスバンド	1934年		民間	1934. 10. 2大阪吹奏楽団（放送）			「勇壮なる行進曲」「典雅なる行進曲」	放送記録では「二つの小品」。	2、i
598	二つの支那風景	組曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1942. 4. 26海軍			「戎克」「辻馬車」		1、2
599	復興	行進曲	林豆	ブラスバンド			陸軍（民間）	1934. 10. 21大阪市音楽隊（放送、JOBK）					2
600	武勇	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1935. 9. 16海軍（放送）					2
601	奮起す一億	序曲	永井巴	ブラスバンド			陸軍（民間）	1944. 5. 17海洋（放送）					2
602	分列行進	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1945. 6. 19扶桑（放送）			（乗馬隊駈歩）、（徒歩隊）、（乗馬隊速歩）		2、4、d
603	分列行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍						d
604	兵営の一日（幻想曲）	その他	岩国茂太郎 編曲	ブラスバンド			民間	1931. 12. 6大阪市音楽隊（放送）				原曲不明。	2
605	米国野球団歓迎行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1931. 11. 2陸軍（放送、中継）				放送記録には「米国野球団選手歓迎会演奏曲」と記載あり。	2
606	平和	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1935. 9. 14陸軍（放送）					2
607	平和の鐘	行進曲	上羽仙松	ブラスバンド			陸軍（民間）	1938. 8. 6警視庁（放送）					2
608	防空	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍	1940. 10. 4陸軍					4、9
609	防空	行進曲	坂西久治	ブラスバンド			海軍	1934. 10. 18聯合艦隊軍楽隊（放送）				放送記録では、太田黒海軍大尉作詞、坂西作曲。	2
610	奉迎大行進曲	行進曲	大沼哲	ブラスバンド			陸軍	1921. 9. 10陸軍					1
611	奉祝讃歌	その他	山田耕筰	ブラスバンド	1940年		民間	1940. 11. 11陸海軍合同	ポリドールP-5076			紀元二千六百年奉祝会制定。	2、3
612	奉祝前奏曲	前奏曲	大沼哲	ブラスバンド	1924年		陸軍	1924. 6. 5陸軍		日本の吹奏楽V 大沼哲作品集	1924年6月5日「摂政宮殿下御成婚奉祝大音楽会」演奏曲（公開初演）。		1、9、a、h、i
613	豊稔祭（描写曲）	意想曲	樽原良作	ブラスバンド			海軍	1943. 7. 1海軍				海軍軍楽隊名義。放送記録では「豊年祭」の表記。	1、2、9
614	放送日本	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1942. 2. 9放吹（放送）＊「割愛」と記載のため未放送か				日本放送協会選定	2
615	北洋を征く	行進曲	広山勝留	ブラスバンド			不明	1944. 7. 23海洋（放送）					2
616	母校の学芸会（幻想曲（接続曲））	その他	坂西久治	ブラスバンド			海軍（民間）	1939. 5. 5海軍（第五艦隊軍楽隊）（台湾市公会堂）					b
617	歩兵第五十九連隊行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1935年		陸軍		コロムビア 28586			歩兵第五十九連隊作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の「歩兵第五十九連隊歌」を使用。	3
618	歩兵第四連隊行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1936年		陸軍		コロムビア 28790			楽曲中に歩兵第四連隊作詞作曲の「歩兵第四連隊歌」を使用。	3
619	陸軍航空行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1943. 4. 17陸軍					1
620	主すらを（描写曲）	意想曲	安倍盛	ブラスバンド		管楽研究会	民間	1941. 8. 18星桜（放送）					4、d

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
621	護れ太平洋	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1941年		海軍（民間）	1941. 4. 3海洋（放送）	ビクターA-3100			海軍省推薦、東日・大毎選定、武富邦茂作詞、瀬戸口藤吉作曲の同名歌をトリオに使用。	3
622	護れ海原	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1939年	管楽研究会	海軍	1939. 2. 5海軍（放送）	ポリドール9090-B	日本の吹奏楽III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。トリオに合唱が付く版もあり（伊藤竹夫作詞）。	2、3、5、8、a、d
623	護れ海軍	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						d
624	マレー沖の凱歌	行進曲	加賀谷源蔵	ブラスバンド			海軍		コロムビア100451			海軍軍楽隊名義。読売新聞社選定、西条八十作詞の「マレー沖の凱歌」を曲中に使用。	3、b
625	マレー海戦	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド		管楽研究会	海軍						5
626	満州大行進曲	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1942年頃	共益商社、吹奏楽付録楽譜（1942-2-9）	民間	1942. 8. 1（管弦楽版）	ビクターA-4356（管弦楽版）		満洲国建国十周年記念曲。	中間部に風巻景次郎作詞の歌詞あり。吹奏楽2巻9号付録楽譜。	5、n
627	満州の思い出	意想曲	田村明一	ブラスバンド			陸軍	1935. 9. 14陸軍(放送)				陸軍軍楽隊名義。	1、2、9、d
628	満洲の広野	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 8. 25陸軍					1、d
629	満鉄行進曲	行進曲	高津敏	ブラスバンド			陸軍（民間）		ポリドールAT-12（委託盤）			トリオに満鉄社員会選歌、高津敏作曲「満鉄行進歌」を使用。	3
630	三笠	行進曲	坂西久治	ブラスバンド			海軍（民間）	1944. 5. 26海洋（放送）					2、d
631	潮船	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1936. 11. 9満洲国陸軍新京軍楽隊（放送）					2
632	水のたわむれ	円舞曲	三戸知章	ブラスバンド		白眉出版	民間						5
633	みたみわれ	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 10. 1海軍（放送）					2
634	みちゆき（幻想曲）	その他	広岡九一	ブラスバンド		管楽研究会	民間						4、d
635	三つの港風景（組曲）	組曲	片山正見	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	海軍	1941. 5, 10海軍		日本の吹奏楽IV 片山正見作品集	「大連街の風景」、「上海の街芸人」、「九州南部の港」	海軍軍楽隊名義。	4、a、b、d
636	密林を征く軍旗	序曲	永井巴	ブラスバンド			陸軍（民間）	1944. 5. 16星桜（放送）					2
637	密林を征く	その他	石田一郎	ブラスバンド	1942年		民間				日本音楽文化協会陸軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）。楽譜に作曲年記載。	5、6、9
638	港の朝	組曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 11. 28海軍（放送）			「夜明け」「踊る小波」「朝の船出」		2
639	南進	行進曲	不明	ブラスバンド			不明						9
640	南支軍	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1939年頃		陸軍		ポリドール2776				3
641	南の幻想（組曲）	組曲	徳田三郎	ブラスバンド			海軍	1943. 3. 9海軍			「前奏曲」「舞曲」「部落」「サルタンの行進」	海軍軍楽隊名義。	1、2
642	南の島の朝	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 5. 14東京交響吹奏楽団（放送）					2、d
643	稔りの秋	円舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1944. 11. 28海軍（放送）					2
644	御代の栄	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1940. 12. 10海軍					4
645	民族の誓い	序曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 7. 1海軍（放送）			1943年、日本音楽文化協会の海軍献納「山本帥讃頌」の一曲。	音楽文化新聞では「題未定」。放送記録に記載あり。『音楽文化新聞』第52号、第1面。	2、6
646	無敵海軍	行進曲	江口源吾	ブラスバンド			海軍（民間）	1942. 10. 18放吹（放送）					2
647	村の鍛冶屋	意想曲	勝部藤五郎	ブラスバンド			陸軍（民間）	1934. 7. 21大阪市音楽隊（放送）					2
648	村人の踊り	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						d
649	村祭	不明	石田一郎	ブラスバンド			民間	1943. 5. 20星桜（放送）					2
650	ムンダ戦線を思いて	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1943. 8. 18陸軍（放送）					2
651	明治行進曲	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）				（一）、（二）があり。		4、d
652	明治節行進曲	行進曲	松倉五郎	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	陸軍	1941. 11. 1陸軍（放送）		日本のマーチ・ベスト20（戦前篇）	第2回瀬戸口賞入選曲（安倍盛と同時入選、この回は順位なし）。	トリオに唱歌「明治節」を使用。	4、5、a、d
653	明治大帝讃仰	行進曲	安倍盛	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	民間	1940. 9. 17海軍後楽舎（軍艦行進曲四十周年記念大演奏会）			第2回瀬戸口賞入選曲（松倉五郎と同時入選、この回は順位なし）。	トリオに唱歌「明治節」を使用。	4、5、d
654	明治の大御代	円舞曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 11. 3放吹（放送）					2
655	明治の面影	円舞曲	藤咲源司	ブラスバンド			海軍	1935. 5. 11海軍				海軍軍楽隊名義。谷村氏資料には「藤崎源司（佐野国盛）？」の記載。	1、b
656	盟友	行進曲	全関東吹奏楽連盟	喇叭鼓隊とブラスバンド	1936年頃	管楽研究会	その他	1937. 4. 17全関東吹奏楽連盟（中継放送）		進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集	全関東吹奏楽連盟結成記念曲。	ブラスバンドと喇叭鼓隊の合同編成。	2、4、d
657	盟邦と共に	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 2. 4海軍（放送）					2
658	名誉の軍旗	行進曲	渡辺永吉	ブラスバンド			陸軍	1935. 9. 14陸軍（放送）				陸軍軍楽隊名義。楽譜に作曲者名記載。	2、9
659	目覚めよ若人	行進曲	永井巴	ブラスバンド		管楽研究会	陸軍（民間）					副題に「青年に贈る行進曲」。	4、d
660	召されたる勇士	不明	草川信	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
661	豪古行進曲	行進曲	松平頼則	ブラスバンド			民間	1943. 8. 2星桜（放送）					2
662	盛典の感激	序曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						d
663	森の遊び	意想曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1939. 6. 3陸軍					1、4、d、h
664	野営の篝火	意想曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍		テイチクA363		1940年、第1回紀元2600年奉祝・集団音楽大行進並大競演会喇叭鼓楽部課題曲。		3、4、c、d、h、i
665	野球行進曲	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド		共益商社	海軍			日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集			4、a、d
666	野球行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1934年		陸軍		ポリドール4104-B			薄田泣菫作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲の全国選抜中等学校野球大会歌「陽は舞い踊る甲子園」を使用。	3
667	野球大会行進曲	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1935年		民間					富田砕花作詞　全国中等学校野球大会行進曲。	f
668	躍進日本	行進曲	油谷三美	ブラスバンド			陸軍（民間）	1941. 9. 1星桜（放送）					2、d
669	躍進日本	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）	1937. 10. 11荒川区青年団喇叭鼓隊（放送）					2、4、d
670	八尋白皆鳥（交響的序曲）	序曲	石田一郎	ブラスバンド	1941年		民間	1942. 5. 3陸軍（放送）					2、9、i
671	山里	組曲	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）				1朝やけ　II子ども神楽　III英霊帰る　IV土と闘う		9
672	山の唄	意想曲	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1942. 5. 17放吹（放送）					2
673	雄飛	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 7. 27星桜（放送）					2
674	悠遠なる光	不明	山下孝	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』には記載なし。『音楽文化新聞』第17号に記載あり。『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
675	勇敢なる喇叭手	行進曲	森屋五郎	ブラスバンド			陸軍	1942. 5. 22陸軍（放送）					2、9
676	勇気	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 8. 29陸軍（放送）				吹奏楽：ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース5巻1号、9〜11頁（広岡九一「吹奏楽曲解説」）に解説あり。	2、5、9
677	遊戯	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30233			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
678	勇躍	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30236			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
679	悠久	序曲	木島敏雄、須磨洋朔	ブラスバンド	1940年	管楽研究会	陸軍	1940. 7. 1陸海軍合同	ビクターA3070, 3071	黒船以来〜吹奏楽150年の歩み〜		陸軍軍楽隊名義。建国祭本部制定曲。海軍の行進曲「建国」と対。	1、4、9、a
680	友情	円舞曲	井上繁隆	ブラスバンド			陸軍	1943. 3. 22星桜（放送）					2
681	愉快な行進曲	行進曲	宮下紫水	ブラスバンド		バンドの友社、白眉出版	民間						5、d

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
682	愉快に	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア 30232			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
683	雪の進軍	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍			不滅の日本行進曲傑作集 第2集		永井建子作詞作曲の軍歌「雪の進軍」をトリオに使用。	a
684	輸送船行進歌	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		ビクターA-4479			根ノ瀬信作作詞、堀内敬三作曲の「輸送船行進歌」をトリオに使用。	3
685	ゆるがぬ守り	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 9. 29海軍（放送）	コロムビア AK212				2、3、d
686	揚子江	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1942年		海軍			日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集			a
687	蘇る民族	その他	佐藤長助	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 1. 10陸軍					2、9
688	雷撃隊の歌	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1944年		海軍	1944. 6. 15海軍（放送）	コロムビア 100903B	海軍軍楽隊の遺産（LP）		海兵69期による帝国海軍雷撃隊が1941年に作曲した「雷撃隊の歌」をトリオに使用。	2、3、a
689	ラジオ行進曲	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1925年頃	共益商社	海軍			日本の吹奏楽I 瀬戸口藤吉作品集		JOAK放送開始記念。	4、a
690	ラストローズ・オヴ・サンマー（幻想曲）	その他	森光栄	ブラスバンド			不明	1940. 11. 17盟和青年団ブラスバンド（函館市吹奏楽連盟結成記念演奏会）					4
691	喇叭鼓隊	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア 30237			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
692	蘭花	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1935. 4. 21陸軍					1、9
693	乱舞の胡蝶	不明	澤田礎敬	ブラスバンド		バンドの友社	不明						5
694	陸軍マーチ	行進曲	陸軍軍楽隊	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1928. 9. 8陸軍（其の二のみ）	コロムビア 33343		（一）、（二）がある。		4、1
695	陸軍空の特攻隊	行進曲	不明	ブラスバンド			不明	1945. 5. 1陸軍（放送）					2
696	陸鷲	行進曲	平川英夫	ブラスバンド	1942年頃？		民間		コロムビア 33757				3
697	立派な兵隊	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1924年	共益商社 / 共同音楽出版（No. 3）（戦後）	陸軍	1930. 12. 28陸軍（放送）	コロムビア 33797、キング 21107 ほか	日本の吹奏楽V 大沼哲作品集	当初は「美しき兵士」、満州事変頃に「立派な兵隊」に改題。戦後、行進曲「立派な青年」と改題して共同音楽出版社より出版されている。		2、3、4、a、d、h、i ほか多数
698	旅順口	行進曲	吉本光蔵	ブラスバンド			海軍	1907. 8. 24海軍					1
699	旅順陥落行進曲	行進曲	吉本光蔵	ブラスバンド	1904年		海軍		ポリドール401-B	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編			a、g
700	霊峰富士	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア 30239			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
701	黎明（ファンファーレ）	その他	服部逸郎	ブラスバンド			民間	1941. 8. 29放吹（放送）					2
702	黎明	行進曲	八木伝	ブラスバンド			陸軍（民間）	1944. 1. 12星桜（放送）					2
703	黎明日本	行進曲	油谷三美	ブラスバンド		ヲグラ楽譜出版	陸軍（民間）	1942. 6. 7星桜（放送）					2、4、d
704	連合艦隊行進曲	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1932年頃		海軍（民間）	1938. 5. 27海軍（放送）	コロムビア 29324	日本の吹奏楽II ～江口 源吾 作品集～		高木雅楽作詞の同名の曲をトリオに使用。	2、a、d
705	連合艦隊行進曲	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1932年		民間	1934. 1. 28海軍（放送）	コロムビア 27846B	日本のマーチ（戦前編）	1943年、日本音楽文化協会の海軍献納「山本元帥讃頌」の一曲。	軍人勅諭渙発五十年記念曲。曲中に君が代の旋律、トリオに1934年の松島慶三作詞、山田作曲の同名曲を使用。『音楽文化新聞』第52号、第1面。	2、6、a、b、d
706	若い戦士	行進曲	古関裕而	ブラスバンド			民間		コロムビア 32048			奥山貞吉作詞、古関裕而作曲の同名曲を曲中に使用。	3
707	若人よ！	行進曲	橋本国彦	ブラスバンド	1937年	共益商社	民間	1937. 11. 10陸海軍軍楽隊、東京市内高等女学校生徒（放送中継、神宮外苑）	ビクターZ-1	黒船以来～日本の吹奏楽150年の歩み～、戦前日本の名行進曲集～海軍軍楽隊編～	「第5回報国音楽週間」の「連合女子音楽体育大会」演奏曲。	橋本国彦作詞作曲。女性合唱付き行進曲。	2、9、a、d、i
708	若鷲	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 4. 17海洋（放送）					2
709	若人	行進曲	伊藤隆一	喇叭鼓隊		管楽研究会	陸軍（民間）	1938. 5. 12川越商業学校喇叭鼓隊（放送）	キングK353-B		1941年、全関東吹奏楽団聯盟主催「第６回吹奏楽競演会」喇叭鼓楽部課題曲。		2、5、c
710	若人	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド	1930年以前		民間		ビクター51348-B				3
711	若人	行進曲	陶野重雄	ブラスバンド	1939年頃		民間		あり（不明）	帝國海軍軍楽隊の遺産（LP）	1939年、大日本文化協会選定、第1回瀬戸口賞二等当選曲。	帝國海軍軍楽隊の遺産（LP）に戦前の音源が収録。	5
712	我らの工廠（描写曲）	意想曲	朝永研一郎	ブラスバンド			海軍*	1937. 8. 27海軍（放送）					2
713	我らの軍隊	行進曲	和田小太郎、大沼哲	喇叭鼓隊とブラスバンド|喇叭鼓隊		共益商社、ヲグラ楽譜出版／管楽研究会	陸軍（民間）	1937. 8. 12陸軍	キングN-7（委託盤）	戦前日本の名行進曲集：陸軍軍楽隊編		陸軍軍楽隊名義。ブラスバンドと喇叭鼓隊の合同演奏譜あり（管楽研究会より出版）。	3、4、a、d
714	我らの青年	行進曲	宮下榮永	ブラスバンド			民間	1937. 5. 11大東京（放送）					2
715	我らのバンド	行進曲	不明	ブラスバンド		白眉出版	不明						b
716	ワンステップ	不明	大沼哲	ブラスバンド	不明		陸軍						i
717	亜欧記録大飛行声援歌	行進曲	奥山貞吉	ブラスバンド	1937年		民間		コロムビア 29304	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編		朝日新聞者懸賞募集「亜欧連絡記録大飛行」声援歌「亜欧記録大飛行応援歌」を曲中に使用。	3、a
718	英魂を送る －故山本五十六元帥の霊に捧ぐ－	行進曲	深井史郎	ブラスバンド	1943年		民間			奏楽堂の響き3	1943年、日本音楽文化協会の海軍献納「山本元帥讃頌」の一曲。	『音楽文化新聞』第52号、第1面。	6、10、a、i
719	園遊曲	不明	大沼哲	ブラスバンド	1928年		陸軍				宮内省楽部委嘱、李王朝・方子皇太子妃殿下ヨーロッパご旅行帰国園遊会のための楽曲。		h
720	音楽人の片影	不明	三田正美	ブラスバンド			海軍（民間）						b
721	化工マーチ	行進曲	伊藤隆一	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1937. 12. 30東京府立化学工業学校喇叭鼓隊（放送）					2
722	我艦隊	不明	石井五郎	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
723	憧かしき便り	円舞曲	小倉朗	ブラスバンド			民間	1944. 8. 10放吹（放送）					2
724	海を渡る荒鷲	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1940. 10. 25海軍		海軍軍楽隊の遺産（LP）			2、a、d
725	海軍陸戦隊	行進曲	大場八百蔵	ブラスバンド			海軍	1939. 8. 13海軍（放送）	ビクター52144	海軍軍楽隊の遺産（LP）		海軍軍楽隊名義。喇叭譜「速歩行進」を楽曲中に使用。	2、a
726	海軍讃頌	前奏曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1943. 9. 13海洋（放送）					2
727	海二題	組曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 6. 15海軍（放送）			「島のあけくれ」「黒潮越えて」		2
728	楽しき生活	円舞曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1934. 5. 5陸軍（放送）					2、9
729	紀元二千六百年	行進曲	安倍盛	ブラスバンド	1939年	管楽研究会	民間	1940. 1. 1. 陸海軍軍楽隊合同（放送）			紀元二千六百年懸賞募集吹奏楽行進曲入選曲。		2、4
730	紀元二千六百年	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド	1940年	管楽研究会、ヲグラ楽譜出版	海軍	1940. 1. 1. 陸海軍軍楽隊合同（放送）	ポリドールP-5075	日本の吹奏楽 III 斉藤丑松作品集		海軍軍楽隊名義。紀元二千六百年奉祝会及び日本放送協会制定の増田好生作詞、森儁八郎作曲の奉祝国民歌「紀元二千六百年」をトリオに使用。懸賞募集吹奏楽行進曲入選三曲発表放送の番外として放送。	4、d

番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
731	紀元二千六百年	行進曲	深海善次	ブラスバンド	1939年	管楽研究会	海軍（民間）	1940. 1. 1. 陸海軍軍楽隊合同（放送）			紀元二千六百年懸賞募集吹奏楽行進曲入選曲。		2、4
732	紀元二千六百年	行進曲	水島数雄	ブラスバンド	1939年	管楽研究会	陸軍（民間）	1940. 1. 1. 陸海軍軍楽隊合同（放送）			紀元二千六百年懸賞募集吹奏楽行進曲入選曲。		2、4、9
733	紀元二千六百年	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1940. 2. 23陸軍					4
734	紀元二千六百年	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1940年		海軍（民間）		ポリドール2879-B	戦前日本の名行進曲集：海軍軍楽隊編		紀元二千六百年奉祝会及び日本放送協会制定の増田好生作詞、森儀八郎作曲の奉祝国民歌「紀元二千六百年」をトリオに使用。放送協会公募の行進曲とは異なる。	3、a
735	紀元二千六百年（奉祝円舞曲）	円舞曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1940. 2. 11. 海軍					1、4、b
736	輝く御稜威	行進曲	和田小太郎	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍（民間）	1938. 8. 29満蒙開拓青少年義勇軍訓練所喇叭鼓隊（放送）	管楽研究会C202-B				2、4、d
737	吉志舞（古典風軍楽）	その他	伊福部昭	ブラスバンド	1943年		民間	1943. 4. 19放吹（放送）		黒船以来 吹奏楽150年の歩み		海軍軍楽隊委嘱。	2、a
738	興亜の凱歌	不明	山下孝	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会陸軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
739	銀輪部隊	行進曲	戸山英得	ブラスバンド			不明	1942. 5. 17放吹（放送）					2
740	薫る菊花	円舞曲	片山正見	ブラスバンド	1938年頃	管楽研究会 / バンドジャーナル1962年2月号付録（富士を仰ぎて）	海軍	1938. 12. 20海軍（放送）	ビクターA-4134	日本の吹奏楽IV片山正見作品集		海軍軍楽隊名義。戦後、「富士を仰ぎて」と改題。	2、5、a、b
741	決戦	行進曲	白鴎巌	ブラスバンド	1942年頃		陸軍（民間）		コロムビア32053	戦前日本の名行進曲集：秘蔵名盤編		教練用、正常歩行行進曲集。	3、a
742	月下の陣	意想曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1944. 3. 9陸軍（放送）					2
743	御大礼観兵式記念行進曲	行進曲	岩井貞麿	ブラスバンド	1914年頃		民間	1927. 5. 24陸軍（放送）	ポリドール10119-A	日本の吹奏楽の変遷		トリオに喇叭譜「君が代」を使用。	2、3、4、9
744	皇風うけて	行進曲	須摩洋朗	ブラスバンド			陸軍	1940. 5. 14陸軍				「皇風享けて」の表記もあり。	4、9、d
745	耕作の歌	不明	清瀬保二	ブラスバンド			民間	1943. 5. 20皇桜（放送）					2
746	行進曲	行進曲	小倉朗	ブラスバンド	1942年		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
747	国のたから	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド	1943年頃		海軍		コロムビア32070B			レコード片面は佐々木すぐる作曲の同名曲。	3
748	国民皆兵	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1944. 1. 27放吹（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
749	山桜	行進曲	松本岩井	ブラスバンド			陸軍			警視庁音楽隊創設50周年記念			9、10、a
750	子供の豊年祭「前奏と三つの神前踊り」	その他	草川信	ブラスバンド			民間	1943. 3. 28放吹（放送）					2
751	若桜	序曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1944. 7. 8皇桜（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
752	鬼忠	序曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1945. 3. 21海軍（放送）					2
753	初春の前奏と行進曲	行進曲	山田耕筰	ブラスバンド	1932年		民間	1933. 1. 1陸軍（放送）		黒船以来～日本の吹奏楽150年の歩み～		東京中央放送局委嘱。1933年の初放送以降、正月三が日に放送している。題は《日出づる國》副題は「日本の子どものために」。	1、2、9、a、d
754	少年楽手	不明	須摩洋朗	鼓笛隊			陸軍				1942年、第3回大日本吹奏楽大会鼓笛隊舞台演奏課題曲。		c
755	昭南島	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1942. 5. 5放吹（放送）					2、9
756	昭和礼賛	序曲	大沼哲	ブラスバンド	1927年		陸軍	1942. 12. 25陸軍（放送）			1927年、東京中央放送局委嘱の管弦楽曲の編曲。		2、9、d、h、i
757	常在戦場	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1944. 6. 8皇桜（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
758	伸び行く日本	行進曲	須摩洋朗	ブラスバンド			陸軍			日本の吹奏楽VI須摩洋朗作品集			a
759	進撃	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1943. 9. 13放吹（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
760	進撃	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1942. 11. 23陸軍（放送）					2
761	吹雪の進軍	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間					JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	f
762	征け よ聖戦に	不明	和田小太郎	喇叭鼓隊			陸軍（民間）	1945. 6. 19扶桑（放送）					2
763	征空	行進曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1943. 6. 30海洋（放送）			1943年、日本文化中央連盟制定。	放送記録に曲名の記載あり。	2、6
764	征空	行進曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍						d
765	征空萬里	行進曲	服部逸郎（編曲？）	ブラスバンド			民間	1945. 3. 30皇桜（放送）				宮田東峰作曲。	2
766	誓忠	行進曲	大沼哲	ブラスバンド	1925年		陸軍			日本の吹奏楽V大沼哲作品集	大正天皇銀婚式のための曲。	同時に作曲された管弦楽版の「マルシュ・オマージュ」（1925. 5. 16陸軍初演）がある。	9、a、d、h、i
767	青年マーチ	行進曲	大沼哲	喇叭鼓隊		共益商社	陸軍	1933. 4. 15陸軍（放送）	コロムビア33341			陸軍軍楽隊名義。	2、3、4
768	雪上の勝関	行進曲	岡部伸平	ブラスバンド			民間	1944. 2. 3皇桜（放送）					2
769	千代田城を仰いで	行進曲	江口源吾	ブラスバンド	1925年	管楽研究会	海軍（民間）	1930. 1. 23海軍（放送）	コロムビア27932、ポリドール357	日本の吹奏楽II～江口 源吾作品集～			2、5、a、d
770	戦捷行進	行進曲	和田小太郎 編曲	喇叭鼓隊	1934年以前	共益商社	陸軍（民間）				1942年、第3回大日本吹奏楽大会喇叭鼓隊行進演奏課題曲。		4、5、c、d
771	戦塵	行進曲	長津義司	ブラスバンド	1940年頃		民間		ポリドール2881			藤岡武雄作詞、石具谷弘三作曲の愛国歌「戦塵」を使用。	3
772	台湾の想出（接続曲）	その他	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1932年		陸軍		ビクター523228				3
773	台湾民謡による舞踏曲	舞曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1943年		民間	1943. 2. 11皇桜（放送）	ニッチクAK-636				2、3
774	大政翼賛	行進曲	斉藤壮松	ブラスバンド	1941年	管楽研究会	海軍	1941. 3. 15陸海軍合同（大政翼賛の歌発表会）	ビクターA-3100ほか	日本の吹奏楽III 斉藤壮松作品集	1941年、全関東吹奏楽団連盟主催「第６回吹奏楽競演会」吹奏楽部課題曲。	大政翼賛会選定、山岡勝人作詞、鷹司平通作曲の国民歌「大政翼賛の歌」をトリオに使用。広告、レコードには「作曲 帝国軍楽隊」の表記。	4、a、d
775	大捷	円舞曲	山本統三郎	ブラスバンド			陸軍						d
776	大東亜戦争陸軍の歌	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド	1942年		民間	1942. 3. 9陸軍（一ツ橋、陸軍記念日前日）	コロムビア10040I	日本のマーチ（戦前編）		朝日新聞社制作、陸軍省選定歌の「大東亜戦争陸軍の歌」（作詞 佐藤惣之助、作曲 古関裕而 ）をトリオに使用。	2、a
777	大日本目黒団行進曲	行進曲	雲井肇	ブラスバンド	1941年		不明		テイチクT3172			薄井晴雄作曲。	3
778	太平洋行進曲	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間					JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	f
779	大和尚山	行進曲	永井建子	ブラスバンド			陸軍	1940. 7. 27陸軍					1、9、e
780	第一徴兵行進曲	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍		コロムビアA214（委託盤）				3
781	狸囃子	序曲	深海善次	ブラスバンド			海軍（民間）	1943. 8. 25放吹（放送）	ニッチクAK-634				2、3
782	中支那便り（描写曲）	意想曲	海軍軍楽隊	ブラスバンド			海軍	1943. 4. 4海軍（放送）			「南京親衛隊の行進」「蘇州の水景」「上海の街を行く」		2
783	田園風景（組曲）	組曲	市川都志春	ブラスバンド			民間	1943. 4. 29放吹（放送）	ニッチクAK-635		「野を往く」、「湖」、「山を往く」		2、3
784	土の唄	舞曲	八木伝	ブラスバンド	1944年		陸軍（民間）				日本音楽文化協会「決戦楽曲」応募曲（新作）。	『日本音楽文化協会会報』第1号、第4面。	6
785	堂々たる行進	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30239			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3
786	堂々たる行進	行進曲	山口常光	ブラスバンド			陸軍	1942. 12. 25陸軍（放送）					2
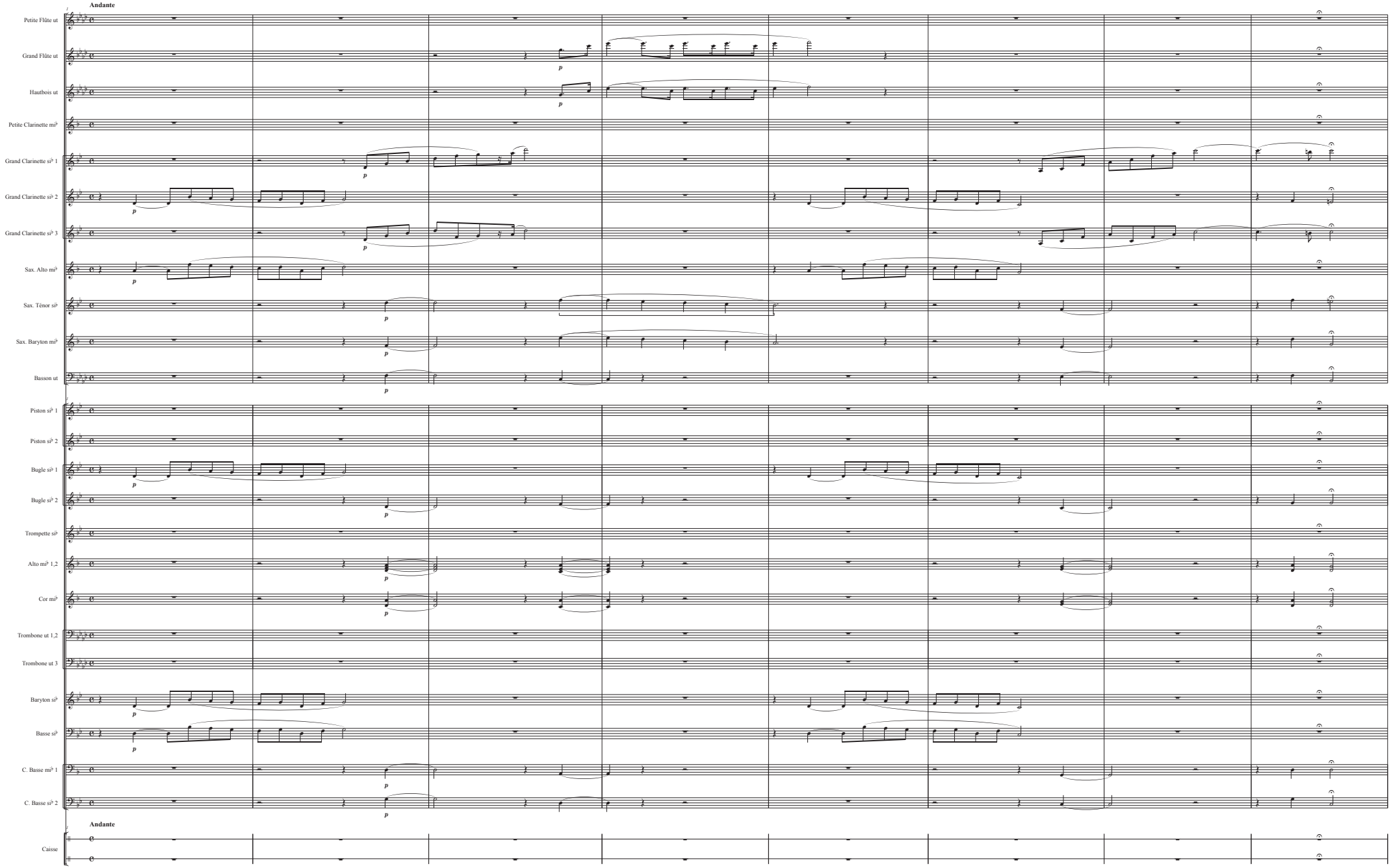
番号	曲名	曲種	作曲者	編成	作曲年	出版状況	作曲者の出身、所属	参考演奏記録	参考レコード	その他音源	備考	楽曲の情報・特記事項	典拠
787	特幹の歌	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1945. 5. 16陸軍（放送）					2
788	南郷少佐	行進曲	斉藤丑松	ブラスバンド			海軍	1939. 3. 28陸海軍合同（放送）				海軍軍楽隊名義。放送記録では軍歌付き行進曲（松島慶三作詞）と記載あり。	2、b
789	南国風景二題	組曲	安倍盛	ブラスバンド			民間	1945. 8. 11星桜（放送）			『円舞曲「南海の朝」』『舞曲「椰子の木の下で」』		2
790	南十字星下を征く	行進曲	安部幸明	ブラスバンド	1942年以前		民間				日本音楽文化協会海軍献納曲。	『吹奏楽』（2巻7号、72頁）、『音楽文化新聞』（第17号、第10面）	5、6
791	南進日本	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1943. 11. 4星桜（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
792	南洋之航路	行進曲	田中穂積	ブラスバンド			海軍						b
793	日章旗	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1943. 7. 3星桜（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
794	爆撃機（描写曲）	意想曲	江口源吾	ブラスバンド	1932年頃		海軍（民間）	1932. 8. 26海軍（放送）	コロムビア30387	日本の吹奏楽II～江口 源吾作品集～			1、2、a、d
795	敷島艦行進曲	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド	1900年頃	バンドの友社、白眉出版	海軍		キング60009	日本の吹奏楽I瀬戸口藤吉作品集		阪正臣作詞、瀬戸口作曲の「敷島艦の歌」をトリオに使用。	3、a、d
796	舞厳「パトロール」	意想曲	朝永研一郎	ブラスバンド			海軍*		リーガルR-15			朝永研一郎は軍楽隊員ではなく海軍造機少将。レコード「舞鶴海軍工廠厳歌」の裏面に収録。「我らの工廠」の副題。	3、8、b
797	舞鶴海軍工廠	行進曲	朝永研一郎	ブラスバンド		管楽研究会	海軍*		リーガルR-15			合唱付。	3、8、b
798	芳奉の幻（幻想曲）	その他	江口源吾	ブラスバンド	1931年		海軍（民間）	1934. 3. 30海軍（放送）		日本の吹奏楽II～江口 源吾作品集～			1、2、a
799	鵬翼萬里	行進曲	深海善次	ブラスバンド		共益商社	海軍（民間）			進め！荒鷲/戦前日本のマーチ傑作集			a、d
800	北方の防人	行進曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間	1944. 1. 12星桜（放送）				JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	2、f
801	万民翼賛	序曲	須賀田礒太郎	ブラスバンド	1941年		民間					JOAK委嘱「行進曲集・第一輯」中の1曲。	f
802	明けゆく亜細亜	行進曲	陸軍軍楽隊	ブラスバンド			陸軍	1942. 7. 6陸軍（放送）					2
803	明治三十有五年	行進曲	瀬戸口藤吉	ブラスバンド			海軍			日本の吹奏楽I瀬戸口藤吉作品集			a
804	夜の水都（交響楽）	その他	菅原明朗	ブラスバンド	1933年頃		民間	1934. 10. 2大阪吹奏楽団（放送）			第一楽章「巷の夜」、第二楽章「水の上」、第三楽章「道走曲と天守閣の讃歌」		2、i
805	弥栄の大八州	序曲	藤井弘也	ブラスバンド			陸軍（民間）	1943. 5. 8星桜（放送）					2、d
806	驀進	行進曲	不明	ブラスバンド			不明		コロムビア30238			レコードには体育運動用（律動普及協会編）との表記あり。	3

【別冊譜例1】
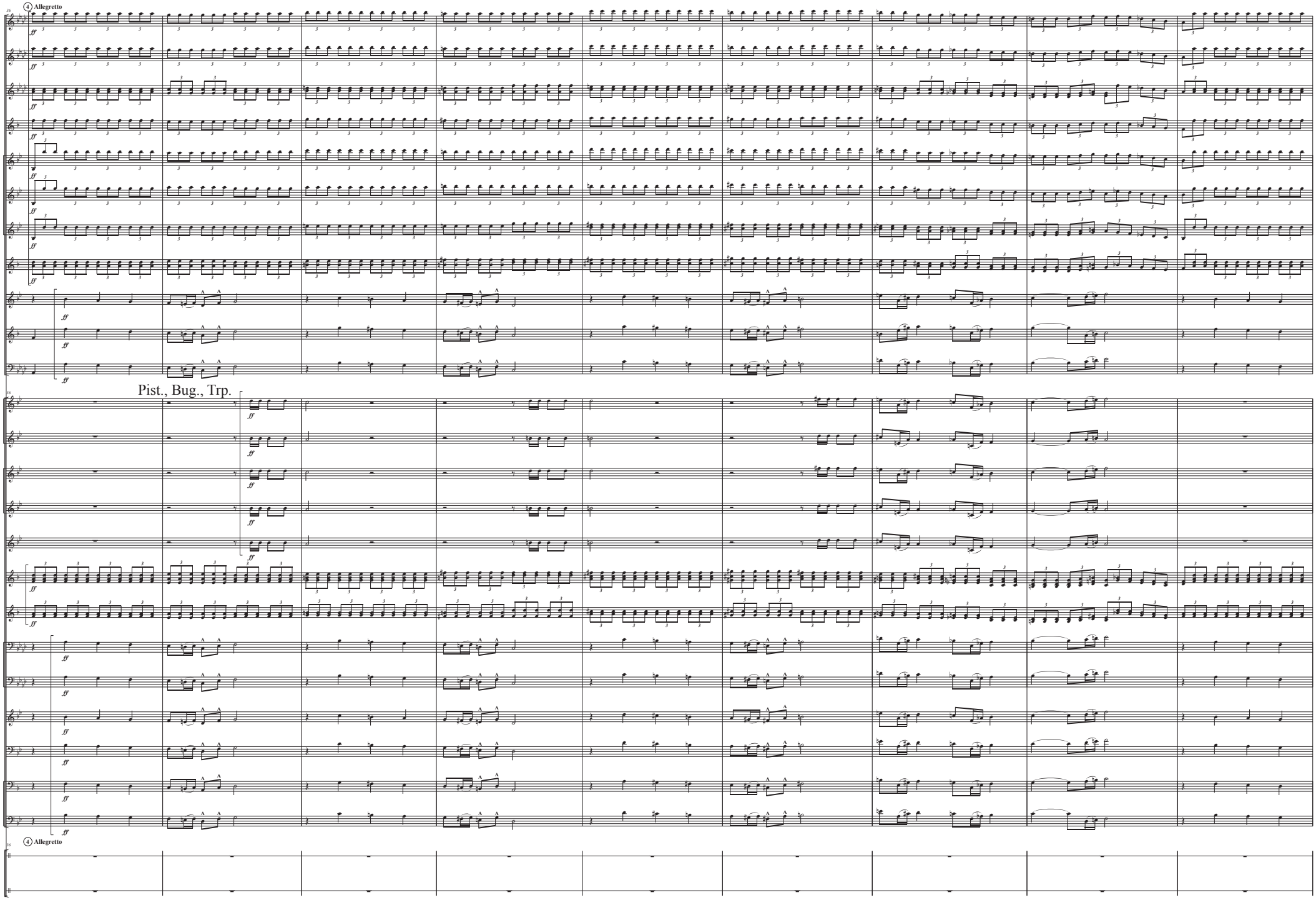
Les Préludes

dédié en Félicitations pour le Mariage de Son Altesse Impériale le prince héritier.
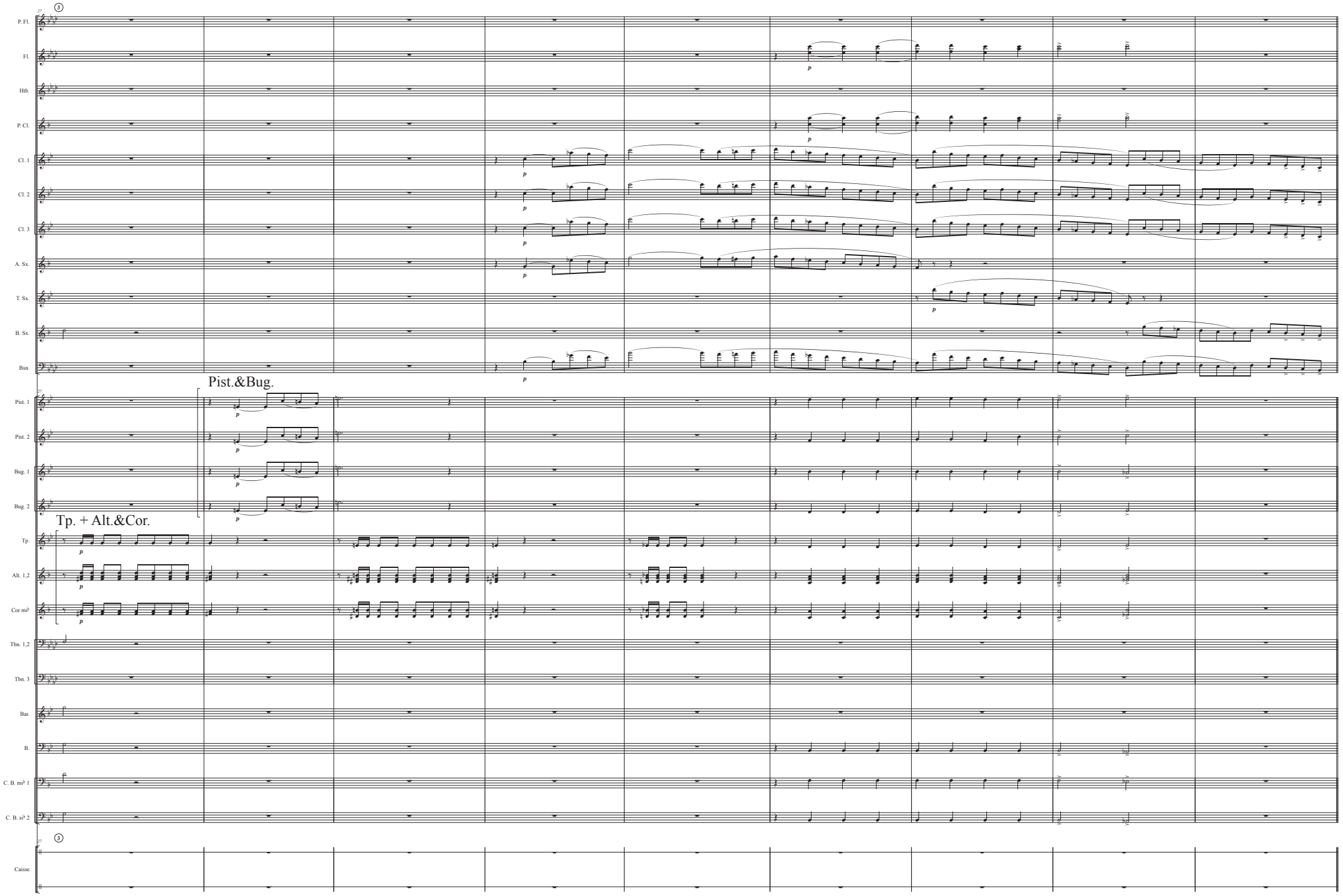
Satoru Ohnuma



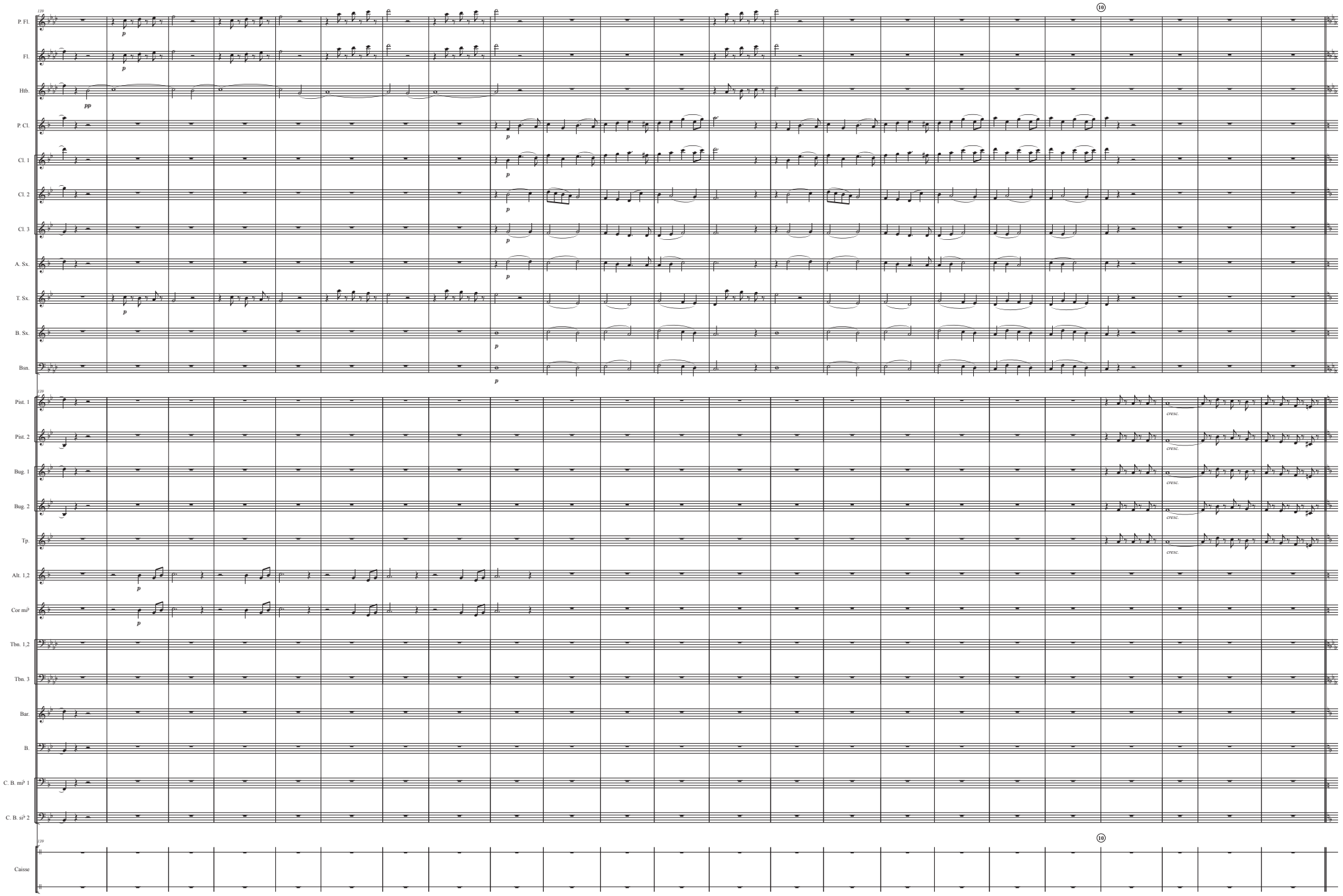
【別冊譜例2】


Allegretto
P. Fl.
Fl.
Htb.
P. Cl.
Cl. 1
Cl. 2
Cl. 3
A. Sx.
T. Sx.
B. Sx.
Bsn.
Pist., Bug., Trp.
Pist. 1
Pist. 2
Bug. 1
Bug. 2
Tp.
Alt. 1,2
Cor mi♭
Tbn. 1,2
Tbn. 3
Bar.
B.
C. B. mi♭ 1
C. B. si♭ 2
Allegretto
Caisse
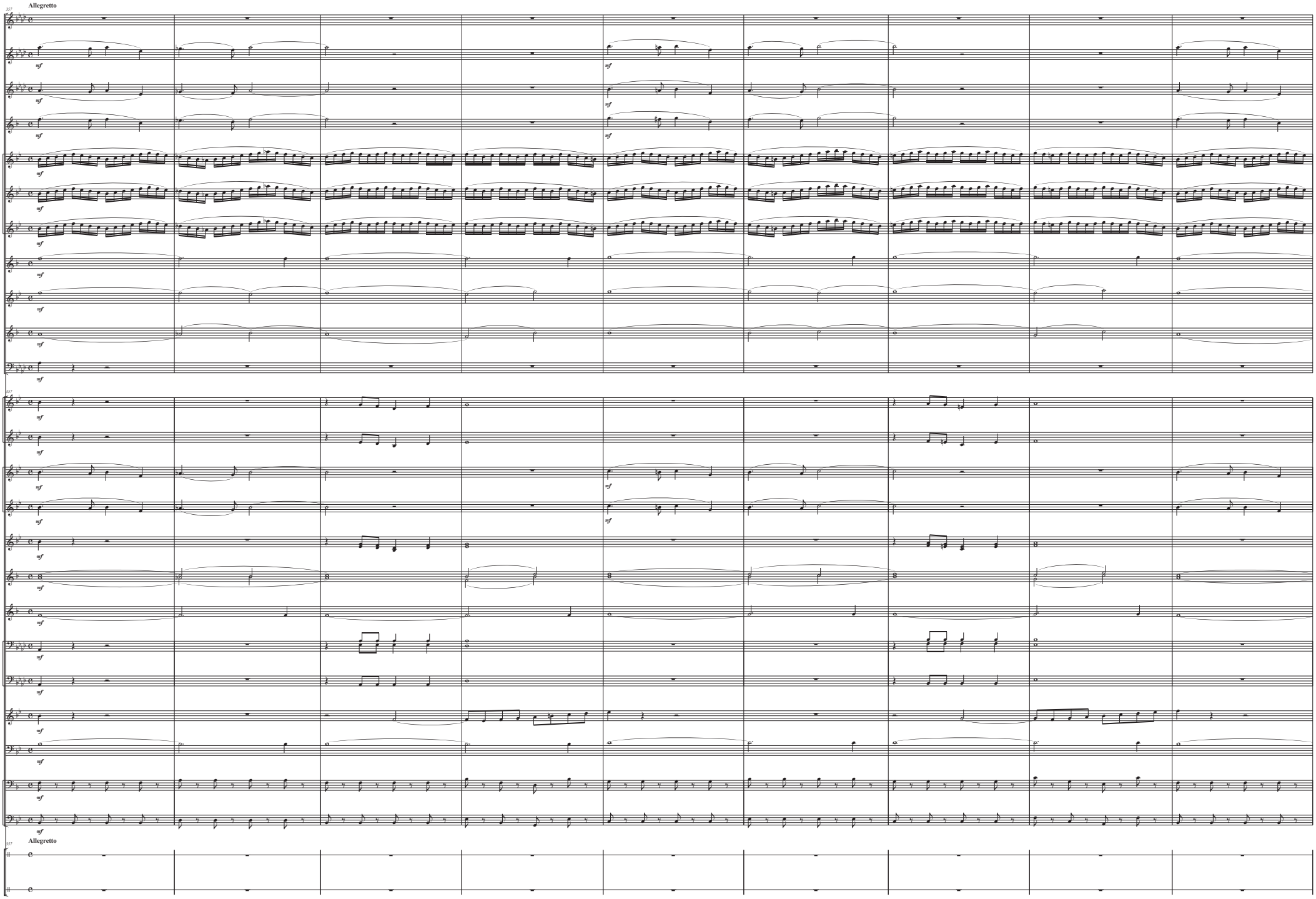
【別冊譜例3】


27
3
P. Fl.
Fl.
Htb.
P. Cl.
Cl. 1
Cl. 2
Cl. 3
A. Sx.
T. Sx.
B. Sx.
Bsn.
Pist.&Bug.
Pist. 1
Pist. 2
Bug. 1
Bug. 2
Tp. + Alt.&Cor.
Tp.
Alt. 1,2
Cor mi♭
Tbn. 1,2
Tbn. 3
Bar.
B.
C. B. mi♭ 1
C. B. si♭ 2
27
3
Caisse

【別冊譜例4】


139
P. Fl.
Fl.
Htb.
P. Cl.
Cl. 1
Cl. 2
Cl. 3
A. Sx.
T. Sx.
B. Sx.
Bsn.
Pist. 1
Pist. 2
Bug. 1
Bug. 2
Tp.
Alt. 1,2
Cor mi♭
Tbn. 1,2
Tbn. 3
Bar.
B.
C. B. mi♭ 1
C. B. si♭ 2
Caisse
10
p
pp
cresc.

【別冊譜例5】


337
Allegretto
P. Fl.
Fl.
Htb.
P. Cl.
Cl. 1
Cl. 2
Cl. 3
A. Sx.
T. Sx.
B. Sx.
Bsn.
337
Pist. 1
Pist. 2
Bug. 1
Bug. 2
Tp.
Alt. 1,2
Cor mi♭
Tbn. 1,2
Tbn. 3
Bar.
B.
C. B. mi♭ 1
C. B. si♭ 2
337
Allegretto
Caisse
mf

付録資料3　吹奏楽曲の編成例

楽器名横の数字はパートを表す。

また楽器名横の括弧のうち、特記のないものは筆者の補足である。

楽器属性	《密林を征く》（石田一郎）	《交響的序曲「八尋白智鳥」》（石田一郎）	《奉祝前奏曲》（大沼 哲）	《総進軍》（柿本七郎）	《行進曲「日章旗」》（永井建子）
出版等	自筆譜	自筆譜	手稿譜	自筆譜	手稿譜？
Piccolo（C or D♭）	Petite Flûte en ré♭	Petite Flûte en ré♭	Petite Flûte ut	Petite Flûte en ré♭	Petite Flûte ut
Flute（C or D♭）	Grande Flûte en ut	Grande Flûte en ut	Grand Flûte ut	Grandes Flûtes en ut	
Oboe	Hautbois en ut	Hautbois en ut	Hautbois ut (div.2)	Hautbois en ut	Hautbois (div.2)
Bassoon			Basson ut (div.2)	Basson en ut	
Clarinet E♭	Petite Clarinette en mi♭	Petite Clarinette en mi♭	Petite Clarinette mi♭ (div.2)	Petite Clarinettes en mi♭	P. Clarinette
(Solo Clarinet)					
Clarinet B♭	Clarinettes en si♭ 1,2	Clarinettes en si♭ 1,2	Grand Clarinette si♭ 1,2,3 (div.2)	Clarinettes en si♭ 1,2,3	Clarinette 1,2,3
Bass Clarinet				Bass Clarinettes en si♭	
Soprano Saxophone				Saxophones: Soprano en si♭	Soprano Saxophone
Alto Saxophone	Saxophone Alto en mi♭	Saxophone Alto en mi♭	Sax. Alto mi♭ (div.2)	Saxophones: Altos en mi♭	Alto Saxophone (div.2)
Tenor Saxophone	Saxophone Tenor en si♭	Saxophone Tenor en si♭	Sax. Tènor si♭	Saxophones: Tenors en si♭	Tenor Saxophone (div.2)
Bariton Saxophone	Saxophone Baryton en mi♭	Saxophone Baryton en mi♭	Sax. Baryton mi♭	Saxophones: Barytons en mi♭	Baryton Saxophone
Bass Saxophone				Saxophones: Contra Bass en mi♭	
Petite Bugle E♭					P. Bugle (E♭)
Bugle B♭	Bugle en si♭ 1,2	Bugle en si♭ 1,2	Bugle si♭ 1,2		Bugle 1,2
(Solo Cornet or Solo Trumpet)				Solo Trompettes en si♭	
Cornet	Cornets à pistons en si♭ 1,2	Cornets à pistons en si♭ 1,2	Piston si♭1,2		Piston 1,2
Trumpet	Trompettes en si♭ 1,2	Trompettes en si♭ 1,2	Trompette si♭	Trompettes en si♭ 1,2	Trompette 1,2
Alto Horn	Alto en mi♭ 1,2,3	Alto en mi♭ 1,2,3	Alto mi♭ 1,2 (div.3)		Alto 1,2,3
Horn E♭ or F			Cor mi♭ (div.2)	Cors en fa 1,2,3,4	
Trombone	Trombone 1,2,3	Trombone 1,2,3	Trombone ut 1,2,3	Trombones 1,2(en Ut),Bass(en fa)	Trombone 1,2,3,4
Bariton	Baryton en si♭ 1,2	Baryton en si♭ 1,2	Baryton si♭	Barytons en si♭	Baryton 1,2
Bass (B♭ or C) or Euphonium	Basse en si♭ 1,2	Basse en si♭ 1,2	Basse si♭		Basse
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba	Contrabasse en mi♭	Contrabasse en mi♭	C. Basse mi♭		C. Basse mi♭
	Contrabasse en si♭	Contrabasse en si♭	C. Basse si♭	Tuba bass-Contra en si♭	C. Basse si♭
喇叭鼓隊					
Other instruments					
Percussion	Timbales	Timbales	Caisse: Snare Drum	(Xylophon, Bells, Vibraphone)*	Caisse: Snare Drum
	Caisse Claire	Caisse Claire	Caisse: Bass Drum	Caisse Claire	Caisse: Bass Drum
	Cymbales et Grosse Caisse	Cymbales*	Caisse: Cymbal	Grosse Caisse	Caisse: Cymbal
		Grosse Caisse*			

*括弧の打楽器はad lib.

*楽譜に以下の注釈あり。

「CymbalesはG.caisseにより取って 特別の指示がない場合は二つのCymbalesにて。（但、G.CaisseとCymbalesは一人で演奏可能）」

楽器属性	《英魂を送る》（深井史郎）	《南風（諧謔曲）》（平尾貴四男）	《戦野を征く》（森屋五郎）	《大行進曲「挙国の感謝」》（服部逸郎）
出版等	自筆譜	自筆譜	自筆譜	白眉出版
Piccolo（C or D ♭）	(1) petite flûte en ut	Piccolo	P. Flûte ré ♭	Piccolo
Flute（C or D ♭）	(2) grandes flûtes en ut	Flûte		Flute (div.2)
Oboe	(4) hautbois I,2		Hautbois ut	Oboe in C (div.2)
Bassoon	(4) bassons 1,2		Basson ut	
Clarinet E ♭	(2) petite clarinettes en mi ♭	Clarinette en mi ♭	P. Clarinette mi ♭	E ♭ Clarinet
(Solo Clarinet)	(2) solo clarinettes en si ♭			
Clarinet B ♭	(4,3) clarinettes en si ♭ 1,2	Clarinettes en si ♭ (div.4)	Clarinette si ♭ 1,2,3	B ♭ Clarinet 1,2,3
Bass Clarinet				
Soprano Saxophone				
Alto Saxophone	(4) saxophones altos en mi ♭	Saxophone alto	S. Alto mi ♭	Alto Saxophone
Tenor Saxophone	(4) saxophones ténors en si ♭	Saxophone Ténor	S. Tenor si ♭	Tenor Saxophone
Bariton Saxophone	(ad lib.) saxophones barytons en mi ♭			Baritone Saxophone
Bass Saxophone				Bass Saxophone
Petite Bugle E ♭				
Bugle B ♭			Bugle si ♭	
(Solo Cornet or Solo Trumpet)	(2) solo trompettes en si ♭ (ou cornets à pistons en si ♭)			
Cornet	(4,4) cornets à pistons en si ♭ 1,2	Cornette (Trompette) (div.4)	Cornet si ♭ 1,2	
Trumpet				Trumpet in B ♭ 1,2,3
Alto Horn	(4,3,3) altos en mi ♭ 1,2,3 (ou cors en mi ♭)	Altos	Alto mi ♭ 1,2	Alto Horn in E ♭ 1,2,3,4
Horn E ♭ or F				
Trombone	(3,2,2) trombones 1,2,3	Trombones (div.2)	Trombone ut 1,2	Trombone in C 1,2,3
Bariton	(4) barytons en si ♭	Barytons	Baryton si ♭	Baritone
Bass (B ♭ or C) or Euphonium	(4) basses en si ♭	Basses	Basse si ♭	Euphonium in C
C.Bass (E ♭, B ♭ or C) or Tuba	(2) contrebasses en mi ♭	C.B. (E ♭)	Contrabasse mi ♭	Bass
	(3) contrebasses en si ♭		Contrabasse si ♭	
喇叭鼓隊				
Other instruments				Piano
Percussion	timbales, cymbales	Tamb.	P.Caisse	Tympani
	caisse reulante, grosse caisse, triangle	Cymbale	G.Caisse	Triangle
	caisse claire	G.C.		Drums: Snare Drum
				Drums: Bass Drum

*楽器名左の括弧は人数。

楽器属性	《行進曲「興亜」》（橋本国彦）		《行進曲「艦隊の威容」》（白磯巌）		《行進曲「大日本」》（陸軍軍楽隊）	《明治節行進曲》（松倉五郎）	《行進曲「盟友」》（全関東吹奏楽連盟）
出版等	共益商社		共益商社		共益商社	共益商社	管楽研究会
Piccolo（C or D♭）	ピッコロ・フリュート（C）		Piccolo Des		Petite Flûte ré♭	Piccolo D♭	
Flute（C or D♭）	フリュート（C）		Flute Des		Grande Flûte ut		Flute ut
Oboe	オーボー		Oboe 1,2		Hautbois ut	Oboe	Hautbois ut
Bassoon	バズーン		Basson			Bassoon	
Clarinet E♭	クラリネット（E♭）		Clarinet Es		Petite Clarinette mi♭		P.Clarinette mi♭
(Solo Clarinet)							
Clarinet B♭	クラリネット（B♭） 1,2,3		Clarinet 1,2,3		Clarinettes si♭ 1,2	Clarinet 1,2,3	Clarinette si♭ 1,2
Bass Clarinet							
Soprano Saxophone							
Alto Saxophone	アルトサクソフォーン（E♭）1,2		Alt. sax		Saxophone Alto mi♭	Alto Saxophone E♭	Sax. Alto mi♭
Tenor Saxophone	テノールサクソフォーン（B♭）		Tenor sax		Saxophone Tenor si♭	Tenor Saxophone B♭	Sax. Tènor si♭
Bariton Saxophone	バリトンサクソフォーン（E♭）				Saxophone Baryton mi♭	Baritone Saxophone E♭	Sax. Baryton mi♭
Bass Saxophone							
Petite Bugle E♭							
Bugle B♭					Bugle si♭ 1,2		Bugle si♭ 1,2
(Solo Cornet or Solo Trumpet)							
Cornet	コルネット（B♭） 1,2,3		Cornette 1,2		Piston si♭ 1,2	Cornet B♭ 1,2	Cornet à piston si♭ 1,2
Trumpet	トロムペット（B♭）				Trompette si♭	Trompet B♭	
Alto Horn	アルトホルン（E♭） 1,2,3		Althorn 1,2,3		Alto mi♭ 1,2	Alto E♭ 1,2,3	Alto mi♭ 1,2,3
Horn E♭ or F			Horn in F		Cor mi♭ 1,2		
Trombone	トロムボーン（テノール バス）1,2,3		Trombone 1,2,Bass		Trombone ut 1,2,3	Trombone 1,2,3	Trombone ut 1,2,3
Bariton	バリトン（B♭） 1,2		Bariton		Baryton si♭	Baritone B♭	Baryton si♭
Bass (B♭ or C) or Euphonium	バス（C）		Euphonium		Basse si♭ 1,2	Euphonion C	Basse si♭ 1,2
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba	コントラバス（C）		Bass（C）		Contrabasse mi♭	Bass C	C.Basse mi♭
					Contrabasse si♭		C.Basse si♭
喇叭鼓隊							小喇叭 第一、第二
							中喇叭 第一、第二
							大喇叭
Other instruments							
Percussion	打楽器	Snare Drum	Drum	Snare Drum	Timbales	Side Drum, Chimes	小太鼓
		Bass Drum		Bass Drum	P. Caisse	Bass Drum	大太鼓
		Cymbal		Cymbal	G. Caisse		

楽器属性	《行進曲「紀元二千六百年」》（安倍盛）	《行進曲「紀元二千六百年」》（深海善次）	《行進曲「祝勝」》（海軍軍楽隊）	《行進曲「大東亜戦争海軍の歌」》（片山正見）
出版等	管楽研究会	管楽研究会	管楽研究会	管楽研究会
Piccolo（C or D♭）	Piccolo		ピッコロ D♭	
Flute（C or D♭）	Flute C	Flute C	フリュート D♭	フリュート
Oboe	Oboe C	Oboe	オーボー 1,2	オーボー
Bassoon			バズーン	バズーン
Clarinet E♭	P. Clarinette E♭	Clarinetto E♭	クラリネット E♭	クラリネット E♭
(Solo Clarinet)				
Clarinet B♭	Clarinette B♭ 1,2,3	Clarinetto B♭ 1,2,3	クラリネット B♭ 1,2,3	クラリネット B♭ 1,2,3
Bass Clarinet				
Soprano Saxophone				
Alto Saxophone	Sax. Alto E♭	Saxophone Alto E♭	アルトサキソフォーン	アルト・サクソフォーン E♭
Tenor Saxophone	Sax. Tenor	Saxophone Tenor B♭	テノールサキソフォーン	テノル・サクソフォーン B♭
Bariton Saxophone				
Bass Saxophone				
Petite Bugle E♭				
Bugle B♭	Bugle B♭ 1,2			
(Solo Cornet or Solo Trumpet)				
Cornet	Cornet B♭ 1,2,3	Cornet B♭ 1,2	コルネット B♭ 1,2	コルネット B♭ 1,2
Trumpet	Trompetto B♭ 1,2	Trombar B♭ 1,2		
Alto Horn	Alto E♭ 1,2	Horn E♭ 1,2,3	アルトホーン E♭ 1,2,3	アルト E♭ 1,2,3
Horn E♭ or F				
Trombone	Trombone C 1,2,3	Trombone C 1,2	トロンボーン C（1,2,バス）	トロンボーン C 1,2,3
Bariton	Baryton B♭	Bariton B♭ 1,2	テノールホーン B♭	
Bass (B♭ or C) or Euphonium	P. Basse B♭	S. Bass B♭	ユーフォニュム C	小バス C
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba	C. Basse C	Bass C	バス C	大バス C
喇叭鼓隊				
Other instruments				
Percussion	P. Caisse	Drums	大太鼓	小太鼓
	G. Caisse		小太鼓	大太鼓
			チンパニー	
			ベル	

楽器属性	《行進曲「海の進軍」》（斎藤丑松）	《行進曲「ハワイ大海戦」》（片山正見）	《行進曲「進め！荒鷲」》（深海善次）	《行進曲「少年航空兵」》（宮下紫水）
出版等	管楽研究会	管楽研究会	管楽研究会	管楽研究会
Piccolo（C or D♭）	ピッコロ D♭	ピッコロ D♭	Piccolo in C	Piccolo in C
Flute（C or D♭）	フリュート D♭	フリュート D♭		Flute in C
Oboe	オーボー	オーボー	Oboe	
Bassoon	バズーン	バズーン		
Clarinet E♭	クラリネット E♭	クラリネット E♭	Clarinetto in E♭	Clarinett in E♭
(Solo Clarinet)				
Clarinet B♭	クラリネット B♭ 1,2,3	クラリネット B♭ 1,2,3	Clarinetto in B♭ 1,2,3	Clarinett in B♭ 1,2,3
Bass Clarinet				
Soprano Saxophone				
Alto Saxophone	アルトサキソフォーン	アルトサキソフォーン	Saxophone Alto in E♭	
Tenor Saxophone	テノルサキソフォーン	テノールサキソフォーン	Saxophone Tenor in B♭	
Bariton Saxophone				
Bass Saxophone				
Petite Bugle E♭				
Bugle B♭				
(Solo Cornet or Solo Trumpet)				Solo Cornett in B♭
Cornet	コルネット 1,2	コルネット B♭ 1,2	Cornet or Trompette in B♭ 1,2,3	Cornett in B♭ (1,2)
Trumpet				
Alto Horn	アルトホーン E♭ 1,2,3	アルトホーン E♭ 1,2,3	Alto in E♭ 1,2,3	Alto in E♭ 1,2,3
Horn E♭ or F				
Trombone	トロンボン C（1,2,バス）	トロンボーン C（1,2,バス）	Trombone	Trombone in C 1,2
Bariton	テノルホーン B♭	テノールホーン B♭	Bariton in B♭	Baritone in B♭
Bass (B♭ or C) or Euphonium	ユーフォニュム C	ユーフォニュム C	Euphoniom in B♭	
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba	バス C	バス C	Bass Tuba in C	Contra Bass in E♭
				Contra Bass in B♭
喇叭鼓隊				
Other instruments				
Percussion	大太鼓	大太鼓	Drums	Side Drum
	小太鼓	小太鼓		Bass Drum

楽器属性	《行進曲「大詔奉戴」》（片山正見）	《建国行進曲》（永井巴）	《戦野を征く》（森屋五郎）	《聖戦萬里》（安倍盛）
出版等	管楽研究会	管楽研究会	吹奏楽月報7巻7号 付録	吹奏楽月報7巻9号 付録
Piccolo（C or D♭）	PIccolo C	Piccolo	Piccolo C	
Flute（C or D♭）	Flute C		Flute C	Flute C
Oboe	Oboe	Oboe	Oboe	Oboe
Bassoon	Bassoon			
Clarinet E♭	Clarinet E♭	S.Clarinet in E♭	Clarinet E♭	Clarinet E♭
(Solo Clarinet)				
Clarinet B♭	Clarinet B♭ 1,2,3	Clarinet in B♭ 1,2	Clarinet B♭ 1,2,3	Clarinet B♭ 1,2
Bass Clarinet				
Soprano Saxophone				
Alto Saxophone	Alto Saxophone	Sax. Alto in E♭	Alto Saxophone E♭	Alto Saxophone E♭
Tenor Saxophone	Tenor Saxophone	Sax. Tenor in B♭		
Bariton Saxophone				
Bass Saxophone				
Petite Bugle E♭				
Bugle B♭				
(Solo Cornet or Solo Trumpet)				
Cornet	Cornet 1,2	Cornet in B♭ 1,2	Cornet B♭ 1,2	Cornet B♭ 1,2
Trumpet				
Alto Horn	Horn E♭ 1,2,3	Alto in E♭ 1,2	Alto E♭ 1,2	Alto E♭ 1,2,3
Horn E♭ or F				
Trombone	Trombone 1,2	Slide Trombone in B♭ 1,2	Trombones C 1,2	Trombones C 1,2
Bariton	Tenor Horn B♭	Baryton in B♭	Baritone B♭	Baritone B♭
Bass (B♭ or C) or Euphonium	Euphonium	Bass in B♭	Euphonium C	Euphonium & 3rd Trombone C
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba	Basses	Bass in E♭		
		Contra Bass in B♭	Bass C	Bass C
喇叭鼓隊				
Other instruments				
Percussion	Drums	Side Drum	Drums	Drums
		Bass Drum		

楽器属性	《行進曲「青春」》（白磯巌）	《行進曲「一億一心」》（江木理一）	《行進曲「戦捷」》（陸軍軍楽隊）	《行進曲「航空士官」》（永井巴）	《海の行進曲》（菅原明朗）
出版等	吹奏楽2巻2号 付録	吹奏楽2巻2号 付録	吹奏楽2巻3号 付録	吹奏楽2巻6号 付録	吹奏楽2巻7号 付録
Piccolo（C or D♭）	Piccolo in C	Piccolo C	Piccolo C	Piccolo C	
Flute（C or D♭）	Flute in C	Flute C			フルート
Oboe	Oboe	Oboe C			
Bassoon					
Clarinet E♭	E♭ Clarinet	Clarinet E♭	Clarinet E♭	S. Clarinet E♭	小クラリネット E♭
(Solo Clarinet)					
Clarinet B♭	Clarinet in B♭ 1,2,3	Clarinet B♭ 1,2,3	Clarinet B♭ 1,2,3	Clarinet B♭ 1,2	クラリネット B♭ 1,2,3
Bass Clarinet					
Soprano Saxophone					
Alto Saxophone	Alto Saxophone in E♭	Alto Sax. E♭			
Tenor Saxophone					
Bariton Saxophone					
Bass Saxophone					
Petite Bugle E♭					
Bugle B♭					
(Solo Cornet or Solo Trumpet)					
Cornet	Cornet in B♭ 1,2		Cornet B♭ 1,2	Cornet 1,2（B♭）	コルネット 1,2
Trumpet		Trumpet B♭ 1,2			
Alto Horn	Alto horn in E♭ 1*,2,3	Alto E♭ 1,2	Alto E♭ 1,2	Alto E♭ 1,2	アルト E♭ 1,2
Horn E♭ or F					
Trombone	Trombone in C 1,2	Trombone C	Trombone C 1,2	Trombone 1,2	トロンボーン 1,2
Bariton	Baritone in B♭	Baritone B♭	Baritone B♭	Baritone	バリトン B♭
Bass (B♭ or C) or Euphonium	Euphonium in C and B♭**	Euphonium C and B♭*	Euphonium B♭	Euphonium B♭	小バス (C)
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba				C. Bass E♭	
	Bass in C	Bass C	Bass C	C. Bass C	バス (C) 1,2
喇叭鼓隊					
Other instruments					
Percussion	Drums: Snare Drum / Bass Drum / Cymbal	Drums: Snare Drum / Bass Drum / Cymbal	Drums: Snare Drum / Bass Drum / Cymbal	Drums: Snare Drum / Bass Drum / Cymbal	小太鼓 / 大太鼓

*1stは Alto or hornと掲載。　*Euphoniumは同様の内容で2種類の移調譜。

**Euphoniumは同様の内容で2種類の移調譜。

楽器属性	《意想曲「攻撃」》（山本銃三郎）	《満州大行進曲》（橋本国彦）	《行進曲「空征く日本」》（古関裕而）		《行進曲「小国民進軍」》（海軍軍楽隊）	《行進曲「大日本」》（斎藤丑松）
出版等	吹奏楽2巻8号 付録	吹奏楽2巻9号 付録	吹奏楽2巻10号 付録		吹奏楽3巻3号 付録	ネクサス出版（原典版）
Piccolo（C or D♭）	ピッコロ	Piccolo			ピッコロ	Piccolo
Flute（C or D♭）	フルート		フルート		フリュート	Flute
Oboe						
Bassoon						Bassoon
Clarinet E♭	小クラリネット E♭	E♭ Clarinetto	E♭ クラリネット		E♭ クラリネット	Clarinet in E♭
(Solo Clarinet)						
Clarinet B♭	クラリネット B♭ 1,2	B♭ Clarinetto 1,2,3	クラリネット 1,2,3		B♭ クラリネット 1,2,3	Clarinet in B♭ 1,2,3
Bass Clarinet						
Soprano Saxophone						
Alto Saxophone						Alto Saxophone in E♭
Tenor Saxophone						Tenor Saxophone in B♭
Bariton Saxophone						
Bass Saxophone						
Petite Bugle E♭						
Bugle B♭						
(Solo Cornet or Solo Trumpet)						
Cornet	コルネット B♭ 1,2		B♭ コルネット 1,2		コルネット 1,2	Cornet in B♭ 1,2,3
Trumpet		B♭ Trombe 1,2,3				
Alto Horn	アルト E♭ 1,2	E♭ Alto 1,2	アルト 1,2,3			
Horn E♭ or F						Horn in F 1,2,3
Trombone	トロンボーン 1,2	Tromboni 1,2	トロンボン 1,2		トロンボーン 1,2,バス	Trombone 1,2,Bass
Bariton	バリトン	B♭ Bariton	B♭ バリトン			Baritone
Bass (B♭ or C) or Euphonium	ユーフォニューム (B♭)		小バス（B♭）		ユーホニァム (C)	Euphonium
C.Bass (E♭, B♭ or C) or Tuba		C. Bassi (C, div.2)				Basses
	バス B♭		大バス（B♭）		バス (C)	
喇叭鼓隊						
Other instruments						
Percussion	小太鼓	Tamb. Miltr.	Drums	小太鼓	小太鼓	Snare Drum
	大太鼓	Gr. Cassa		大太鼓	大太鼓	Bass Drum
	シンバル	Triangolo		シンバル	シンバル	Suspended Cymbal
						Timpani